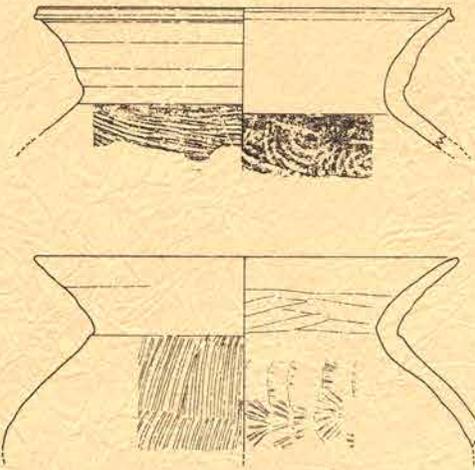


近畿自動車道（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 2 分冊 ——

泉 貢 窯 跡 山 神 城 跡



1992. 3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第2分冊 ——



泉貢窯跡（南東から）



山神城跡ベト谷地区（東上空から）

序

近畿自動車道関・伊勢線にかかる現地の埋蔵文化財発掘調査は、第8次区間（久居～勢和）が昭和63年度に終了し、その年度後半から第9次区間（勢和～伊勢）が開始され、現在に至っております。第9次区間は、多気町・玉城町・伊勢市に所在する30遺跡の調査を対象とし、昭和63年度から調査を行ってまいりました。

第9次区間については、平成5年に予定されている伊勢神宮式年遷宮、及び翌年の祝祭博開催を臨んだ県行政の大幹に関連した道路建設でもあり、当事業にかかる埋蔵文化財の保護とその円滑な調整については鋭意努力いたしている処であります。

第9次区間の路線となる前述の市町が所在する地域は、古来から伊勢神宮との関連が深いことが分かっております。この地域に考古学的なメスを入れることは、当該地域の歴史を考えていくうえで、重要な資料を提供することとなりましょう。また、この調査によって得た資料を基に、当該地域の歴史を考えていくことも発掘調査を行った我々の大きな責務のひとつであり、ここに公刊する泉貢窯跡・山神城跡についても同様であります。開発と文化財の保存との接点を学術的な方面に求めることも重要なことといえましょう。

調査に際しては、日本道路公団、県土木部近畿道対策室、三重県土地開発公社、並びに伊勢市、多気町、玉城町の各関係機関、及び地元各位の多大なるご理解とご協力を得ることができました。文末となりましたが、ここに心からの御礼を申し上げます。

平成4（1992）年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中林 昭一

例 言

1. 本書は平成3年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地内の遺跡発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書のうち、泉貢窯跡・山神城跡の調査報告書（第2分冊）である。

2. 調査（整理・報告書作成業務）にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3. 調査（整理・報告書作成業務）の体制は下記のとおりである。

- ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第2課第1係
 - 第2課長 新田 洋 ・ 主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
 - 主事 河瀬信幸 ・ 主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
 - 主事 河北秀実 ・ 主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）
- （室内整理員）反町瑩子・谷久保美知代・采野妙子・竹内ゆかり

4. 本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次及び各文末にも明記した。また、遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方々からご指導、助言を賜った。また、広岡公夫、三辻利一の両氏からは玉稿も賜った。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）

- 広 岡 公 夫（富山大学教授）
- 三 辻 利 一（奈良教育大学教授）
- 中 井 均（滋賀県米原町教育委員会技師）
- 奥 義 次（三重県立松阪高等学校教諭）

5. 泉貢窯跡の報文作成に関連して、須恵器の蛍光X線分析試料を収集したが、その際、斎宮歴史博物館、多気町教育委員会、玉城町教育委員会の御好意により須恵器片を提供していただいた。

6. 本書掲載の2遺跡については、既に『きんき道調査ニュースNo.30』（三重県埋蔵文化財センター 1990. 12）、及び『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990. 3）、『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1991. 3）にその調査概要を公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。なお、のせんじ遺跡、浦ノ内遺跡、上ノ垣内遺跡、里山（古墳）については、山神城跡の範囲内に所在するため、それぞれ、山神城跡・のせんじ地区、浦ノ内地区、上ノ垣内地区、里山地区として報告した。

7. 本書掲載の2遺跡の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

8. 本書で使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

SA 柵・土塁 SX 中世墓 SD 堀切 SF 焼土 SZ テラス状平坦地

9. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺はスケールバーを参照ください。

目 次

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

表 目 次

I. 前 言

1. 調査に至る経過	新田 洋	1
2. 調査および整理の方法	稲本 賢治	1
3. 調査の体制	〃	2

II. 泉貢窯跡

1. はじめに	前川 嘉宏	9
2. 調査の方法		9
3. 調査日誌抄		11
4. 地形と土層		17
5. 窯体と灰原		17
6. 出土遺物		22
7. まとめ		30
泉貢窯跡の考古地磁気測定	広岡 公夫、田中 豊、森定 尚	43
泉貢窯跡出土須恵器の蛍光X線分析	三辻 利一	47

III. 山神城跡

1. 遺跡と調査の概要	大川 勝宏	59
2. 周辺の歴史的環境	〃	60
3. のせんじ地区の調査	小坂 宜広	68
4. 浦ノ内地区の調査	江尻 健・稲本 賢治	69
5. おく地区の調査	大川 勝宏	71
6. 相戸地区の調査	〃	73
7. 上ノ垣内地区の調査	小坂 宜広・稲本 賢治	75
8. 追谷地区の調査	大川 勝宏	76
9. 西老谷地区の調査	稲本 賢治	78
10. 東老谷地区の調査	大川 勝宏	82
11. ベト谷地区の調査	〃	82
12. 明神前地区の調査	〃	104
13. 里山地区の調査	〃	104
14. 結語	〃	105

図 版 目 次

泉 貢 窯 跡

P L. 1	調査前窯体周辺遠景 第1次調査全景	31
P L. 2	調査後調査区全景 調査後調査区全景	32
P L. 3	調査後遠景 表土除去後窯体	33
P L. 4	窯体土層断面 窯体土層断面	34
P L. 5	窯体と石組み煙道 窯体と石組み煙道	35
P L. 6	石組み煙道 スサ入り粘土除去後石組み煙道	36
P L. 7	石組み煙道除去後窯体 石組み煙道除去後窯体	37
P L. 8	窯体と灰原 断ち割り後窯体	38
P L. 9	断ち割り後窯体と灰原 断ち割り後窯体と灰原	39
P L. 10	出土土器	40
P L. 11	出土土器	41
P L. 12	出土土器	42
P L. 13	太陽の方位の観測 試料のサンプリング	46
P L. 14	分析試料	58

山 神 城 跡

P L. 1	山神城跡全景 山神城跡全景	107
P L. 2	浦ノ内地区調査区全景 おく地区調査区全景	108
P L. 3	相戸地区調査区全景 相戸地区堀切・土橋	109
P L. 4	追谷地区調査区全景 追谷地区堀切	110
P L. 5	西老谷地区調査前風景 西老谷地区全景	111
P L. 6	西老谷地区全景 西老谷地区SD1・SA4	112
P L. 7	西老谷地区SD1埋没状況	113

西老谷地区SD1・SR3

P L. 8	東老谷地区全景 ベト谷地区調査前風景	114
P L. 9	ベト谷地区調査前全景 ベト谷地区全景	115
P L. 10	ベト谷地区全景 ベト谷地区SD3	116
P L. 11	ベト谷地区SD4埋没状況 ベト谷地区SD5	117
P L. 12	ベト谷地区郭1・SA7 ベト谷地区郭2・SZ10・SZ11・SZ12	118
P L. 13	ベト谷地区SA9 ベト谷地区SZ11・SF25	119
P L. 14	ベト谷地区SZ11断ち割り状況 ベト谷地区SZ12~18	120
P L. 15	ベト谷地区SZ13 ベト谷地区SZ14	121
P L. 16	ベト谷地区SX19検出状況 ベト谷地区SX19遺物取り上げ後状況	122
P L. 17	ベト谷地区SX20・SX21 ベト谷地区SX22・SX23・SF26	123
P L. 18	ベト谷地区SX22検出状況 ベト谷地区SX24	124
P L. 19	ベト谷地区調査風景 明神前地区全景	125
P L. 20	山神城跡出土遺物	126
P L. 21	山神城跡出土遺物	127
P L. 22	山神城跡出土遺物	128

挿 図 目 次

第1図	近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢） 内遺跡位置図 …………… 5	第35図	山神城跡周辺地形図 …………… 65・66
	泉 貢 窯 跡	第36図	のせんじ地区出土遺物実測図 …………… 68
第2図	泉貢窯跡周辺の窯跡分布図 …………… 10	第37図	のせんじ地区、浦ノ内地区位置図 …… 68
第3図	遺跡地形図および遺跡周辺字切り図 … 12	第38図	浦ノ内地区遺構平面図 …………… 69
第4図	圃場整備前遺跡周辺地形図 …………… 13	第39図	浦ノ内地区出土遺物実測図 …………… 70
第5図	調査区位置図 …………… 13	第40図	おく地区、相戸地区位置図 …………… 71
第6図	調査前調査区測量図 …………… 14	第41図	おく地区地形測量図 …………… 72
第7図	調査後調査区測量図 …………… 15	第42図	おく地区調査区遺構平面図・断面図、 土橋断面図 …………… 72
第8図	調査区土層断面図 …………… 16	第43図	相戸地区調査区遺構平面図・断面図、 土橋断面図 …………… 73
第9図	窯体・灰原付近地形測量図 …………… 18	第44図	相戸地区地形測量図 …………… 74
第10図	調査区土層断面図 …………… 19	第45図	上ノ垣内地区出土遺物実測図 …………… 75
第11図	窯体実測図 …………… 20	第46図	上ノ垣内地区、追谷地区位置図 …… 75
第12図	窯体土層断面図 …………… 21	第47図	追谷地区調査区遺構平面図・断面図、 土橋断面図 …………… 76
第13図	石組み煙道実測図 …………… 21	第48図	追谷地区地形測量図…………… 77
第14図	灰原土層断面図 …………… 22	第49図	西老谷地区、東老谷地区位置図 …… 78
第15図	出土土器実測図 …………… 24	第50図	西老谷地区出土遺物実測図 …………… 78
第16図	出土土器実測図 …………… 25	第51図	西老谷地区遺構配置図 …………… 78
第17図	出土土器実測図 …………… 26	第52図	西老谷地区調査区測量図 …………… 79・80
第18図	泉貢窯跡の考古地磁気測定結果と西 南日本の考古地磁気永年変化曲線 …… 45	第53図	S D 1・S A 3土層断面図 …………… 81
第19図	泉貢群、原群、中尾群、徳居群の須 恵器のRb-Sr分布図 …………… 50	第54図	S D 1・S A 3遺構平面図 …………… 81
第20図	泉貢群と中尾群の相互識別 …………… 50	第55図	東老谷地区、ベト谷地区、明神前地区 位置図 …………… 82
第21図	泉貢群と原群の相互識別 …………… 51	第56図	ベト谷地区測量図 …………… 83・84
第22図	泉貢群と徳居群の相互識別 …………… 51	第57図	ベト谷地区調査区小地区割図 …… 85
第23図	泉貢群と久居群の相互識別 …………… 52	第58図	ベト谷地区遺構配置図 …………… 85
第24図	原群と中尾群の相互識別 …………… 52	第59図	S A 7・8・9実測図 …………… 86
第25図	徳居群と中尾群の相互識別 …………… 53	第60図	S D 3平面図・断面図 …………… 87
第26図	久居群と中尾群の相互識別 …………… 53	第61図	S D 4平面図・断面図 …………… 88
第27図	原群と徳居群の相互識別 …………… 54	第62図	S D 5平面図・断面図 …………… 89
第28図	原群と久居群の相互識別 …………… 54	第63図	S D 6地形測量図 …………… 90
第29図	ハム谷、池ノ谷、北ノ山地点表採須 恵器のRb-Sr分布図 …………… 55	第64図	S Z 13平面図・断面図 …………… 90
第30図	河田古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図 55	第65図	東斜面遺構群平面図 …………… 91
第31図	斎宮跡出土須恵器のRb-Sr分布図 …… 55	第66図	東斜面土層断面図 …………… 92
第32図	分析試料の出土地点位置図 …………… 57	第67図	東斜面遺構実測図 …………… 93
	山 神 城 跡	第68図	S X 19実測図 …………… 94
第33図	周辺関連遺跡分布図 …………… 61・62	第69図	S X 22・24, S F 26実測図…………… 95
第34図	山神遺跡周辺字切り図 …………… 63・64	第70図	ベト地区出土遺物実測図 …………… 97

第71図	ベト地区出土遺物実測図	98
第72図	ベト地区および山神城跡 周辺出土遺物実測図	99

第73図	里山地区、里山（古墳）位置図	103
------	----------------	-----

表 目 次

第1表	遺構実測図・遺物実測図 整理番号一覧	4
第2表	発掘調査遺跡一覧（1）	6
第3表	発掘調査遺跡一覧（2）	7～8

泉 貢 窯 跡

第4表	泉貢窯跡周辺の窯跡一覧	10
第5表	器種および出土位置別出土土器重量表	23
第6表	出土土器観察表（1）	27
第7表	出土土器観察表（2）	28
第8表	出土土器観察表（3）	29

第9表	泉貢窯跡の磁化測定結果	43
第10表	泉貢窯跡の考古地磁気測定結果	44
第11表	試料の分析値（1）	48
第12表	試料の分析値（2）	49

山 神 城 跡

第13表	山神城跡周辺神社一覧	67
第14表	ベト谷地区出土遺物観察表	100～103

I. 前 言

1. 調査に至る経過

近畿自動車道関・伊勢線(伊勢自動車道)の第9次区間(勢和～伊勢)の建設区間については、昭和47年に基本計画、57年に整備計画が、そして昭和60年2月に建設大臣から日本道路公団に施行命令が出されている。また、翌月の3月には実施計画認可と路線発表がなされている。

この第9次区間は、第8次区間(久居～勢和)の延長路線として、勢和・多気インターチェンジから仮称伊勢インターチェンジまでの延長21.5kmの建設計画であり、行政区画としては、勢和村、多気町、玉城町、伊勢市をほぼ東西に横断する形をとっている。

この路線は、三重県の中・南伊勢と近畿及び中部経済圏とを結ぶ幹線道路として、一般国道23・42号の交通緩和とともに伊勢湾岸と内陸部の産業、あるいは伊勢志摩・紀州への観光ルートとしての大きな使命をもつものといわれている。そのうち、第8次区間(久居～勢和)については、平成2年12月に供用開始されている。

さて、第9次区間(勢和～伊勢)建設にかかる埋蔵文化財の保護、調整協議については、昭和50年段階に建設省名阪国道工事事務所、県土木部道路建設課と県教育委員会文化課との協議と現地立会い調査という形で開始された。また、事業地内にかかる埋蔵文化財の分布調査については、昭和53・55・56年に3次にわたって県教育委員会文化課が県文化財調査員等の協力を得て実施し、昭和56年3月14日付、教文第429号で道路建設課長あてに「近畿自動車道伊勢線関係遺跡分布調査結果報告について」として公文書通知をしている。

その後については、第8次区間(久居～勢和)の埋

蔵文化財発掘調査の体制と諸準備に追われた形となり、昭和59年度末には第8次区間の現地発掘調査を実施するに至った。この第8次区間の現地発掘調査には昭和59年度を皮切りに開始され、昭和63年度前半までの足かけ5年余の期間が費やされた。

第9次区間(勢和～伊勢)の遺跡取り扱いについては、昭和61年度になって具体的に浮上し、試掘計画等について、日本道路公団松阪工事事務所と調整・協議するに至った。また、昭和62年度初めには、再度、第9次区間建設予定地についての遺跡確認と分布調査を実施した。この段階で公団あてに提示した遺跡は計26件、面積にして114,200㎡である。

なお、この第9次区間については、その後の新発見遺跡等についての協議を経て、多気町で1件(佐奈水銀鉱山跡)、玉城町で1件(泉貢窯跡)、伊勢市内で2件(大谷古墳、古市・中之地蔵町遺跡)の遺跡が追加されている。

以上のような経過を経て、第9次区間の現地における埋蔵文化財発掘調査は、昭和63年度の後半期から開始することとなった。

また、最後となりますが、調査の円滑推進にあたっては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、伊勢市建設部近畿自動車道対策室他、伊勢市・多気町・玉城町の各教育委員会に、現地にあたっては各地元自治会長をはじめ、多くの方々のご援助を得ました。加えて、発掘業務については三重県土地開発公社のご協力をいただきました。文末ながらここに記して厚くお礼申し上げます。

(新田 洋)

2. 調査および整理の方法

1. 現地調査の方法

調査の方法は、近畿自動車道関・伊勢線第8次区

間(久居～勢和)の調査方法に則って行った。以下第9次区間の原則的な調査方法を記す。

地区割

計画路線がほぼ東西方向をとるため、4m方眼で設定する地区割は各遺跡毎に適切なセンター杭2点を結ぶ延長線方向に西から東へ数字、これと直交する方向で南から北へアルファベットを与え、各グリッドの南西の杭をグリッドの名称とした。

遺構カード

遺構カードは原則として4m×4mのグリッド毎に作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入し、さらに遺構の重複関係、土質、出土遺物等の現場で判明した情報を可能な限り記入することとした。遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付すこととし、土杭、溝、住居跡等は遺跡ごとの通し番号とする。

写真撮影

遺構等の写真撮影は、原則として6×7cm版(モノクロネガ、カラーリバーサル)及び35mm版(モノクロネガ、カラーリバーサル)による。また、35mmデータカメラ(カラーネガ)でも同一カットの撮影をする他、作業進捗状況に合わせて日誌としての撮影も行った。

使用したカメラは、アサヒペンタックス67(6×7cm版)・ニコンF-50AF(35mm版)である。

遺構実測

道路工事計画に関する杭が国土座標に基づくため、遺構実測は国土座標に基づいて行った。遺構実測は、泉貢窯跡は平板測量で、山神城跡は航空測量及び平板測量で行った。なお、当地域の座標系は第VI系である。

2. 資料整理の方法

遺構実測図等

遺構実測、断面実測等の図面は、原則として50cm×35cmの方眼紙(2mm方眼)を使用し、各々に6桁の番号を付す。番号のうち上2桁は、調査対象遺跡の番号とし、下4桁を各遺跡ごとの図面の通し番号と

する。これらの図面はファイルに収納し、図面番号、図面の内容、縮尺等を記入した一覧表を2部作成し、1部を各図面ファイルに貼付、他の1部を綴じ込んで図面台帳とする。なお、各図面ともマイクロ撮影を行い、同様に6桁の通し番号を付した後ファイルへ整理する。

遺構実測図

出土遺物のうち実測可能なものは、全て実測する。そして各々の遺物に6桁の通し番号を付す。番号のうち上2桁を調査対象遺跡の番号とし、下4桁を遺物の通し番号とする。これらの図面は、ファイルに収納し、各遺跡の番号、種類、名称、法量等のデータを記入した後ファイルする。なお、6桁の通し番号を与えられた遺物については、遺物及び遺物ラベルにもその番号を注記する。

遺構写真

モノクロ写真は、ベタ焼きと共にネガアルバムに貼付整理し、各コマ毎に地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入する。

カラーライドは、図面及び遺物と同様の方法により、各コマのファイル枠毎に6桁の通し番号を付す。そして、地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入した一覧表を作成し、1部をライドファイルへ貼付し、1部を台帳として保管する。

遺物写真

モノクロ、カラーとも各遺物に付された6桁の通し番号によって整理を行う。整理は遺構写真と同様とする。

拓本

拓本は、報告書図版等に使用する時はコピーを使う。原本は台紙に貼り付け、遺物に付された6桁の通し番号を明記しファイルに保管する。

本報告書に所収の遺跡についての各図面、遺物に付した6桁の通し番号は第1表の通りである。

3. 調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋

蔵文化財センターが担当した。

以下は、昭和63年度、平成元年・2年度の調査体制である。

昭和63年度

主幹兼係長 伊藤久嗣
技 師 新田 洋
主 事 田中喜久雄
主 事 田村陽一
主 事 河北秀実
主 事 小坂宜広
主 事 山崎恒哉
主 事 野田修久
室内整理員 谷久保美知代
近藤豊美
大西友子
野崎栄子
脇葉輝美
山際みち子
東千恵子
孝久由希子
小坂規美子

平成元年度

主幹兼調査第2課長 山澤義貴
主 査 新田 洋
主 事 田村陽一
主 事 河北秀実
主 事 小坂宜広
主 事 山崎恒哉
主 事 江尻 健
主 事 伊藤裕偉
主 事 角谷泰弘 (伊勢市教育委員会より派遣)
主 事 稲本賢治 (多気町教育委員会より派遣)
主 事 前川嘉宏 (玉城町教育委員会より派遣)
室内整理員 反町瑩子
谷久保美知代
采野妙子
吉村道子
白石みよ子
山分孝子
竹内由美

田中智子
中山学
反町有子

平成2年度

次長兼調査第2課長 山澤義貴
主 査 新田 洋
主 事 河北秀実
主 事 増田安生
主 事 齋藤直樹
主 事 伊藤裕偉
技 師 大川勝宏
主 事 角谷泰弘 (伊勢市教育委員会より派遣)
主 事 稲本賢治 (多気町教育委員会より派遣)
主 事 前川嘉宏 (玉城町教育委員会より派遣)
臨時調査員 川崎正幸
室内整理員 反町瑩子
谷久保美知代
采野妙子
吉村道子
白石みよ子
山分孝子
乾ひとみ
上村かおり
竹内由美
中山学
反町有子
調査補助員 森田幸伸 (皇學館大学学生)
近藤大典 (皇學館大学学生)

調査指導 (昭和63年・平成元年・2年度、順不同、敬称略)

大脇 潔 (奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官)
玉田芳英 (奈良国立文化財研究所文部技官)
八賀 晋 (三重大学教授)
広岡公夫 (富山大学教授)
三辻利一 (奈良教育大学教授)
渡辺 寛 (皇學館大学教授)
伊藤秋男 (南山大学教授)
水野正好 (奈良大学教授)

泉 拓 良 (奈良大学助教授)
 西 山 要 一 (奈良大学助教授)
 植 野 浩 三 (奈良大学助手)
 菅 原 正 明 (財和歌山県文化財センター次長)
 石 黒 立 人 (財愛知県埋蔵文化財センター)
 中 井 均 (滋賀県米原町教育委員会技師)
 千 葉 豊 (京都大学埋蔵文化財研究センター助手)
 橋 本 久 和 (大阪府高槻市埋蔵文化財センター技師)
 磯 部 克 (三重県立津西高等学校教諭)
 奥 義 次 (三重県立松阪高等学校教諭)

小 玉 道 明 (三重県総務部学事文書課主幹)
 広 瀬 和 久 (三重県農業技術センター室長)
 原 正 之 (三重県農業技術センター研究員)

〈発掘調査土木工事部門担当〉

三重県土地開発公社

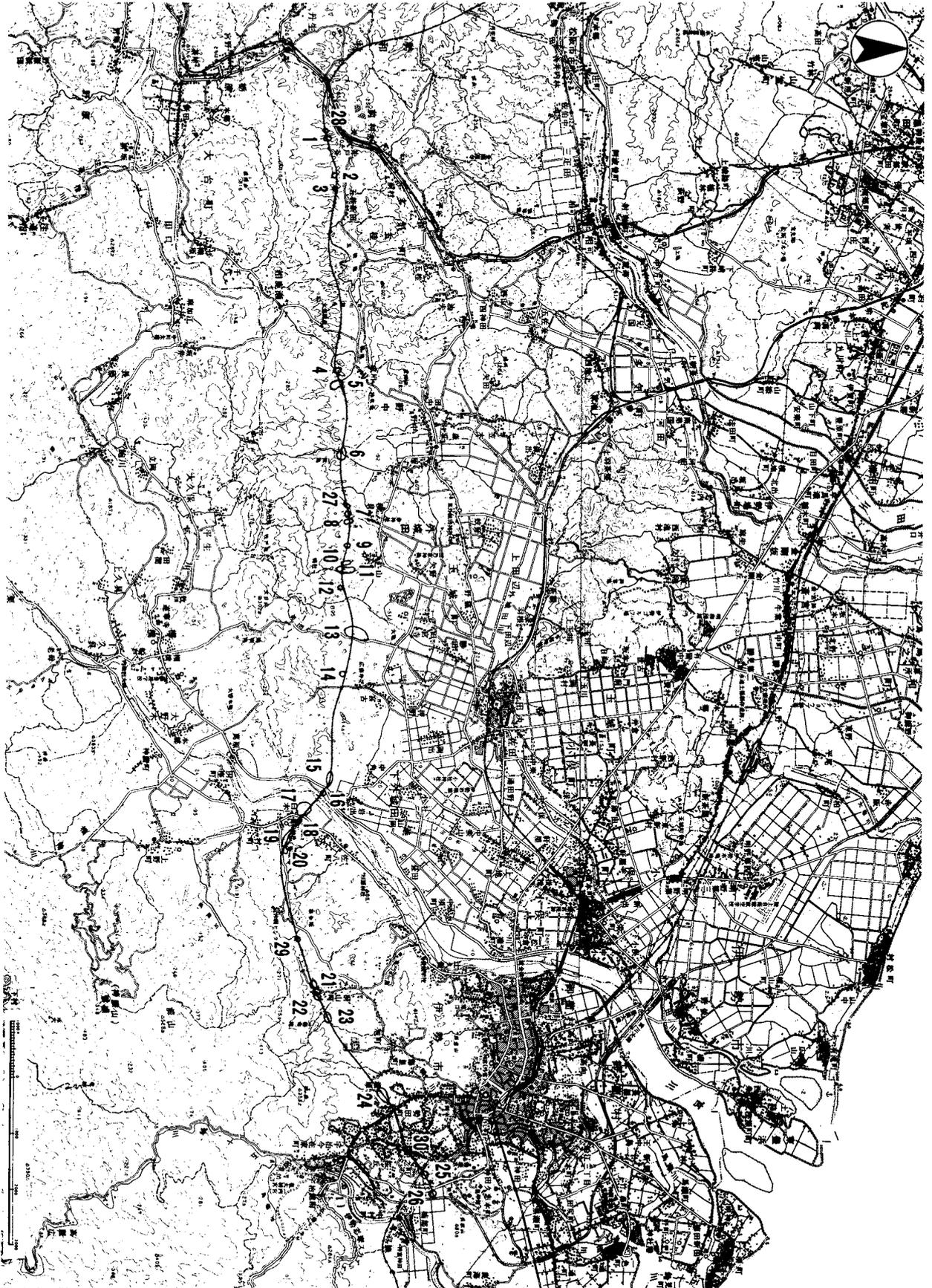
堀 内 信 吾
 稲 葉 庄 衛
 平 生 憲
 浜 口 安 光
 下 地 茂

(稲 本 賢 治)

	遺 跡 名	遺 構 実 測 図	遺 物 実 測 図
7	のせんじ地区	—	7-0001
8	山 神 城 跡	浦ノ内地区	8-0001~0006
9		上ノ垣内地区	—
10		西老谷地区	10-1001~1004、10-2001~2002 10-4001~4003
11		ベト谷地区	11-1001、11-2001~2021 11-3001
12		里山地区	11-4001
27	泉 貢 窯 跡	27-0001~0023	27-0001~0128

第1表 遺構実測図・遺物実測図整理番号一覧

第1図 近畿自動車道第9次区間(勢和～伊勢)内遺跡位置図(1:100,000)



近畿自動車道第9次区間(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査計画

No.	遺跡名	所在地	確認面積(m ²)	調査面積(m ²)					合計			
				昭和63年度		平成元年度		平成2年度				
				試掘	本調査	試掘	本調査	試掘		本調査		
1	王子谷遺跡	多気町前村字王子谷	1,000	48	144				192			
2	桃谷(古墳)	〃 〃 桃谷、五桂字ツツジ	100		27				27			
3	ツツジ(古墳)	〃 〃 五桂字ツツジ	100		20				20			
4	牛バサマA遺跡	〃 野中半バサマ・字定越	1,500	304		3,000			3,304			
5	牛バサマB遺跡	〃 〃 〃 〃 字ナルコ	4,700	336	(1,200)	5,500			5,836			
6	ヒジャロ遺跡	玉城町原字ヒジャロ・国東河内	5,600	288					288			
7	のせんじ遺跡	〃 〃 積良字のせんじ・泉貞	1,000	96					96			
8	浦ノ内遺跡	〃 〃 字浦ノ内	2,800	192	(2,000)	2,500			2,692			
9	上ノ垣内遺跡	〃 〃 山神字上ノ垣内・坂ノ辻	3,400	208					208			
10	富ヶ城跡	〃 〃 字西老谷・老谷	2,000				286	2,180	2,466			
11	山神東城跡	〃 〃 字東老谷	2,700				441	3,922	4,363			
12	里山(古墳)	〃 〃 字里山・東岡谷・仲山	100		30				30			
13	桶ノ木遺跡	〃 〃 勝田字桶ノ木・二ノ谷・ヤケ山他	39,000		2,032	6,890			8,922			
14	矢倉戸前(古墳)	〃 〃 宮古字細谷	100		20				20			
15	蚊山遺跡左郡地区	〃 〃 岩出字塚名・左郡	10,000	587		11,500			12,087			
16	蚊山遺跡所り垣地区	〃 〃 〃 〃 所り垣	2,300	144		3,200			3,344			
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町字中之垣外	4,400		400	2,100			2,500			
18	寺原B遺跡	〃 〃 字寺原	2,400		224	500			724			
19	ハノカ遺跡・口山田遺跡	〃 津村町字ハノカ・字口山田、佐八町字向口	10,000		792	147	2,800		3,739			
20	落合古墳群	〃 〃 字口山田	1,200		151		3,165		3,316			
21	井戸谷遺跡	〃 〃 前山町字井戸谷	400		336				336			
22	河原谷遺跡	〃 〃 字河原谷	100				100		100			
23	亀谷郡C遺跡	〃 〃 字亀谷郡	3,500		312		2,195		2,507			
24	中起遺跡	〃 〃 勢田町字中起	3,500				257		257			
25	蝮尾遺跡	〃 〃 久世戸町字蝮尾	520					32	32			
26	奥遺跡	〃 〃 楠部町字奥	11,800				494		494			
27	泉貞遺跡	玉城町積良字泉貞・向山丑岡	4,500		330		2,556		2,886			
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村字井戸谷	400			400			400			
29	大谷(古墳)	伊勢市佐八町字大谷	400				120		120			
30	古市・中之地蔵町遺跡	〃 〃 中之町・桜木町	5,000				127		127			
計			124,520	2,203	(3,200)	4,818	35,590	1,872	16,918	32	2,500	2,612
合			計	2,203+(3,200)	40,408	18,790	3,164			3,164	64,426	

第2表 発掘調査遺跡一覧(1)

番号	遺 跡 名	所 在 地	調査面積 (㎡)		調 査 期 間	担 当 者	概 要	所収分冊	
				計					
1	王子谷遺跡	多気町前村	48	192	1989. 2. 6～ 2. 7	小坂 宜広 山崎 恒哉	(試掘) 遺構なし、遺物細片	1	
			144		1990. 1.12～ 1.18	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構なし、遺物細片		
2	桃谷(古墳)	多気町前村 五桂	27	27	1990. 1.18～ 1.22	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし		
3	ツツジ(古墳)	多気町五桂	20	20	1990. 1.22～ 1.23	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし		
4	牛バサマA遺跡	多気町野中	304	3,304	1989. 1. 9～ 2. 7	山崎 恒哉	(試掘)		
			3,000		1989.11.17～1990. 1.11	山崎 恒哉	縄文時代以降の土器出土		
5	牛バサマB遺跡	多気町野中	336	5,836	1988.12.12～1989. 1.19	山崎 恒哉	(試掘)		
			5,500		1989. 5.22～ 8. 8	江尻 健	鎌倉時代の掘立柱建物検出		
6	ヒジャロ遺跡	玉城町原	288	288	1988.11.28～12. 1	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		
7	のせんじ遺跡	玉城町積良	96	96	1988.12. 2～12. 7	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		2
8	浦ノ内遺跡	玉城町積良	192	2,692	1989. 2.22～ 3. 3	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)		
			2,500		1990. 2. 8～ 3.22	江尻 健	縄文時代以降の土器出土		
9	上ノ垣内遺跡	玉城町山神	208	208	1988.12.20～12.26	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		
10	山神城跡西老谷地区 (富ヶ城跡)	玉城町山神	286	2,466	1990. 5.15～ 6. 1	稲本 賢治	(試掘)		
			2,180		1990. 7.20～12.27	稲本 賢治 大川 勝宏	中世の堀切・墓など検出		
11	山神城跡ベト谷地区 (山神東城跡)	玉城町山神	441	4,363	1990. 5.15～ 6. 1	稲本 賢治	(試掘)		
			3,922		1990. 7.20～12.27	稲本 賢治 大川 勝宏	中世の堀切・墓など検出		
12	里山(古墳)	玉城町山神	30	30	1990. 2.13～ 2.14	江尻 健	(試掘) 遺構・遺物なし		
13	楠ノ木遺跡	玉城町勝田	2,032	8,922	1989. 5.16～ 6. 5	田村 陽一	(試掘)	3	
			6,890		1990. 6.29～11.17	伊藤 裕偉	平安時代末～室町時代後半の屋敷地や墓地を検出		
14	矢倉戸前(古墳)	玉城町宮古	20	20	1989. 9. 1～ 9. 6	伊藤 裕偉	遺構・遺物なし(試掘)	1	
15	蚊山遺跡左郡地区 (蚊山遺跡)	玉城町岩出	587	12,087	1989. 1. 6～ 2. 7	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)	6	
			11,500		1989. 5.16～1990. 3.20	小坂 宜広 稲本 賢治 角谷 泰弘 前川 嘉宏	古墳の周溝、中世の掘立柱建物・墓など多数検出		
16	蚊山遺跡所り垣地区 (宮地遺跡)	玉城町岩出	144	3,344	1989. 1.26 ～ 2. 2	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)	4	
			3,200		1989. 5.22～ 9.21	山崎 恒哉 稲本 賢治	平安時代末の墓、鎌倉時代の掘立柱建物など検出		

第3表 発掘調査遺跡一覧(太ゴチックは本書所収遺跡)

番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 面 積 (㎡)		調 査 期 間	担 当 者	概 要	所収分冊
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町	400	2,500	1989. 9.18~10. 3	田村 陽一	(試掘)	5
			2,100		1989.11.13~12.23	前川 嘉宏	平安時代末葉の掘立柱建物検出	
18	寺原B遺跡	伊勢市佐八町	224	724	1989. 8.18~10. 3	田村 陽一	(試掘)	5
			500		1989.11.14~1990. 1.14	角谷 泰弘	鎌倉時代前半の掘立柱建物検出	
19	ハノカ遺跡	伊勢市津村町	208	3,739	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘)	5
			147		1990. 5.31~ 6.11	角谷 泰弘	(試掘)	
	2,100	1990. 5.31~ 8. 1	角谷 泰弘		縄文時代・鎌倉時代の土器出土			
	584	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏		(試掘)			
口山田遺跡	伊勢市津村町 佐八町	700	1990. 5.31~ 8. 1	角谷 泰弘	集石遺構検出			
20	落合古墳群	伊勢市津村町	151	3,316	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘)	7
			3,165		1990. 4.24~10.31	伊藤 裕偉	4世紀末頃~6世紀前葉の群集墳	
21	井戸谷遺跡	伊勢市前山町	336	336	1990. 3.14~ 3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘) 明確な遺構なし	
22	河原谷遺跡	伊勢市前山町	100	100	1990.10.11~10.17	角谷 泰弘 川崎 正幸	遺物少量出土	
23	亀谷郡C遺跡 (世義寺跡)	伊勢市前山町	312	2,507	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘)	8
			2,195		1990. 5. 7~ 7. 9	斎藤 直樹 前川 嘉宏	経文が記された陶経筒片出土	
24	中起遺跡	伊勢市勢田町	257	257	1990.10.16~10.23	伊藤 裕偉	(試掘)	
25	寝尾遺跡	伊勢市久世戸町	32	32	1991. 8.19	河瀬 信幸	(試掘) 遺構・遺物なし	
26	奥遺跡	伊勢市楠部町	494	494	1990.10.23~11. 1 1991. 1.14~ 1.16	斎藤 直樹	(試掘) 遺構なし、遺物少量	
27	泉貢窯跡	玉城町積良	330	2,886	1989. 5.22~ 5.31	伊藤 裕偉	(試掘)	2
			2,556		1990. 8.28~11.20	前川 嘉宏 川崎 正幸	10世紀前半頃の須恵器窯1基検出	
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村	400	400	1990. 1.16~ 3.30	田村 陽一	2基の採掘坑口周辺を調査	1
29	大谷(古墳)	伊勢市佐八町	120	120	1990. 7. 2~ 7. 7	前川 嘉宏	(試掘) 遺構・遺物なし	
30	古市・中之地蔵町遺跡	伊勢市中之町 桜木町	127	2,287	1990.10.22~11. 5	角谷 泰弘	(試掘)	8
			850		1991. 6.22~ 8.31	角谷 泰弘 河北 秀実 稲本 賢治	近世以降の町並みの遺構を検出。	
			420		1991. 8.20~ 9.16	前川 嘉宏 角谷 泰弘		
			220		1991.11.18~12. 8	角谷 泰弘		
670	1992. 1.10~ 3.31	河北 秀実						

※ 調査総面積は、63,593㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

Ⅱ. 度会郡玉城町積良 泉 貢 窯 跡 (27)

1. はじめに

度会郡玉城町の南西端に位置する標高411mの国東山の北麓に戸数30戸程の積良の集落がある。集落の東側には小規模な谷底平野があり、その谷筋に沿って南南東へ約400mさかのぼると、泉貢池という溜池に達する。

昭和63(1988)年12月、積良地内にある浦ノ内遺跡の第1次調査(試掘調査)を担当していた調査員が、泉貢池の堤近くで土器(須恵器)を拾ったという地元の人の話をもとにこの付近を踏査し、窯壁塊の露出を確認したことから窯跡の存在が知られるようになった。この地は大字積良字泉貢と字向山丑岡との境で、遺跡名は字名をとって「泉貢窯跡」とした(第3図)。

泉貢窯跡の周辺には、「外城田窯跡群」と総称される須恵器窯跡が30基ほど知られており(第2図・第4表)、伊勢地域(旧伊勢国)での一つの窯業地帯を形成している。その中で代表的なものには玉城町原に所在する原窯跡群^②があり、11基の窯跡が集中して築かれていた。他の窯跡は単独、あるいは2~3基の小規模な群をつくって丘陵斜面に点々と分布している。

これらの窯跡については詳細な調査が実施されないままに破壊されてしまったものが多く、窯の操業時期すらよくわかっていないが、わずかに知られるものに限っては、7世紀前半から8世紀前半にかけてのものと考えられている^③。

多気町内では、須恵器窯跡の他に瓦窯跡も2箇所確認されている。大字牧と鋤形の境に所在する牧瓦窯跡群^④では8基の窯跡が確認され、8世紀初頭に2基、8世紀前半に4基、8世紀中葉以降に1基が操業していたと考えられている。大字成川の西谷瓦窯跡^⑤16は表面採集された瓦片の瓦当文様から、奈良時代のもものと推定されている。

このように、周囲で確認されている窯跡は飛鳥時代~奈良時代のものであることから、泉貢窯跡もこれらの窯跡とほぼ同じ時期のものであろうと想定されていた。

平成元(1989)年5月22日から同年5月31日にかけて実施した第1次調査(試掘調査・調査面積330㎡)では、灰原と工房跡の確認に重点を置き、丘陵裾の水田部分にトレンチを設定した(第5図)。その結果、工房跡の有無は不明であったが、1ないし2箇所の灰原が存在することが確認できた。また、灰原出土の土器から、三重県では例の少ない平安時代前半頃の須恵器窯跡である可能性も考えられた。

第2次調査(本調査)では、複数の窯跡が存在することを想定して、灰原を確認した地点を中心とした約2,600㎡(丘陵斜面部分約1,400㎡、水田部分約1,200㎡)を調査対象範囲とした。第2次調査の調査期間は平成元(1989)年8月28日から同年11月20日までで、最終的な調査面積は2,556㎡である。調査区内で検出された窯体は1基のみであった。

2. 調査の方法

第2次調査(本調査)に際しては、調査区を地形により「(丘陵)斜面部分」「水田部分」とに大きく分けた。また、調査区全域に4×4mの小地区を設定した。小地区割の基本軸は、任意の2点(第6図のc点とd点)を結んだ線とし、そのうえでc点

からd点の方向へ4mごとに、基本軸に直交する方向にも4mごとに区切って小地区割を実施した(第7図)。各小地区には基本軸に沿って数字を、基本軸に直交してアルファベットを与え、各小地区の南隅の杭を小地区の名称とした。



第2図 泉貢窯跡周辺の窯跡分布図 (1 : 50,000)

図中番号	町遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備考	図中番号	町遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備考	
1	396	泉貢窯跡	玉城町積良字泉貢・向山丑岡	10世紀前半	半地下式平窯。須恵器小皿・杯・甕、土師器杯・甕。(1990年発掘調査)	6	98	林中窯跡	森庄字林中		須恵器片。消滅?	
2	190 198	原1号窯 原9号窯	原字愛宕山	飛鳥以降	須恵器類。消滅。	7	81	北ノ山A窯跡	笠木字北ノ山		須恵器。消滅?	
	199	原10号窯	字稻場	8世紀前半	半地下式登窯。須恵器杯・杯蓋・高杯・台付長頸壺。(1963年発掘調査)	8	280	北ノ山B窯跡				
	200	原11号窯		7世紀末	半地下式登窯。須恵器杯・杯蓋・高杯・台付長頸壺(1963年発掘調査)	9	281	北ノ山C窯跡				須恵器杯。道路工事に窯体寸断。
3	293	市寄窯跡	字市寄		消滅。	10	82	南ノ山窯跡	字南ノ山			
4	99	ハム谷1号窯	多気町野中 字ハム谷		土器。消滅?	11	84	中村ノ内窯跡	字中村ノ内			
		ハム谷3号窯										
5	171	池ノ谷1号窯	字池ノ谷	飛鳥以降	須恵器各種。窯体の一部と灰原の一部破壊。	12	164	長安寺1号窯	字長安寺	飛鳥以降	須恵器類。消滅。	
	172	池ノ谷2号窯		飛鳥以降	須恵器各種。消滅。	165	165	長安寺2号窯		飛鳥以降	須恵器類。消滅。	
	287	池ノ谷3号窯		古墳時代	須恵器各種。消滅。	166	166	南山西1号窯	字南山	飛鳥以降	須恵器類・陶器破片。消滅。	
						167	167	南山西2号窯		飛鳥以降	須恵器各種。消滅。	
14	282	中尾窯跡	相可字中尾	7世紀前半	半地下式登窯。須恵器蓋杯・高杯・壺蓋・甕・盤。(1975年発掘調査)	14	282	中尾窯跡	相可字中尾	7世紀前半	半地下式登窯。須恵器蓋杯・高杯・壺蓋・甕・盤。(1975年発掘調査)	
15		明気窯跡群	字明気	7世紀前半	数基存在? 須恵器蓋杯・甕・横瓶・提瓶。	15		明気窯跡群	字明気	7世紀前半	数基存在? 須恵器蓋杯・甕・横瓶・提瓶。	
16	289	西谷瓦窯跡	成川字西谷	奈良時代	軒丸瓦・軒平瓦。	16	289	西谷瓦窯跡	成川字西谷	奈良時代	軒丸瓦・軒平瓦。	

第4表 泉貢窯跡周辺の窯跡一覧

斜面部分での作業は原則として全て人力で行った。水田部分の調査については表土除去を重機で行った後、遺構検出面までの掘削を人力で行ったが、圃場整備事業による置き土が厚かったことや、遺構検出

面がつかみにくかったことなどにより、結果としてかなりの作業を重機で行うこととなった。

なお、窯体実測以外の遺構実測および地形測量は平板測量で行った。

3. 調査日誌抄

第1次調査（1989年5月22日～5月31日）

5月22日（月）調査開始。水田部分にトレンチを設定。近接した2箇所の灰原を確認。
5月23日（火）前日のトレンチに直交したトレンチを6本設定。作業は午前中のみ。
5月24日（水）～26日（金）雨天のため作業中止。
5月29日（月）・30日（火）清掃と写真撮影。
5月31日（水）土層断面実測およびトレンチ埋め戻し。第1次調査終了

第2次調査（1990年8月28日～11月20日）

8月28日（月）業者入札。(株)森組が落札。
8月29日（火）調査区範囲設定。下草刈り開始。
8月30日（木）～9月1日（土）下草刈り。
9月3日（月）下草刈り。小地区割基本軸設定。調査前調査区測量図（1:100・平板測量）作成開始。
9月4日（火）・5日（水）下草刈り。調査前調査区測量図作成。
9月6日（木）斜面部分の表土除去開始。
9月7日（金）～11日（火）斜面部分の表土除去。調査前調査区測量図作成。
9月12日（水）～13日（木）斜面部分の表土除去。
9月14日（金）～21日（金）台風が近づき雨天続きのため現地での作業ほとんどできず。20日には台風直撃。翌日後片付け。
9月22日（土）～10月1日（月）台風により作業が遅れてきたので、土曜日・日曜日にも斜面部分の表土除去を行いながら遺構を探すが、検出できず。再び台風が接近し、作業遅れる。
10月2日（火）G17・H18付近で炭と焼土検出。窯体の可能性を考え精査するが遺構とならず。
10月3日（水）窯体予想地点（窯壁塊露出地点）付近の表土および崩壊土除去開始。窯体の最奥部分の位置を確認。

10月4日（木）雨天により作業中止。

10月5日（金）窯体付近の表土および崩壊土除去。

10月6日（土）～8日（月）台風21号接近のため作業できず。

10月9日（火）～11日（木）窯体前面の水田部分の表土除去開始。

10月12日（金）窯体検出。窯体主軸杭を設定。

10月15日（月）・16日（火）窯体検出。

10月17日（水）窯体掘削前の写真撮影。窯体断面土層図（1:10）作成開始。

10月18日（木）窯体埋土掘削開始。

10月19日（金）窯体埋土掘削。窯体断面土層図作成。

10月22日（月）～24日（水）灰原検出。灰原東側に続く黄褐色砂質土からも生焼けの須恵器片多数出土。窯体断面土層図作成。

10月25日（木）窯体埋土掘削後の写真撮影。

10月26日（金）・27日（土）窯体主軸方向の調査区土層断面図（1:10）作成。水田部分の包含層掘削。

10月29日（月）窯体平面図・断面土層図（1:10）作成。

10月30日（火）雨天のため作業中止。

10月31日（水）水田部分の包含層掘削。

11月1日（木）石組み煙道の写真撮影と実測図（1:10）作成。水田部分の遺構検出。

11月2日（金）水田部分の遺構検出。

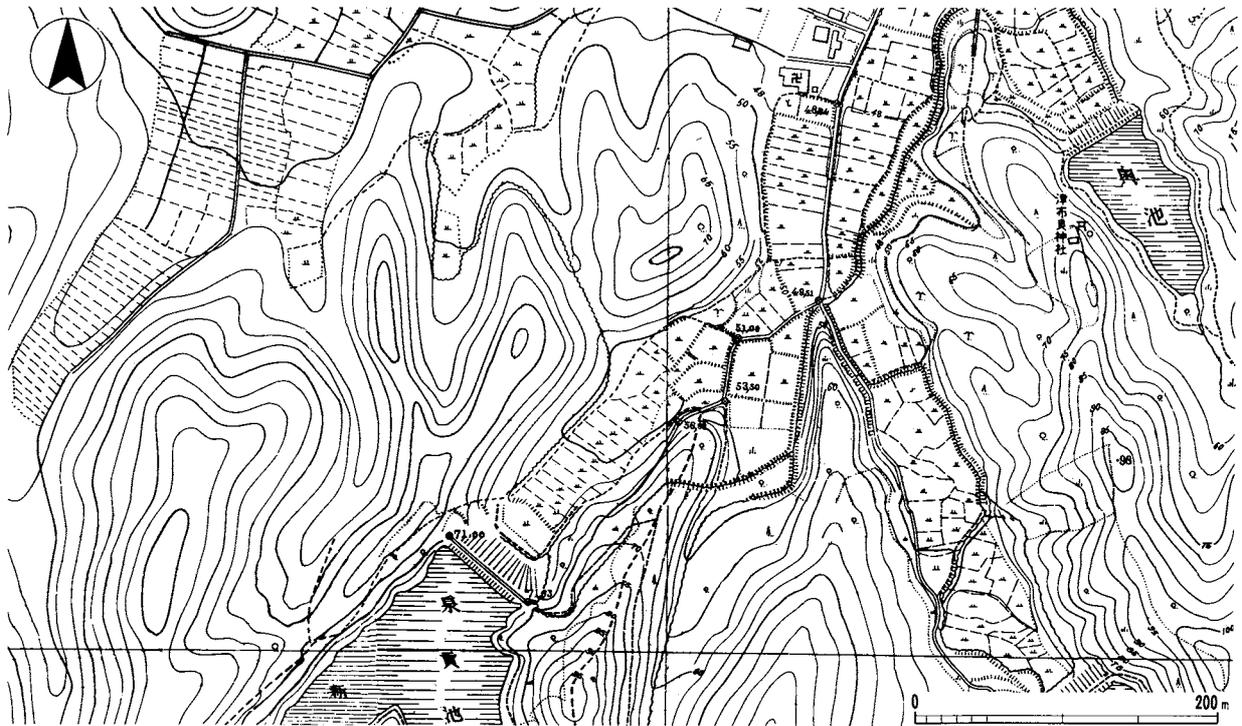
11月5日（月）石組み煙道除去後の窯体写真撮影。水田部分の遺構検出。

11月6日（火）窯体・灰原付近の写真撮影および地形測量図（1:50・平板測量）作成。

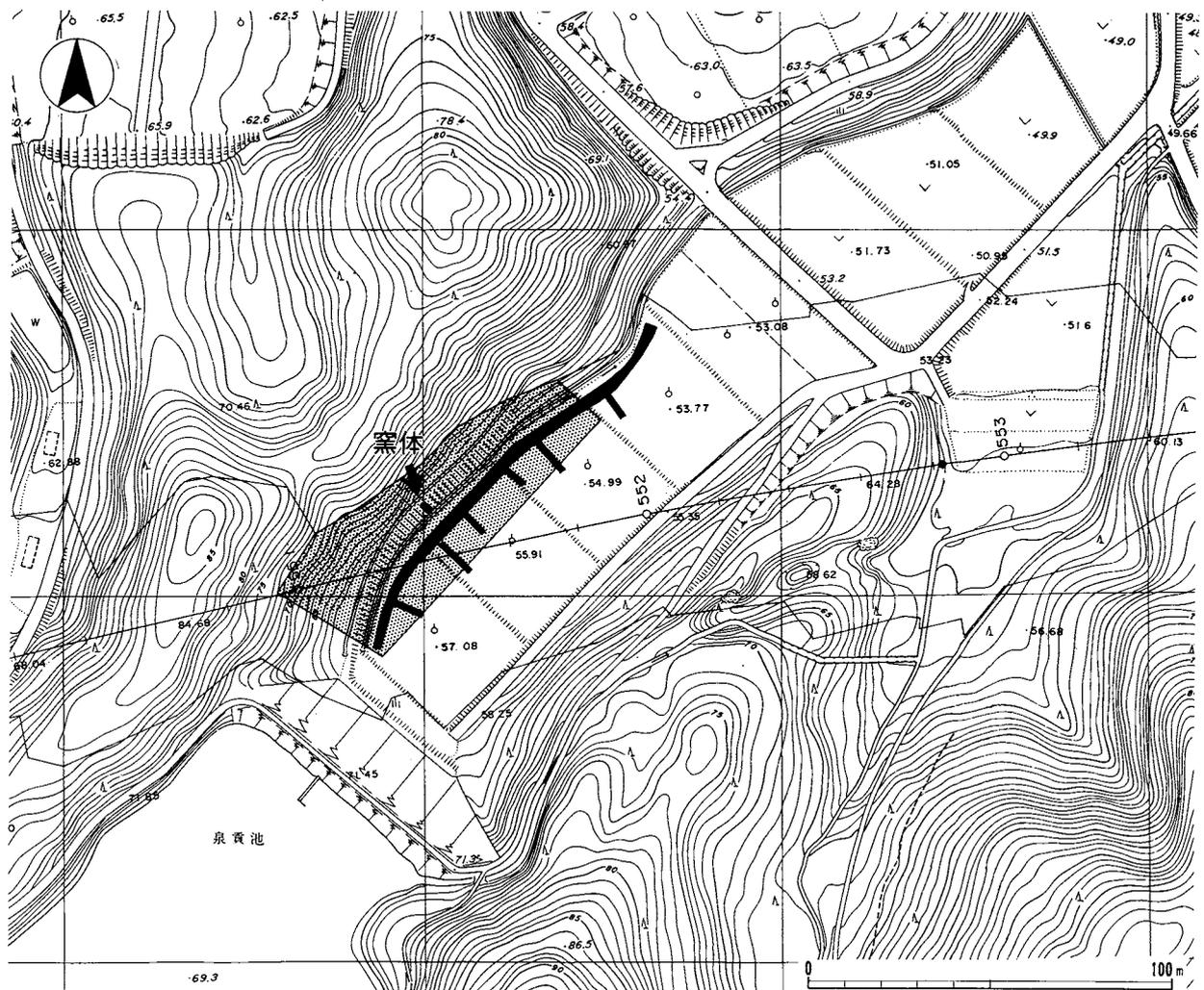
11月7日（水）調査区全景写真撮影。灰原断ち割り。調査後調査区測量図（1:100・平板測量）作成。

11月8日（木）窯体および灰原の断ち割り。調査区南東壁の土層断面図（1:20）作成開始。

11月9日（金）調査区南東壁の土層断面図作成。断



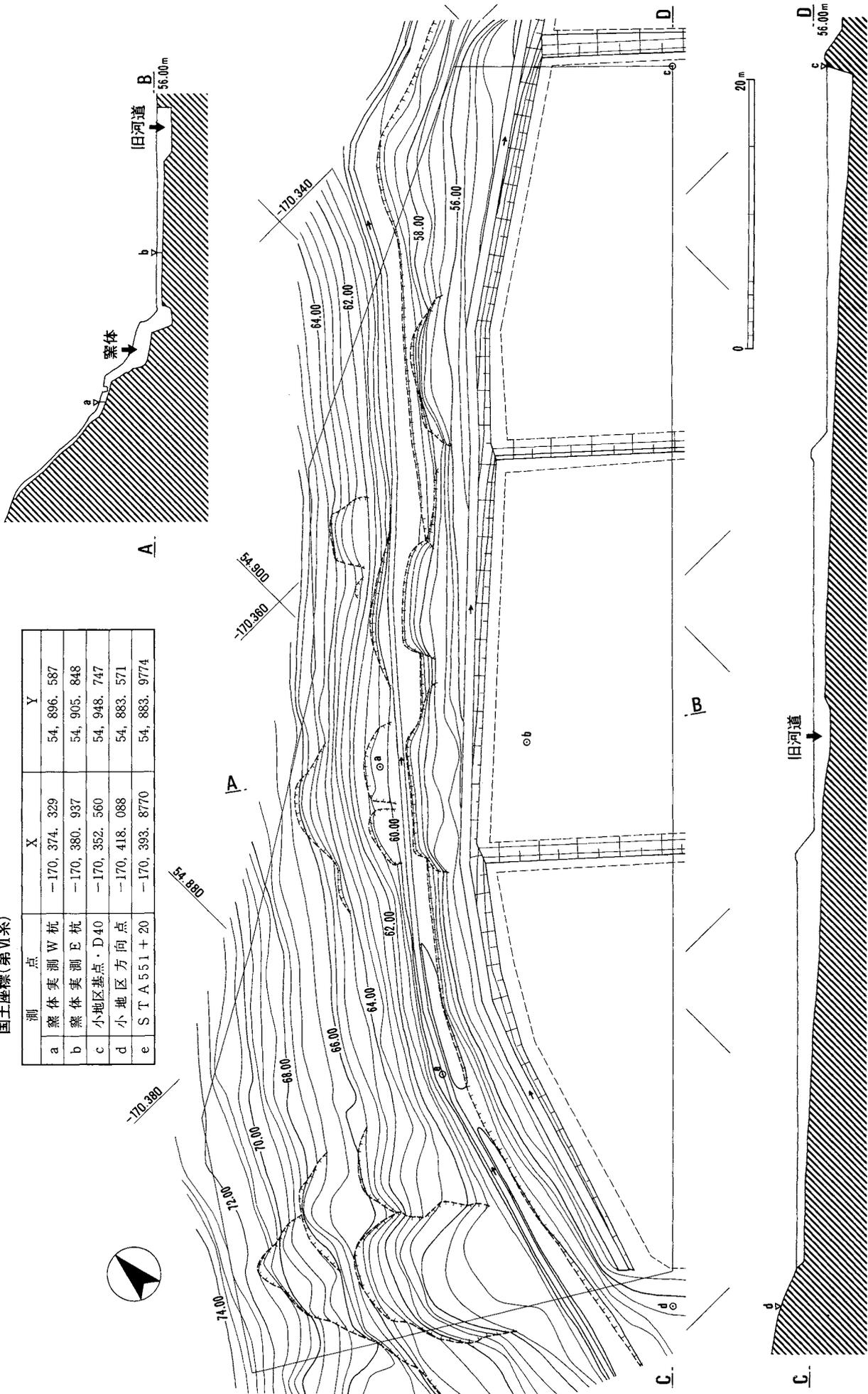
第4図 園場整備前遺跡周辺地形図（1：5,000） ※玉城町役場が昭和40年頃作成・昭和46年頃加筆した地形図（1：3,000）を修正して使用



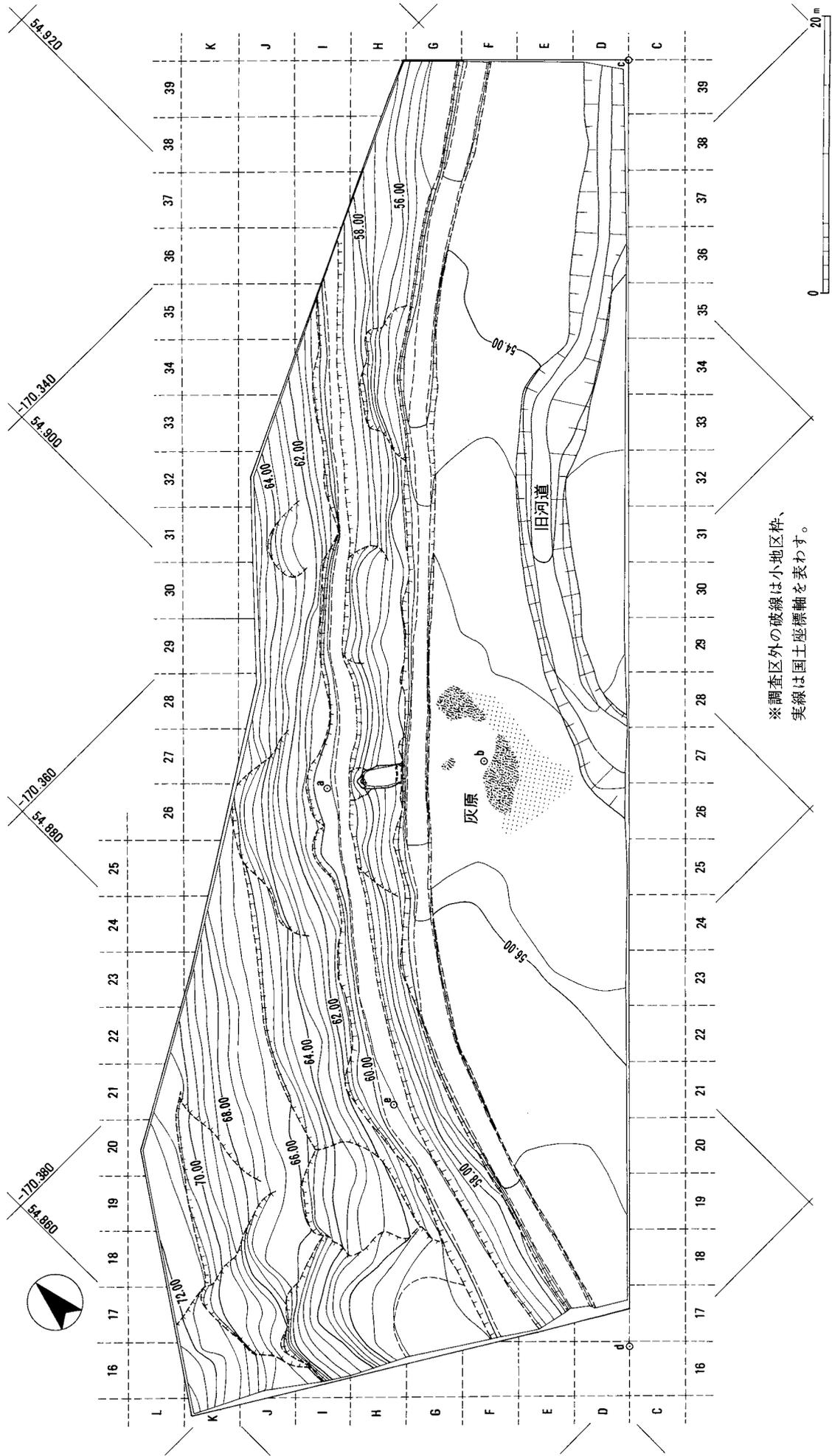
第5図 調査区位置図（1：2,000） ※黒ベタ＝第1次調査試掘トレンチ、網目＝第2次調査区範囲

国土座標(第VI系)

測点	X	Y
a 窠体実測W杭	-170, 374. 329	54, 896. 587
b 窠体実測E杭	-170, 380. 937	54, 905. 848
c 小地区基点・D40	-170, 352. 560	54, 948. 747
d 小地区方向点	-170, 418. 088	54, 883. 571
e S T A 551 + 20	-170, 393. 8770	54, 883. 9774

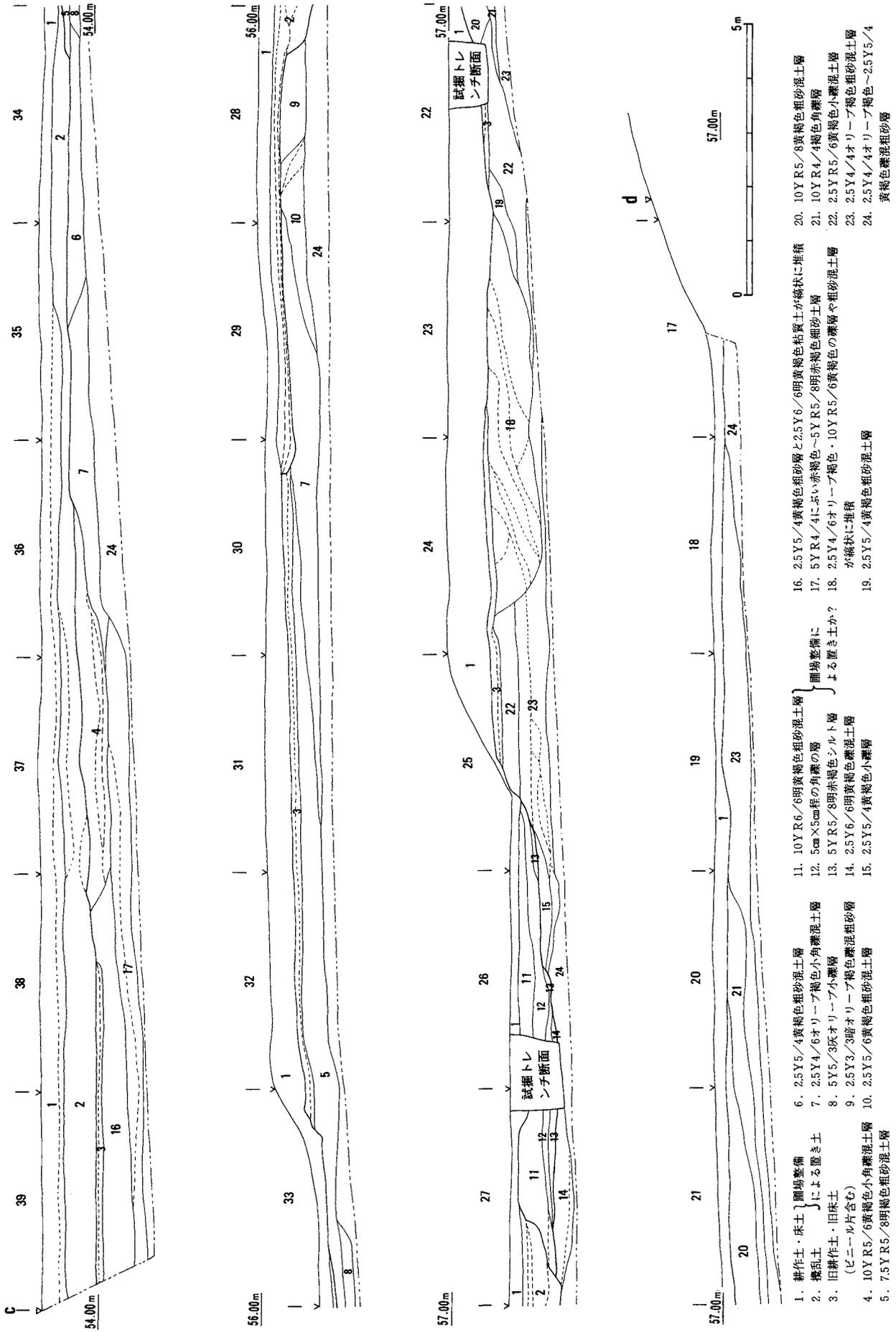


第6図 調査前調査区測量図(1:400)



※調査区外の破線は小地区枠、
実線は国土座標軸を表わす。

第7図 調査後調査区測量図 (1 : 400)



第8図 調査区土層断面図 (南東壁) (1:100)

ち割り後の窯体と灰原の写真撮影。

11月13日（木）灰原土層断面図（1：20）作成。

11月18日（火）～20日（木）灰原土層観察用土手除

去。

12月16日（日）富山大学理学部教授の広岡公夫氏による泉貢窯跡の考古地磁気測定実施。

4. 地形と土層

調査区のすぐ北側には中央構造線と呼ばれる大断層が東西方向に走り、調査区は断層の南側の外帯の地質構造となる。調査区付近の丘陵や水田の基盤は三波川帯の結晶片岩類である緑色片岩で、中央構造線の影響を受けて破碎・風化が著しい。

調査区の丘陵斜面部分は、北西方向から南東方向へ傾斜する約 50° の急斜面である。0.1～0.2mの厚さに堆積した腐植土を除去すると、片理が発達した脆い結晶片岩の岩塊が随所に露頭する。

調査区の水田部分は昭和50（1975）年頃に圃場整備が行われており旧地形がかなり改変されている。現況では3枚の水田に分かれ、各水田間には約1mの段差があり、全体としては南西方向から北東方向への緩やかな傾斜地となっている（第6図）。調査区内で最も低い水田面の標高は約55.0m、最も高い

水田面の標高は約57.0mである。

玉城町役場が昭和40年代に作成・加筆した地図（第4図）を見ると、調査区内の水田は8枚程の細長い水田に分かれていたことがわかる。この水田はおそらく、泉貢池の築造（1808年築造・1838年拡張）に伴って開かれたものであろう。

調査区南東壁断面の土層（第8図）では、0.2～0.7mの厚さで圃場整備時に置かれた耕作土あるいは攪乱土があり、その下の所々に旧耕作土の層が薄く見られる。この旧耕作土中にはビニール片が挟まっていたことから圃場整備事業直前のものであると思われる。旧耕作土の下は谷地形に沿って自然に堆積したと思われる褐色系統の砂礫層が幾層も見られ、調査区南東壁土層断面においては、地表面から2m近く掘り下げてでも遺構や遺物は全く確認できなかった。

5. 窯体と灰原

1. 窯体

調査区内で検出された窯体は1基のみであった。窯体は傾斜角度 $30\sim 40^{\circ}$ の丘陵急斜面に築かれた半地下式の平窯である。丘陵の基盤は緑色片岩であるが、窯体の築かれている付近のみは黄褐色の粗砂混土が厚く堆積し、加工が比較的容易な地盤となっており、須恵器工人がそういう地盤を意図的に選択したということが推察される。

窯体は南東方向に開口しており、奥壁から水平距離にして約3mの所で切断されている。天井部は全く残存していない。主軸方向は $N 55^{\circ} W$ で、等高線にはほぼ直交している（第9図）。

床面の直上にはほぼ全面に厚さ1cmほどの灰・炭の層がある。その上に還元層を下にした窯壁塊の層がみられることから、窯体内がほぼ空洞状態の時点で天井部が崩落したと思われる。また、窯体主軸方向の土層断面をみると（第12図）、その後、数度お

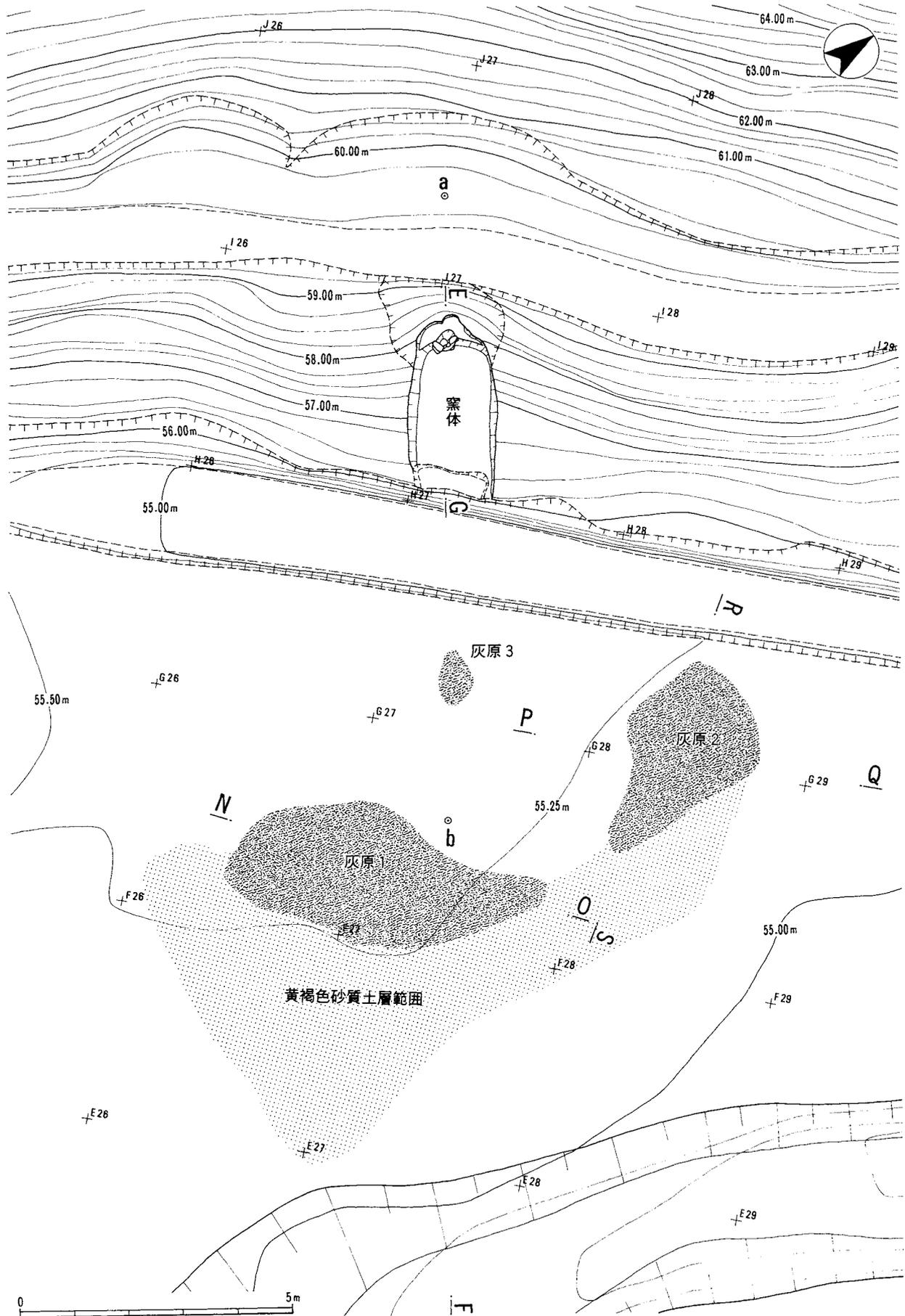
こった丘陵斜面の土砂の流出とともに窯壁塊や焼土が標高の下の方へ流されていったことがわかる。

検出された床面の傾斜はきわめて緩く、切断部分から奥へ約1mの所まで水平に近いが、ここからさらに奥へは約 13° の傾斜をもつ（第11図）。しいていえばこの傾斜角の変換部分より手前が焼成部で奥壁側が焼成部と考えることができるが、床幅がいずれの部分でも約1.3mとほぼ一定しているため断定はできない。

残存している床面の平面形は隅丸の方形で、奥壁や側壁が床面からほぼ垂直に立ち上がっているため、窯体内の空間は直方体に近い形態となる（第11図）。

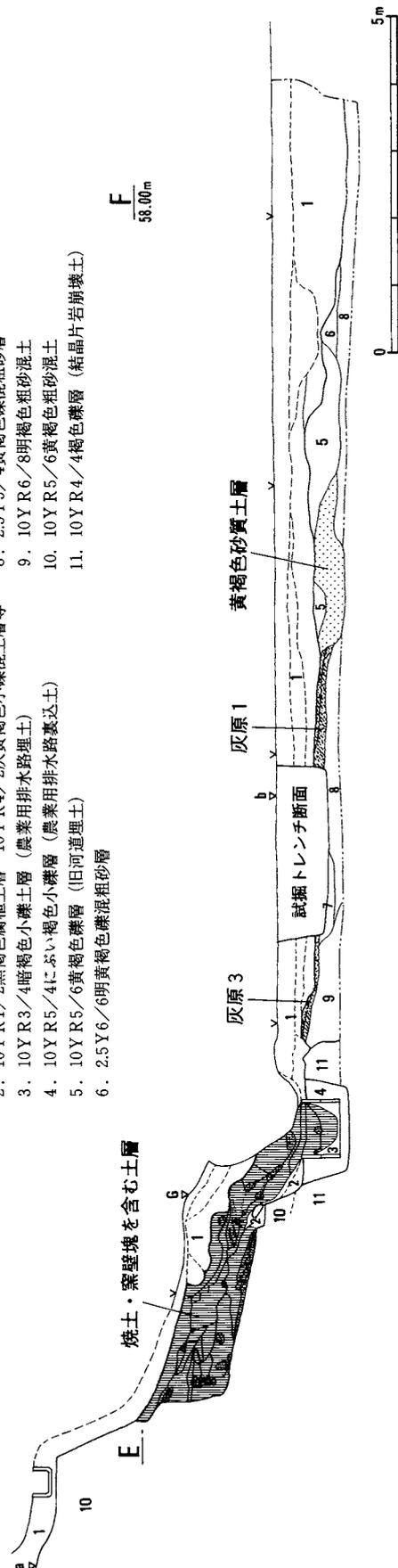
窯体埋土や床面直上で出土した遺物はほとんどなく、須恵器の小片が数点みられたのみである。

奥壁に接して石組みの煙道が検出された（第11図・第13図）。この石組み煙道は、長さ20cm、幅10cm、厚さ5～10cm程の細長く扁平な結晶片岩をスサ入り



第9図 窠体・灰原付近地形測量図 (1:100)

1. 腐植土層・圃場整備による置き土層等
2. 10Y R1/2 黒褐色腐植土層・10Y R4/2 灰黄褐色小礫混土層等
3. 10Y R3/4 暗褐色小礫土層 (農業用排水路埋土)
4. 10Y R5/4 にぶい褐色小礫層 (農業用排水路裏込土)
5. 10Y R5/6 黄褐色礫層 (旧河埋土)
6. 2.5Y 6/6 明黄褐色礫混粗砂層
7. 10Y R6/6 明黄褐色粗砂層
8. 2.5Y 5/4 黄褐色礫混粗砂層
9. 10Y R6/8 明褐色粗砂混土
10. 10Y R5/6 黄褐色粗砂混土
11. 10Y R4/4 褐色礫層 (結晶片岩崩壊土)



第10図 調査区土層断面図 (窯体主軸方向)
(1 : 100)

粘土で固定しながら積み上げて築かれたもので、最下段では2個のやや大きめの石材を門柱状に立てて煙道口としている。スサ入り粘土は石と石との間のみでなく、石組み煙道の外面全体を覆うように貼り付けられていた。煙道が石組みであるのは手前側半分だけで、奥側は奥壁を掘り窪め、結果として径20cm程の円筒形の空間を形作っている。石組み煙道内には、煤と崩落土とが混在する柔らかい土が入っており、土師器甕13 (第15図) の比較的大きい破片が出土した。この土師器甕は煙出し口の蓋として使用されていた可能性が考えられる。

石組みの部分が残っているのは床面からの高さ約60cmであるが、奥壁に掘られた窪みは約1mの高さがある。その窪みの両側にはスサ入り粘土を貼り付けた痕跡がみられる (第13図) ことから、石組み部分が少なくともこの高さまであったことは充分予想できる。

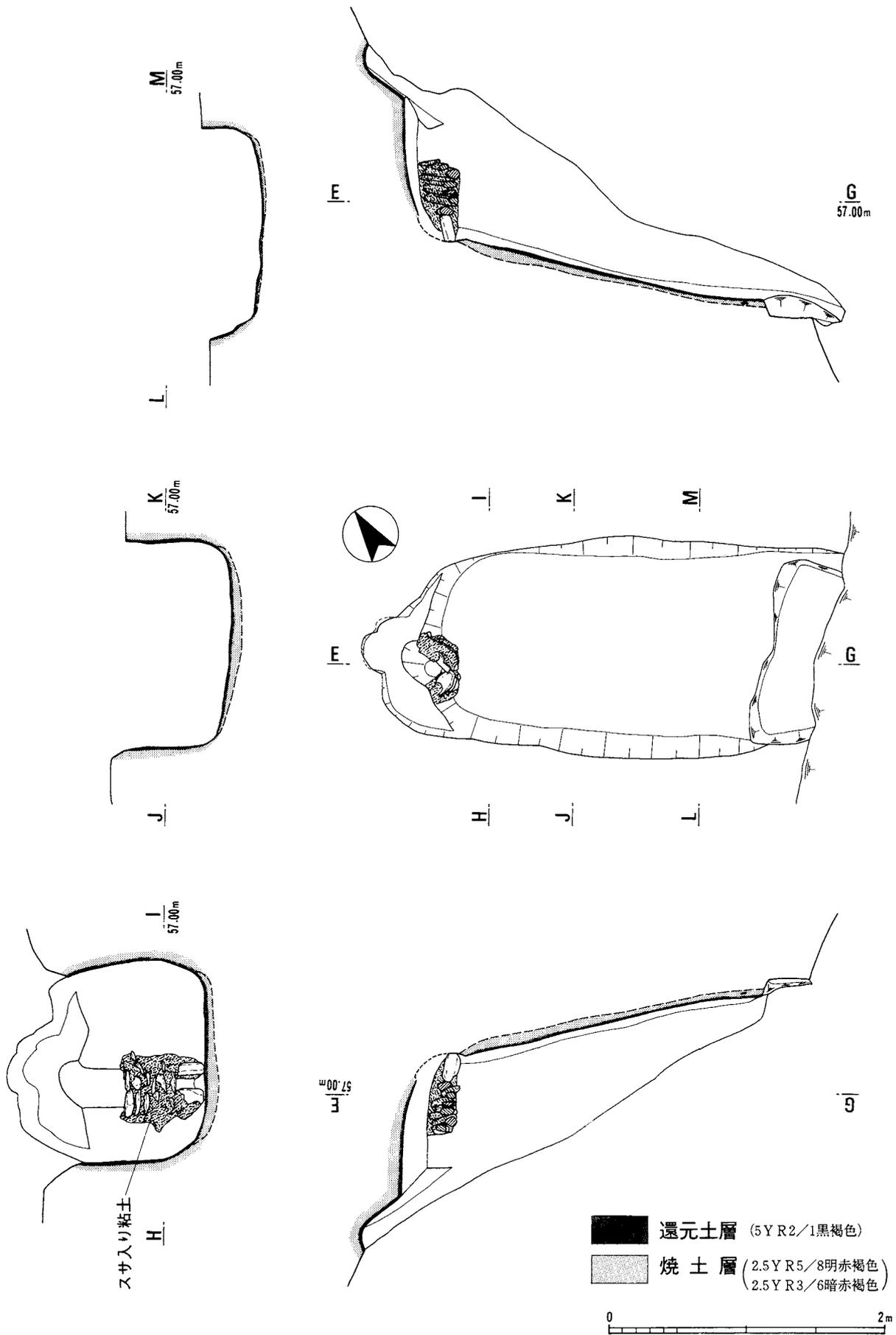
奥壁の上方には、約38°の傾斜をもつ傾斜面がつくられており、さらに上方には煙道の延長と考えられる窪みが掘られているのが認められる。この部分の本来の構造や機能は不明であるが、煙道に関係していたと思われる。

床面および側壁の断面をみると、表面には黒褐色の還元層が2cm程の厚さでみられ、その外側には約5cmの厚さで赤褐色の焼土が取り巻いている (第11図)。窯壁はよく焼け締まっているが、熱により変化している幅はやや薄い。断面で観察する限りでは焼成面は1面のみであるが、窯体東端の床面直下の窯壁中から生焼けの須恵器甕口頸部片47 (第15図) と甕の体部片が出土しており、床面には粘土を薄く貼って補修したような形跡もうかがえるため、焼成回数は複数であったと思われる。

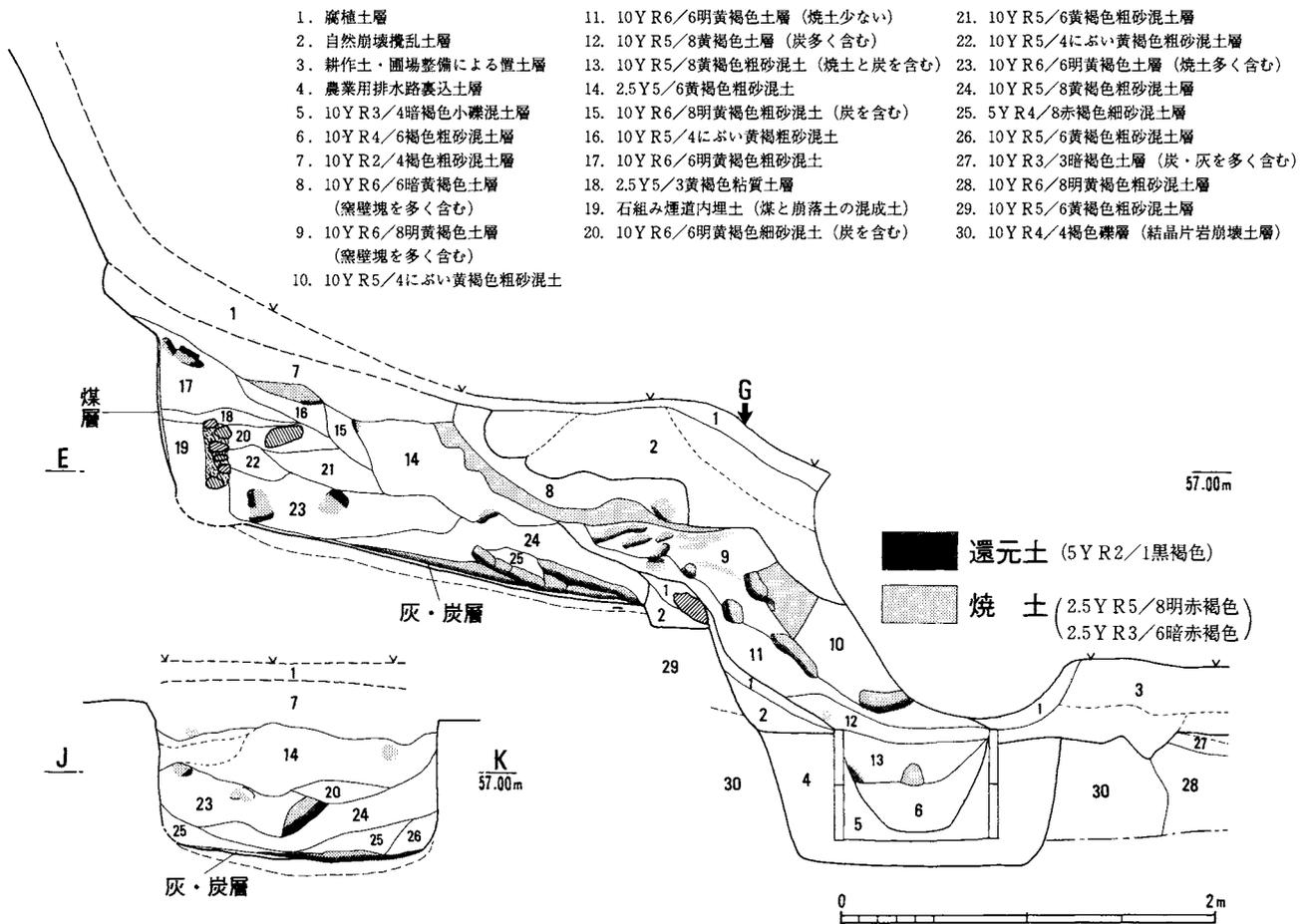
なお、窯体内南東端 (窯体が切断されている付近) の床面直下と思われる位置から土師器杯7 (第15図) が出土したが、土層断面の観察により、この部分は後世に攪乱されていると判断した。

2. 灰原

窯体の全面に広がる黄褐色礫混粗砂層上で、灰原が確認された。灰原は後世に削平を受けたらしく、上面が平らで、灰層も薄い (第9・10図)。灰原1



第11図 窯体実測図 (1:40)

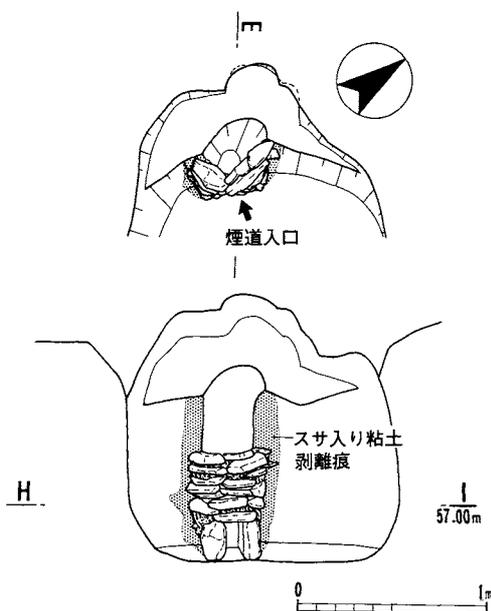


第12図 窯体土層断面図 (1 : 40)

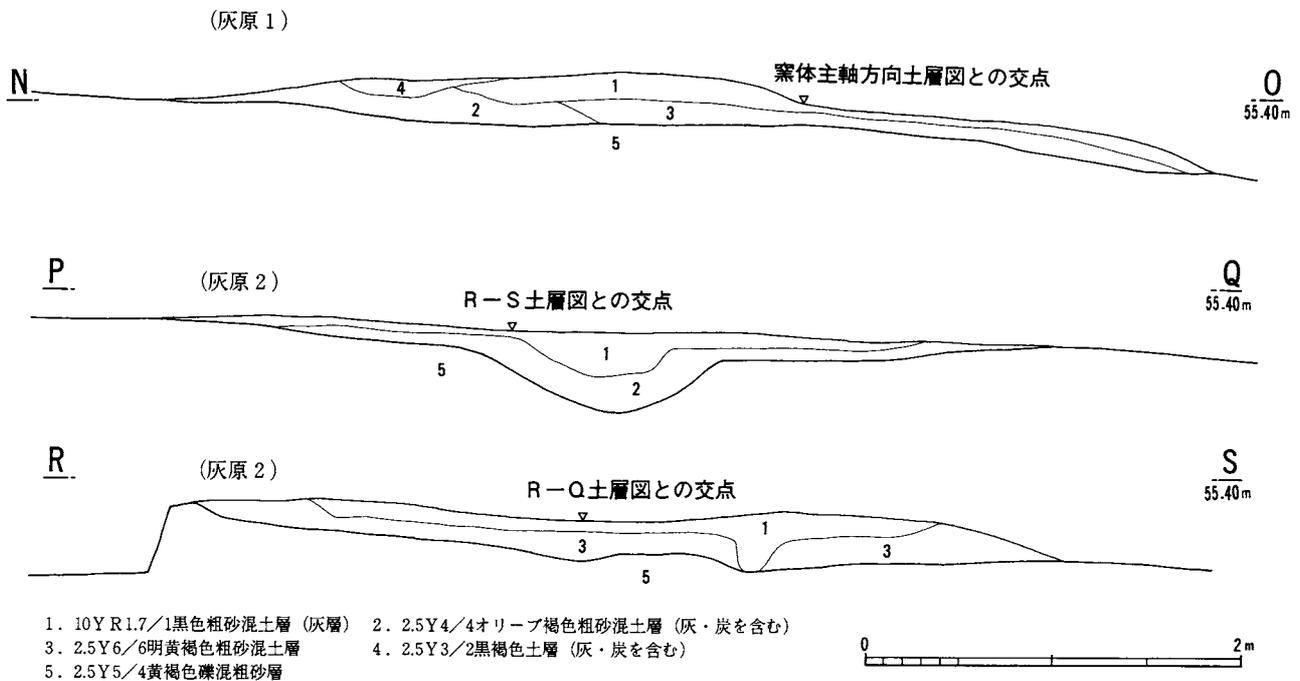
と灰原2の灰層の厚さは10~20cmで、その下に灰や炭を少量含む褐色の粗砂混土層が10cm前後の厚さで見られる(第14図)。灰原3は本来灰原1と連続していたと思われるものであるが、灰層が薄かったため、検出後はその輪郭が不明瞭になってしまった。灰原3の位置は窯体の全長を推定する上で参考にできると思われる。

灰原のさらに外側には砂の粒子が比較的均質な黄褐色砂質土層が取り巻いている。この層には灰や炭がほとんど含まれていないが、灰原部分と同じ程度の密度で生焼けの須恵器片が包含されていることから、ここも灰原と同じ性格をもつものであろう。

灰原が形成された付近の地形は南西から北東へと緩やかに傾斜しているが、灰原3周囲は人工的に平坦に加工している形跡がみられ、土器片を多量に包含する灰原1・灰原2・黄褐色砂質土層はこの平坦面周囲の標高が低い方(東側あるいは南東側)に形成されている。



第13図 石組み煙道実測図 (1 : 40)



第14図 灰原土層断面図 (1 : 40)

6. 出土遺物

調査区からは整理箱25箱程度の遺物が出土している。遺物は全て土器で、圧倒的に須恵器が多い。完形のものではなく、全て破片であり、須恵器の中には生焼けのものが多く含まれている。出土土器の全重量は約59kgである(第5表)。

窯跡に関係すると思われる土器以外には、丘陵斜面出土の縄文土器の細片1点、水田部の表土および攪乱土から出土した近世以降の陶磁器片数点がみられるのみである。

1. 土師器 (第15図・第6表)

土師器には杯と甕があり、整理箱で約1箱分出土した。重量で約1kgで、調査区内で出土した土器の2%にも満たない。土師器の出土量が極端に少なく、焼成不良のものもないことから、これらは当窯跡で焼かれた製品ではなく、須恵器工人により持ち込まれたものであろうと思われる。

A. 杯 1~9

計測値が不確定なものが多いが、皿に近い形態をもつ1を除くと口径は13~14cm程度である。器壁が薄く口縁部と底部との境が不明瞭なもの(1~5・

7・8)と、器壁が厚く口縁部と底部との境が屈曲するもの(6・9)とがある。7の内面には放射状の暗文が施されている。

B. 甕 10~13

いずれも口縁端部が上方にわずかに肥厚する。10~12は口頸部の細片である。体部は球形に近いものであろう。13は体部が浅く鉢状のもので、石組み煙道内から出土した。

2. 須恵器 (第15~17図・第6~8表)

接合後に数えた須恵器の口縁部片は75点で、そのうち甕が63点(84%)、杯が11点(16%)、壺が1点(1%)であり、甕の比率が圧倒的に多い。重量比で見ると甕の比率はさらに高くなり、出土須恵器の総重量約57kgの中で約56kg(98%)を占める。

A. 杯 14~31

底部外面にはヘラ切り痕あるいは回転ヘラケズリ痕が認められ、体部と底部との境の外面には手持ちと思われるヘラケズリが施されている。残存度が低いため、口径や器高については不確定なものが多いが、便宜的に、口径に比して器高が低いものを杯A、

器高が高いものを杯B、付け高台をもつものを杯Cとして分けた。なお、24～26は底部片であるため杯Aか杯Bかは不明であり、31は壺の底部である可能性も高いためこれらの分類には入れなかった。

杯A 14～21 杯Aは杯Bとの比較によってまとめられたものであるため、その中には雑多な形態のものが含まれている。14・15は小皿的なものであり、16は蓋である可能性も考えられる。17～21は口縁端部の形状によって、端部が丸く収まるもの（17・19・20）と端部に面をもつもの（18・21）とに分けることができ、また、体部器面の形状と底部の調整によって器面が波打ち、調整が粗雑なもの（17・18・21）と器面が平滑で比較的丁寧な作りを感じさせるもの（19・20）とに分けることも可能である。

杯B 22・23・27 器高が高く、小鉢状の形態をもつ。外面は波打っているが、内面は平滑に整えられている。

杯C 28～30 剥離した付け高台のみの出土である。杯としたが、出土した杯底部の破片には高台が剥がれた痕跡をもつものが認められないことから、どういう形態のものに付いていたかは不明である。

B. 甕 32～49・51～72

体部内面の当て具痕が同心円状であるものを甕A、放射状であるものを甕Bとした。この2者は体部外面の叩き具痕や口頸部の形状にも違いが認められる。また、口頸部片1点のみの出土であるが、甕A・甕

Bとも異なる特徴をもつ51を甕Cとした。出土した破片の重量比では甕Aが8割を占め、甕Bは2割に満たないが、灰原1および灰原1近くの黄褐色砂質土層出土の須恵器甕片に限ると、甕Bは約4割となる。一方、灰原2および灰原2近くの黄褐色砂質土層からは甕Bは出土していない。

甕A 32～49・63～72 体部外面に斜め方向の平行叩き具痕、内面に同心円当て具痕が残る。ほとんどの破片が焼成不良なため色調は白っぽい、比較的良好なものはやや青味がかった。口頸部は体部から「く」の字形に開き、やや外彎してのびる。口縁端部には外傾する面をもち、上方か下方あるいは上下両方に小さく肥厚する。体部の形態はよくわからないが、68～72をみる限りでは、最大径が肩部近くにある縦長で平底のものと思われる。口縁部の径や口頸部の形態などによってさらに細分することが可能であることから、元来、甕タイプのもとの壺タイプのもとの区別があったのかもしれない。

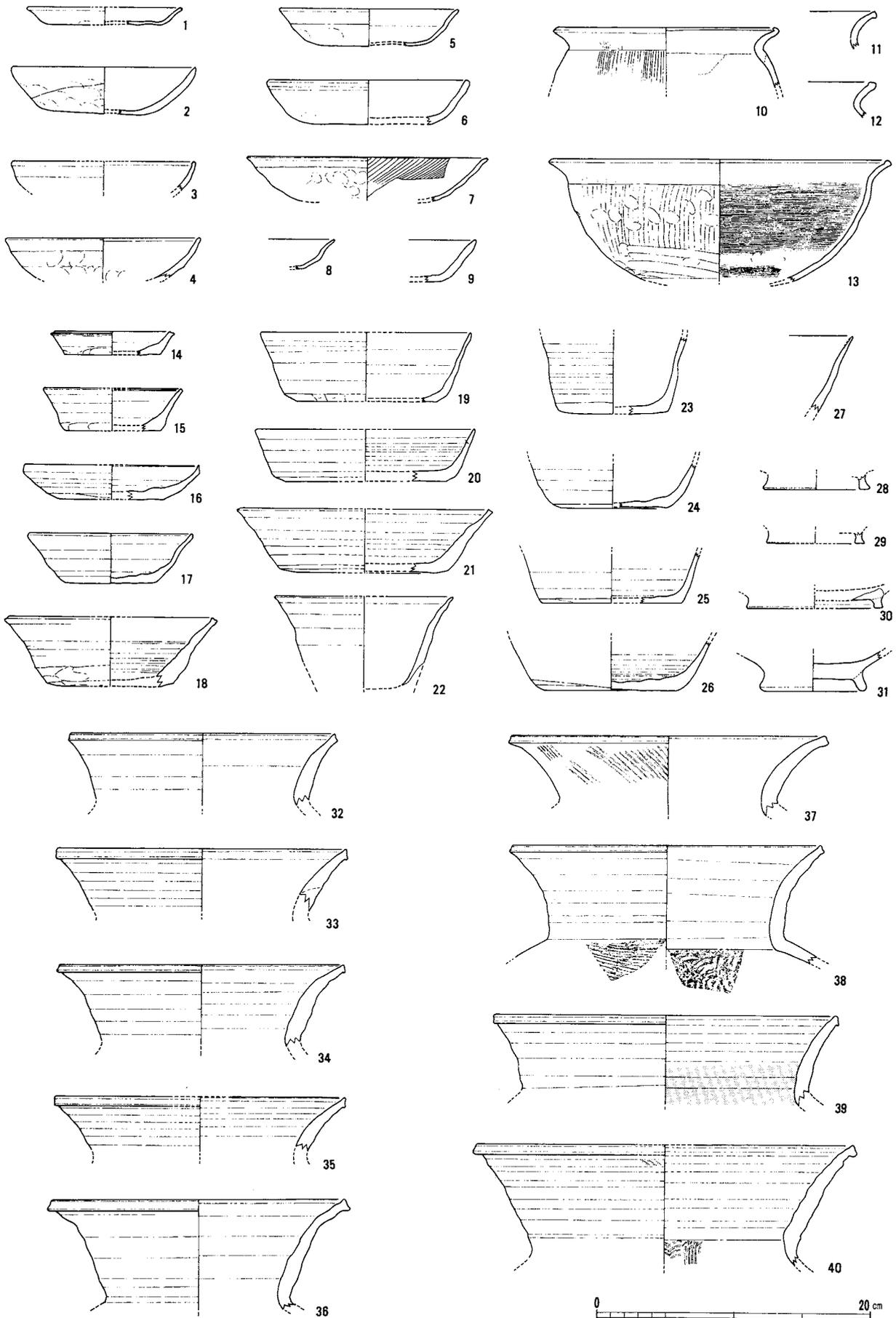
甕B 52～62 体部外面に縦方向の平行叩き具痕、内面に放射状当て具痕が残る。色調は淡く褐色味がかっているため、口頸部のみの破片であっても甕Aとのおおよその区別は可能である。52・53をみる限りでは、口頸部は直線的にのび、口縁端部は単純に終わる。55をみると体部は甕Aと類似するが、底部は58では丸底に近いものとなっている。

甕C 51 口頸部の小片であるため、全体の形態は

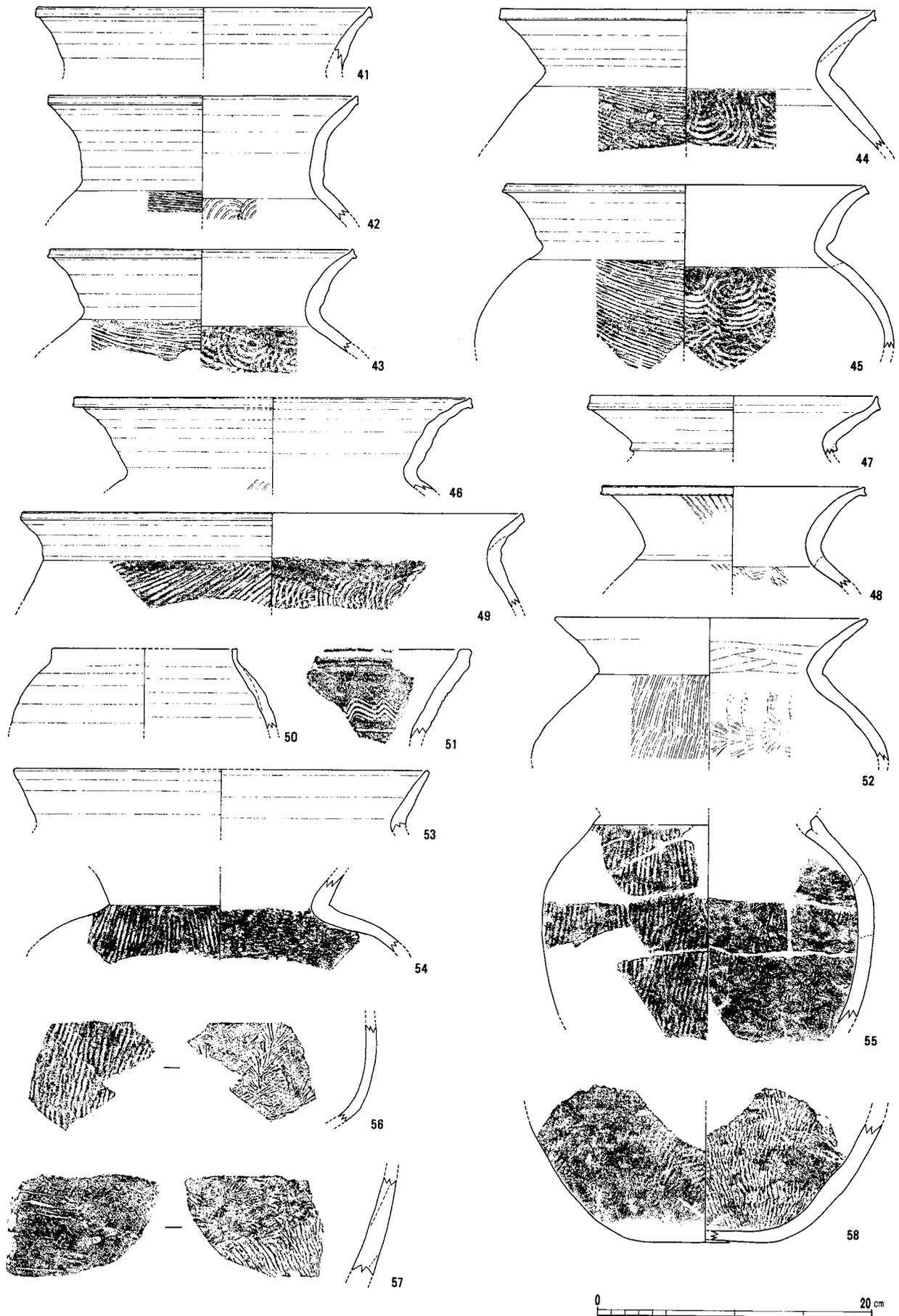
器種	出土位置		窯体・煙道	灰原 1	灰原 2	灰原 3	黄褐色砂質土層				表土・攪乱土等	合計						
	杯	甕					灰原 1 近く (28ライン以西)	灰原 2 近く (28ライン以東)										
土師器	杯		100	100	150	—	200		100	150		800	1,100					
	甕		50	100	—	—	50		100	—		300						
須恵器	杯	A	—	200	100	—	50	—	—	—	—	350	1,100					
		B	—	50	50	—	50	—	—	—	—	150						
		C	—	50	50	—	50	—	50	—	—	150						
		不明	—	150	150	—	100	50	—	—	—	450						
器	甕	A	850	13,000	19,200	200	9,000	1,800	2,150	—	46,200	57,300						
		B	—	850	4,800	17,800	—	19,200	—	200	4,800		13,850	1,800	300	2,450	9,900	56,150
		C	—	—	—	—	—	50	—	—	—		50	—	—	—	50	
	壺		—	—	—	—	50	—	—	—	—	50						
	その他		—	—	—	—	—	—	—	—	400	—	400					
	合計		1,000	18,450	19,700	200	14,400	2,050	3,000	—	58,800							

第5表 器種および出土位置別出土土器重量表

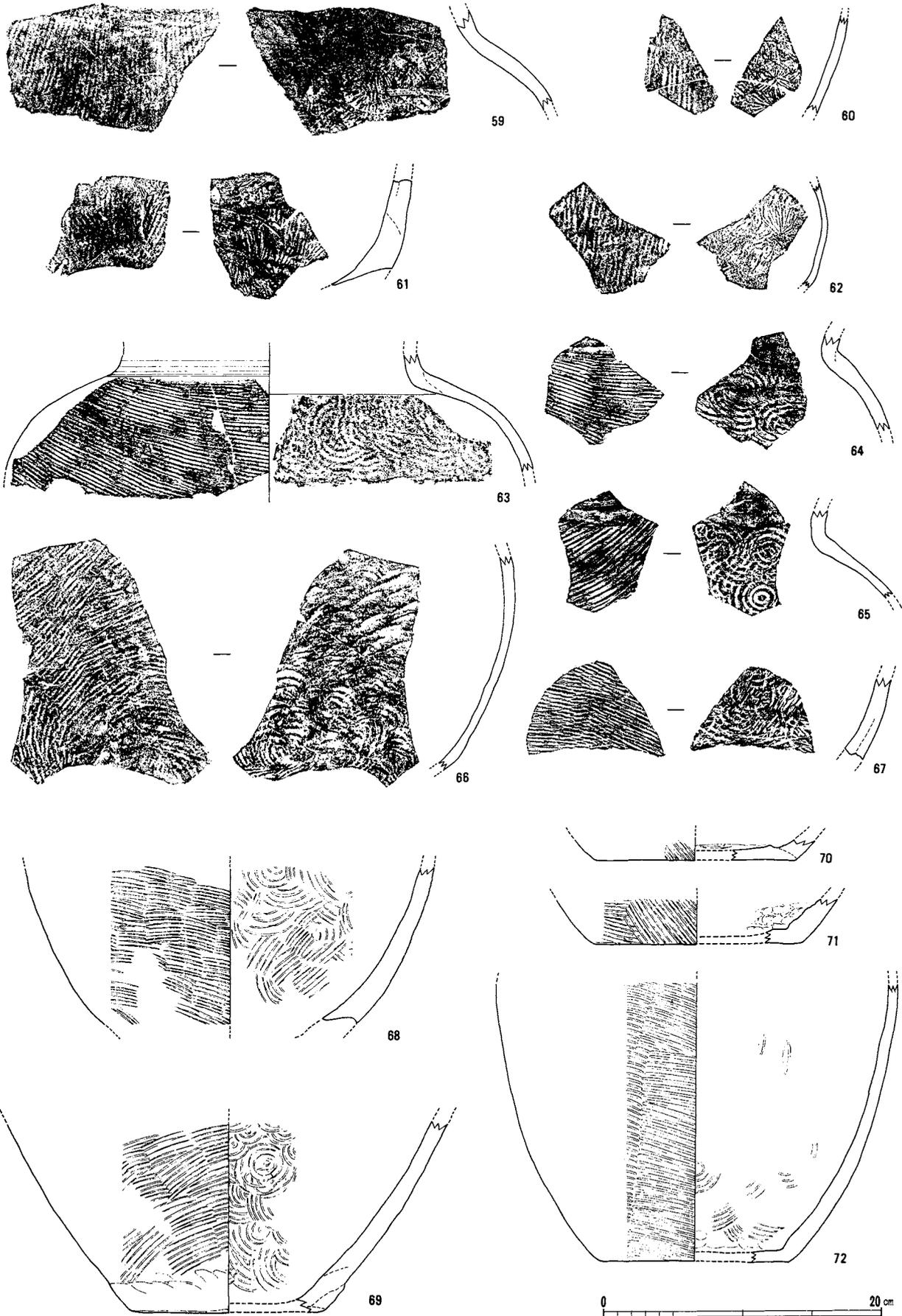
※表中の数値は厳密なものではない。単位はgである。



第15图 出土土器实测图 (1 : 4)



第16图 出土土器实测图 (1:4)



第17図 出土土器実測図(1:4)

遺物番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土・焼成	残存度	備考	整理番号
1	G-28 灰原2	土師器杯	口径:11.0? 底径:8.2? 器高:1.3?	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ。	外:7.5YR 8/6 浅黄橙色 内:7.5YR 8/8 黄橙色	細砂粒含 良	口縁:1/10 底部:1/6	磨減進む	27-0099
2	G-28 灰原2	土師器杯	口径:13.2 器高:3.5?	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ナデ。	5 YR 6/8 橙色	細砂粒含 良	口縁:1/2	体部外面粘土紐痕	27-0094
3	F-28 黄褐色砂質土	土師器杯	口径:13.2?	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ナデ。	5 YR 7/8 橙色	細砂粒含 良	口縁:1/9		27-0100
4	E-27 黄褐色砂質土	土師器杯	口径:14.0?	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ナデ。	5 YR 7/8 橙色	細砂粒含 良	口縁:1/8		27-0097
5	F-28 黄褐色砂質土	土師器杯	口径:12.9? 器高:1.7?	口縁部内外面強いヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ナデ。	7.5YR 8/3 浅黄橙色	細砂粒含 良	口縁:1/4	器壁薄い	27-0093
6	F-27 黄褐色砂質土	土師器杯	口径:14.4? 器高:3.2?	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ナデ。	7.5YR 7/6 橙色	細砂粒含 良	口縁:1/10	磨減進む	27-0095
7	H-27 窯体内東端	土師器杯	口径:17.4?	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ヨコナデ後放射状暗文。	外:5 YR 7/6 橙色 内:5 YR 6/6 橙色	細砂粒含 良	口縁:1/8	器壁薄い	27-0098
8	F-28 黄褐色砂質土	土師器杯		口縁部内外面強いヨコナデ。底部外面指オサエ、内面ナデ。	7.5YR 7/6 橙色	細砂粒含 良	体部片	器壁薄い	27-0102
9	E-26 黄褐色砂質土	土師器杯			外:5 YR 6/8 橙色 内:2.5YR 6/8 橙色	細砂粒含 良	体部片	磨減進む	27-0101
10	第1次調査 灰原1	土師器甕	口径:15.8?	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面タテハケ目、内面板状工具によるナデ。	10YR 8/4 浅黄橙色	細砂粒含 良	口縁:1/12		27-0115
11	F-27 灰原1	土師器甕		口縁部内外面ヨコナデ。	外:10YR 5/2 灰黄褐色 内:2.5YR 6/3 にぶい黄色	細砂粒含 良	口縁部片		27-0103
12	E-27 黄褐色砂質土	土師器甕		口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面タテハケ目。	外:2.5YR 7/3 浅黄色 内:2.5YR 6/3 にぶい黄色	細砂粒含 良	口頸部片		27-0104
13	H-27 石組み煙道内	土師器甕	口径:24.4?	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面粗いタテハケ目、内面細かいヨコハケ目。底部外面ヘラケズリ。	外:10YR 8/4 浅黄橙色 内:10YR 8/6 黄橙色	細砂粒少含 良	口縁:1/10		27-0088
14	E-27 黄褐色砂質土	須恵器杯A	口径:8.4? 底径:7.0? 器高:1.7?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	5 Y 7/1 灰白色	細砂粒含 良	口縁:1/4 底部:1/4		27-0056
15	E-27 黄褐色砂質土	須恵器杯A	口径:10.0? 底径:6.8? 器高:3.1?	内外面回転ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	外:5 Y 7/2 灰白色 内:5 Y 8/1 灰白色	微砂粒少含 不良	口縁:1/20 底部:1/5		27-0058
16	F-26 灰原1	須恵器杯A	口径:12.6? 底径:7.6? 器高:2.5?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	外:5 BG 6/1 青灰色 内:7.5Y 6/2 灰オリーブ	微砂粒含 やや不良	口縁:1/8 底部:1/4	蓋か。	27-0004
17	G-28 灰原2	須恵器杯A	口径:11.8? 底径:6.4? 器高:3.7?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	7.5Y 6/1 灰色	細砂粒少含 不良	口縁:1/10 底部:3/4	磨減進む	27-0025
18	第1次調査 灰原1	須恵器杯A	口径:14.8? 底径:7.6? 器高:5.0?	内外面回転ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	2.5Y 7/4 浅黄色	細砂粒少含 不良	口縁:1/5 底部:1/5	磨減進む	27-0106
19	G-27 灰原1	須恵器杯A	口径:15.2? 底径:10.2? 器高:5.0?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	2.5Y 7/4 浅黄色	砂粒含 不良	口縁:1/10 底部:1/6		27-0001
20	F-27 灰原1	須恵器杯A	口径:15.8? 底径:11.8? 器高:3.8?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	外:5 YR 5/2 灰褐色 内:5 YR 7/2 明灰褐色	微砂粒含 やや不良	口縁:1/8 底部:1/6		27-0005
21	F-26 灰原1 G-28 灰原2	須恵器杯A	口径:18.2? 底径:10.2? 器高:4.7?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	外:7.5Y 7/1 灰白色 内:7.5Y 7/3 浅黄色	細砂粒含 不良	口縁:1/10 底部:1/6		27-0003
22	G-28 灰原2	須恵器杯B	口径:12.8?	内外面回転ナデ。	外:10YR 8/6 黄橙色 内:2.5Y 8/4 淡黄色	細砂粒含 不良	口縁:1/8	磨減進む	27-0027
23	E-27 黄褐色砂質土	須恵器杯B	底径:7.6	内外面回転ナデ。底部外面ヘラケズリ?	外:5 Y 6/2 灰オリーブ 内:5 Y 8/3 淡黄色	微砂粒少含 不良	底部:2/5	磨減激しい	27-0057
24	F-28 灰原2	須恵器杯	底径:7.6?	内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちヘラケズリ。	外:5 Y 7/2 灰白色 内:5 Y 7/4 浅黄色	細砂粒少含 不良	底部:1/6		27-0026

第6表 出土土器観察表(1)

遺物番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土・焼成	残存度	備考	整理番号
25	F-26 灰原1	須恵器杯	底径：10.2?	内外面回転ナデ。底部外面へラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちへラケズリ。	外：7.5Y 6/1 灰色 内：N 6/0 灰色	微砂粒少含 良	底部：1/4		27-0002
26	F-28 灰原2	須恵器杯	底径：9.6	内外面回転ナデ。底部外面へラ切り後ナデ。体部と底部の境手持ちへラケズリ。	外：2.5Y 8/4 淡黄色 内：5Y 8/4 淡黄色	微砂粒少含 不良	底部：3/5	磨減激しい	27-0028
27	F-26 灰原1	須恵器杯B		内外面回転ナデ。	5Y 8/2 灰白色	細砂粒多含 不良	体部片	磨減激しい	27-0012
28	E-27 黄褐色砂質土	須恵器杯C	台径：7.6	高台内外面ヨコナデ。	5Y 7/4 浅黄色	微砂粒少含 やや不良	台径：2/3		27-0059
29	F-26 灰原1 上面	須恵器杯C	台径：7.0?	高台内外面ヨコナデ。	10YR 8/3 浅黄橙色	微砂粒少含 不良	台部：1/7		27-0007
30	F-26 灰原1	須恵器杯C	台径：9.8?	高台内外面ヨコナデ。底部外面ナデ。	7.5YR 7/2 灰白色	微砂粒含 不良	台部：1/10	磨減進む	27-0006
31	E-28 黄褐色砂質土	須恵器杯?	台径：7.0	底部内外面ナデ。高台内外面ヨコナデ。	5Y 7/1 灰白色	砂粒含 良	台径：1/2	壺の高台か	27-0060
32	F-27 灰原1	須恵器甕A	口径：19.2?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	外：5Y 8/2 灰白色 内：5Y 8/1 灰白色	細砂粒含 不良	口縁：1/7	磨減激しい	27-0021
33	F-26 灰原1	須恵器甕A	口径：20.1?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	外：5Y 7/1 灰白色 内：5Y 7/2 灰白色	細砂粒含 不良	口縁：1/5	磨減進む	27-0015
34	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：20.6?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	5Y 8/4 淡黄色	微砂粒少含 不良	口縁：1/20	磨減進む	27-0031
35	G-28 灰原2	須恵器甕A		口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	外：2.5Y 7/4 浅黄色 内：2.5Y 7/3 浅黄色	砂粒含 不良	口縁：1/8		27-0046
36	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：21.2?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	外：7.5Y 6/1 灰色 内：2.5GY 6/1 オリーブ灰	微砂粒少含 やや不良	口縁：1/5		27-0030
37	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：22.8?	口縁部外面叩き具痕、内面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	外：10YR 7/3 にぶい黄橙色 内：10YR 6/1 褐灰色	細砂粒多含 不良	口縁：1/5	磨減進む	27-0036
38	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：22.4?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	外：N 6/0 灰白 内：N 7/0 灰白色	細砂粒含 良	口縁：3/7		27-0034
39	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：24.8?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	外：7.5Y 7/1 灰白色 内：7.5Y 7/2 灰白色	微砂粒含 やや不良	口縁：1/7	頸部内面に暗灰色顔料塗布	27-0038
40	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：27.4?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。頸部内面同心円当て具痕。	外：10Y 7/1 灰白色 内：5Y 6/1 灰色	微砂粒少含 やや不良	口縁：1/20		27-0039
41	F-28 灰原2	須恵器甕A		口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	5Y 4/1 灰色	細砂粒多含 不良	口縁部片	磨減進む	27-0043
42	G-28 灰原2	須恵器甕A	口径：22.4?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	外：5Y 8/3 淡黄色 内：5Y 8/4 淡黄色	細砂粒含 不良	口縁：1/6	磨減激しい	27-0044
43	E-26 黄褐色砂質土	須恵器甕A	口径：22.0?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	5Y 8/4 淡黄色	細砂粒含 やや不良	口縁：1/8		27-0105
44	F-27 黄褐色砂質土	須恵器甕A	口径：27.2?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	5Y 8/4 淡黄色	細砂粒含 不良	口縁：1/4	磨減進む	27-0063
45	E-26 黄褐色砂質土	須恵器甕A	口径：26.2?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	2.5Y 8/1 灰白色	微砂粒少含 やや不良	口縁：1/6 肩部：1/4		27-0062
46	E-27 黄褐色砂質土	須恵器甕A	口径：28.8?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	外：2.5Y 8/3 淡黄色 内：7.5YR 8/3 浅黄橙色	微砂粒多含 不良	口縁：1/9	磨減進む	27-0064
47	H-27 窯体床面下	須恵器甕A	口径：20.9?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。	2.5Y 8/1 灰白色	微砂粒含 不良	口縁：1/12	磨減激しい	27-0087
48	G-28 攪乱土	須恵器甕A	口径：19.0?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	2.5Y 8/1 灰白色	微砂粒多含 やや不良	口縁：1/6	磨減進む	27-0090

第7表 出土土器観察表(2)

遺物番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土・焼成	残存度	備考	整理番号
49	G-28 灰原2	須恵器 甕A	口径：36.4?	口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	外：5 Y 7/2 灰白色 内：N 8/0 灰白色	微砂粒少含 良	口縁：1/6		27-0037
50	G-28 灰原2	須恵器 短頸壺	口径：13.4?	内外面回転ナデ。	2.5 Y 8/3 淡黄色	微砂粒少含 不良	口縁：1/7	磨減激しい	27-0029
51	E-26 黄褐色砂質土	須恵器 甕C		口縁部内外面回転ナデ、端部強いヨコナデ。外面に波状文と沈線。	5 Y 6/1 灰色	微砂粒多含 やや不良	口縁部片	磨減進む	27-0061
52	F-27 灰原1	須恵器 甕B	口径：22.4?	口縁部内外面回転ナデ。肩部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕後ナデ。	外：2.5 Y 7/2 灰黄色 内：2.5 Y 6/2 灰黄色	微砂粒含 不良	口縁：1/3	磨減進む	27-0016
	E-27黄褐色砂質土 第1次調査 灰原1								
53	F-26 灰原1上面	須恵器 甕B	口径：30.0?	口縁部内外面回転ナデ。	外：7.5 YR 5/2 灰褐色 内：7.5 YR 7/2 明灰褐色	微砂粒少含 不良	口縁：1/9	磨減進む	27-0070
	E-27黄褐色砂質土								
54	E-27 黄褐色砂質土	須恵器 甕B	頸径：16.0?	肩部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕後ナデ。	7.5 YR 6/1 褐灰色	微砂粒含 不良	口縁：1/4	磨減進む	27-0128
55	第1次調査 灰原1	須恵器 甕B	体径：24.3?	体部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	7.5 YR 6/1 褐灰色	微砂粒少含 不良	体部：1/4	磨減進む	27-0127
	E-27黄褐色砂質土								
56	第1次調査 灰原1	須恵器 甕B		体部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕後ナデ。	7.5 YR 6/1 褐灰色	微砂粒少含 不良	体部片	磨減進む	27-0117
57	第1次調査 灰原1	須恵器 甕B		体部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	7.5 YR 6/1 褐灰色	微砂粒少含 不良	体部片	磨減進む	27-0118
58	F-27黄褐色砂質土	須恵器 甕B		底部外面不定方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	外：5 Y 6/2 灰オリーブ 内：2.5 Y 5/1 黄灰色	微砂粒少含 不良	底部：1/2	磨減進む	27-0082
	E-27黄褐色砂質土 第1次調査 灰原1								
59	E-27 黄褐色砂質土	須恵器 甕B		肩部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	外：10 YR 5/2 灰黄橙色 内：10 YR 6/2 灰黄橙色	微砂粒少含 やや不良	肩部片	磨減進む	27-0086
60	F-26 灰原1	須恵器 甕B		肩部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	外：7.5 YR 6/1 褐灰色 内：5 Y 4/1 灰色	微砂粒少含 不良	体部片	磨減進む	27-0024
61	第1次調査 灰原1	須恵器 甕B		肩部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	7.5 YR 6/1 褐灰色	微砂粒少含 不良	底部片	磨減進む	27-0120
62	E-27 黄褐色砂質土	須恵器 甕B		肩部外面縦方向平行叩き具痕、内面放射状当て具痕。	2.5 Y 5/1 黄灰色	微砂粒少含 不良	体部片		27-0065
63	G-28 灰原1	須恵器 甕A	頸径：22.0?	肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	2.5 Y 8/4 淡黄色	微砂粒少含 不良	肩部：1/7	磨減進む	27-0033
64	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A		肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	N 7/10 灰白色	微砂粒少含 やや不良	肩部：1/7	磨減進む	27-0123
65	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A		肩部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	N 7/10 灰白色	微砂粒少含 やや不良	肩部：1/7	磨減進む	27-0124
66	G-28 灰原1	須恵器 甕A		体部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	N 7/10 灰白色	細砂粒含 良	体部片		27-0035
67	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A		体部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	N 7/10 灰白色	微砂粒少含 やや不良	体部片		27-0125
68	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A		体部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	5 Y 8/3 淡黄色	微砂粒少含 不良	体部片	磨減進む	27-0112
69	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A		体部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	N 7/10 灰白色	微砂粒少含 不良	体部片	磨減進む	27-0109
70	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A	底径：14.4?	底部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	5 Y 8/3 淡黄色	細砂粒含 不良	底部：1/5	磨減激しい	27-0114
71	第1次調査 灰原1	須恵器 甕A	底径：15.1?	底部外面斜め方向平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	2.5 Y 7/6 明黄褐色	細砂粒少含 不良	底部：1/5	磨減進む	27-0113
72	G-27 灰原3	須恵器 甕A	底径：13.4?	体部外面平行叩き具痕、内面同心円当て具痕。	外：5 Y 8/3 淡黄色 内：2.5 Y 7/6 明黄褐色	砂粒含 不良	底部：1/5	磨減進む	27-0009
	G-27 用水路上								
	H-27窯体(奥)								

第8表 出土土器観察表(3)

不明である。焼成は不良で胎土や色調が甕Aに類似しているため、当窯跡の製品であることは確かと思われるが、口頸部外面に波状文が施されていることや、口縁端部に水平に近い面をもつことなど、他の須恵器甕に見られない特徴を多くもつ。

B. 壺 50 口頸部がきわめて短い短頸壺で、口縁端部上面に狭い面をもつ。壺と認められる破片はこの1点のみであるが、焼成が不良であることから、当窯跡の製品であることは確かであると思われる。

7. ま と め

泉貢窯跡は丘陵南東斜面に築かれた半地下式の平窯である。調査区内では窯体は1基しか検出されず、付近にも窯跡は確認されていないことから、おそらく単独で存在していたのであろう。出土遺物を見ると製品の大半は須恵器甕で、須恵器の杯類も若干焼成していたことがわかる。また、土師器杯・甕の破片も少量出土しているが、これらは製品ではなく、須恵器工人が持ち込んだものと思われる。

窯の操業時期については、窯体の形態や製品である須恵器から、平安時代の中頃であろうと推定されるが、この時期の類例が少ないため、確かなことはいえない。

土師器杯を斎宮跡の土師器編年^⑦でみると、形態や調整の特徴が、平安時代の前Ⅱ期あるいは中期のものに近い。土師器甕や須恵器甕についても斎宮跡出土のこの時期のものと比べて矛盾はみられない。平安時代前Ⅱ期と中期の土師器には猿投窯編年^⑧の黒笹90号窯式と折戸53号窯式の灰釉陶器が共伴していることから、実年代は9世紀後半から10世紀前半と思われる。泉貢窯跡の操業時期は10世紀前半頃としておきたい。

出土遺物の中で特記すべきものに、体部内面に放

射状の当て具痕がみられる須恵器甕B類がある。三重県内での類例は、斎宮跡で検出された奈良時代前半とされる円形周溝S X4310出土のもののみである。斎宮跡出土の甕は、時期の差、口頸部の形態や放射状当て具痕の刻文の違いなどから、泉貢窯跡のものとは直接の関係を想定しがたい。放射状当て具痕をもつ須恵器大甕については高橋与右エ門氏の論考^⑨があるが、斎宮跡出土の例も含めて、まだまだ検討すべき事柄は多く残されている。

10世紀前後の東海地方は灰釉陶器生産の最盛期で、三重県内でも桑名市の七和2号窯址^⑩（10世紀代）、四日市市の岡山3号窯址^⑪（11世紀代）などの灰釉陶器を焼成していた窯跡が知られている。一方、東海地方での須恵器生産は最終末を迎え、三重県内ではこの時期の須恵器窯の存在は全く知られていないばかりか、石組み煙道、放射状当て具痕をもつ須恵器甕等、泉貢窯跡に関わる類例は皆無に等しく、須恵器製作技術の伝播や製品の流通についての問題を含めて今後に残された課題はあまりにも多い。

近い将来、泉貢窯跡での焼成品が他の遺跡で出土し、その課題の一部でも解明される日が来ることを期待する。 (前川 嘉宏)

〔註・参考文献〕

- ① 本書で報告。「山神城跡 浦ノ内地区」
- ② 主に三重県教育委員会が作成した『三重県遺跡台帳』を参考にした。
- ③ 昭和38（1963）年に発掘調査された2基（「度会郡玉城町原6号・同7号発掘略報」『ふびと』22 三重大学学芸学部歴史研究会1964）以外は全て発掘調査をせずに破壊され消滅した。
- ④ 明気窯跡群については6世紀代に遡る可能性もある。
- ⑤ 河北秀実・野原宏司 他「牧瓦窯跡群」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊2』三重県教育委員会1989
- ⑥ 窯体を確認されていないため、『三重県遺跡台帳』には「西谷遺跡」となっている。

- ⑦ 「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡 発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1985
- ⑧ 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会 1983
- ⑨ 『三重県斎宮跡調査事務所年報1986 史跡 斎宮跡 発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1987
- ⑩ 高橋与右エ門「須恵器大甕にみられる“放射状当て具痕”について」『紀要Ⅳ』（財）岩手県埋蔵文化財センター 1984
- ⑪ 小玉道明「七和2号窯址発掘調査報告」三重県教育委員会 1973
- ⑫ 小玉道明・山澤義貴「岡山古窯址群発掘調査報告」四日市市教育委員会 1971

第1次調査全景 (南西から)



調査前築体周辺遠景 (南から)

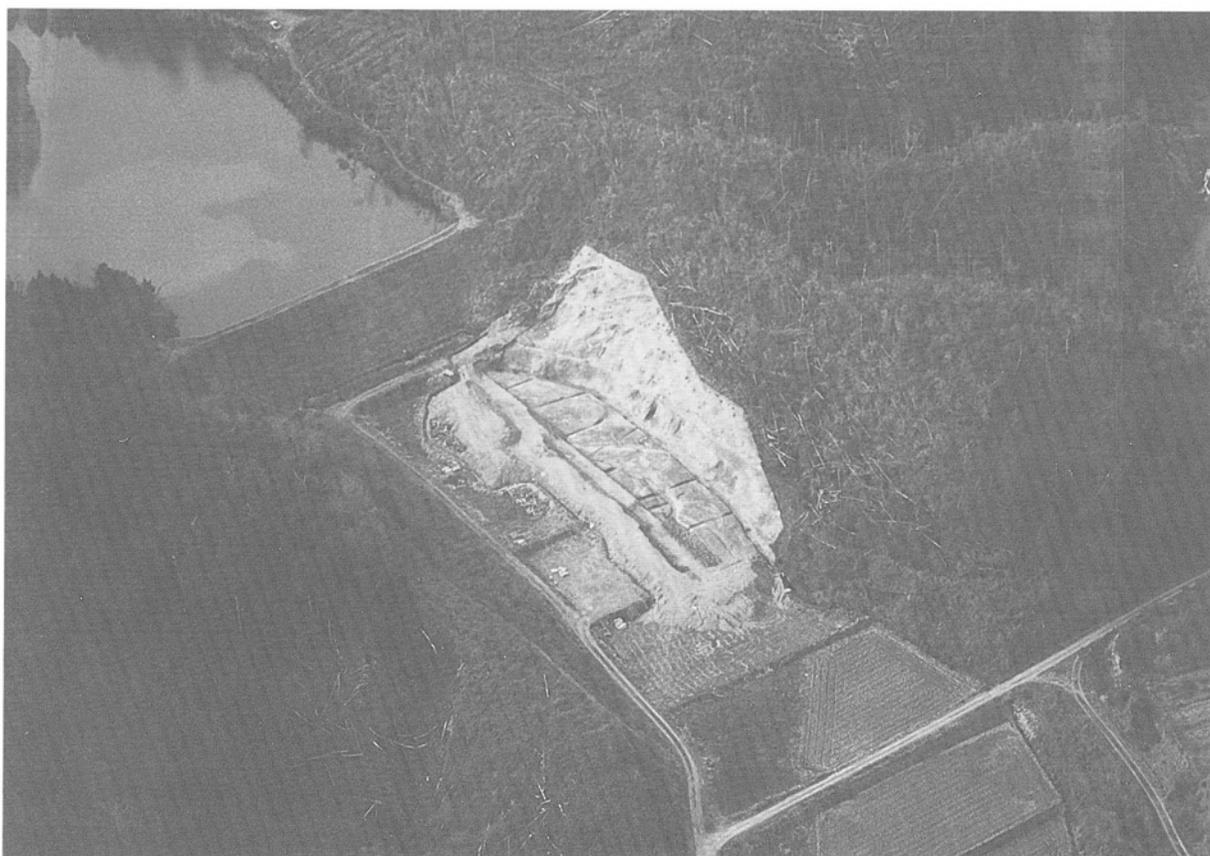


調査後調査区全景 (東から)



調査後調査区全景 (南西から)





調査後遠景（北東上空から）

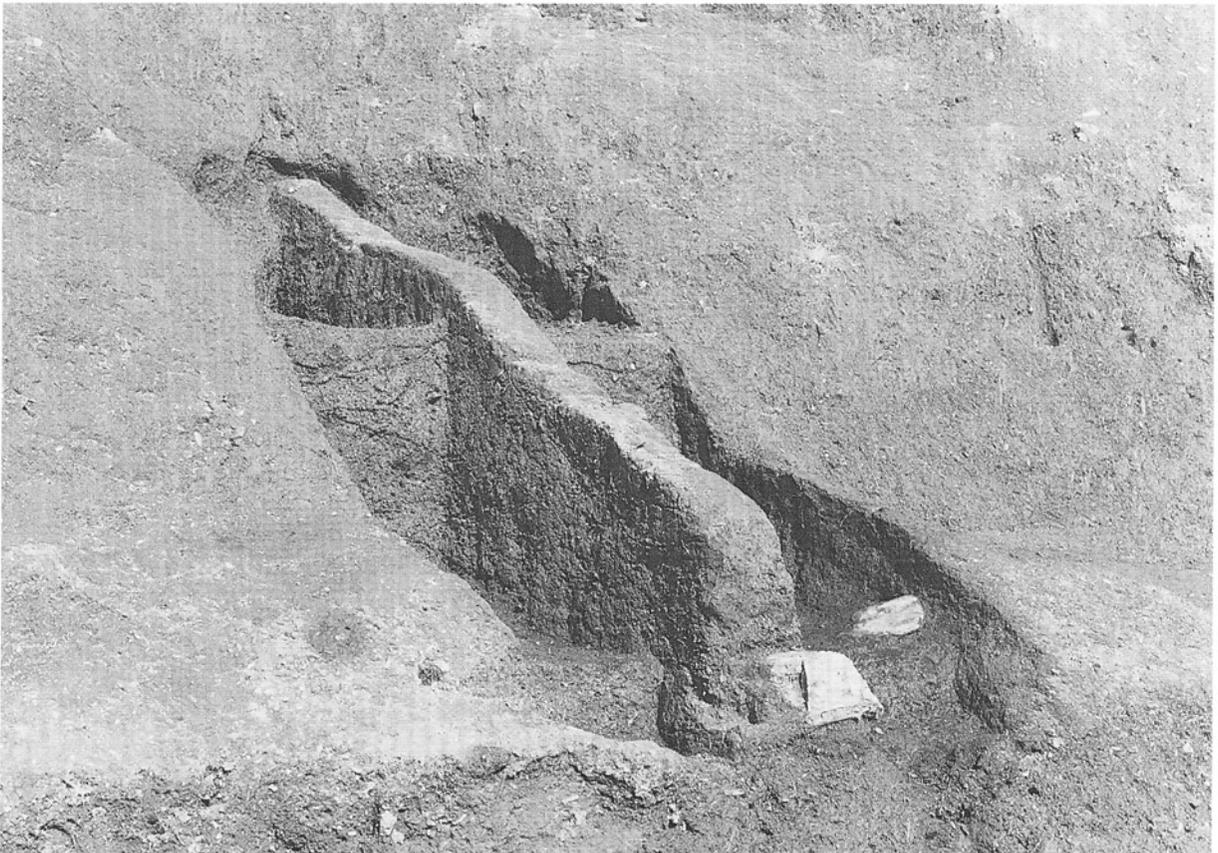


表土除去後窠体（南東から）

P L 4



窯体土層断面（南東から）

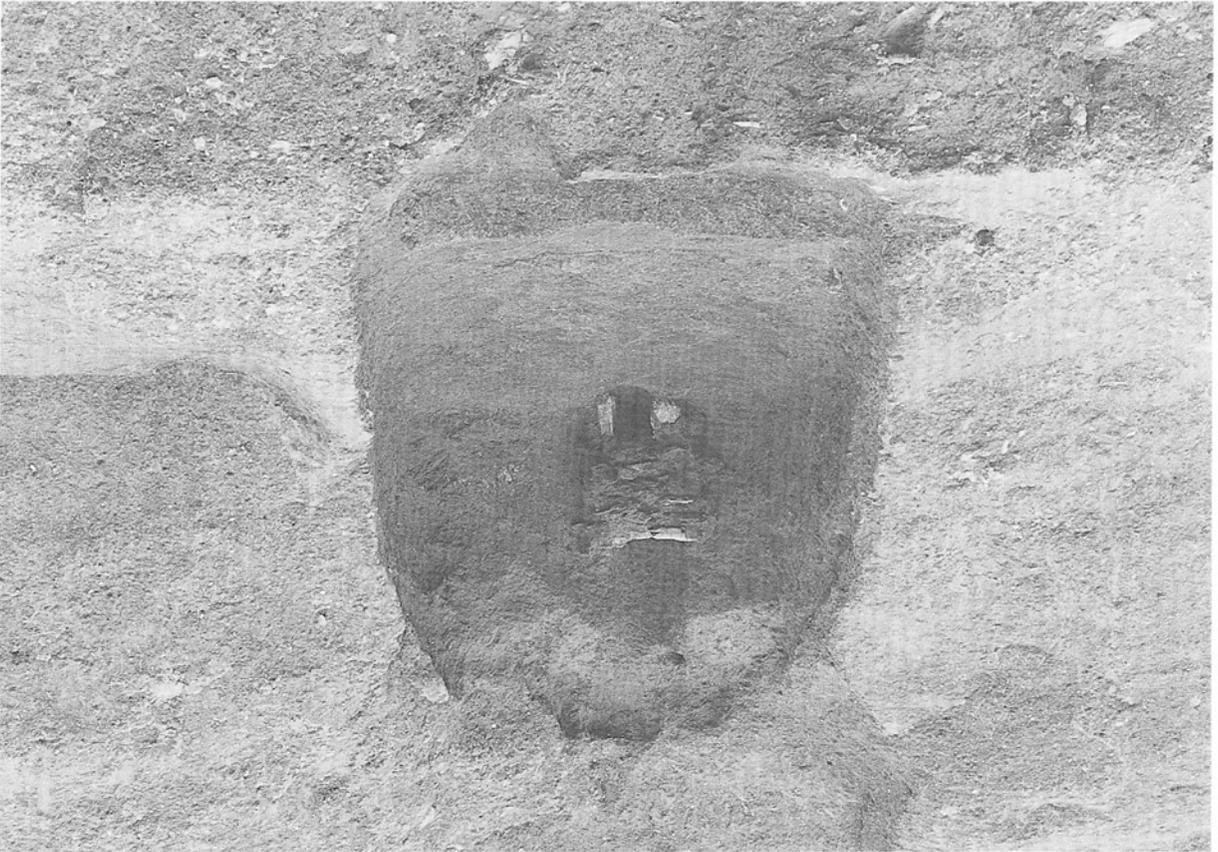


窯体土層断面（南から）

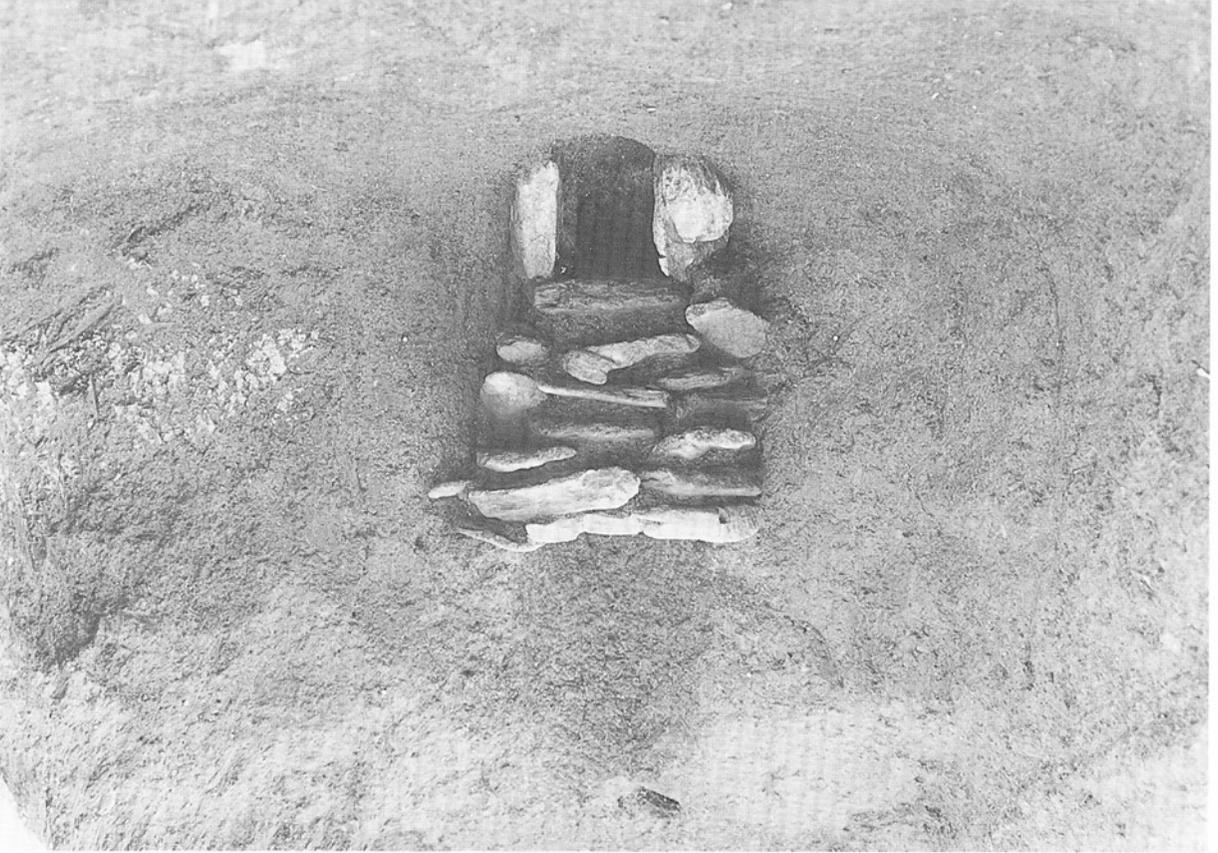
窯体と石組み煙道（東から）



窯体と石組み煙道（南東から）

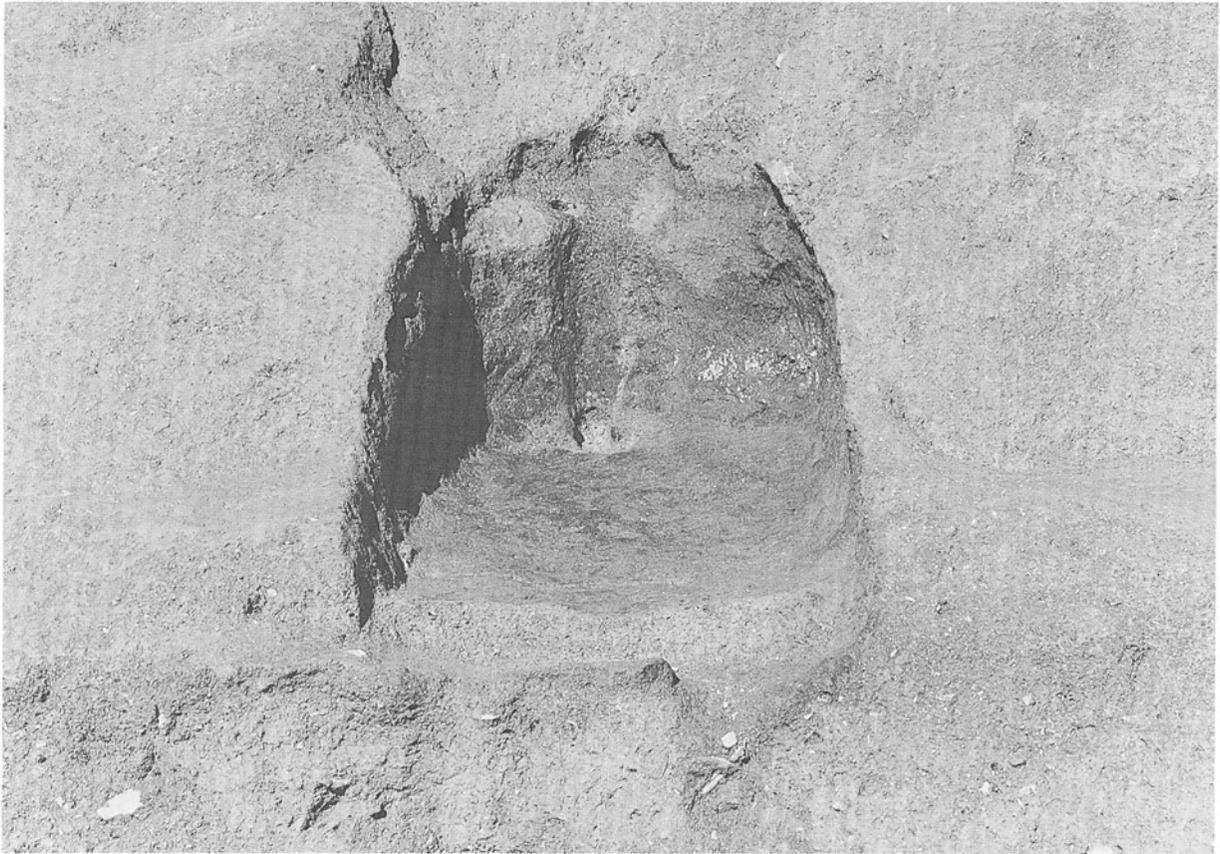


又サ入り粘土除去後石組み煙道 (南東から)



石組み煙道 (東から)



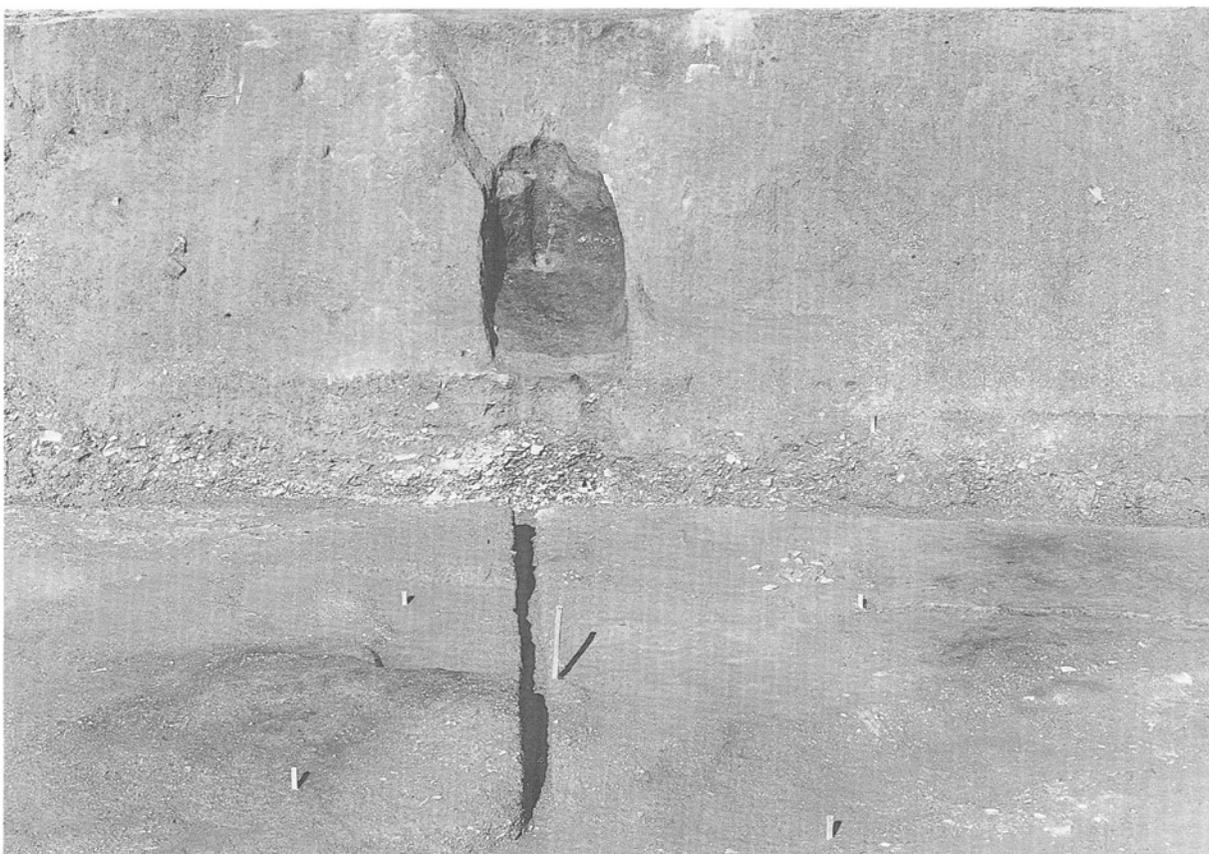


石組み煙道除去後窯体（南東から）

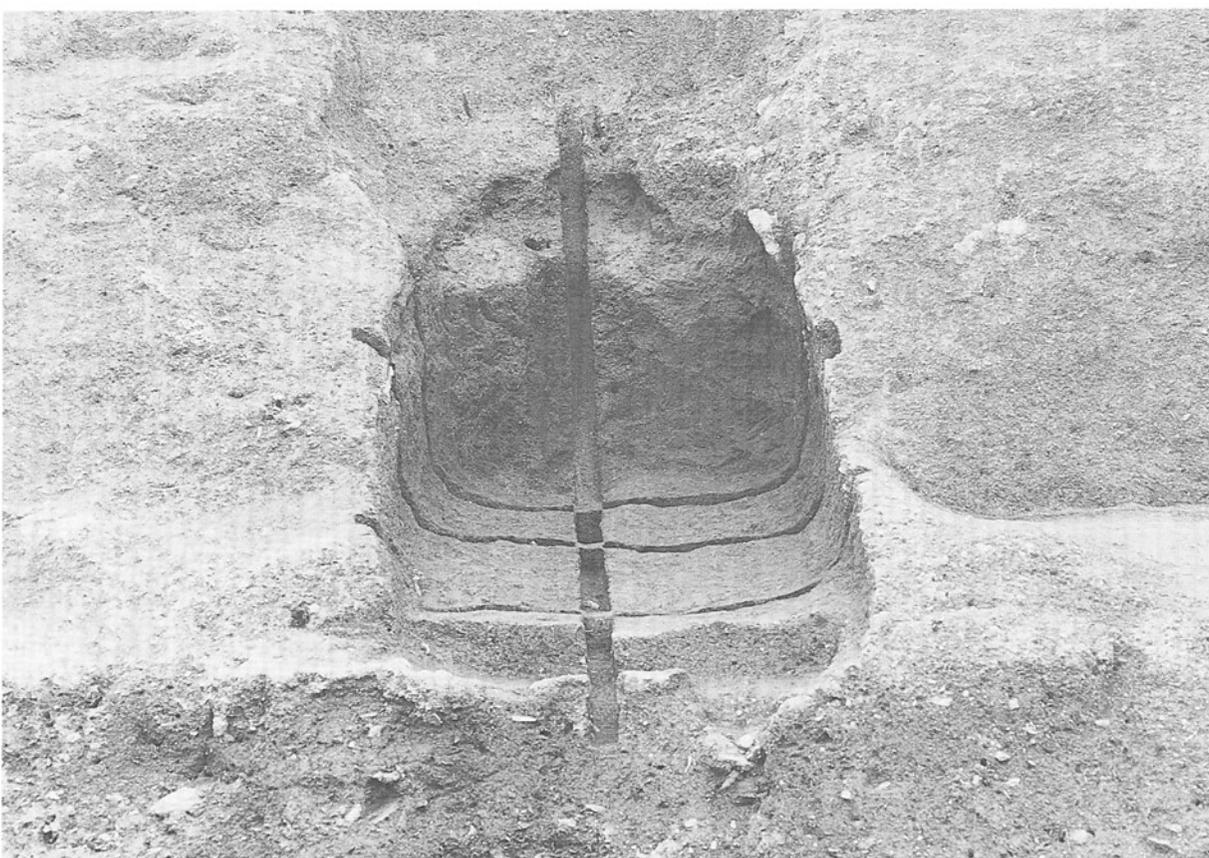


石組み煙道除去後窯体（南から）

PL 8



窯体と灰原（南東から）



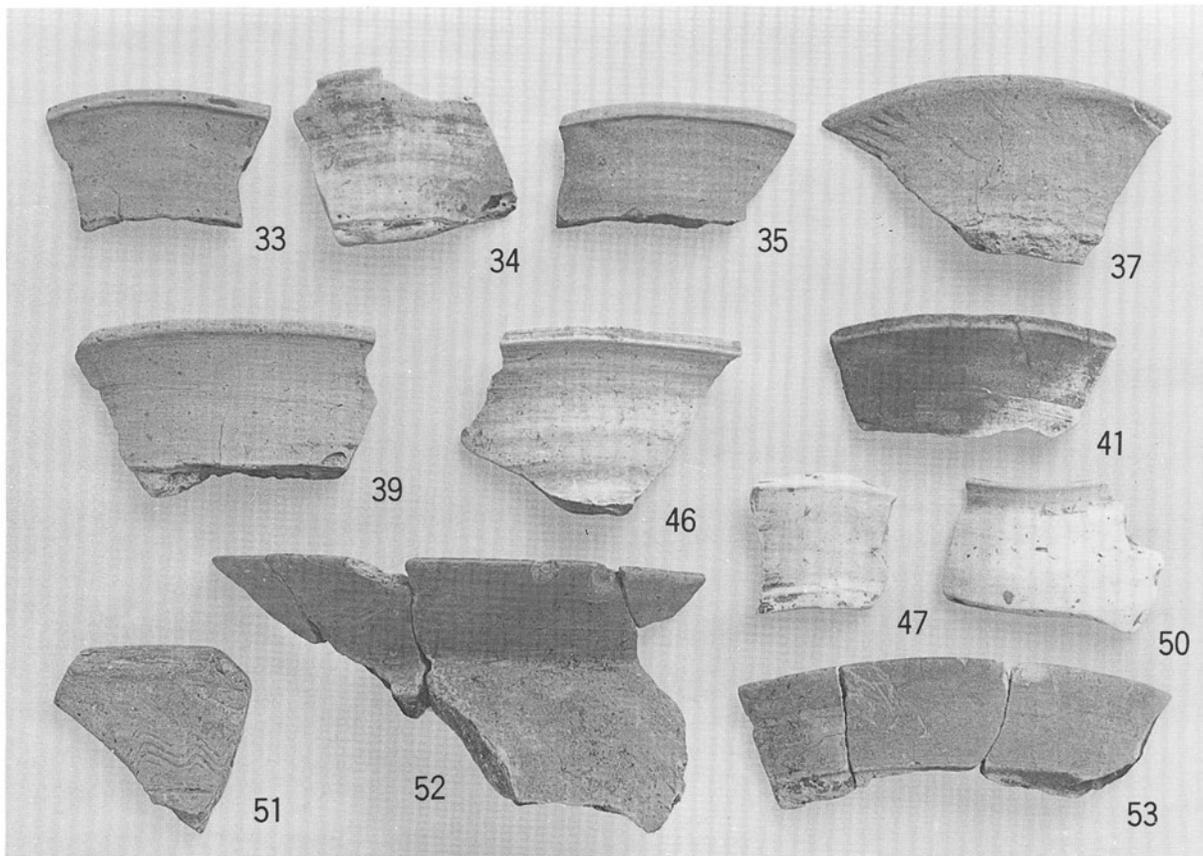
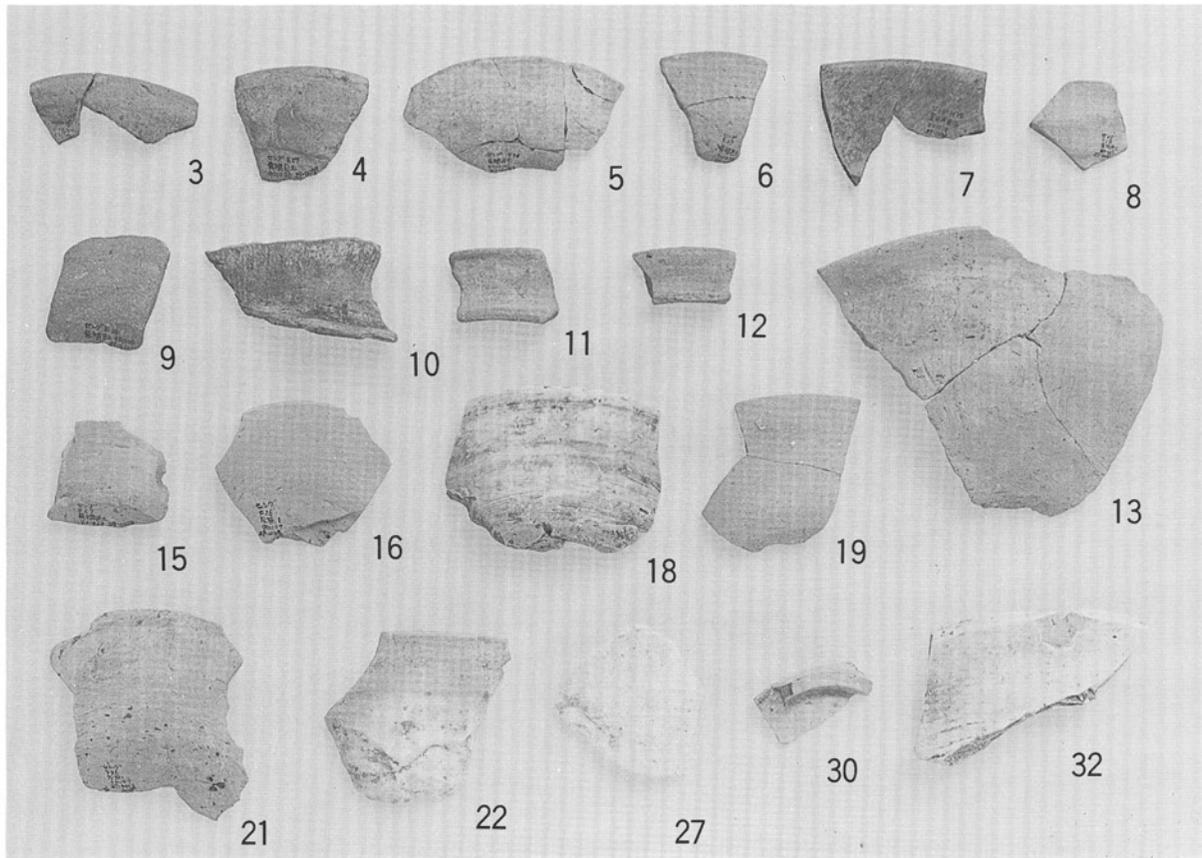
断ち割り窯体後（南東から）

断ち割り後築体と灰原 (東から)

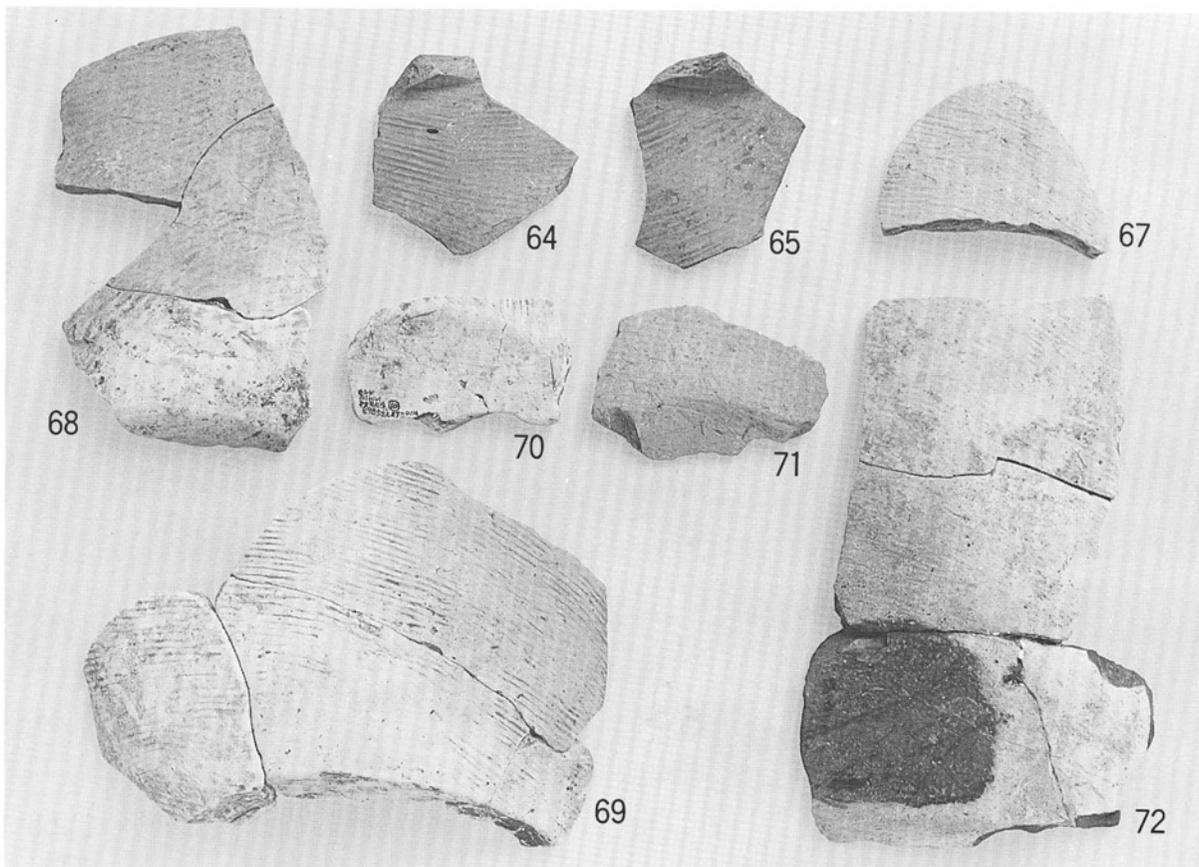
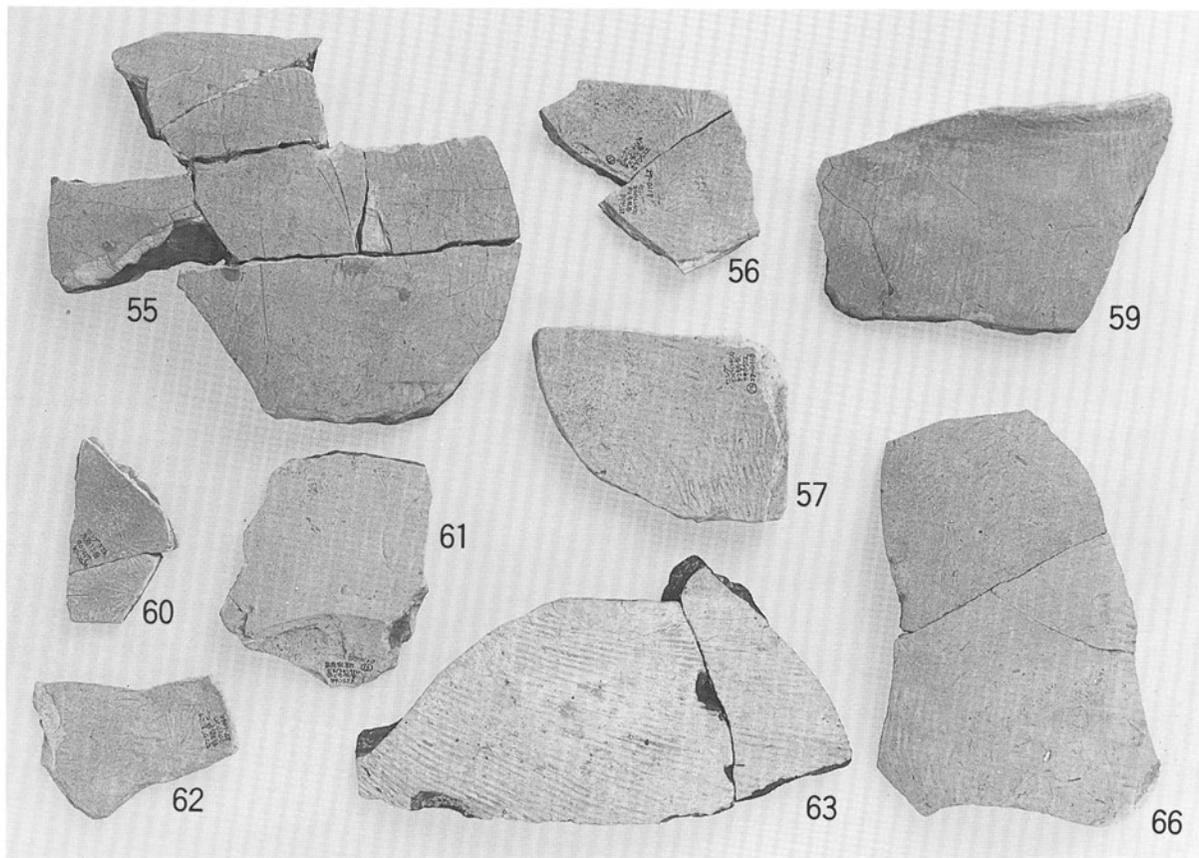


断ち割り後築体と灰原 (南から)



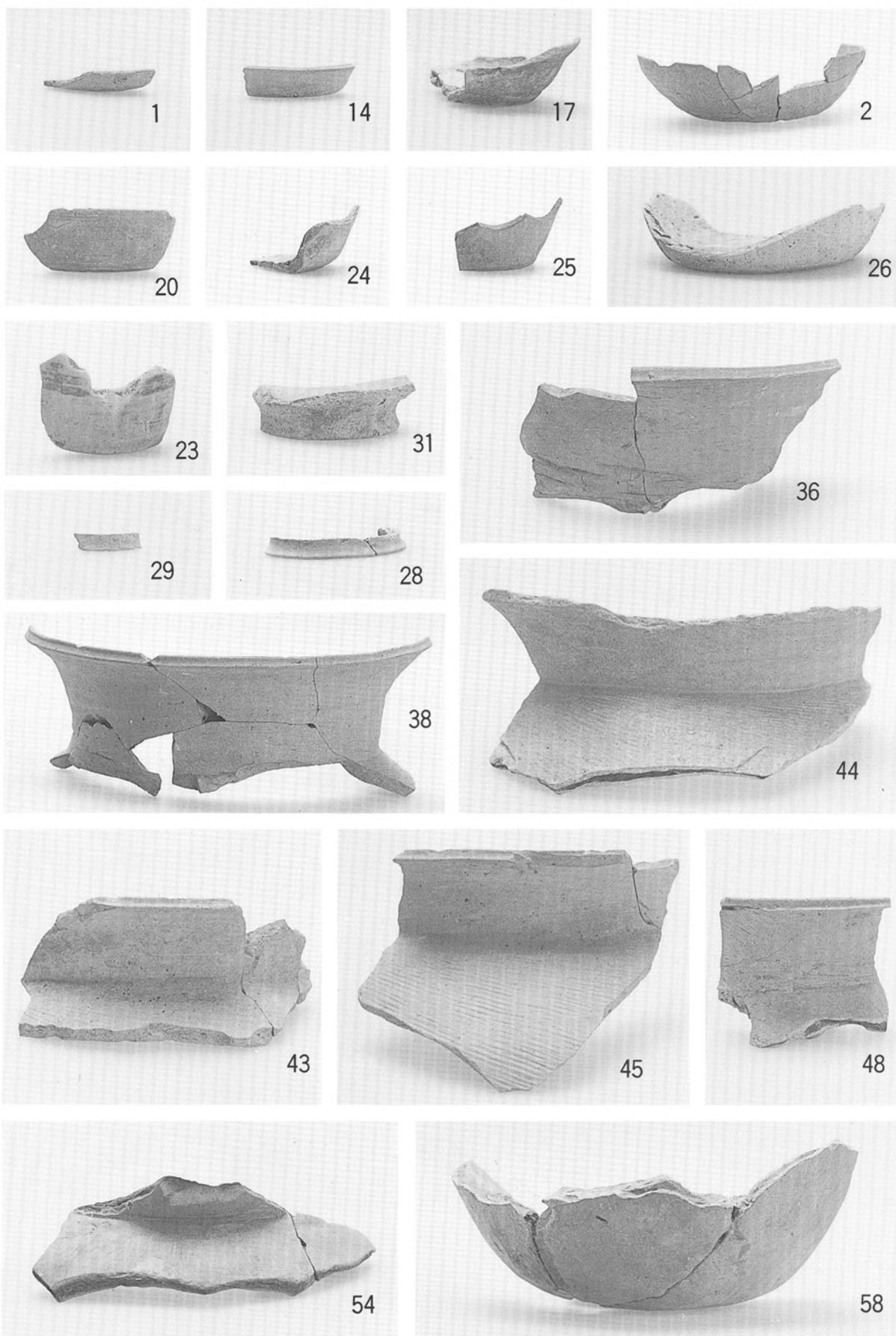


出土土器 (1 : 3)



出土土器 (1 : 3)

P L12



出土土器 (1 : 3)

泉貢窯跡の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、田中 豊、森定 尚

1. はじめに

遺跡に残る焼土の熱残留磁化を測定して、その磁化方向から遺構の年代を求める考古地磁気法は、窯跡や炉跡などの焼土遺構の年代推定法として、定着しつつある。

三重県内の遺跡についても多くの考古地磁気測定の報告がある。古くは、久居3号窯、原5号窯 (Kawai et al., 1965) や岡山1、2号窯、西大鐘窯跡、小海製塩炉址 (Hirooka, 1971) の測定に始まり、牧瓦窯跡群 (広岡他, 1989) などについてなされている。また、現在、斎宮跡で出土している土師器を焼いた窯跡が明和町で見つかり、発掘調査がなされた北野遺跡、戸峯古墳群、戸峯A遺跡について考古地磁気の測定を行っている。

地磁気は、時代によって変化が大きい時期と小さい時期とがあり、変化が小さいときは、年代が違っていても地磁気の方向はあまり変わらないので、年代推定の分解能が落ちる。19世紀後半以降と8世紀後半から11世紀前半までの期間は、丁度このような変化の少ない時期に当たっている。

2. 試料の採取と磁化測定

窯体内では、普通、側壁の方がよく焼けているが、側壁は内側に倒れ込むように傾いていることが多く、その分だけ磁化方向の角度も変わるので、誤った磁化方向を与える危険性がある。そのため、そのような恐れのない床面から試料を採ることになっている。泉貢窯跡でも、床面中央部から12個 (試料番号HMI 1~12) の試料を採取した。それぞれ石膏で固めて、窯跡内でのその焼土の方位を詳しく測った定方位試料をとる。試料採取の方法の詳細については、牧瓦窯跡群の報告 (広岡他, 1989) に述べてあるのでそれを参照されたい。

研究室で34mm×34mm×34mmの立方体に整形した後、リングコア・スピナー磁力計 (夏原技研製SMM-

85型) を使い、6回置き直して、試料の残留磁化の測定を行った。

3. 残留磁化の測定結果

各試料の磁化測定の結果は第9表のようになる。磁化強度は $10^{-3} \sim 10^{-4}$ emu/grの値を示しており、十分高温で焼かれたことを物語っている。試料HMI 3は、他の試料に比べて偏角が少し西に偏りすぎており、HMI10は伏角が他と比べて浅すぎる傾向が見られる。これら2個の試料を除くと、磁化方向のまとまりは非常に良く、信頼度の高い結果が得られた。平均磁化方向と磁化のばらつきの大きさを求めるには、フィッシャーの方法 (Fisher, 1953) を用いて統計処理をした。この統計計算によって、平均偏角・平均伏角・95%レベルのフィッシャーの信頼角 (α_{95})・フィッシャーの精度変数 (K) および平均磁化強度を求める。 α_{95} およびKはともに同一遺構から得られた試料の残留磁化方向が、どれくらいばらついていのかを示すもので、 α_{95} は、平均磁化方向 (平均偏角・

第9表 泉貢窯跡の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
HMI 1	-15.8	48.2	12.9
2	-15.4	53.0	6.41
* 3	-24.2	46.1	4.19
4	-13.1	51.6	15.4
5	-14.9	53.1	2.80
6	-13.0	51.1	9.84
7	-12.1	51.8	5.09
8	-18.2	49.1	6.78
9	-14.3	50.9	3.14
* 10	-15.4	42.4	1.77
11	-15.2	48.6	2.42
12	-11.7	49.3	2.70

*: 統計計算の際に除外したもの。

平均伏角) のまわり $\pm \alpha_{95}$ の範囲に真の磁化方向が95%の確率で存在することを示している。測定試料数が多くなるほどその平均磁化方向の信頼度が高くなり、 α_{95} の値は小さくなる。Kは、同一遺構内の任意の2つの試料の磁化方向の平均的な違いの大きさを表すパラメータで、値が大きいくほどばらつきが少ないことを意味する。この値は試料の数には関係なく、その遺構の個々の試料の磁化方向がどれくらいばらついているかを示す。よく焼けた窯跡の場合には、 α_{95} は 3° 以内におさまり、Kは数百以上の値となる。統計計算の結果は第10表に示されている。

4. 考古地磁気推定年代

第10表の結果を西南日本の考古地磁気永年変化曲線(広岡, 1977) と比べたのが第18図である。図の黒丸が各遺構の平均磁化方向を示し、それを囲む楕円が α_{95} の範囲を表す。黒丸に最も近い永年変化曲線の部分の年代が考古地磁気学的に推定される年代値となり、推定年代の誤差の大きさは、 α_{95} の楕円が覆う永年変化曲線の線分の長さに対応する。

図から分かるように、永年変化曲線はA.D.550年頃が重なっており、10世紀、11世紀も、ここから余り離れていないところにある。今回の測定結果は丁度そこに位置しているので、考古地磁気学的には、2つないし3つの推定年代値が存在する事になる。これらの年代は、

- A.D.570 \pm 20年、
- 又は A.D.800 \pm 30年、
- 又は A.D.970 \pm 30年、

である。考古地磁気学的に可能性の高いものから順に挙げてあるが、このうちから考古学的知見と矛盾しない年代を採用すればよい。

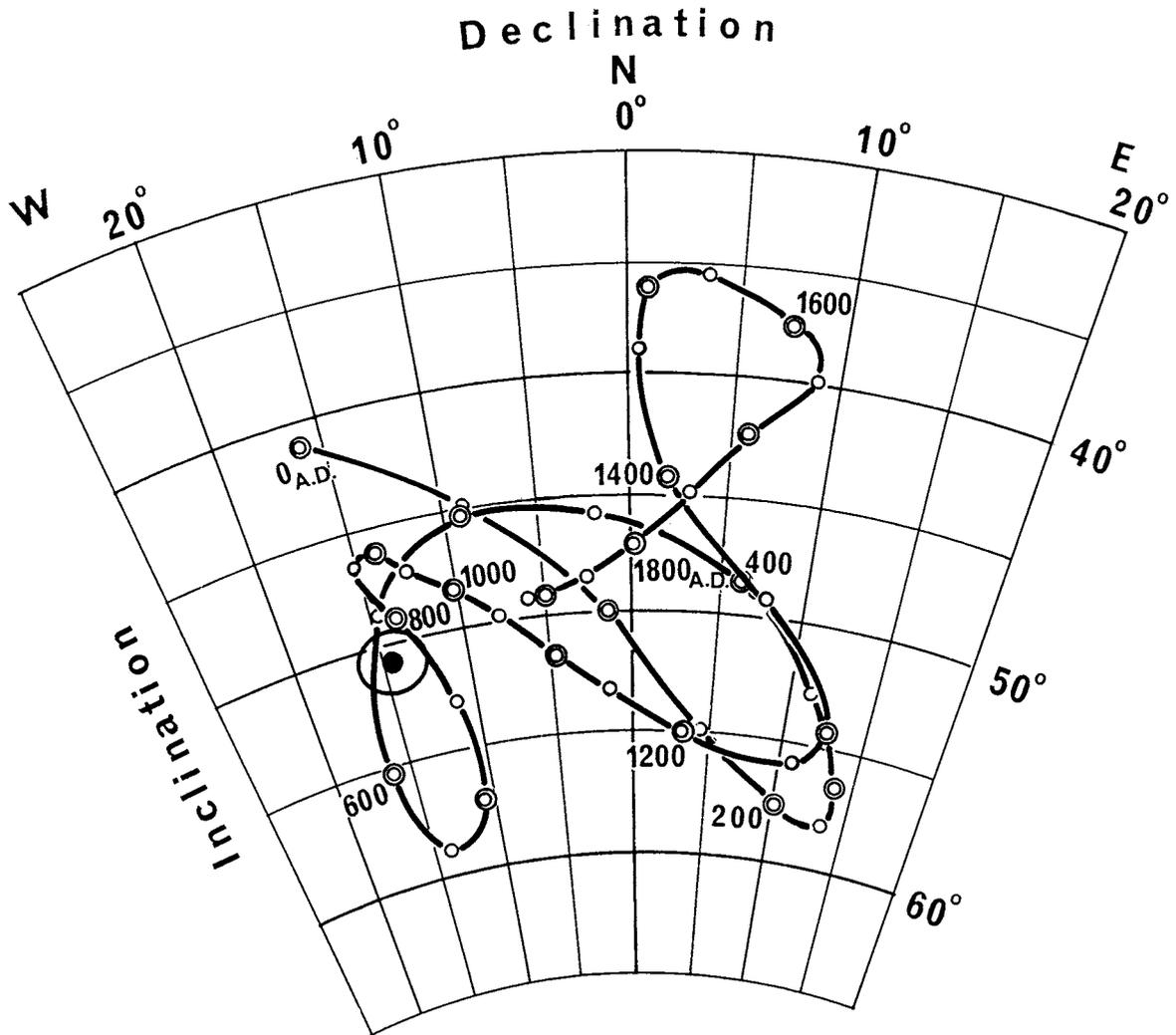
引用文献

- Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
- Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203.
- 広岡公夫、吉村勝之、味喜大介 (1989) 牧瓦窯跡群の考古地磁気測定、「近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊2、139-144.
- Kawai, N., K. Hirooka, S. Sasajima, K. Yasakawa, H. Ito and S. Kume (1965) Archaeomagnetic studies in southwestern Japan, Ann. Geophys. vol. 21, 574-578.

第10表 泉貢窯跡の考古地磁気測定結果

窯跡名	N	D ($^\circ$ E)	I ($^\circ$)	α_{95} ($^\circ$)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
泉貢窯跡	10	-14.4	50.7	1.30	1389.3	6.75

N: 試料個数、D: 平均偏角、I: 平均伏角、 α_{95} : フィッシャーの信頼角、K: フィッシャーの精度パラメータ。



第18図 泉貢窯跡の考古地磁気測定結果と西南日本の考古地磁気永年変化曲線



太陽の方位の観測



試料のサンプリング

泉貢窯跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学

三 辻 利 一

1. はじめに

須恵器の産地推定の基本的な考え方は、元素分析によって古墳出土須恵器を窯跡へ結び付けることである。そのためには、前以って窯跡を整理しておかなければならない。同じ地域に多数の窯跡がある場合、化学特性からみて窯跡群としてまとめられるのが普通である。三重県内には100基以上の窯跡が集中する、所謂、大窯跡群はない。しかし、徳居窯跡群（鈴鹿市徳居町ほか・38基・5世紀末葉～8世紀初頭）・外城田窯跡群（度会郡玉城町・多気郡多気町・約30基・7世紀前半～10世紀前半）のように数10基の窯跡をもつ中規模の窯跡群や、久居窯跡群（久居市藤ヶ丘町・4基・5世紀末葉）のような小規模な窯跡群がある。これらの窯跡で作られた須恵器は何処へ供給されていったのか現在のところ未解明である。

外城田窯跡群は、中尾窯跡（多気郡多気町・7世紀前半）・原窯跡群（度会郡玉城町・11基・7世紀末葉～8世紀前半）などの窯跡で構成されており、泉貢窯跡（10世紀前半）もその中の1つである。外城田窯跡群で焼成された須恵器は、河田古墳群（多気郡多気町・99基・6世紀末葉～7世紀前半）などの近辺の古墳群や斎宮跡（多気郡明和町）へ供給された可能性が考えられるが、確かなことはわかっていない。

以上のようなことから、泉貢窯跡をはじめ、県内の窯跡の製品が相互識別できるかどうかをはじめに検討した。次いで、河田古墳群、斎宮跡から出土した須恵器の産地を推定した結果について報告する。

2. 分析法

須恵器片試料は表面を研磨して付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎された。粉末にすることを意味は試料を均質化することと、粉末試料を整形して入射X線や検出器に対して一定の幾何学的条件をもつ試料

をつくるためである。粉末試料は塩化ビニール製リングの枠の中に入れ、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmの錠剤試料を作成した。この錠剤試料にX線を照射して発生する蛍光X線を測定した。蛍光X線スペクトルの測定には2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用した。2次ターゲットにTiを使用した真空中でK、Caを、またMoを使用して空気中でFe、Rb、Srを測定した。バックグラウンドを差し引いて、蛍光X線強度としてピーク面積が求められた。このピーク面積を岩石標準試料JG-1の対応する元素のピーク面積で割って標準化値が求められた。分析値はこの標準化値で表示された。

3. 分析結果

第19図には泉貢窯跡、中尾窯跡、原窯跡群、徳居窯跡群の須恵器のRb-Sr分布図を示す。Rb-Sr分布は各地の須恵器の地域差を有効に表示する分布図として知られる。第19図でも、窯跡群ごとにそれぞれまとまって分布しており、かつ、少しずつ分布領域がずれていることがわかる。各領域はほとんどの点を包含するようにして長方形に描いてあるが、長方形であることには特に意味はない。描き易いように長方形にしたにすぎない。したがって、この領域は定性的な意味しかもたないが、それでも、各窯跡群の製品の化学特性を比較するには十分役に立つ。第19図より、これら4つの窯跡群の製品の相互識別の可能性を示している。

より定量的に相互識別を行うには、統計学の方法が必要である。すなわち、いかに迅速に、かつ、簡便に分析できる装置ができたからといって、窯跡から出土するすべての製品を分析する訳にはいかない。普通、任意に20-30点の破片をとり出して分析するにすぎない。これらのデータから、窯跡から出土する全破片の化学特性を推計する訳である。ここに推

No.	出土位置	器種	部位	色調	胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	外面調整	内面調整
-----	------	----	----	----	----	---	----	----	----	----	------	------

泉 貢 窯 跡 (度会郡玉城町積良字泉貢・向山丑岡) [1990年発掘調査、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター]

1	F27 灰原1	甕	胴部	10Y 6/1 灰	砂粒多含	0.254	0.139	1.21	0.236	0.300	平行叩き具痕	同心円当て具痕
2	F26 灰原1	甕	胴部下半	7.5Y R 7/6 橙	細砂粒多含	0.376	0.157	1.27	0.255	0.331	平行叩き具痕	同心円当て具痕
3	F26 灰原1	甕	胴部	7.5Y 7/1 灰白	微砂粒少含	0.241	0.147	1.29	0.255	0.365	平行叩き具痕	同心円当て具痕
4	F27 灰原1	甕	胴部	10Y R 8/4 浅黄橙	微砂粒少含	0.288	0.166	1.22	0.255	0.374	平行叩き具痕	同心円当て具痕
5	F26 灰原1	杯	底部	10Y R 6/2 灰黄褐	微砂粒少含	0.269	0.127	1.39	0.282	0.366	体部ロクロナデ。底部外面不明。	
6	F27 灰原1	杯	底部	5 Y 8/3 淡黄	微砂粒含	0.287	0.142	1.40	0.194	0.341	不明	
7	G28 灰原2	甕	胴部	5 Y 8/4 淡黄	細砂粒多含	0.435	0.168	1.45	0.297	0.354	平行叩き具痕	同心円当て具痕
8	G28 灰原2	甕	胴部	7.5Y 8/1 灰白	細砂粒多含	0.304	0.173	1.49	0.300	0.395	平行叩き具痕	同心円当て具痕
9	G28 灰原2	甕	胴部下位	2.5Y 6/2 灰黄	細砂粒含	0.318	0.126	1.38	0.313	0.351	平行叩き具痕	同心円当て具痕
10	G28 灰原2	杯	平底底部	5 Y 8/1 灰白	微砂粒含	0.258	0.123	1.39	0.222	0.384	不明	不明
11	G28 灰原2	甕	胴部	5 Y 7/4 淡黄	微砂粒少含	0.302	0.146	1.32	0.285	0.416	平行叩き具痕	同心円当て具痕
12	G28 灰原2	甕	胴部	5 Y 7/2 灰白	微砂粒少含	0.316	0.131	1.25	0.361	0.392	平行叩き具痕	同心円当て具痕
13	G28 灰原2	甕	胴部下半	5 Y 7/1 灰白	微砂粒少含	0.342	0.124	1.33	0.297	0.298	平行叩き具痕	同心円当て具痕
14	E27 黄褐色土	甕	胴部	2.5Y 6/2 灰黄	砂粒多含	0.229	0.121	1.45	0.224	0.290	平行叩き具痕	同心円当て具痕
15	E27 黄褐色土	甕	胴部	10Y R 6/1 褐灰	細砂粒多含	0.338	0.173	1.30	0.270	0.381	平行叩き具痕	同心円当て具痕
16	E27 黄褐色土	甕	胴部	2.5Y 5/1 黄灰	細砂粒含	0.300	0.161	1.29	0.353	0.374	平行叩き具痕	放射状当て具痕
17	E27 黄褐色土	杯	底部	2.5Y 7/4浅黄	細砂粒多含	0.255	0.139	1.24	0.343	0.341	底部外面ヘラギリ痕。体部と底部の境手持ちヘラケスリ。	
18	E27 黄褐色土	甕	胴部	2.5Y 6/2 灰黄	精良	0.265	0.124	1.37	0.391	0.367	平行叩き具痕	平行当て具痕?
19	E27 黄褐色土	甕	胴部	10Y R 6/2 灰黄褐	微砂粒少含	0.260	0.149	1.39	0.390	0.384	平行叩き具痕	放射状当て具痕
20	E27 黄褐色土	甕	胴部	5 Y 8/3 淡黄	微砂粒少含	0.289	0.175	1.50	0.350	0.389	平行叩き具痕	同心円当て具痕

原 窯 跡 群 (度会郡玉城町原字愛宕山) [1~28=玉城町教育委員会保管、29~38=個人蔵、39~41=三重県埋蔵文化財センター保管]

21	780728 表探	甕	胴部	N 7/0 灰白	微砂粒少含	0.470	0.139	1.74	0.526	0.501	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
22	780728 表探	甕	胴部	5 Y 2/1 黒	微砂粒多含	0.514	0.126	1.25	0.579	0.468	平行叩き具痕	同心円当て具痕
23	780728 表探	甕	胴部	5 Y 8/1 灰白	砂粒多含	0.492	0.130	1.19	0.655	0.632	不明	同心円当て具痕
24	780728 表探	甕	胴部	N 7/0 灰白	砂粒多含	0.500	0.128	1.75	0.590	0.506	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
25	780728 表探	甕	胴部	N 6/0 灰	砂粒多含	0.470	0.136	1.69	0.662	0.598	平行叩き具痕	同心円当て具痕
26	780728 表探	甕	胴部	5 Y 2/1 黒	砂粒多含	0.491	0.158	1.47	0.576	0.607	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
27	780728 表探	甕	胴部	10Y R 8/4 浅黄橙	砂粒含	0.517	0.090	1.60	0.551	0.309	平行叩き具痕	同心円当て具痕
28	780728 表探	杯	平底底部	N 7/0 灰白	微砂粒少含	0.427	0.092	2.02	0.490	0.493	底部外面ヘラギリ痕	
29	850216 表探	甕	胴部	7.5Y 2/1 黒	細砂粒多含	0.429	0.172	2.11	0.457	0.464	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
30	850216 表探	甕	胴部	7.5Y 8/1 灰白	微砂粒含	0.419	0.112	1.72	0.506	0.493	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
31	850216 表探	甕	胴部	7.5Y 3/1 オリーブ黒	細砂粒多含	0.420	0.182	1.20	0.639	0.589	擬格子状叩き具痕	当て具痕ナデ消し
32	850216 表探	甕	胴部	7.5Y 5/1 灰	細砂粒多含	0.557	0.186	1.23	0.781	0.785	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
33	850216 表探	甕	胴部	N 6/0 灰	砂粒含	0.438	0.148	1.28	0.597	0.629	擬格子状叩き具痕	当て具痕ナデ消し
34	850216 表探	甕	胴部	7.5Y 5/1 灰	細砂粒含	0.431	0.200	1.31	0.663	0.531	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
35	850216 表探	甕	肩部	2.5Y 2/1 黒	微砂粒含	0.438	0.120	1.38	0.498	0.303	ロクロナデ	ヨコ方向ナデ
36	850216 表探	甕	胴部	N 7/0 灰白	微砂粒少含	0.428	0.183	1.26	0.545	0.313	ロクロナデ	ロクロナデ?
37	850216 表探	甕	口縁~肩	7.5Y 7/1 灰白	細砂粒多含	0.614	0.185	1.07	0.847	0.793	ロクロナデ・波状文	ロクロナデ
38	850216 表探	杯蓋		N 6/0 灰	微砂粒多含	0.430	0.144	2.34	0.458	0.460	ロクロナデ	ナデ
39	900910 表探	甕	胴部	7.5Y 6/1 灰	細砂粒多含	0.565	0.165	1.33	0.726	0.670	平行叩き具痕	同心円当て具痕
40	900910 表探	甕	胴部	N 5/0 灰	細砂粒多含	0.387	0.083	2.48	0.514	0.418	平行叩き具痕	同心円当て具痕
41	900910 表探	甕	胴部	N 5/0 灰	細砂粒含	0.454	0.081	3.76	0.510	0.386	平行叩き具痕	同心円当て具痕

ハ ム 谷 地 点 (多気郡多気町野中宇ハム谷) [三重県埋蔵文化財センター保管]

42	910226 表探	甕	胴部	N 5/0 灰	細砂粒多含	0.366	0.186	2.37	0.413	0.329	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕?
43	910226 表探	杯	底部?	2.5GY 6/1 オリーブ灰	細砂粒少含	0.362	0.188	2.06	0.469	0.496	ナデ?	ナデ?

第11表 試料の分析値 (1)

No.	出土位置	器種	部位	色調	胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	外面調整	内面調整
-----	------	----	----	----	----	---	----	----	----	----	------	------

池ノ谷1地点 (多気郡多気町野中宇池ノ谷) [三重県埋蔵文化財センター保管]

44	910226 表探	杯	底部?	N 6/0 灰	細砂粒多含	0.461	0.132	2.32	0.568	0.450	ナデ?	ナデ?
----	-----------	---	-----	---------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-----	-----

池ノ谷2地点 (多気郡多気町野中宇池ノ谷) [三重県埋蔵文化財センター保管]

45	910226 表探	長頸壺	頸部	N 5/0 灰	砂粒多含	0.464	0.207	2.49	0.485	0.487	ロクロナデ	ナデ
----	-----------	-----	----	---------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	----

池ノ谷3地点 (多気郡多気町野中宇池ノ谷) [三重県埋蔵文化財センター保管]

46	910226 表探	甕	胴部	N 5/0 灰	細砂粒多含	0.545	0.189	2.48	0.616	0.470	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
47	910226 表探	甕?	不明	N 3/0 暗灰	細砂粒多含	0.479	0.147	2.35	0.545	0.493	同心円叩き具痕	同心円当て具痕

北ノ山C-1地点 (多気郡多気町笠木字北ノ山) [三重県埋蔵文化財センター保管]

48	910226 表探	壺?		N 6/0 灰	微砂粒少含	0.437	0.254	2.27	0.533	0.447	ナデ	ヨコ方向ナデ
49	910226 表探	壺	頸部	N 7/0 灰白	砂粒多含	0.384	0.342	1.85	0.414	0.565	ロクロナデ	ロクロナデ

北ノ山C-2地点 (多気郡多気町笠木字北ノ山) [三重県埋蔵文化財センター保管]

50	910226 表探	甕	胴部	N 3/0 暗灰	微砂粒少含	0.582	0.140	2.04	0.673	0.607	擬格子状叩き具痕	同心円当て具痕
51	910226 表探	甕	胴部	10GY 5/1 緑灰	細砂粒多含	0.348	0.156	2.55	0.350	0.343	平行叩き具痕	不明瞭

中尾窯跡 (多気郡多気町相可字中尾) [1975年発掘調査、多気町教育委員会]

52	50-1、9F	甕	胴部	5Y 7/4 浅黄	微砂粒多含	0.398	0.304	1.88	0.468	0.537	平行叩き具痕	同心円当て具痕
53	50-1、9F	甕	胴部	5Y 7/4 浅黄	微砂粒多含	0.312	0.291	1.75	0.380	0.480	平行叩き具痕	同心円当て具痕
54	50-1、11F	甕	胴部	5Y 8/4 浅黄	細砂粒多含	0.308	0.264	1.82	0.328	0.466	平行叩き具痕	同心円当て具痕
55	50-1、11F	甕	肩部	7.5Y 6/1 灰	砂粒多含	0.468	0.336	1.75	0.465	0.594	平行叩き具痕	ナデ
56	4C、Dベース	甕	胴部	N 4/0 灰	細砂粒多含	0.324	0.330	1.84	0.377	0.486	平行叩き具痕	同心円当て具痕
57	4C、Dベース	甕	胴部	7.5Y 8/1 灰白	微砂粒多含	0.304	0.302	1.49	0.407	0.534	平行叩き具痕	不明
58	4C、Dベース	蓋杯		N 6/0 灰	微砂粒少含	0.436	0.325	1.55	0.531	0.510	ロクロヘラケズリ	ロクロナデ
59	4C、Dベース	蓋杯		7.5Y 7/1 灰白	微砂粒少含	0.317	0.273	1.47	0.427	0.577	ロクロヘラケズリ	ナデ
60	4C、Dベース	蓋杯		7.5Y 6/1 灰	微砂粒多含	0.312	0.273	2.22	0.344	0.419	ロクロヘラケズリ	ナデ

河田古墳群C支群 (多気郡多気町河田字東谷) [1975年発掘調査、多気町教育委員会]

61	1号塚表土下	甕	胴部	5Y 7/2 灰白	細砂粒多含	0.363	0.088	1.71	0.457	0.216	平行叩き具痕	同心円当て具痕
62	1号塚表土下	甕	胴部	N 2/0 黒	微砂粒少含	0.364	0.059	2.61	0.482	0.150	平行叩き後カキ目	同心円当て具痕
63	12号	蓋杯		N 6/0 灰	細砂粒多含	0.575	0.348	1.75	0.600	0.612	ロクロヘラケズリ後ナデ	ロクロナデ

斎宮跡31-4次 (多気郡明和町斎宮字牛葉) [1980年度発掘調査、三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所]

64	SE2000	甕	胴部	7.5Y 5/1 灰	微砂粒少含	0.561	0.109	1.04	0.821	0.341	平行叩き具痕	当て具痕ナデ消し
----	--------	---	----	------------	-------	-------	-------	------	-------	-------	--------	----------

斎宮跡44次 (多気郡明和町斎宮字鍛冶山) [1982年度発掘調査、三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所]

65	SK2650	甕	胴部	5Y 8/1 灰白	微砂粒少含	0.514	0.144	1.17	0.865	0.394	擬格子状叩き具痕	ナデ
66	SK2650	甕	胴部	10GY 4/1 暗緑灰	微砂粒少含	0.402	0.089	2.04	0.509	0.208	平行叩き具痕	当て具痕ナデ消し

斎宮跡65-1次 (多気郡明和町斎宮字塚山) [1986年度発掘調査、三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所]

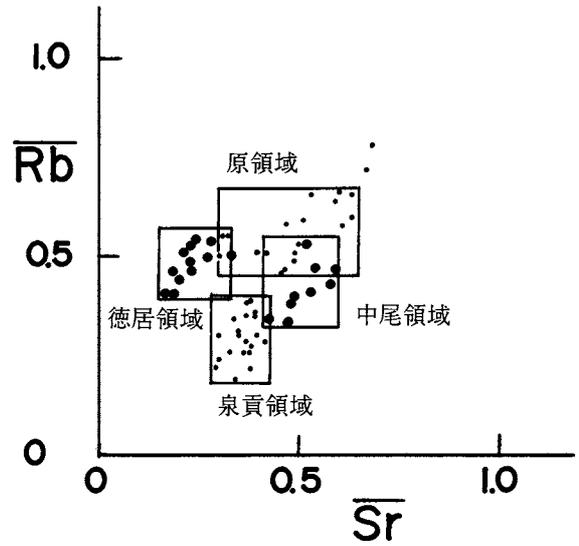
67	SX4310	甕	胴部	10GY 4/1 暗緑灰	微砂粒多含	0.411	0.140	2.15	0.484	0.411	擬格子状叩き具痕	放射状当て具痕
68	SX4310	鉄鉢	体部	7.5Y 5/1 灰	微砂粒少含	0.300	0.061	1.06	0.495	0.207	ロクロヘラケズリ	横方向ナデ

斎宮跡88次 (多気郡明和町斎宮字鍛冶山) [1990年度発掘調査、三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所]

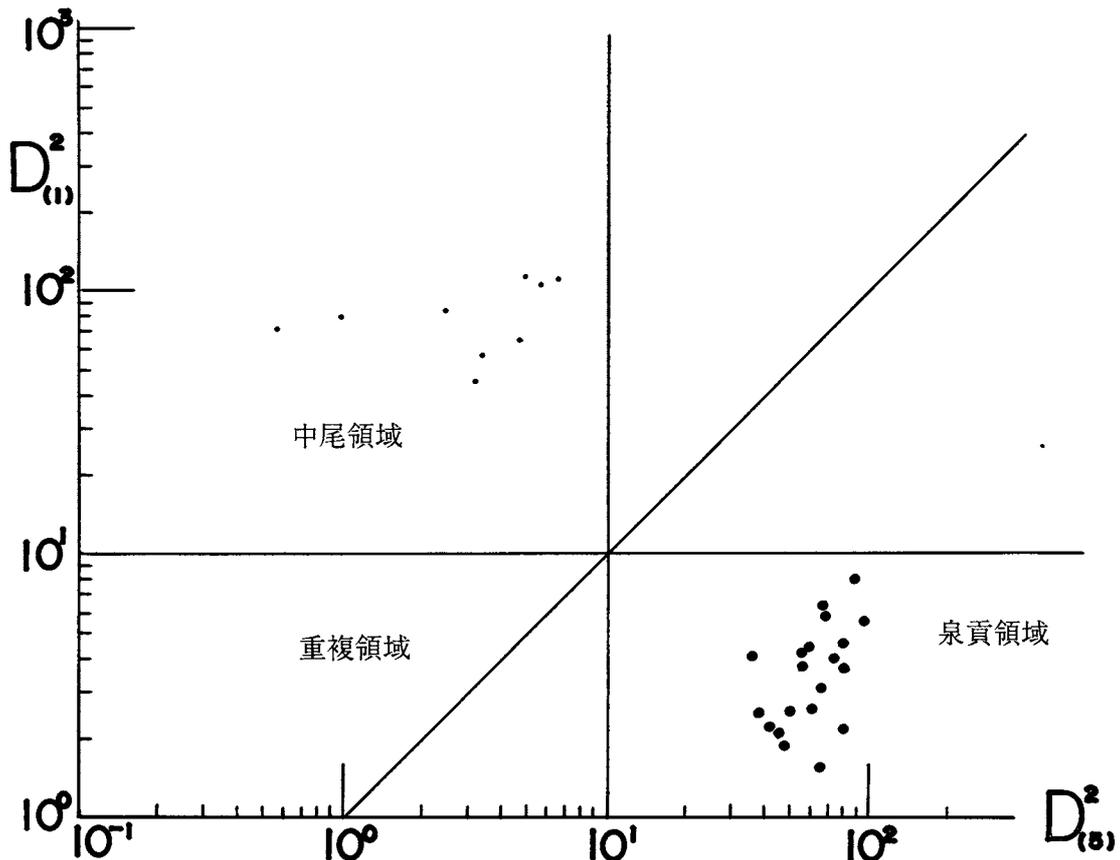
69	SK2798	甕	胴部	5Y 7/4 浅黄	微砂粒少含	0.299	0.052	1.38	0.371	0.189	平行叩き後カキ目	当て具痕ナデ消し
70	SK2798	甕	胴部	2.5Y 7/4 浅黄	微砂粒少含	0.309	0.052	1.39	0.497	0.185	平行叩き具痕	当て具痕ナデ消し
71	SK22-A (仮)	甕	胴部	7.5Y 6/1 灰	微砂粒少含	0.389	0.082	0.936	0.594	0.288	格子状叩き具痕?	当て具痕ナデ消し
72	SK26 (仮)	甕	胴部	5Y 8/2 灰白	微砂粒少含	0.291	0.187	1.83	0.361	0.465	平行叩き具痕	同心円当て具痕
73	SK26 (仮)	盤	体部	7.5Y 8/2 灰白	微砂粒少含	0.244	0.038	1.22	0.361	0.148	ケズリ	ナデ

第12表 試料の分析値 (2)

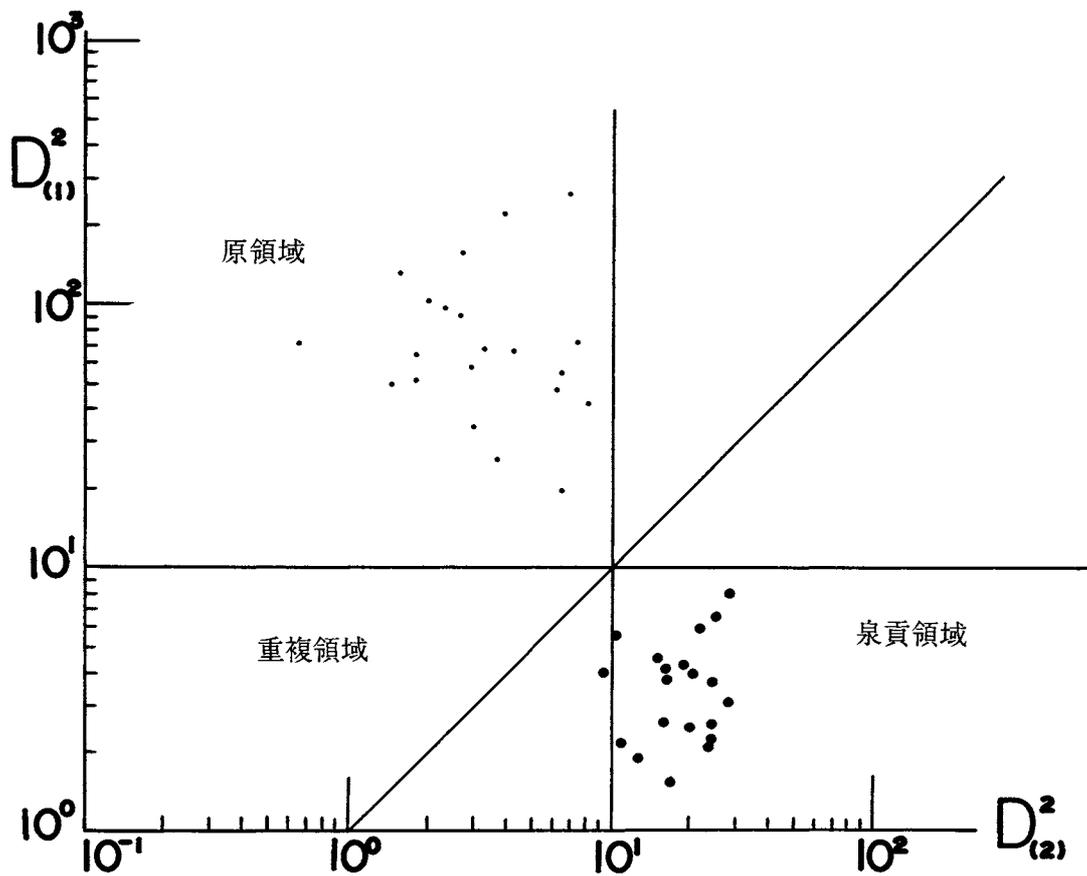
計学の考え方が必要である。そのために活用されるのがマハラノビスの汎距離 (D) である。通常、K、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算される。そして、5%の危険率をかけて許容される母集団の領界が求められる。サンプルが20-30の場合、 D^2 の値が10付近に領界線があることが計算の結果わかった。この結果を入れて描いた図(判別分布図という)が第20図である。 $D^2_{(1)}$ 、 $D^2_{(5)}$ はそれぞれ、泉貢群、中尾群の重心からのマハラノビスの汎距離である。それぞれ、 D^2 の値が10のところを領界線と引いてあるのは前述の計算の結果に基づく。予想どおり、 $D^2_{(1)} \leq 10$ の領域には泉貢群の全分析試料が分布しており、また、 $D^2_{(5)} \leq 10$ の領域に中尾群の全分析試料が分布していることがわかる。同時に、これらのサンプルは相手群から十分離れた領域、すなわち、泉貢群は $D^2_{(5)} > 10$ 、中尾群は $D^2_{(1)} > 10$ の領域に分布していることもわかる。いわば、泉貢群の領域は $D^2_{(1)} \leq 10$ 、 $D^2_{(5)} > 10$ であり、中尾群の領域は $D^2_{(5)} \leq 10$ 、 $D^2_{(1)} > 10$ である。両群のサンプルはこのような各領域に分布しており、完全に相互識別できることがわかる。



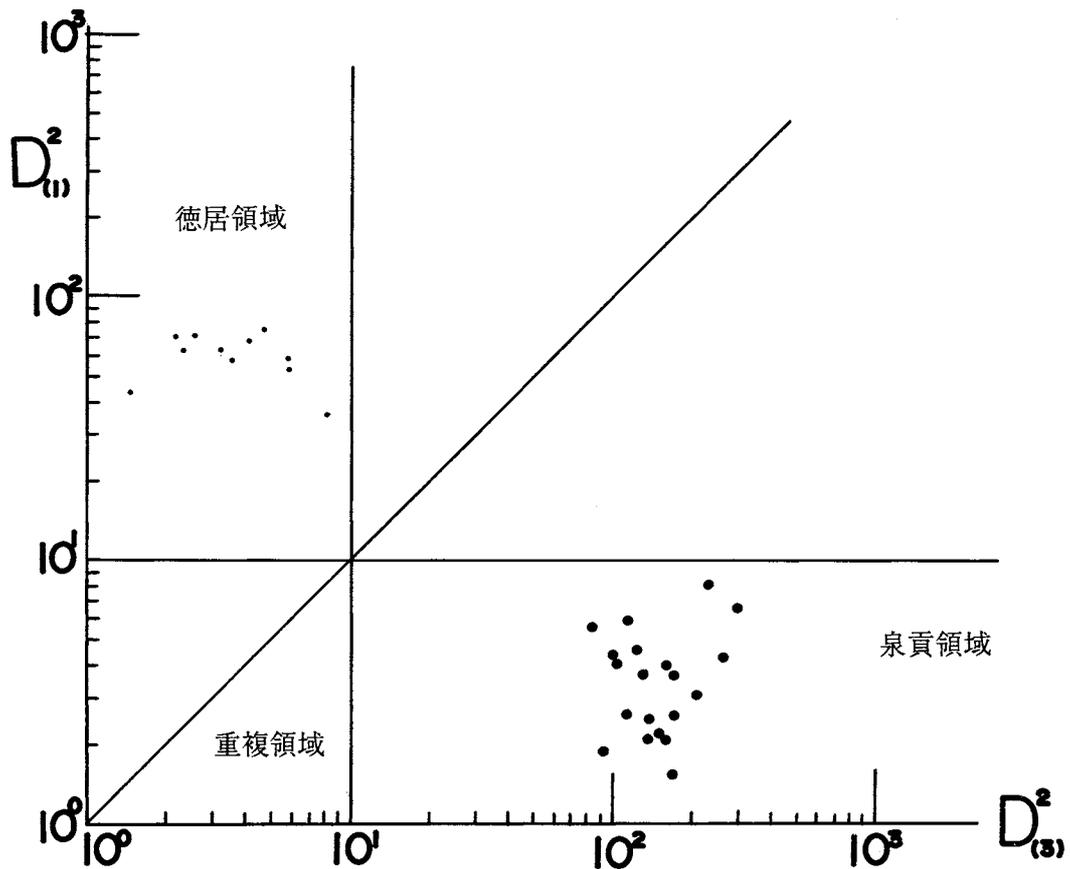
第19図 泉貢群、原群、中尾群、徳居群の須恵器のRb-Sr分布図



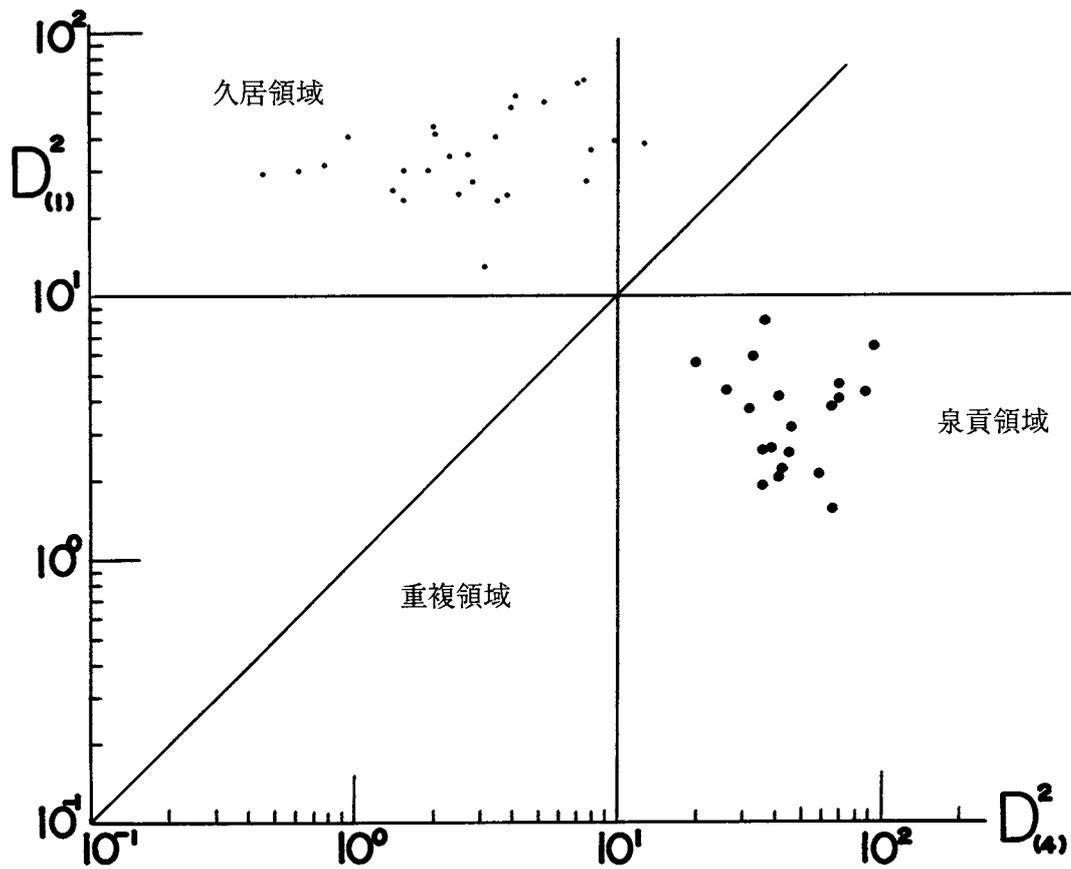
第20図 泉貢群と中尾群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



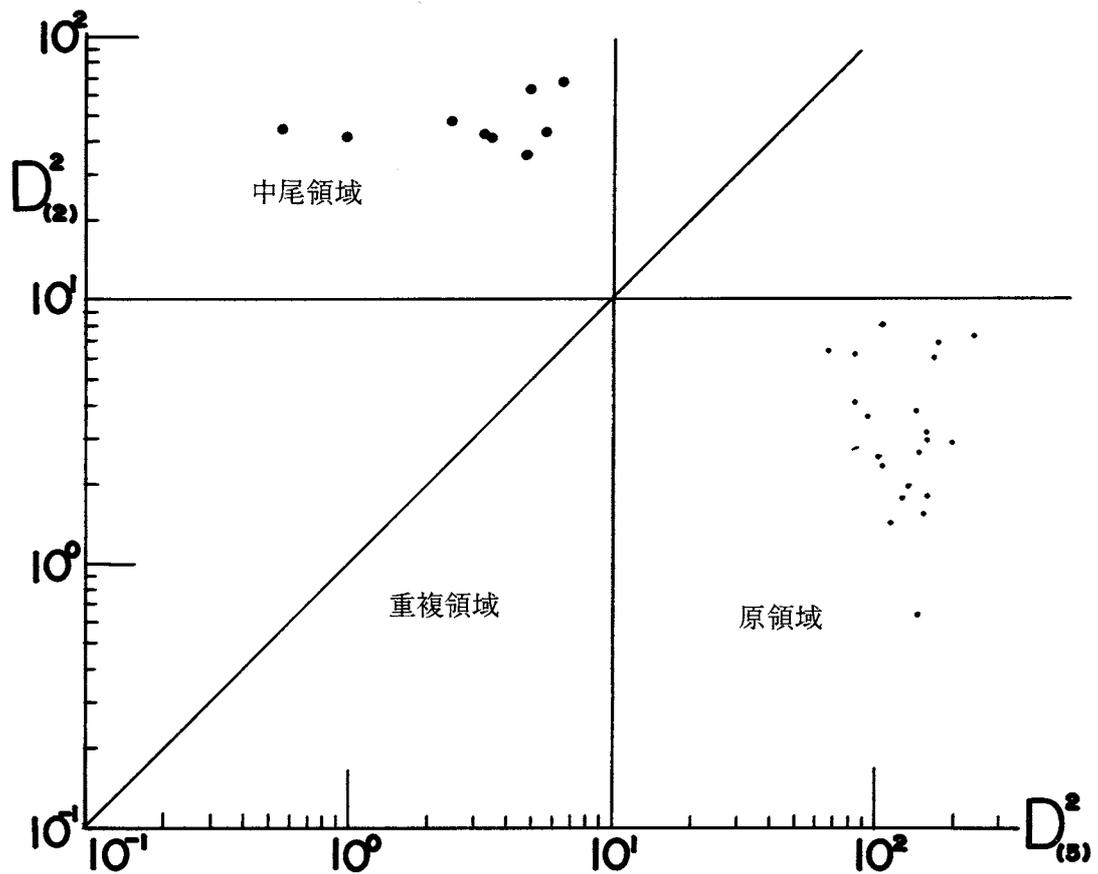
第21図 泉貢群と原群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



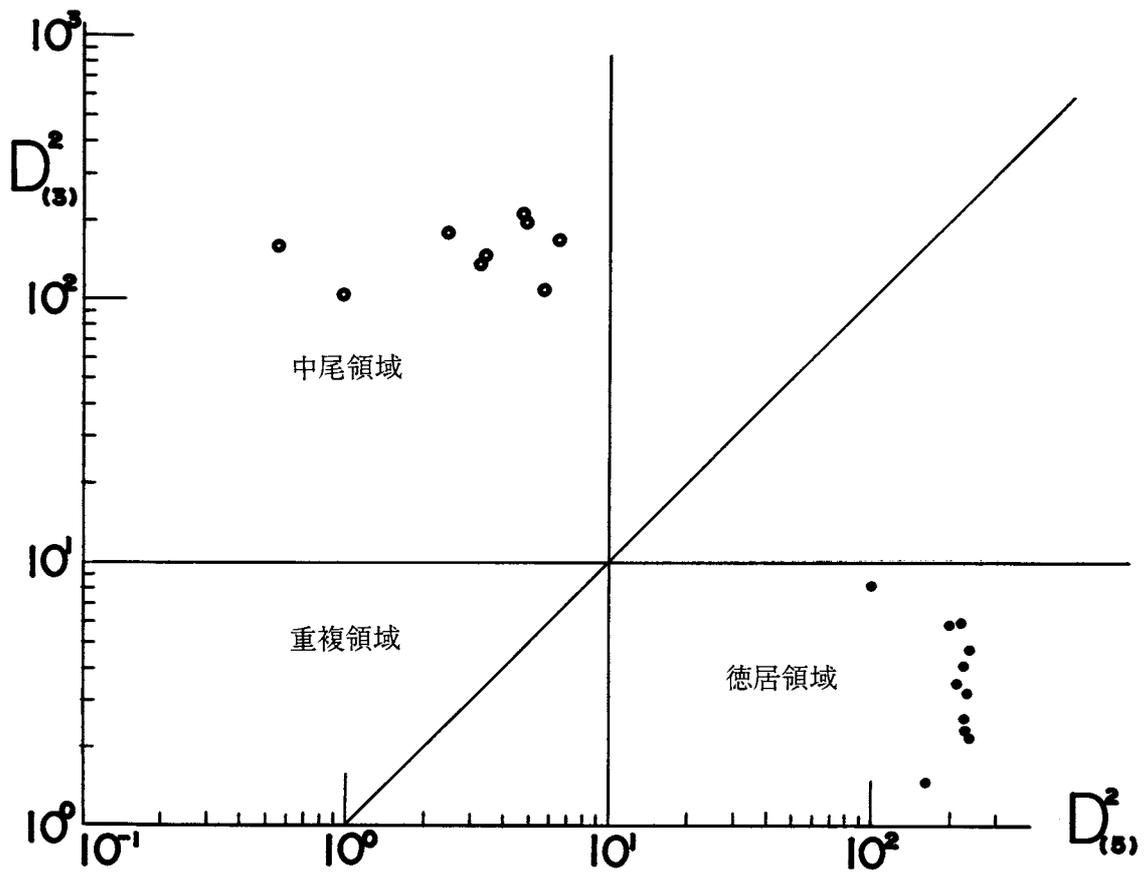
第22図 泉貢群と徳居群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



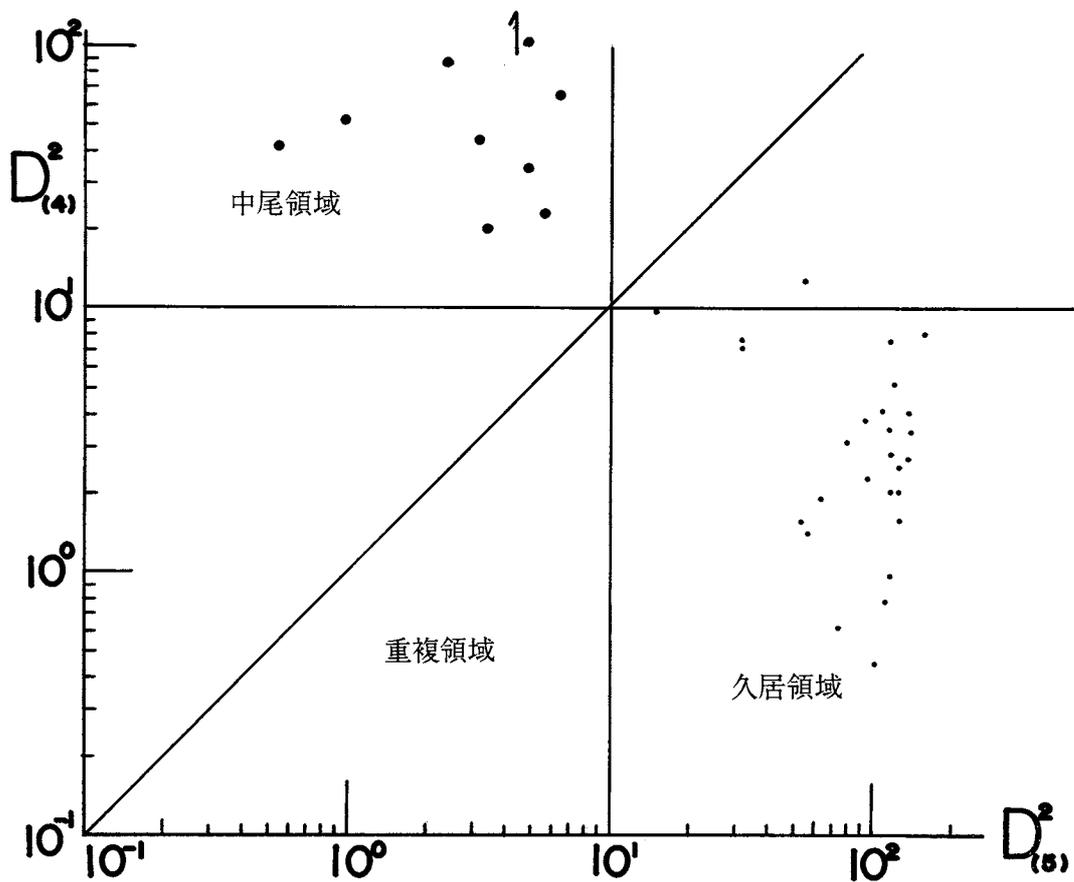
第23図 泉貢群と久居群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



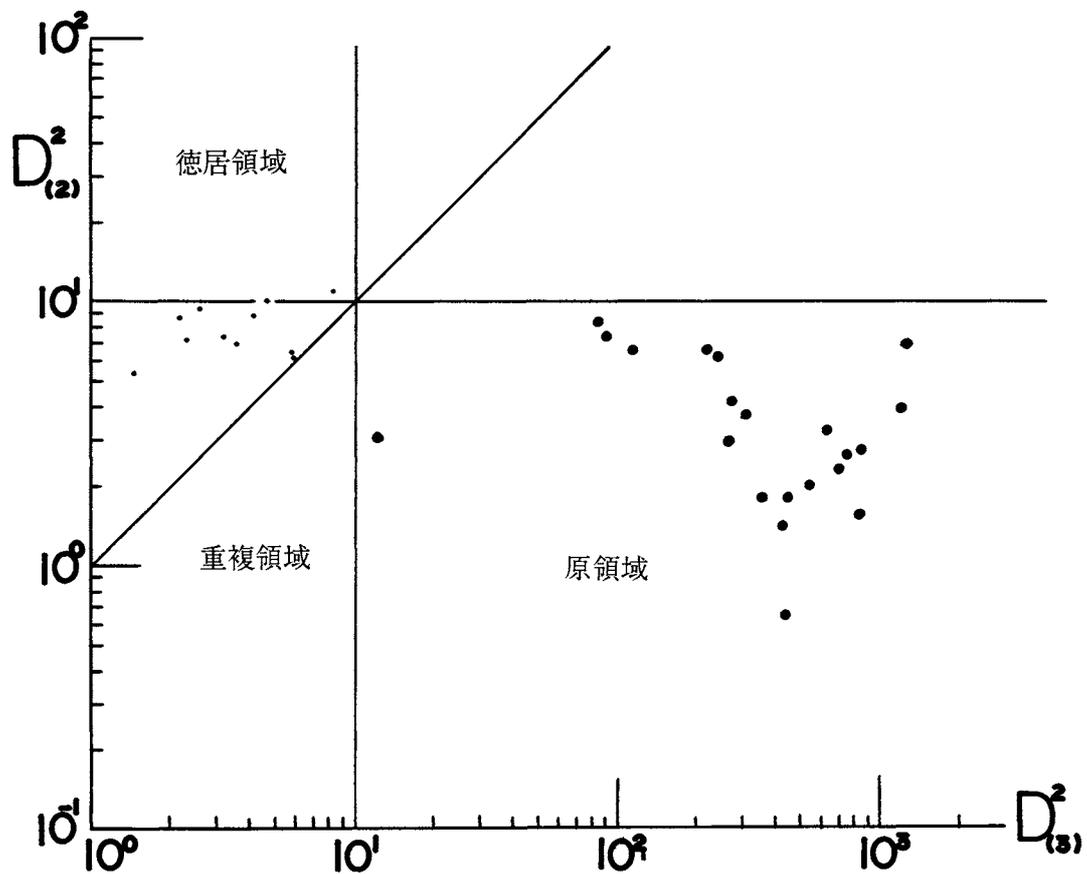
第24図 原群と中尾群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



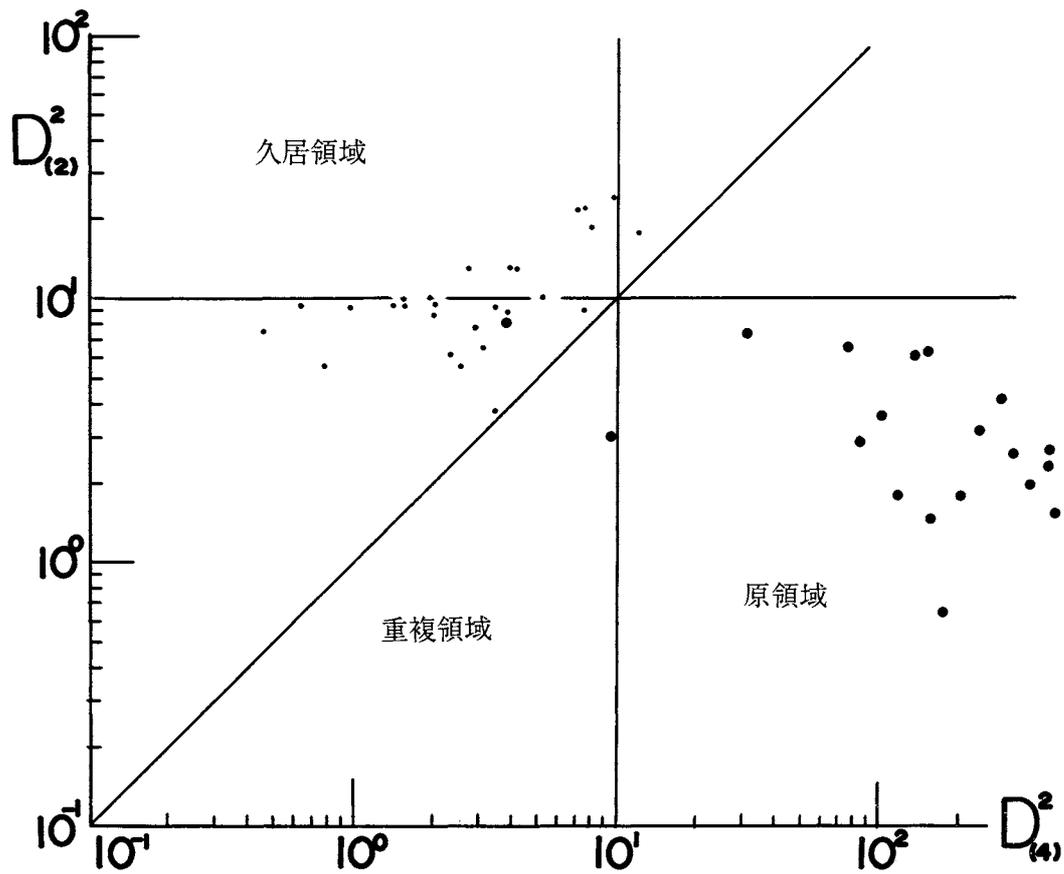
第25図 徳居群と中尾群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



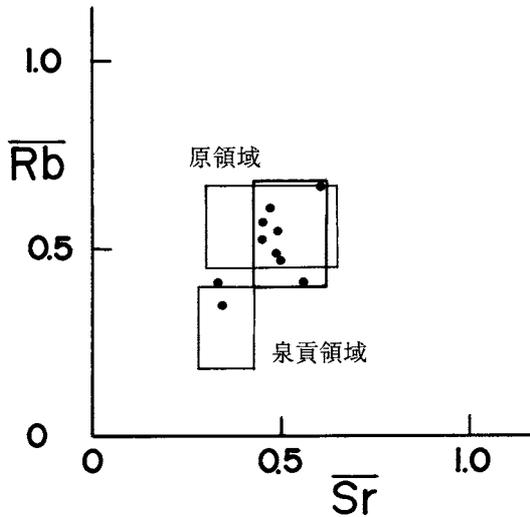
第26図 久居群と中尾群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



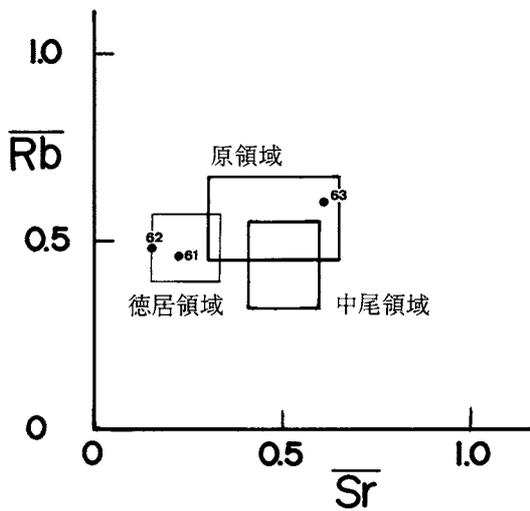
第27図 原群と徳居群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



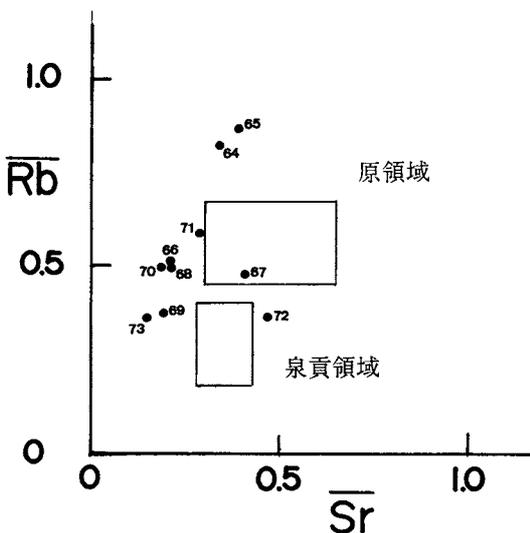
第28図 原群と久居群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



第29図 ハム谷、池ノ谷、北ノ山地点表採須恵器のRb-Sr分布図



第30図 河田古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図



第31図 高宮跡出土須恵器のRb-Sr分布図

第21図には泉貢群と原群の相互識別の結果を示す。原料のサンプルのうちの1点が重複領域〔 $D^2_{(a)} \leq 10$ 、 $D^2_{(b)} \leq 10$ 〕に分布しているが、それでも両群のサンプルは完全に分離しており、相互識別は可能であることを示している。

同様に、第22図には泉貢群と徳居群、第23図には泉貢群と久居群の相互識別の結果を示す。いずれも、完全に相互識別できることを示している。この結果、泉貢窯跡の製品は三重県内のほとんどすべての窯の製品から識別できることがわかった。このことが、第19図のRb-Sr分布図に端的に示されていた訳である。

次に、中尾群に注目してみよう。第24図には中尾群と原群、第25図には中尾群と徳居群、第26図には中尾群と久居群の相互識別の結果を示す。いずれも、完全に分離しており、中尾群の製品も県内の他の窯の製品から識別できることがわかった。

次に、原群に注目してみよう。第27図には原群と徳居群、第28図には原群と久居群の相互識別の結果を示す。これらの図では重複領域に分布するものがある点でこれまでの判別分布図とは異なる。このことは両群の化学特性が次第に類似してきたことを意味する。それでも、両群の相互識別は十分可能であることは第27・28図からわかる。

こうして、三重県内の窯の製品はほとんどの場合、相互に識別できることが判明した。

なお、多気郡多気町のハム谷、池ノ谷、北ノ山の各地点（窯跡は消滅しているため、表面採集した試料が各窯跡で焼成したもとは断定しがたい。そのため、試料の採集地を「窯跡」とは呼ばず「地点」とした）の須恵器のRb-Sr分布図を第29図に示す。サンプルの数が多くないので、ここでは統計計算はせず、Rb-Sr分布図を描くに止めた。これらの須恵器は原窯跡群の製品と類似していることがわかる。その中で2点（No.42・51）、泉貢領域付近に分布するものがあるが、このことについては今後さらに検討する必要がある。

このように、1つの県内でいくつもの窯跡群が相互識別できることは珍しい例である。三重県の地質に基因するものと思われる。

河田古墳群と斎宮跡出土のものについては、今回は、Rb-Sr分布図で産地が何処か探りを入れたにすぎない。

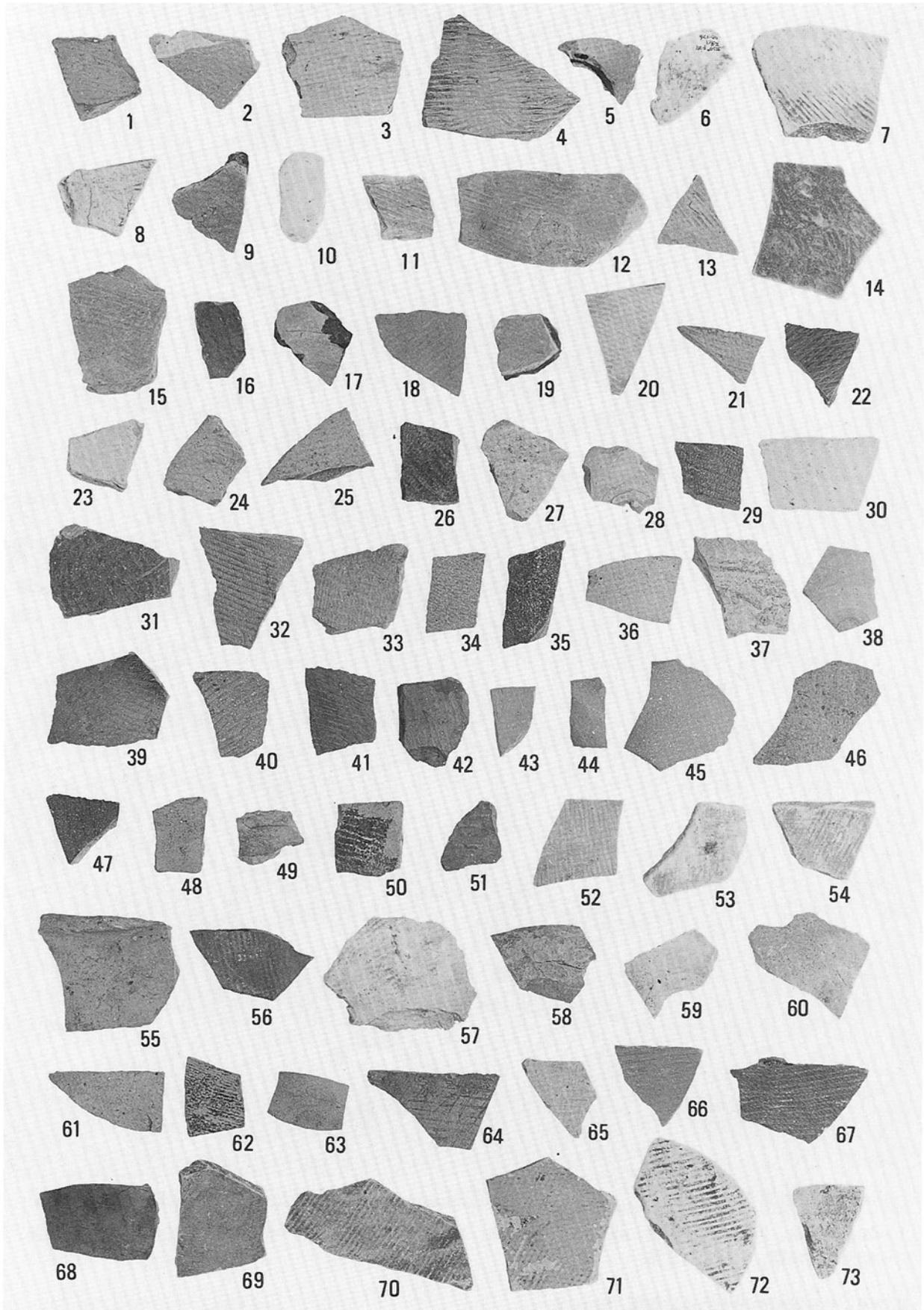
第30図には河田古墳群の須恵器のRb-Sr分布図を示す。時期的にも同じである中尾窯跡には3点とも対応しないが、原窯跡群には1点(No.63)が対応する。原窯跡群と河田古墳群とは時期的にずれるため、この1点は、原窯跡群と化学特性が類似するハム谷、池ノ谷、北ノ山の各地点を含めた範囲に存在していた窯跡との関連を考える必要がある。No.61・62は外城田窯跡群内の窯跡とは対応せず、県内では徳居窯跡群が産地候補地に挙げられる。県外では名古屋の猿投窯跡群か、あるいは大阪府堺市の陶邑窯跡群も産地候補地となる。これらのいずれかの判断は難しい。Na因子のデータが必要である。今回はNaのデータがないので、産地がいずれであるかを判断しなかった。

第31図には斎宮跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。泉貢窯跡、原窯跡群の製品があるかどうかをみてみた。泉貢領域に対応するものは一つもないことがわかる。No.67は原領域に分布しているが、K、Ca因子でもよく対応しており、原窯跡群産と推定される。No.64・65の2点はともに、K、Rb量が多く、同一産地の製品とみられる。このような特性をもつ須恵器は三重県内の他の窯の製品にはない。外部地域からの搬入品である。美濃地域が有力な産地の候補地である。No.66・68・69・70・73も同じ地域で作られた製品である可能性が高い。8世紀代は既に、猿投でも須恵器の生産活動は盛んである。猿投窯跡群も産地候補地に挙げられるし、県内では徳居窯跡群も産地候補地となる。原窯跡群の製品が意外に少ない点が興味深い。No.72の産地推定は難しい。これまでに、Rb-Sr分布図でこの領域に分布した愛知、岐阜県産の須恵器はない。もし、対応するとすると、静岡県湖西周辺に産地を求めなければならないだろう。とりあえず、ここでは産地不明としておく。



1～20泉貢窯跡、21～41原窯跡群、42・43ハム谷地点、44～47池ノ谷地点、48～51北ノ山地点、52～60中尾窯跡、61～63河田古墳群、64～73斎宮跡

第32図 分析試料の出土地点位置図 (50,000)



分析試料（全て須恵器片）（1：3）

Ⅲ. やま かみ じょう あと 山 神 城 跡

1. 遺跡と調査の概要

(1) 遺跡の概要

度会郡玉城町の南部には、宮川水系と外城田川水系を分ける標高350mほどの国東山の山並が東西に走る。その北側には同じく東西走する断層によって形成された、標高100m未満の開析がすすんだ丘陵が、数100mほど北に向かつてのびる。これらの地形の基盤となるのは、三波川変成帯に属する砂質～泥質の緑色をおびた結晶片岩で、活発な浸食作用をうけて狭小な尾根部と谷部をつくる。また、層理が大きく西に向かつて傾斜しているため、尾根の東側が相対的に急斜面になっている。

山神城跡の遺構は、このうち5本の尾根上に立地し、行政的には玉城町山神、積良に属する。遺跡からは史跡田丸城跡や伊勢湾、知多半島まで見渡すことができ、また丘陵の先端部の谷の出口には山神、積良の現集落がある。

今回調査した、近畿自動車道路線予定地内では、調査開始当初「山神東城跡」、「富ヶ城跡」として、2本の尾根上の遺構のみが確認されていた。他にこの西にも、今回の調査範囲外だが「山神西本城跡」と呼称されている頂上部が平坦なピークがある。また、平成2年5月15日から6月1日にかけての試掘調査および周辺の踏査の結果、路線予定地内でもさらに遺構の分布が広がることが確認されたため、新たに谷部分の試掘調査なども加えて9つの調査区を設定し、平成2年8月2日から12月27日にかけて本調査を実施した。以後今回の一連の調査分を、平成元年度に調査した上ノ垣内遺跡、里山(古墳)、のせんじ遺跡、浦ノ内遺跡もあわせ、主要部分をしめる大字名から「山神城跡」として一括して扱うこととした。最終的な調査面積は8936㎡である。

(2) 調査の方法

調査は合計9つの調査区からなる。「富ヶ城跡」および「山神東城跡」はそれぞれ山神城跡の「西老谷地区」、

「バト谷地区」とし、この2地区については4m×4mのグリッドを設定し、面的な発掘調査を行った。調査グリッドは近畿自動車道の工事用センター杭のNo.562+20とNo.563+40を結ぶ鉛直線を基準とし、それぞれ西からアルファベット、北からアラビア数字の昇順で調査区ナンバーを付した。よって今回の調査区割りは、国土座標にそわせたものではないことをことわっておく。

その他の尾根上の調査区は西から「おく地区」、「相戸地区」、「追谷地区」とし、これらは地表面の観察からも確認された堀切と土橋の遺構にあわせて一辺5m～10mほどの方形の調査区をそれぞれ現況にあわせて設定した。また、尾根上の調査区で最も東に設定した「里山地区」は堀切の存在の可能性を考えて、尾根筋にそわせた1m×7mのトレンチ調査区を、さらにその上手の里山(古墳)とされたピークには、その頂上部から東西に幅1m、長さ14m、南北に幅1m、長さ17mの十字トレンチを設定した。

これらの尾根に挟まれた谷部からも僅かながら遺物が採集されており、遺構が存在する可能性が考えられたため、路線予定地内に平坦地がかかるところについては谷筋にそって十字トレンチをもうけ、それぞれ「東老谷地区」、「明神前地区」とし、遺構の有無を確かめた。なお、追谷地区と西老谷地区の尾根に挟まれた谷地については、強度の湿潤地であること、今回の調査に先立って資材等の運搬・保管のために一部がすでに埋め立てられていたことなどから、やむなく今回の調査では対象外とした。これらより西の谷では、昭和63年度より順次試掘調査が行われており、それぞれ当該年度の発掘調査概要に報告されている。しかし、平成2年度の調査の中で、これらをはさむ尾根上に中世城郭としての遺構が確認され、複数の尾根群からなる遺跡であることがわかったため、これまでの調査分も今回一括して扱うこととし

た。これによって、それぞれに付されていた「遺跡」を「地区」に置き換えて、「のせんじ地区」、「浦ノ内地区」、「上ノ垣内地区」と呼称を変更した。

調査の進行は、対象地が山上で平坦地が乏しいため、大掛かりな機械力は導入できず、表土から人力による掘削とカキ取りを行った。排土は一輪車を用いて工事予定地内の斜面下方に落とした。ベト谷地区の東斜面のみは遺構の埋土が部分的には深さ1mを越える状況だったため、小型の重機を上げて遺構上面の掘削を行った。

谷部の試掘調査については谷水の排水路を確保した上で小型の重機を用いて掘削を行い、人力で清掃を行った。

写真は、調査区全景や重要な遺構のディテールについては6×7版の中型カメラで撮影し、その他に35mm版の小型カメラでも逐次補助的に撮影を行っている。

調査区遺構の測量・実測は、平成2年度に調査した尾根上の調査地区については、すべて調査前の現況を1/100のスケールで平板測量して埋蔵文化財センターに保管してある。また西老谷地区およびベト谷地区の全体測量図は玉野総合コンサルタント(名古屋市中東区)に空中写真測量を業務委託した。この原図縮尺も1/100である。遺構の細部についてはそれぞれ基準点を任意設定し、支距法で1/20や1/5の実測図を作成した。遺構の検出されなかった地区は平板測量で1/100の調査区図面を作成した。

(大川勝宏)

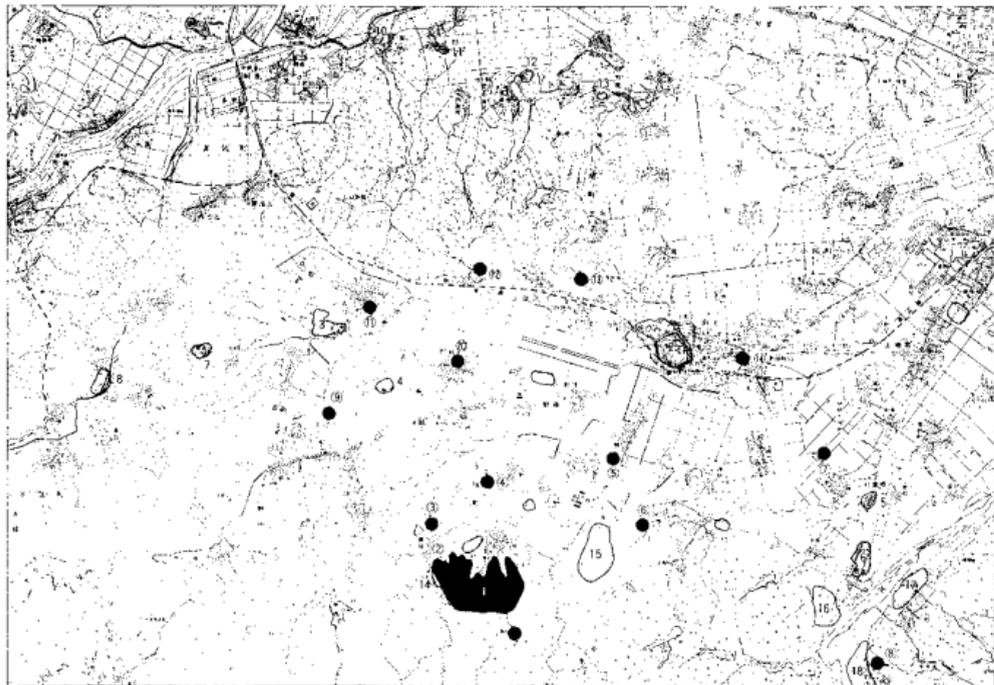
(3) 調査の流れ(平成2年度分)

5月15日	試掘調査の開始 (西老谷地区、ベト谷地区 6月1日まで)
7月12日	工事部門受託業者入札(伊勢市株式会社宮本組)
7月25日	西老谷地区への進入道路の設置。
8月3日	西老谷地区の調査開始、あわせて現況測量も進める。このころ作業員の確保がされず、5人ほどで作業する日が続く。
8月24日	西老谷地区SD1の掘削。
8月25日	西老谷地区SD1の図面作成。
9月6日	調査区の拡張について道路公団と協議。
9月14日	西老谷地区写真撮影。その後土橋のたち割りを実施。
9月16日	西老谷地区土橋のたち割りと実測。ベト谷地区の調査開始。
9月18日	ベト谷地区SD4の掘削。瀬戸産盤が出土。
9月20日	台風による被害。ベト谷地区への進入路は遮断され、現地プレハブも倒壊する。復旧作業にかかり、調査は22日に再開する。
9月22日	ベト谷郭1でSA7検出。他には建物遺構は認められない。
9月24日	おく地区、相戸地区。追谷地区の現況測量を開始。
9月28日	おく地区の調査開始。順次写真撮影と実測を行う。
10月3日	相戸地区の調査開始。
10月5日	ベト谷地区でSZ12が検出され、その脇からSZ14も見つかる。
10月8日	追谷地区の調査開始。あわせて登攀用の道を確保。
10月18日	ベト谷地区SD6の現地測量を行う。
10月23日	ベト谷地区東斜面の埋土推積状況を確認するため、試掘時のトレンチの拡張と延長を行う。
10月29日	おく・相戸・追谷地区の実測を行う。
11月2日	SZ16調査中にSX19を発見。周囲からも土師器片が多数出土。
11月5日	SX19を精査する過程でSZ15を発見。
11月7日	郭1、2の撮影を行う。このころ柿の収穫のため作業員が減る。
11月8日	東斜面の赤褐色土を除去し、下層遺構を確認する。SX24が同土層内から検出される。
11月10日	SZ15、SZ16付近の遺構実測を行う。
11月11日	排土置場確保のため、調査区東斜面隅の遺構を確認する掘削を行う。
11月12日	SZ17の検出を始める。上面に遺構は認められなかった。
11月20日	SZ17のたち割りトレンチを掘削。平安時代の土師器杯が見つかる。
11月24日	明神前地区のトレンチの掘削を小型重機で実施。遺構は確認できず。
12月3日	台風の来襲。
12月4日	里山地区の調査を実施。遺構は確認できず。
12月8日	SZ13の掘削。遺構の検出・掘削は終了。
12月10日	東斜面遺構群の写真撮影。
12月14日	西老谷地区・ベト谷地区の空中写真測量実施。
12月21日	発掘用資材等の撤収を始める。
12月27日	SX22、23の写真撮影とSF25の断ち割りをを行い現地調査はすべて終了する。

2. 周辺の歴史的環境

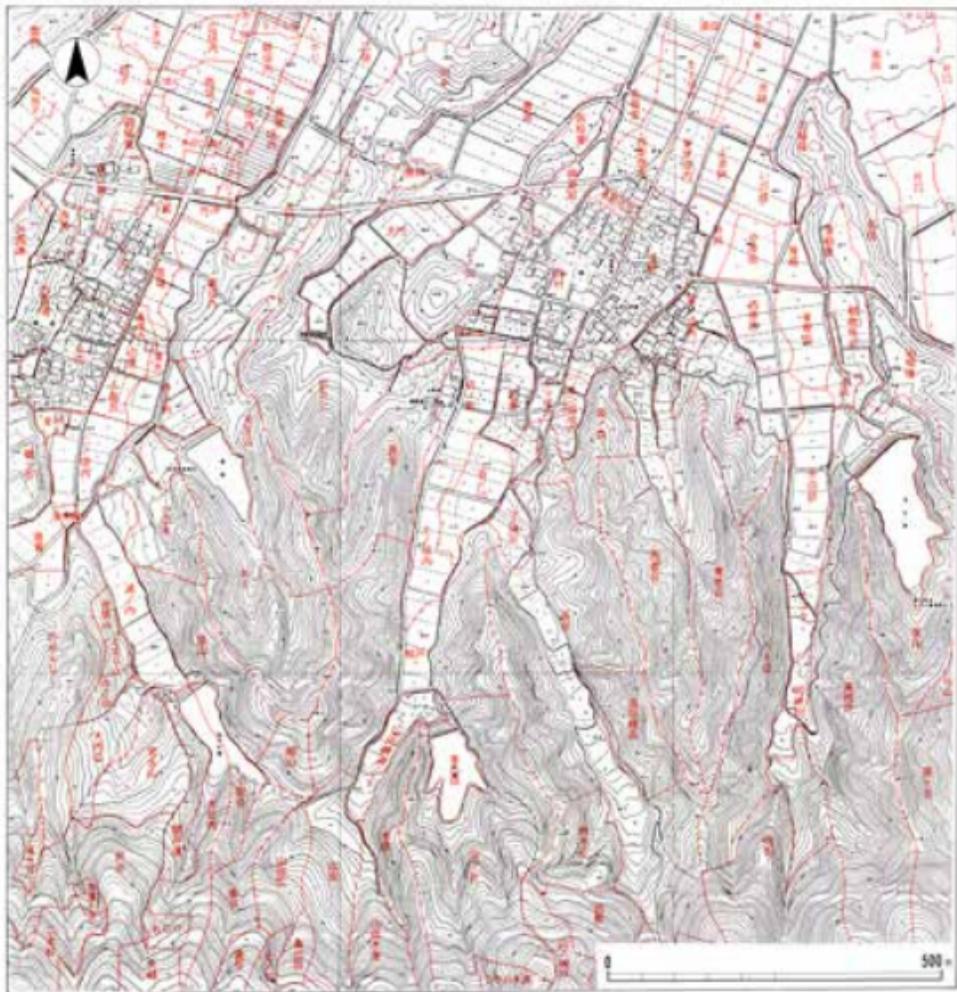
山神城跡の立地する一帯は標高100m未満の丘陵が南北にのびた先には、現在の^{ひの}矢野・^{かの}蚊野・^{のどの}野篠・^た田宮寺・^{みやじ}勝田などの集落がある標高20m~30m程の低台地がつづく。そのさらに北側には外城田川によって形成された沖積平野があり、低丘陵にはさまれた小盆地状の地形を呈する。川をはさんだ北の対岸には玉城丘陵が東西似伸びており、その東端の突出した標高51mの丘陵状に田丸城跡(2)がある。

中世の遺跡を中心に、山神城跡周辺の歴史的環境を見ていくと、まずこの田丸城を見過ごすことができない。田丸城が南北朝期以降、確実な史料に登場するのは寛正6年(1464)11月の北畠氏の神三郡への軍事力の増員からといわれる。この城の城主についてはいろいろな形で推測がなされているが、いずれにしても中世後期にあって北畠国司家の軍事的拠点となっていたことは確実であろう。

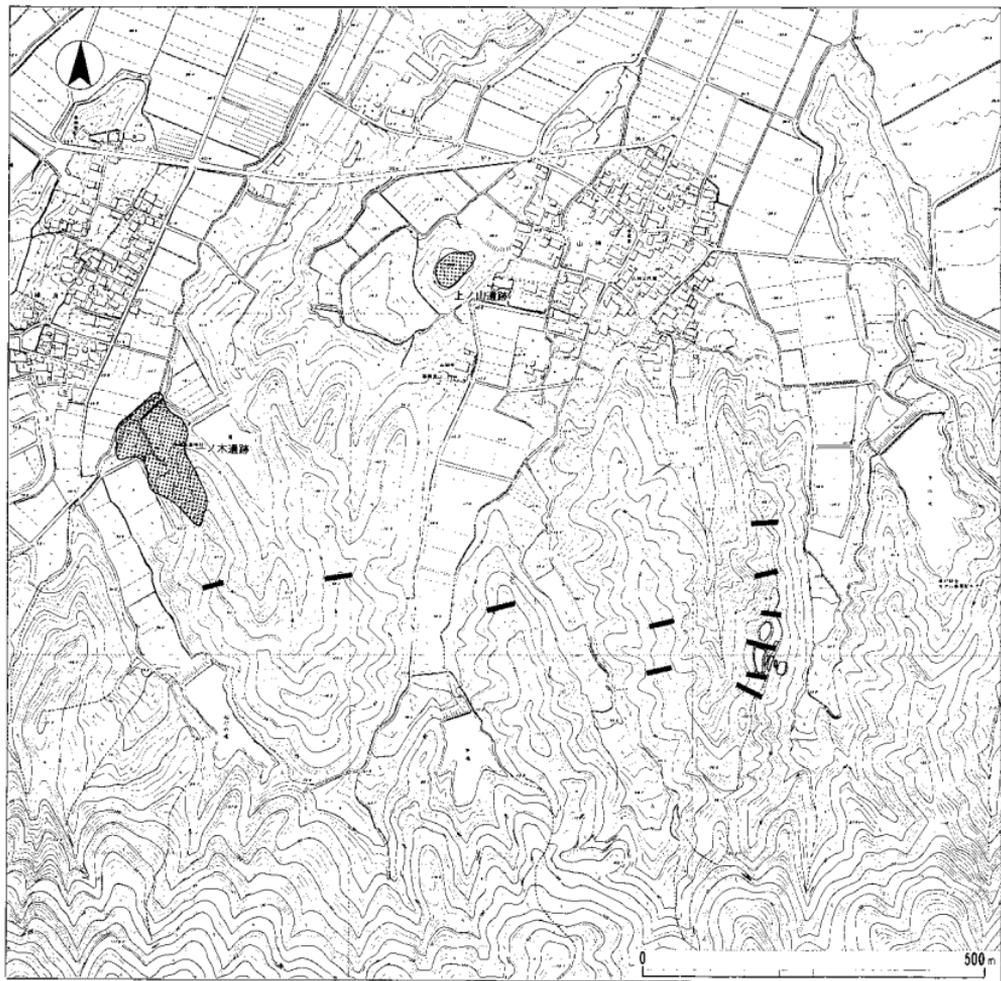


- 1 山神城跡
- 2 田丸城跡
- 3 笠木館跡
- 4 坊主山館跡
- 5 山岡城跡
- 6 岩出城跡
- 7 矢田城跡
- 8 西山城跡
- 9 神山城跡
- 10 岩内城跡
- 11 上村城跡
- 12 池村城跡
- 13 有樂中城跡
- 14 山神西城跡
- 15 楠ノ木遺跡
- 16 蚊山古墳
- 17 佐八藤波遺跡
- 18 中ノ垣外遺跡

第33図 周辺関連遺跡分布図 (1 : 50,000)



图例 比例尺 1 : 5,000



第35図 山神城跡周辺地形図 (1 : 5,000)

その他の中世城郭にも実態が判明しているものはほとんどない。周辺のものを見ていくと、笠木館跡(3)は、「信長公記」永禄12年(1569)条に笠木の地名が見られ、現森出集落の南西の標高40m程の台地全体に遺構が広がっている。堀や土塁で区画した方形を主体とした多数の郭が認められる。坊主山館跡(4)は、その南を旧熊野街道が東西に走り、現在防衛庁明野航空学校のヘリコプター練習場になっている。土塁で周囲を画された長方形の郭が3カ所あったといわれる。東方の宮川左岸には山岡城跡(5)や岩出城跡(6)がある。岩出城跡は、長保から応永年間にかけて神宮祭主大中臣氏の居館があったとされている。慶長5年(1600)に廃城になっており、現在城郭の遺構は地表では認められなくなっているが、大正期の見取り図や、戦後米軍が撮影した航空写真から方形の郭があったことがうかがわれる。こうした山神城跡周辺の中世城郭跡は大半が北畠氏関連のものといわれ、田丸城を除くいずれもが沖積平野に臨んだ低台地上に立地し、生産地あるいは交通の要所をおさえていることがわかる。

中世の集落遺跡では楠ノ木遺跡(15)、蚊山遺跡(19)が発掘調査によって内容が明らかになっている。

蚊山遺跡は鎌倉時代～室町時代の集落と墓地で、多量の土器類が出土している。楠ノ木遺跡は山神城跡の東約1kmにあり、丘陵裾の平坦地に立地するが、旧熊野街道の要所にあつて、現在の集落とは断絶する廃絶のパターンが山神城と関連があるものと見られている。

山神もふくめ、周辺の積良・矢野・野篠・蚊野・原・田宮寺・勝田・宮古・田辺といった集落は現存する神宮関係の史料から中世まで遡ることが知られている。また、これらのうち山神・積良・矢野・野

篠・蚊野の五ヶ村は神宮三節祭に鳥名子舞とよばれる神事舞を奉納し、この五ヶ村の鳥名子神役人で鳥名子組を組織していたといわれ、独自の惣郷的結合体があったとみられている。これらの村の周囲は神社の密度が高く、このこともまた当地域が神宮と深い関わりがあったことを示している。これらは小規模なものながら大半は延喜式内社で、山神城跡にも隣接して津布良神社や鴨神社が鎮座している。積良には『神鳳抄』によれば「積良御牧」があった可能性があり、かつては荒木田氏一族の墳墓と祭祀場があったといわれる。

最後に山神集落についてみると、「山神」は「山上」とも表記され、康永3年(1344)の法楽寺文書紛失記に「度会郡城田郷山上村十五条五緦田里」とみえ、鎌倉時代以前まで遡る集落であることが知られる。現在は谷の開口部付近に立地しているが、地元の口伝ではかつては南西の字「坊の前」や「坂ノ辻」などといった谷間まで集落が広がっており、この付近から多量の一石五輪塔が発見されているという。積良もふくめて周辺には「垣内」地名が多く残されており、「大門」や「法玄寺」といった寺院と関わる字名もある。現在の交通は、山神集落の北をカーブしていく県道が主たるものだが、かつては、現集落の中央を十字に分けて北と東西にのびていく道路がそれぞれ旧熊野街道に続き、集落にとって最も重要なルートであった。

また、城跡に関連して山神城跡のおく地区と相戸地区のある尾根は南で合流し、「山神西本城跡」と呼ばれるピークに達するが、ここには「城山」地名が残っていることから、地元で城郭の跡であることは認識されてきたことがわかる。(大川勝宏)

1	鴨神社 (内宮摂社)	6	奈良波良神社 (内宮摂社)	11	御船神社 (内宮摂社)
2	津布良神社 (内宮末社)	7	小社神社 (内宮末社)	12	棒原神社 (内宮摂社)
3	幸神社	8	園相神社 (内宮摂社)	13	坂手国生神社 (内宮摂社)
4	田乃家神社 (内宮摂社)	9	朽羅神社 (内宮摂社)	14	狭田国生神社 (内宮摂社)
5	鴨下神社 (内宮末社)	10	蚊野神社 (内宮摂社)		

第13表 山神城跡周辺神社一覧

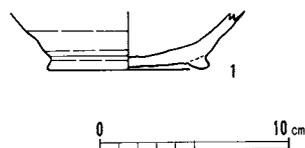
3. のせんじ地区の調査

調査区は、玉城町積良字のせんじに所在する。玉城町と度会町の境に位置する国東山から北西に続く丘陵の北端にある小さく突き出た尾根に挟まれた谷あいの畑と水田に4m×4mのグリッド6か所(計96㎡)を設定し、1988年12月2日～12月7日にかけて調査を行った。

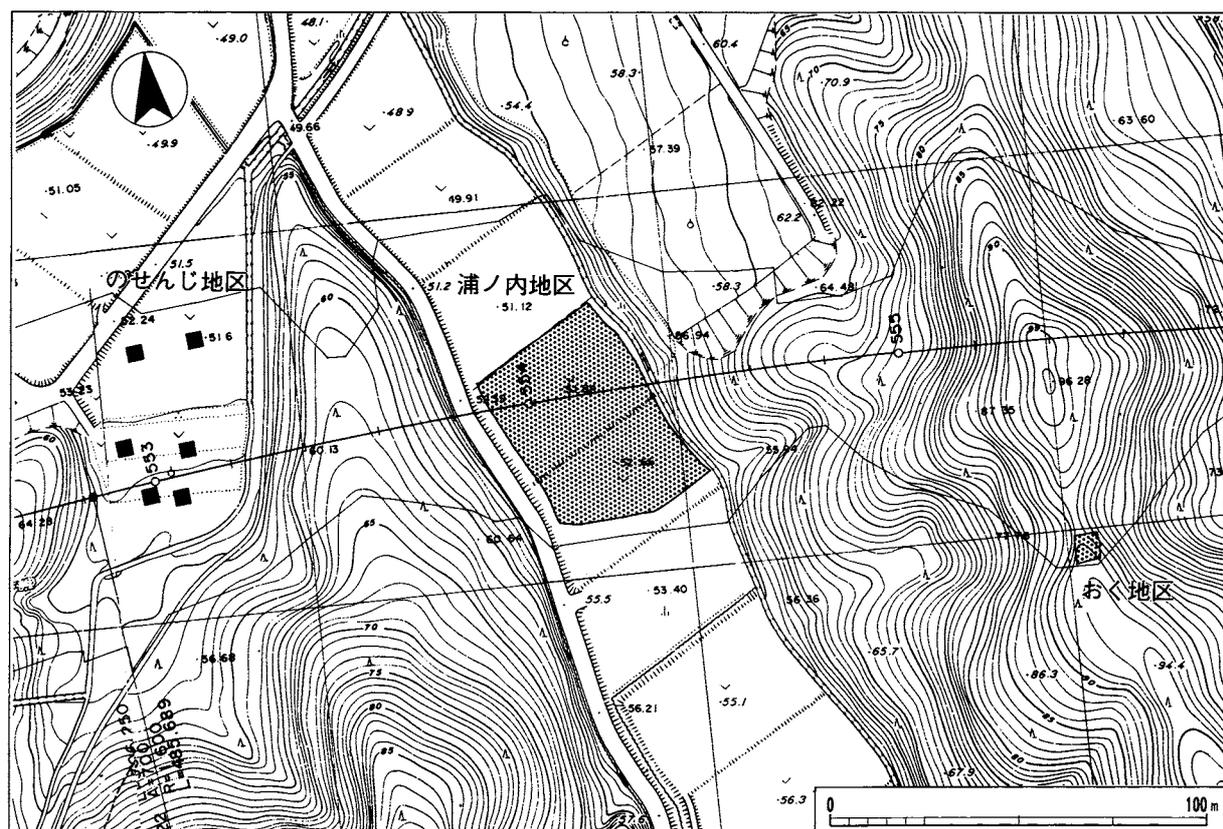
畑地は、分布調査では中世土器片や近世陶磁器片など遺物散布の密度が水田に比して大きかったが、表土から扁平な山石を含み、20cmほど掘り下げたところで褐色土から黄褐色土に変わった。出土遺物は、鎌倉時代のものと思われる山茶碗の底部(1)が1片と若干の近世陶器片だけであり、遺構は検出されなかった。

水田では、耕作土の下に圃場整備の際に置かれた土砂が60cmほどの層をなし、その下は拳大～人頭大の石が混じる地山である。水田からは、遺物・遺構ともに検出されなかった。

(小坂 宜広)



第36図 のせんじ地区出土遺物実測図(1:4)



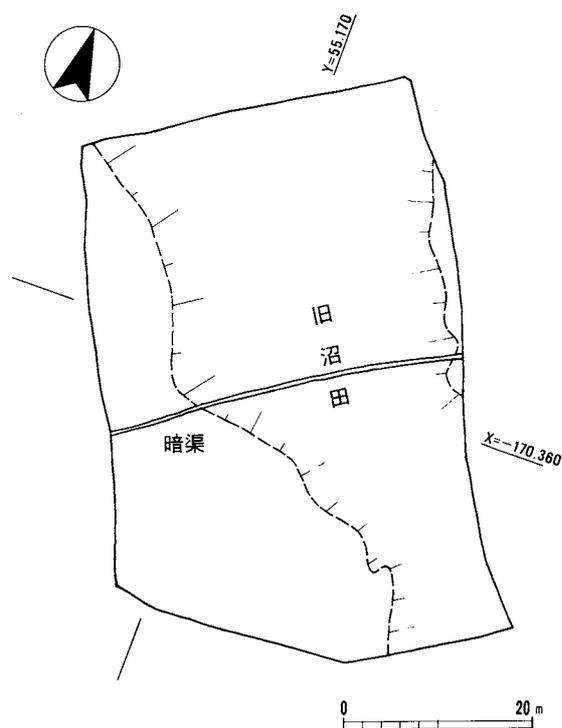
第37図 のせんじ地区、浦ノ内地区位置図(1:2,000)

4. 浦ノ内地区の調査

調査区は、宮川左岸の国東山塊北側の南北に走る小さな谷の狭あい部に位置し、標高50m前後で現況は水田である。行政区画上は、度会郡玉城町積良字浦ノ内に所在する。なお、昭和50年代に圃場整備が行われている。

当調査区の所在する積良は、伊勢神宮内宮の祢宜家であった荒木田氏の旧地とされており、その祖霊を祀る石積・巨石の山宮神事場があり、「建久三年(1192年)皇太神宮年中行事」に祖霊祭が行われたことが記録されている。また、内宮末社の津布良神社や地域の安産信仰を集める乳宮神社・幸の神社がある。

調査区の土層層序は、上層から灰黄褐色土(耕作土)・暗褐色粘質土・青灰色礫混土・黄褐色礫混土(地山)である。このうち、青灰色礫混土が透水層で、地下水が湧出する。地表から透水層までの層厚は、およそ60cmである。調査区の3分の2ほどが、かつての沼田であり、それ以外の部分についても圃場整備の際に地山の部分まで攪乱および削平を受けており遺構は検出されなかった。



第38図 浦ノ内地区遺構平面図(1:800)

遺物は、遺構が検出されなかったため包含層出土のものばかりである。縄文時代から近世にわたり多種多様なものが整理箱に20箱ほど出土したが、そのほとんどが細片である。

出土遺物

縄文土器(1・2) いずれも縄文時代後期中葉のもので北白川上層式に併行するものである。

土師器杯(10・11) (10)は推定口径13.5cm、(11)は推定口径17.5cmで、いずれも橙色を呈する。奈良時代後半頃のものと思われる。

土師器小皿(12~18) (12)は内面底部に墨書が記されているが、完存でないために判読が不可能である。(13)は口縁部に油煙痕が付着しており灯明皿として使用されていたようである。(14~18)も含めて、器壁は非常に薄い。いずれも近世のものと思われる。

土師器焙烙(19・20) (19)は推定口径15cm、(20)は推定口径14cmでともに外面に煤が付着。いずれも近世のものと思われる。

土師器茶釜(21・22) いずれも推定口径10cmで、体部外面上半にハケメが施されている。(21)は口縁部外面に煤が付着している。近世のものと思われる。

土師器鍋(23・24) (23)は口縁端部が折り返され、強いヨコナデが施される。(24)も口縁端部が折り返され強いヨコナデが施されるが、口縁端部外面にもそれが見られる。いずれも口縁部外面に煤が付着している。

土師器羽釜(25) 推定口径31cmで外面に煤が付着している。

陶器摺鉢(26) 16世紀以降のものと思われる。

灰釉陶器(27) 高台部の約10分の1が残存。平安時代後半のものと思われる。

山皿(28) 底部が2分の1残存。底部外面に糸切り痕が残る。鎌倉時代のものと思われる。

山茶椀(29) 高台部が3分の2残存。底部外面に糸切り痕が残る。鎌倉時代のものと思われる。

青磁椀(30) 高台部が残存。体部外面に蓮弁文様を有する。龍泉窯系のものと思われる。

鉄釉小皿(31) 黒茶色の光沢のある釉が全面に掛かる小皿である。近世のものと思われる。

天目茶椀(33~36) (33)は、口縁部が薄く直立的に立ち、光沢のないくすんだ茶灰色を基調にした釉が掛かる。(34・35)は、口縁部の立ち上がりから口縁端部で外反して丸くおさまる。光沢のある黒茶色を基調にした釉が掛かる。

陶器椀(36) 近世の瀬戸系の柳茶椀であろうと思われる。

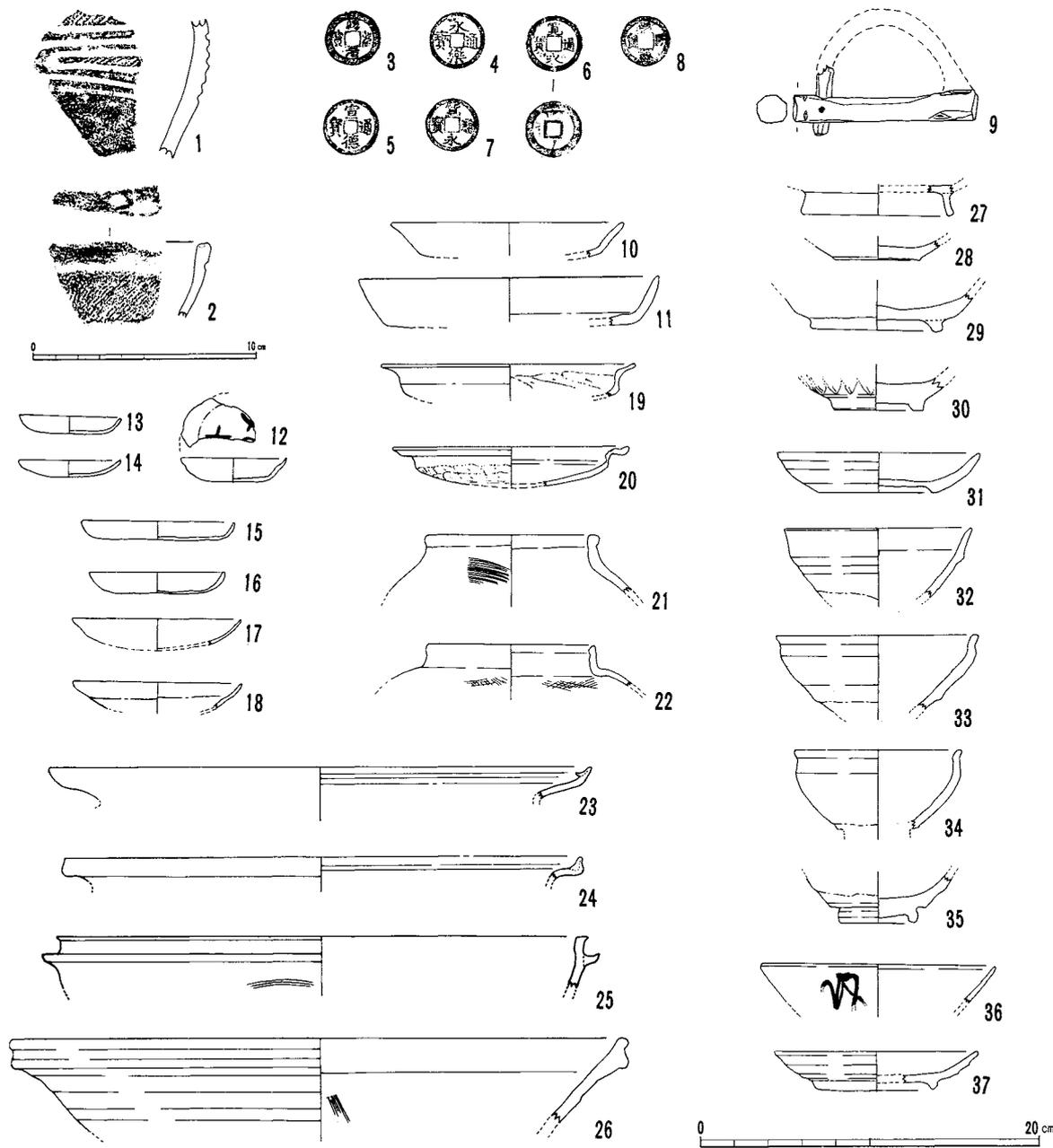
施釉陶器小皿(37) 近世のものと思われる。

銭貨(3~8) (3)は北宋の紹聖元寶、(4)は明の永樂通寶、(5)は明の宣徳通寶、(6・7)は寛永通寶で(6)の裏面に「一」と鑄出されている。(8)は摩滅が激しく判読できない。

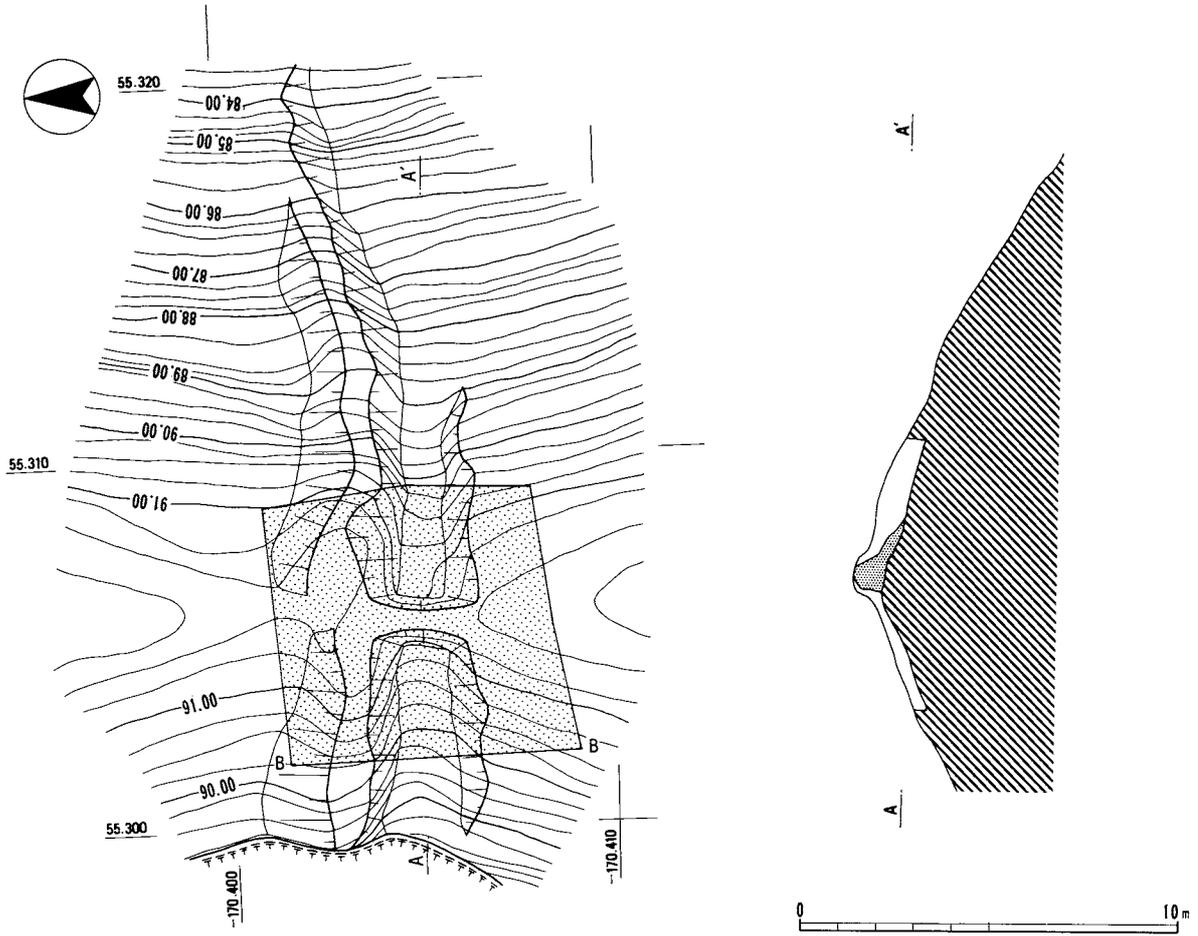
牛の鼻輪(9) 木の枝の又になった部分を利用したもので、このタイプはごく最近まで使用されていたようである。(江尻 健・稲本賢治)

〔註〕

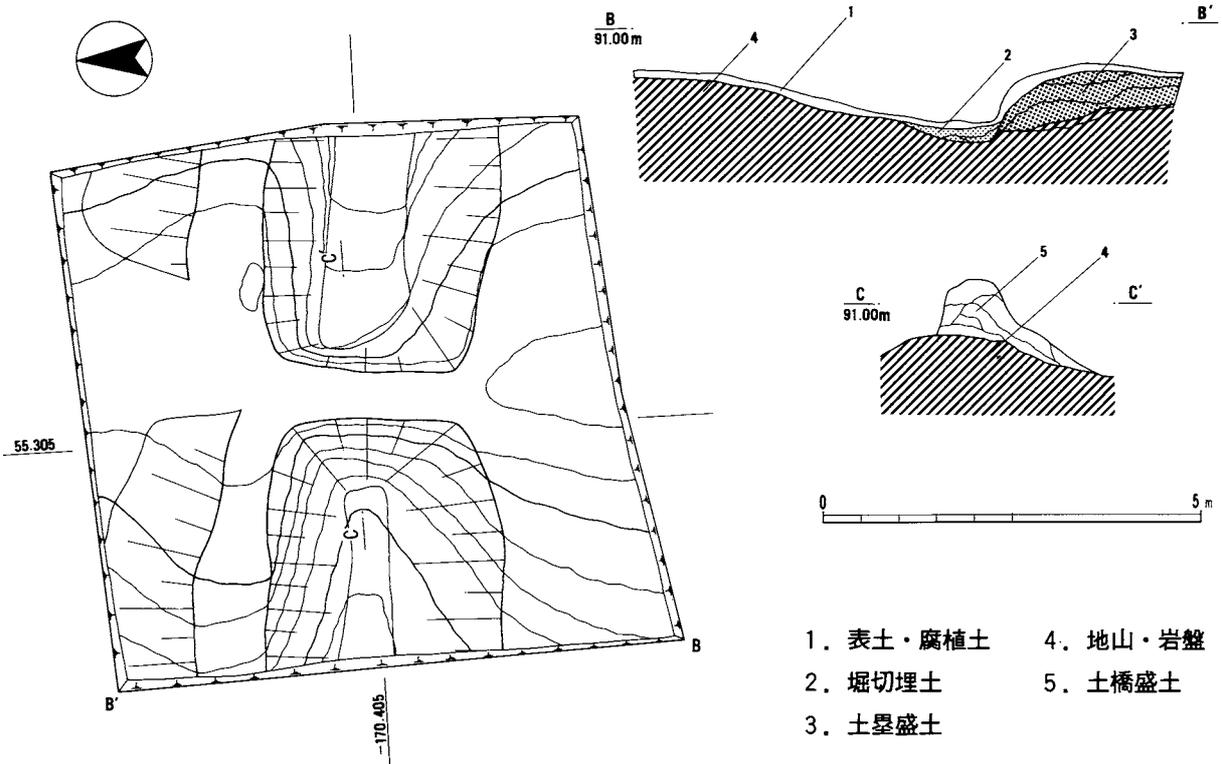
① 統群書類従 神祇部 第一輯上 1984年 統群書類従完成会



第39図 浦ノ内地区出土遺物実測図(1:4)



第41図 おく地区地形測量図 (1 : 200)



第42図 おく地区調査区遺構平面図・断面図，土橋断面図 (1 : 100)

あいと 6. 相戸地区の調査

相戸地区は、おく地区から約200m東に隣接した尾根上にある堀切遺構である。この堀切は、約30～40度近い急傾斜の痩せ尾根をのぼった小さな鞍部を横断してつくられている。今回の調査地内で最も鋭角的に掘削されており、後世の破壊も少なく保存状態もよい。

現地表面の観察では、土塁と土橋が残り、東斜面に21m、西斜面に12mの堀切がのびている。周囲の現況はヒノキの植林である。調査区は土橋を中心に東壁・西壁が堀切に直角方向になるようにして南北で約7.7m、北壁で9.4m、南壁で7mの台形状をしている。

土塁は堀切掘削の排土をその北側に盛って作られており、残存する土塁上から南側の肩までで最大幅で約4.4m、堀切底との比高差では最大深で約2.2mを測る。土塁盛土の底で最大幅が4.2mで堀切底からの立ち上がりで推定すると2m強の高さの盛土があっ

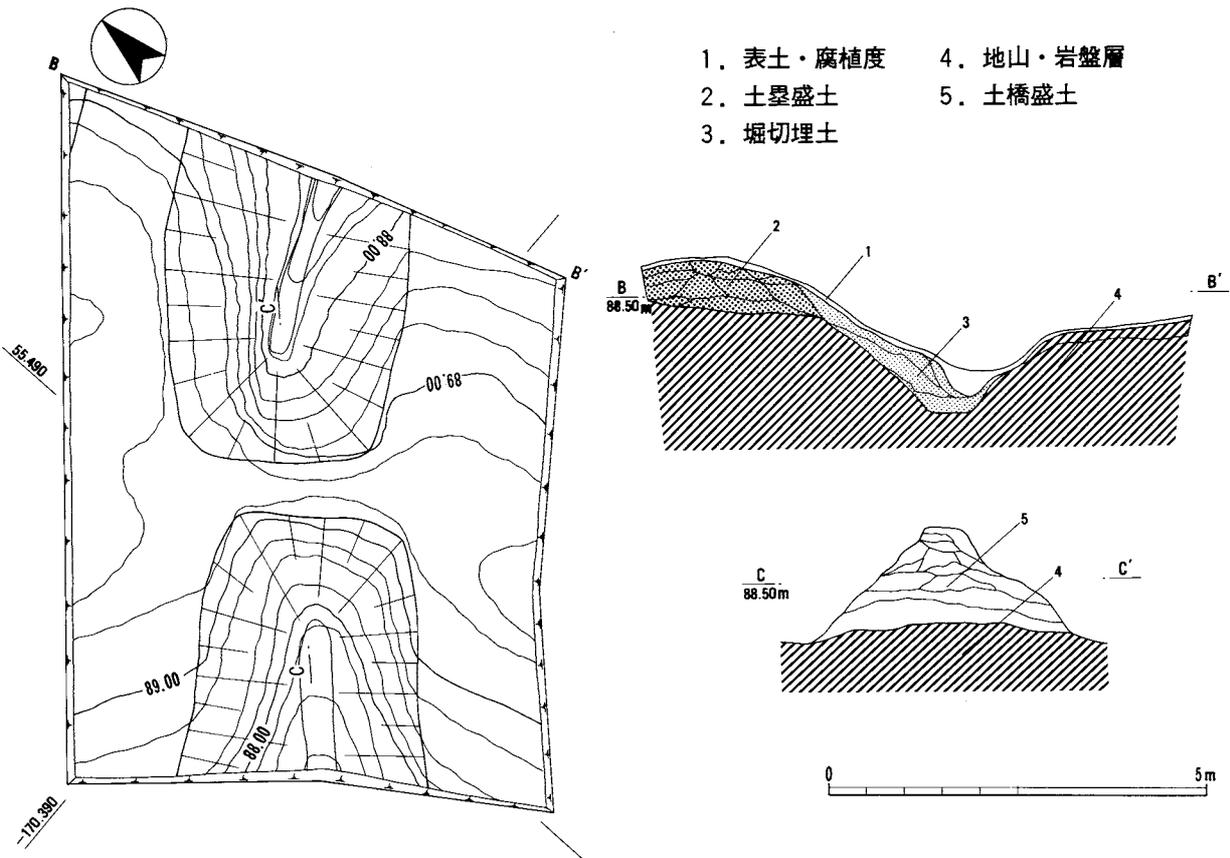
たと思われる。

堀切の形態は底が平らな形で箱葉研堀だが、他の地区と比べ堀切底は狭く、最も狭いところで幅約30cmしかない。旧地表面から約1.2mほど掘り込まれ、基盤の黄褐色砂質土や結晶片岩の岩盤にまで掘削が及んでいる。

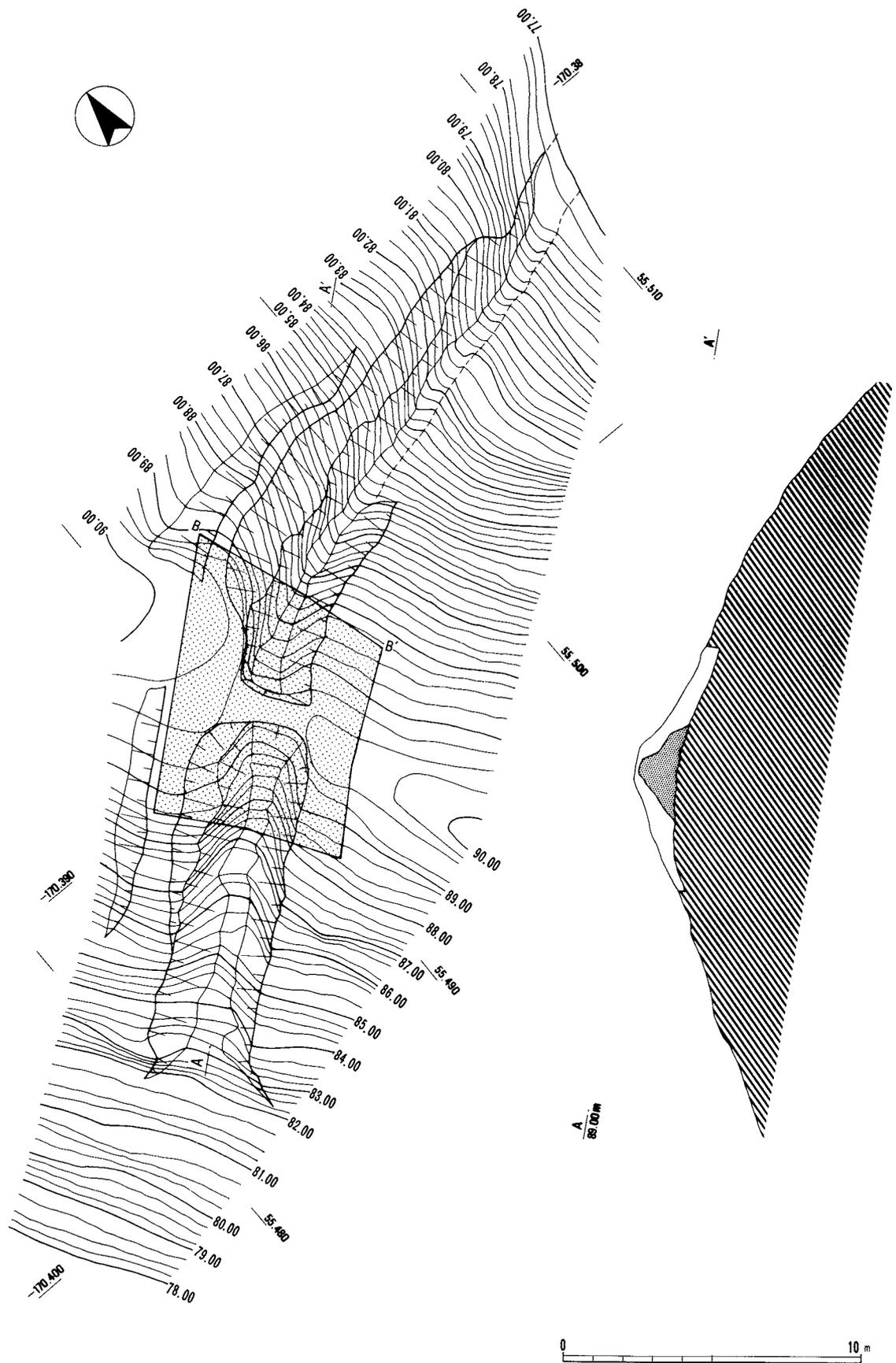
土橋は、断ち割り断面で観察すると底辺約3.5m、高さ約1.5mの台形状に、黄褐色砂質土を堅く盛って作られ、現在も林道の一部となっている。土塁の一部を切って通しており、また、盛土も土塁とちがって腐蝕分をわずかに含んでいることから、おく地区と同様、土橋は後世の作出であるとみられる。

本調査区からも遺物の出土はないが、その形状や他の地区の堀切と東西に並んだような位置関係から、やはり城跡と同時期のものであるとみられる。

(大川勝宏)



第43図 相戸地区調査区遺構平面図・断面図，土橋断面図（1：100）



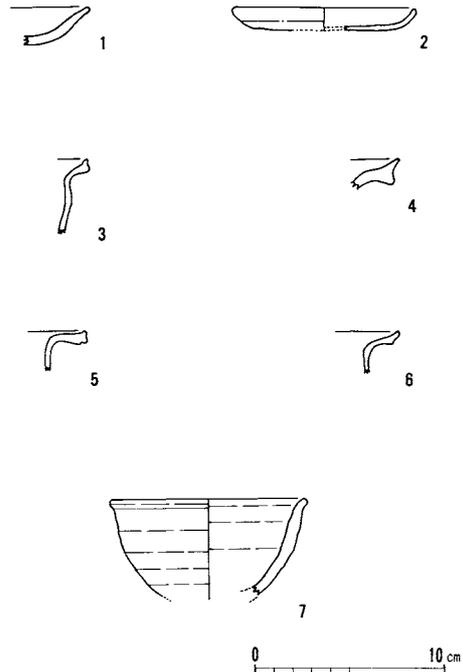
第44图 相戸地区地形測量図 (1 : 200)

7. 上ノ垣内地区の調査

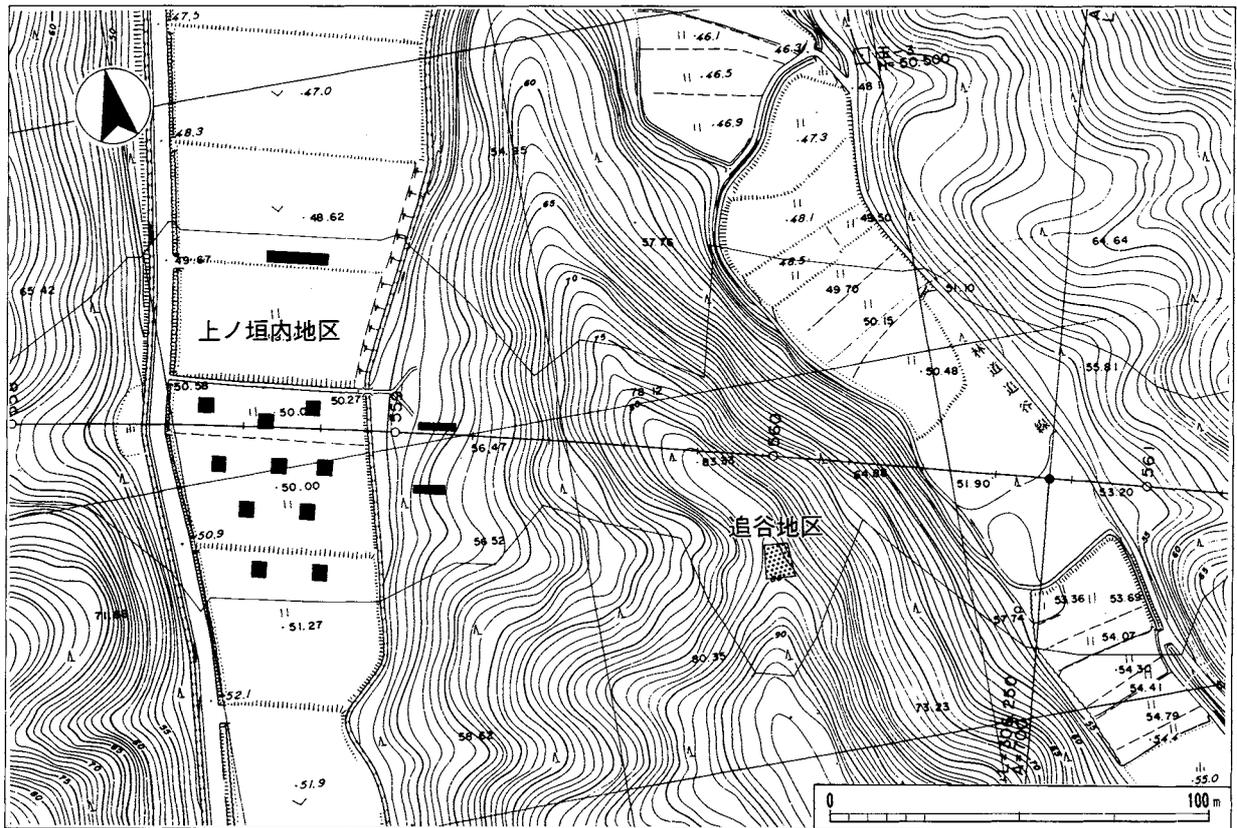
調査区は、玉城町山神字上ノ垣内に所在する。玉城町南西部の大日山から北に続く丘陵の北端に位置する幅40～50mの北に開く谷あいの中の水田に4m×4mのグリッド10か所、3m×16mのトレンチ1本(計208㎡)を設定し、1988年12月20日～12月26日にかけて調査を行った。さらに1990年8月に追谷地区の西斜面に、2m×10mのトレンチを2本設定し、調査を行った。

水田部分ではすでに圃場整備が行われており、浅いところで表土から20cm、深いところでは120cmほど下に旧水田面が認められた。遺物は、平安時代のもと思われる土師器杯(1)、鎌倉時代のもと思われる土師器小皿(2)、室町時代のもと思われる土師器鍋(3～6)、天目茶椀(7)などが出土した。しかし、遺物の密度は全体的に薄く、明確な遺構は検出されなかった。追谷地区の西斜面においても、遺物は出土せず遺構も検出されなかった。

(小坂宜広・稲本賢治)



第45図 上ノ垣内地区出土遺物実測図(1:4)



第46図 上ノ垣内地区、追谷地区位置図(1:2,000)

おいだに 8. 追谷地区の調査

追谷地区は、今回調査に及んだ5本の尾根の中央にあたる。この尾根は南に奥まった、現標高約85mほどのやや低いもので、堀切と土塁の遺構がその西側の斜面にだけつくられ、土橋も残っていて、一部堀切の肩が崩されている以外、形状はよく保存されている。東側の斜面は、基盤の層理にそった浸食のため、相対的に急峻で、地表面の観察でも現在いくつかの崩落部分が認められる。また、堀切に対応して谷状の自然地形になっているため、この東斜面には堀切が掘削されなかったものと考えられる。

調査区は尾根頂部で南北9.5m、東西8.5mほどの方形のものを設定した。

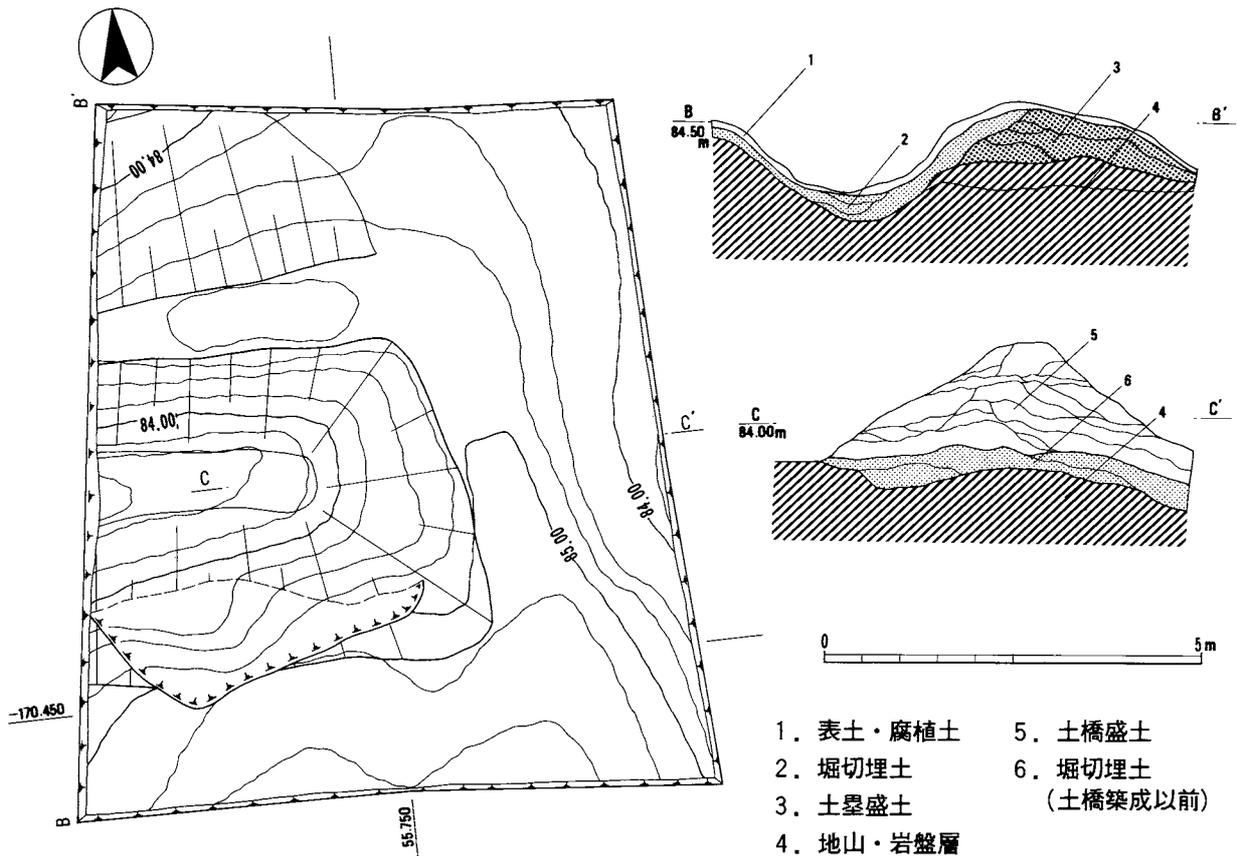
堀切は、痩せ尾根の鞍部が急斜面にさしかかる手前で掘削されている。形態は箱葉研堀で、長さは23mほど残っており、土塁の頂部から反対側の肩までの幅で最大4.2m、比高は最もよく残っているところで約1.8mある。土塁は、やはり堀切の北側につくら

れ、盛土の底の最大幅約3m、堀切底からの立ち上がりから推定して2m強の高さがあったものと思われる。埋土に基盤の結晶片岩が多量に混じっており、堀切掘削時に作られたものであることが分かる。

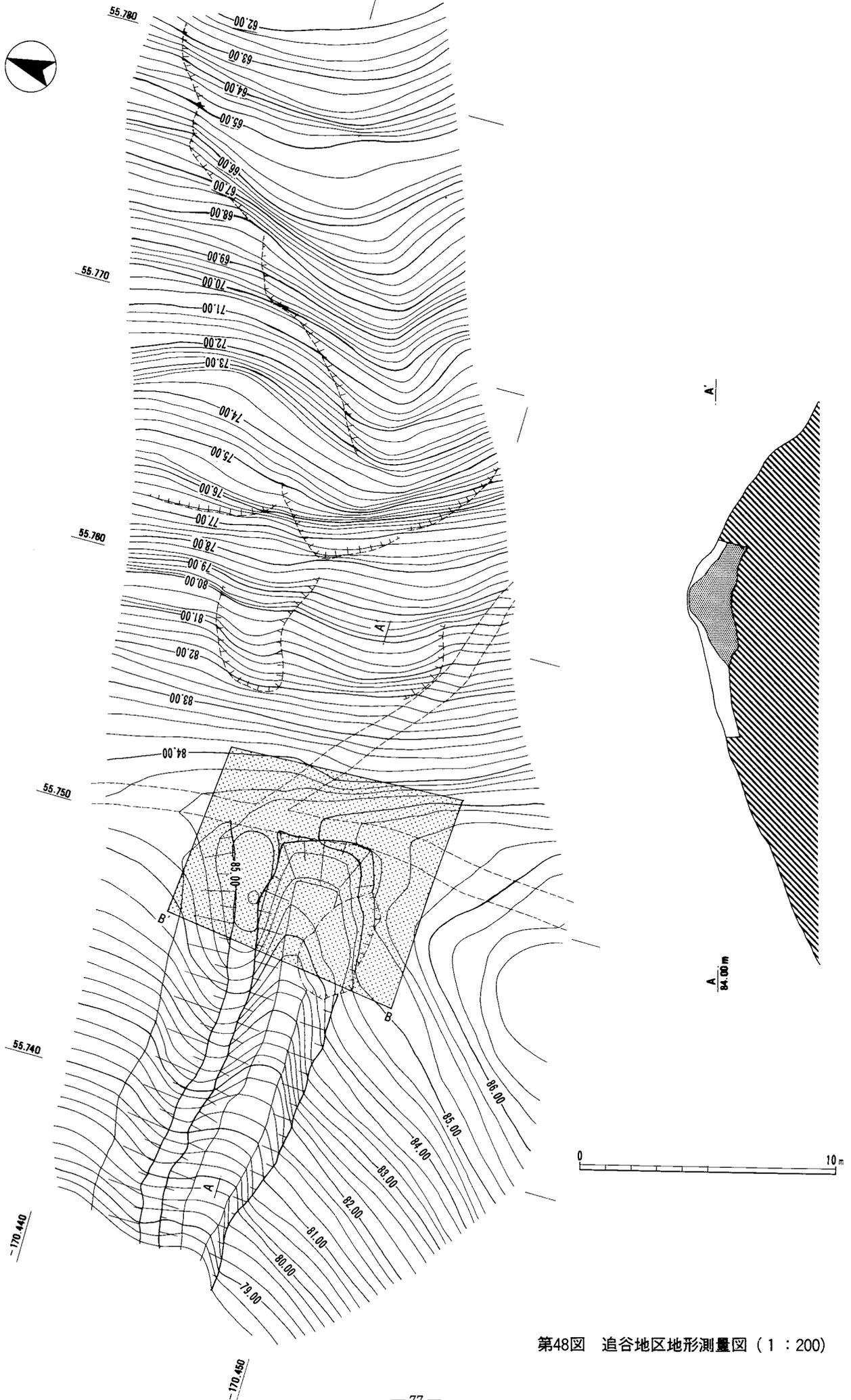
土橋は堀切の頂部を通して。断ち割りセクションで見ると、これは堀切埋土の上から底幅約5mの盛土をしており、また、堀切肩を崩したとみられる土を使っているため、堀切より新しい林道などによる後世の造作であるとみられる。

ここでも遺物の出土はみられず、時期の決定は難しいが、他の地区の堀切と同様の造作であり、東西方向におおむねラインをそろえている点からもほぼ同時期のものであるとみてよいだろう。

(大川勝宏)



第47図 追谷地区調査区遺構平面図・断面図, 土橋断面図 (1:100)



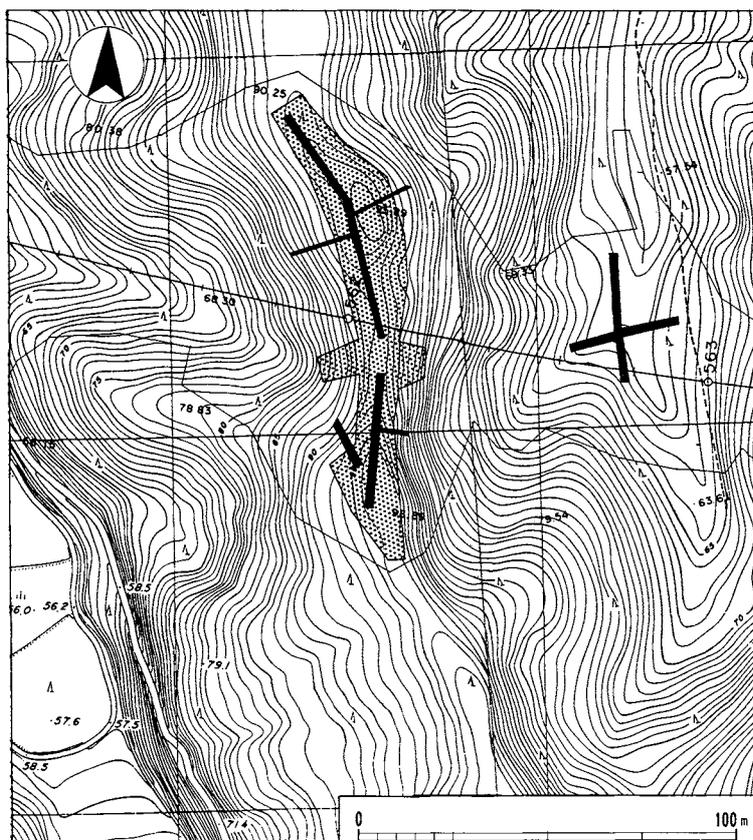
第48图 追谷地区地形测量图 (1 : 200)

にしおいたに
9. 西老谷地区の調査

西追谷地区は、東のベト谷地区、西の追谷地区の二つの尾根に挟まれた標高90～97m程の丘陵尾根上にある。現況では、二ヶ所の平坦部との堀切一条、さらに、それに伴う土塁状の高まりが見られた。

(1) 遺構

土塁



第49図 西老谷地区、東老谷地区位置図 (1 : 2,000)

SA3 SD1を掘削した際の排土を盛り上げたと思われる。土塁盛土は明赤褐色および赤褐色礫混土でできてしまっていない。他の調査地内のものと同様に堀切の北側に土盛りをする。

堀切

SD1 調査区のほぼ中央部に位置する。幅2.0～3.8m、SA3からの比高が2.6mの箱薬研堀である。堀切埋土からの出土遺物はなく時期は不明である。

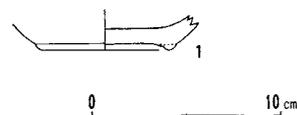
SD2 調査区外のため調査できなかった。

他に、SD1の中央部やや西よりに土橋を検出したが、盛土作りであり、SA3を切って通している点から後世に付設されたものと思われる。

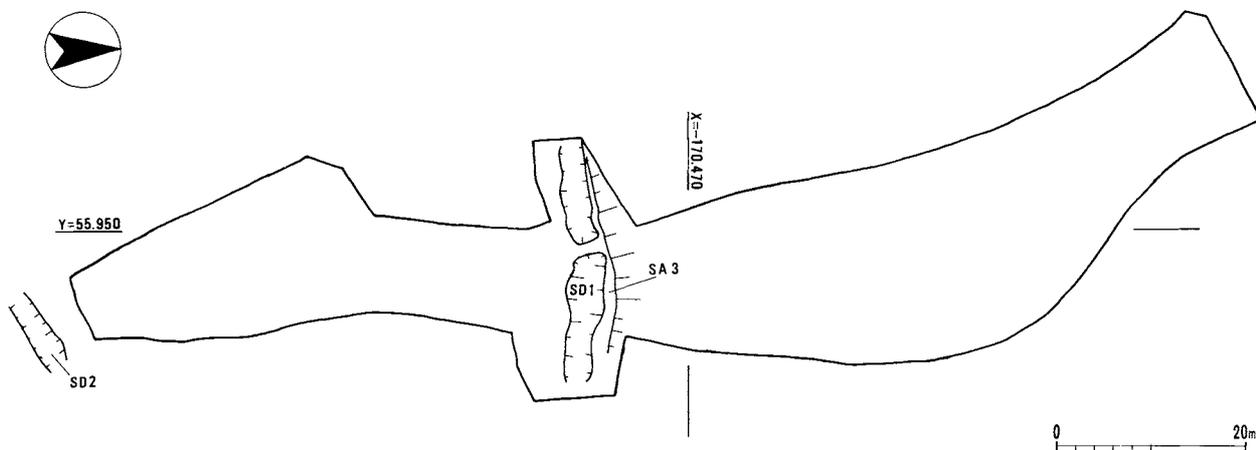
(2) 遺物

山茶碗(1) SD1の北側西斜面の地山直上で出土した。底部のみ残存。鎌倉時代のものと思われる。

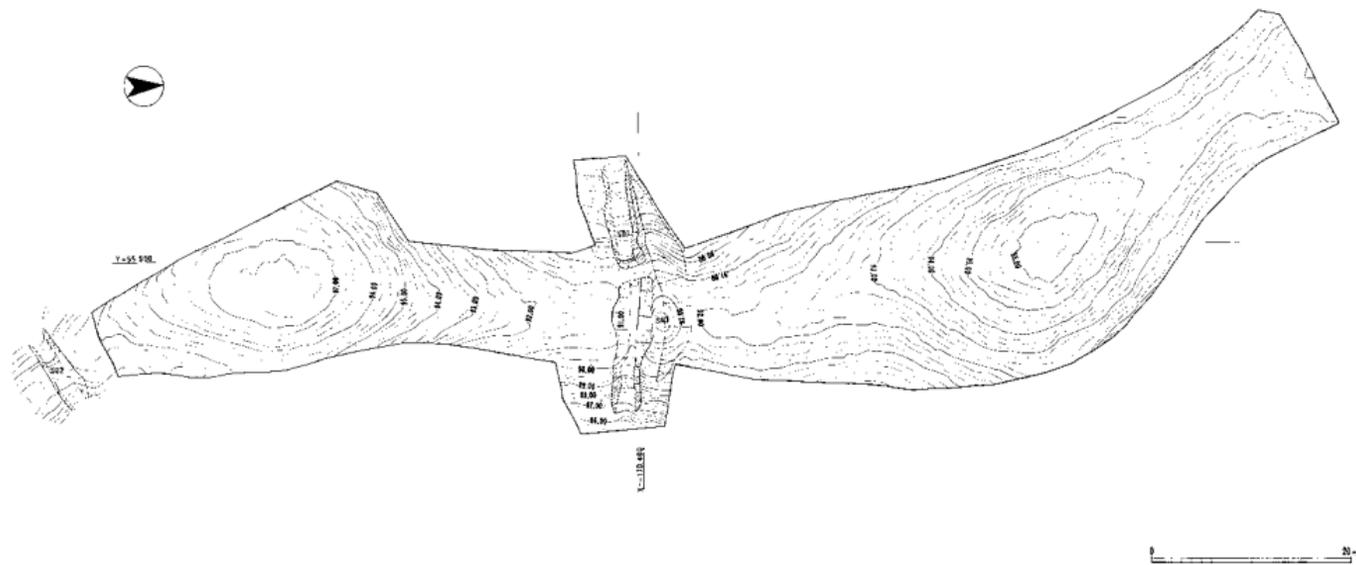
(稲本賢治)



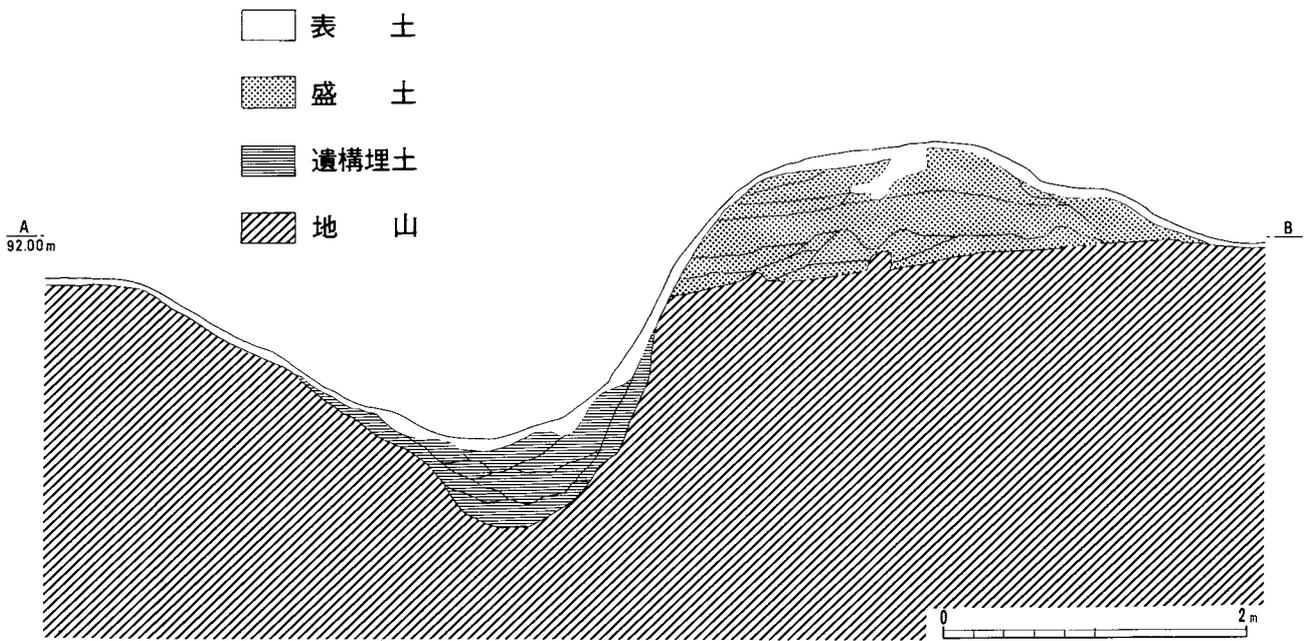
第50図 西追谷地区出土遺物実測図 (1 : 4)



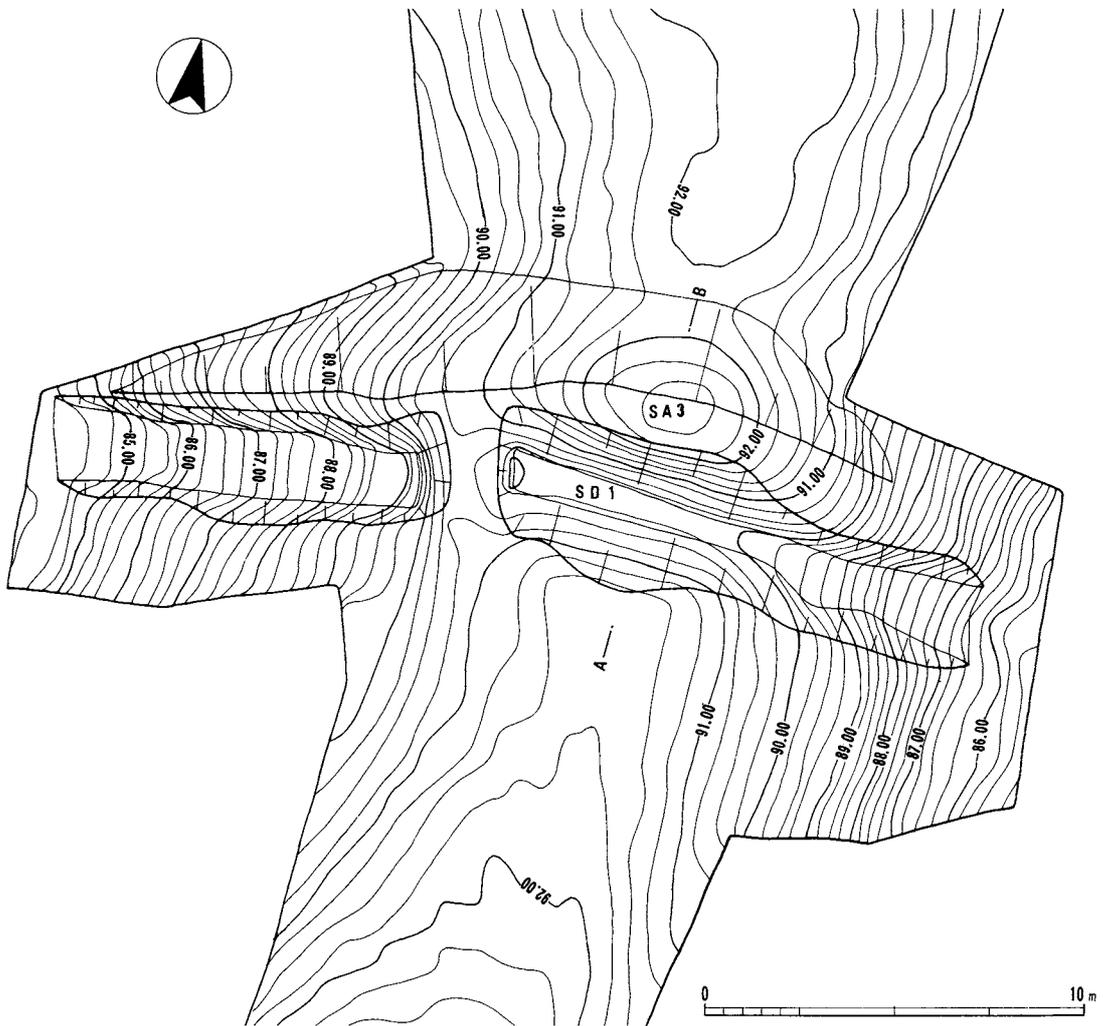
第51図 西老谷地区遺構配置図 (1 : 800)



第52图 西老谷地区调查区测量图 (1:400)



第53図 SD1・SA3土層断面図(1:50)



第54図 SD1・SA3遺構平面図(1:200)

10. 東老谷地区の調査

「西老谷地区」、「ベト谷地区」の二つの面的調査区の間にはさまれた谷地である。現況は山林で、他の谷に比べ乾燥しており、若干の平坦地もある。また、かつてここに井戸があったとの地元の伝承から遺構の分布が期待されたところである。調査としては南

北35m、東西31mの十字トレンチを設けて遺構の検出につとめたが、深さ約2mまでは均質な淡褐色の砂質土層で、以下湧水が見られたため、遺構はないものと判断した。また、遺物の出土もみられなかった。(大川勝宏)

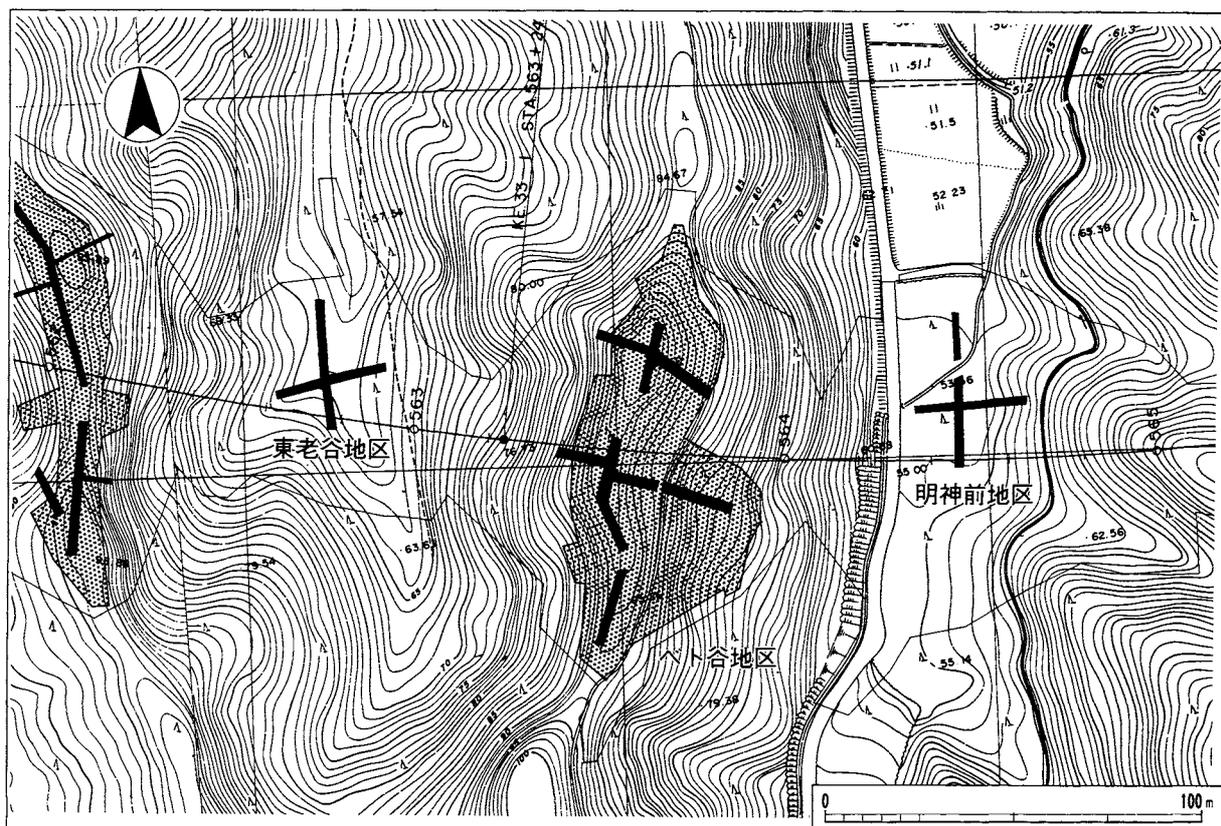
11. ベト谷地区の調査

1. 調査区の概要

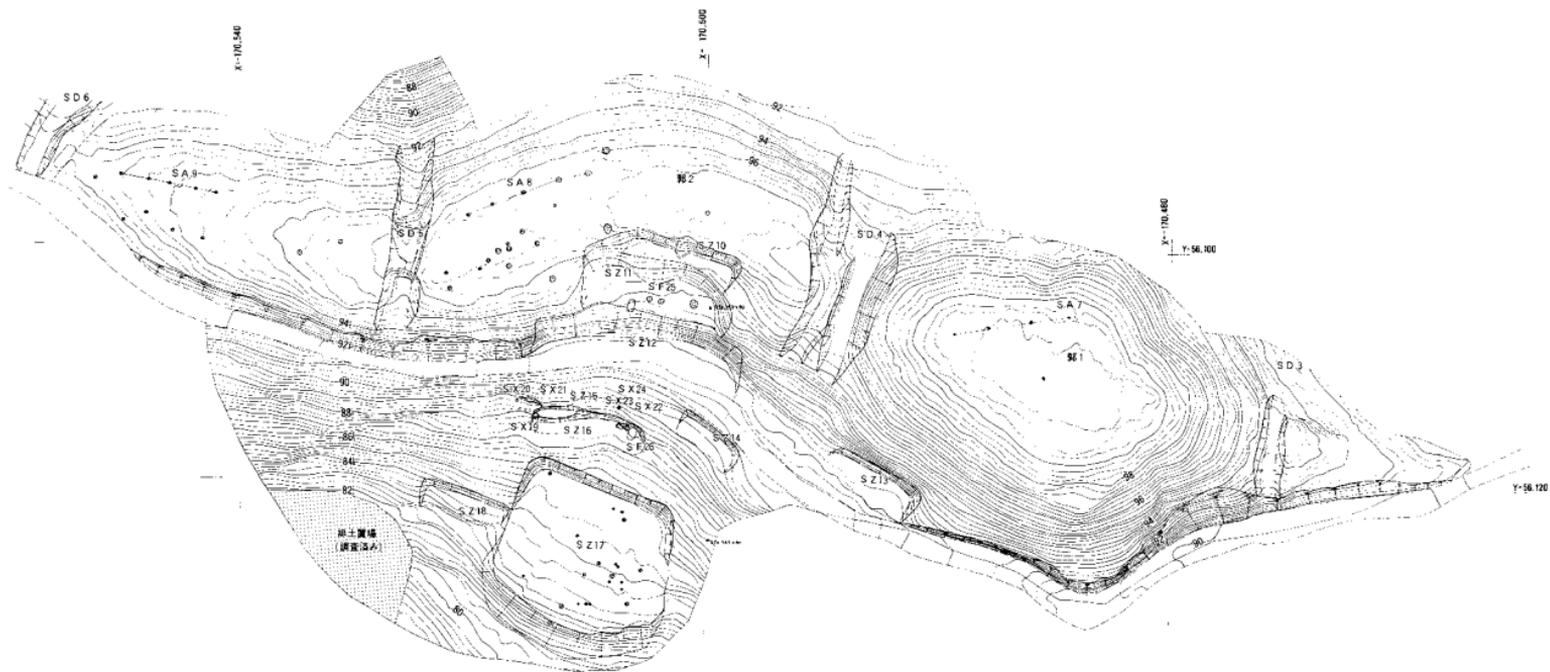
従来「山神東城」と呼称されてきた地点である。現地の観察からも調査区周辺で4本の堀切と尾根筋上の郭状の高まり、斜面のテラス状の平坦地などが判別できた。調査区は、自動車道路線予定地内にかかる3条の堀切と、東斜面の標高85mほどのところにある約14m×12mのテラス状の人工地形をとりこむように設定した。調査対象面積は3,600㎡である。また、当地区内での最高点は99.58mである。

基本的な層序は、尾根上の郭などでは腐蝕分を多

量に含む表土の直下から遺構地山面である礫混じりの黄褐色土が現れる。堀切内には周囲からの崩落による角礫や地山土が主体となる埋土が1m近く見られる他、東斜面の遺構群には崩落土が0.5~1mほど堆積している。この東斜面の埋土は、トレンチによる断面観察や後述する遺構の検出状況から、複雑な重複があるが、大略は表土→褐色礫混じり砂質土→結晶片岩(地形基盤)の順になる。なお、本調査区がある尾根には調査区外も含めて6本の堀切が現況からも観察され、山神城跡全体でも最

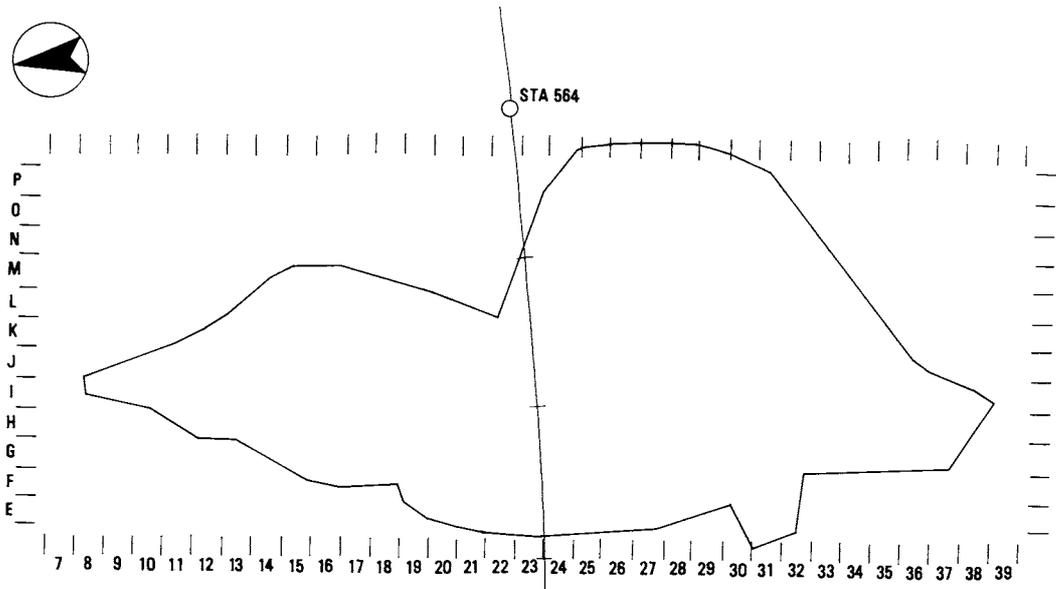


第55図 東老谷地区、ベト谷地区、明神前地区位置図(1:2,000) ※黒ヌキは試掘部分

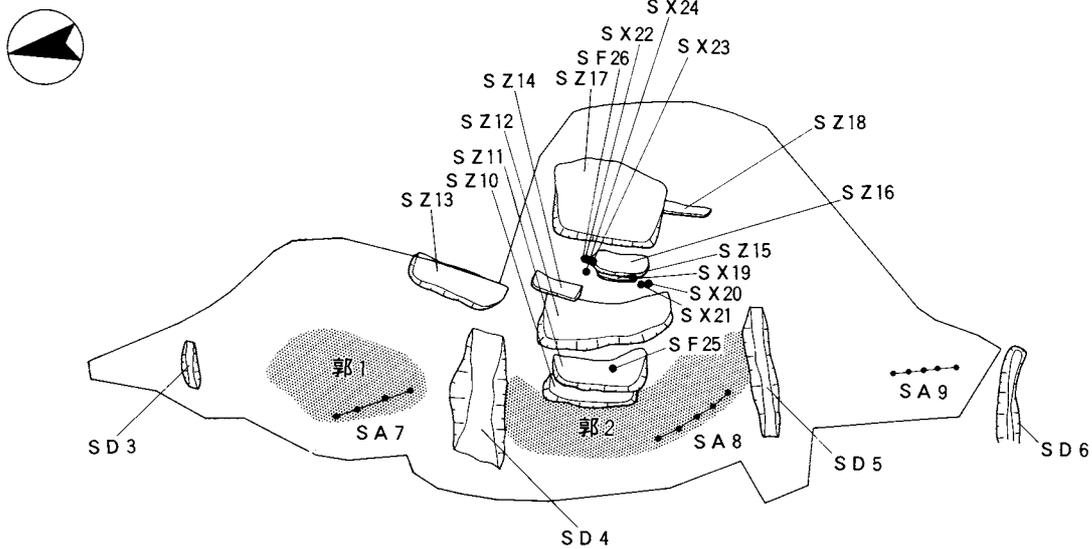


第56図 へつ谷地区地形図 (1:300)





第57図 ベト谷地区調査区小地区割図 (1 : 1,000)



第58図 ベト谷地区遺構配置図 (1 : 1,000)

も遺構の密度が高い地域である。

2. 遺構

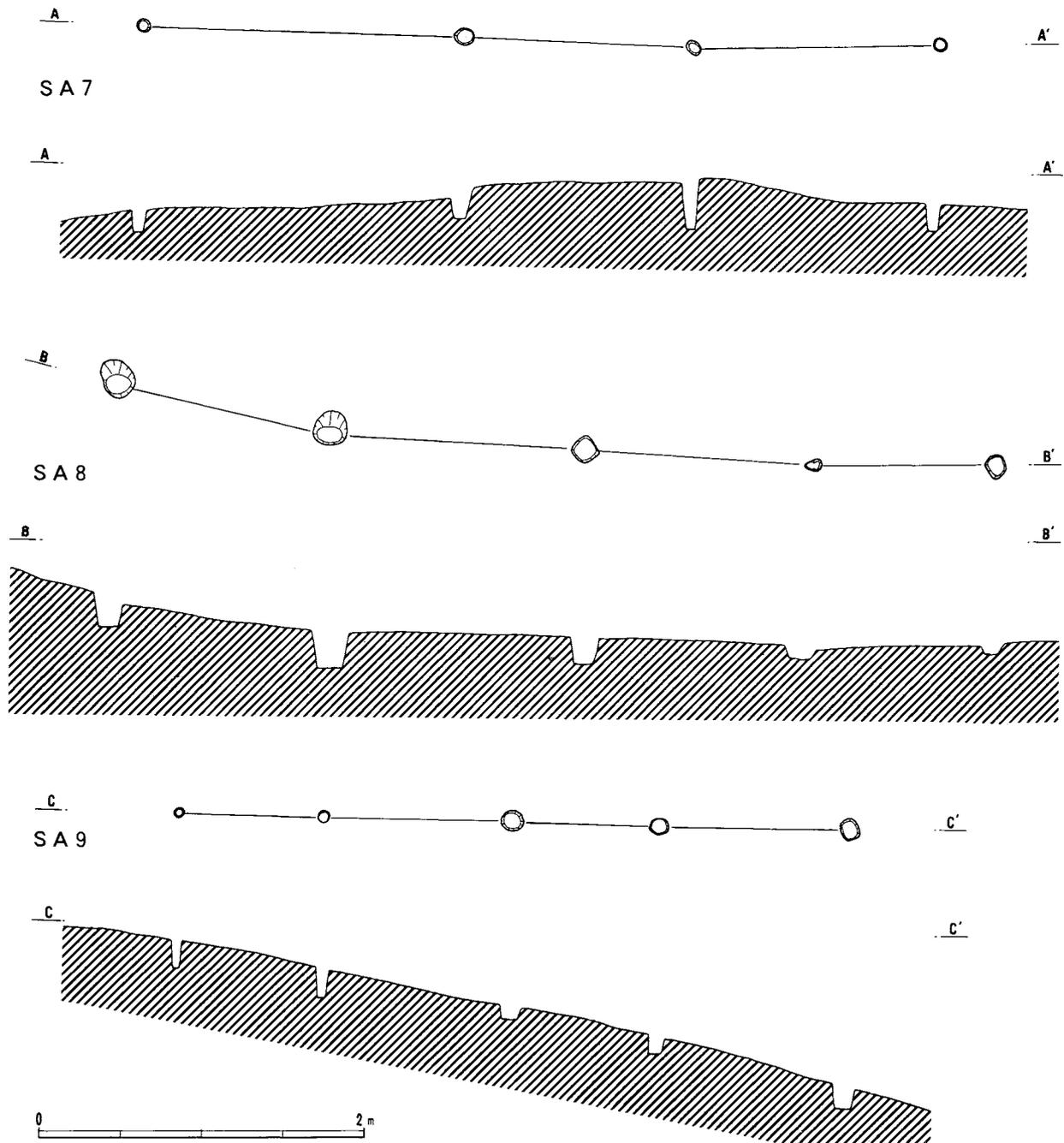
本調査区で検出された遺構には、郭遺構2、郭上の柵(SA)3列、「テラス状遺構」とした郭とは区別される平坦地(SZ)が9面、堀切(SD)3本、中世墓の可能性のある遺構(SX)6基、焼土面(SF)2がある。

①郭1

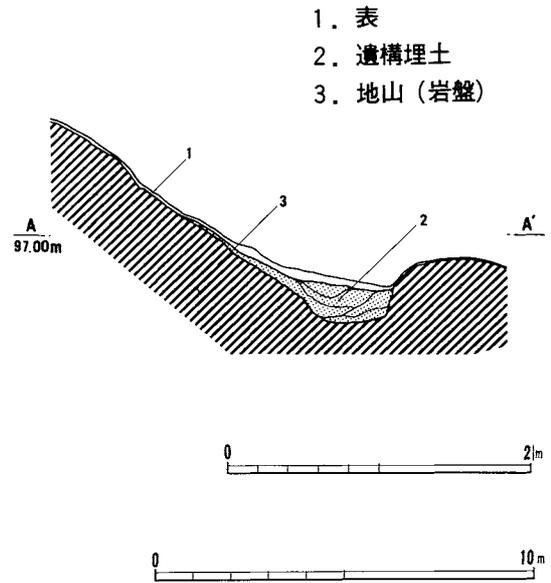
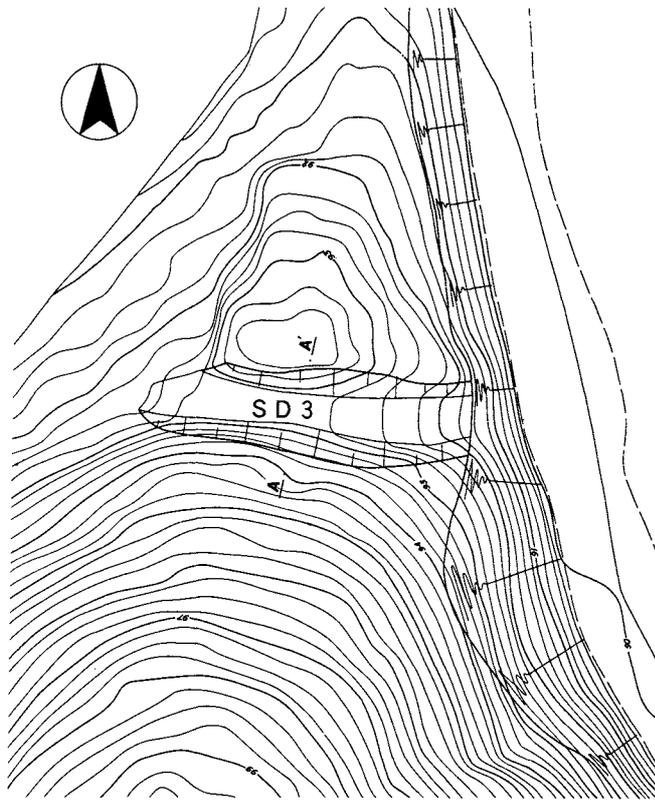
バト谷地区内で最も高く独立したピークを削平し

ており、その南北両端を堀切で切っているため、域内で一層独立性を強めている。上面には12m×20m程の細長い玉子形の平坦面が結晶片岩の基盤まで削平して作られている。

郭内の遺構としては、若干のピットがみられるものの、建物にはならず、SA7が確認されたのみである。SA7は郭1の南西部にあり、直径10cm前後の小ピットが4個並び、おおむね底のレベルをそろえている。ピットの間隔は1.95mから1.5mとバラツ



第59図 SA 7・8・9 実測図 (1:40)



第60図 SD 3 平面図 (1 : 200) ・断面図 (1 : 50)

くが、郭1の縁辺に柱の並びをそろえているため柵とした。

この他に、規模が小さくて傾斜が強いため、遺構とはしなかったが、郭の北東部の標高99mあたりには、小規模な尾根の付け根を利用してわずかに張り出した部分を作出したようにもみえる箇所があるが、防衛上の機能があったのかどうかはわからない。

②SD 3

郭1の北を限る小規模な堀切である。痩せ尾根のなだらかな稜線から郭1のピークへ向かって急斜面にかかるところへ作られる。堀切の規模としては幅約2.4m、長さ約8m、最も深いところでも約60cm程で、岩盤まで掘削しているが、集団的な軍事力を行使する戦闘に際して十分な防御となるものではないと思われる。なお、この堀切には、他の地区で見られるような土塁や土橋は付随していない。

③SD 4

郭1の南を限る堀切で、山神城跡全体の中で最も規模の大きいものである。郭1と郭2の間のレベル差は約2m程しかないが、SD2によって比高約3.7mまで高低差がつけられている。堀切の上端の最大

幅は約12mを測り、十分防御的な機能が考えられる。この堀切はまた、埋土の断面セクションからは最終的には1条のものであったことがわかるが、遺構の掘削後の底の形状からは少なくとも2条以上が逐次あるいは若干の時間差をおいて掘削されていたとみられる。

このSD4にも土塁、土橋は伴わず、SD3とともに郭1を区切るために作出されたものであると考えられる。

この堀切の西側底面付近からは施釉陶器の三足盤(75)が土師器の皿(31)を内側にして伏せた状態で発見された他、若干の土師器片が出土した。

④郭2

郭1の南にSD4をへだててSD5とのあいだにはさまれた全長33mほどの細長く若干湾曲した平坦地がある。標高97~98m程で、郭1と同様に地山下の岩盤まで削平してつくられている。郭1ほど独立性はないが、眺望がきき、また柵遺構もみられるので、ここでは郭として位置づけた。

郭2の中程の、東斜面にかかる部分からやはり岩盤まで掘削してSZ10, 11がとりつくが、通路施設

等の遺構の連続性はみられない。

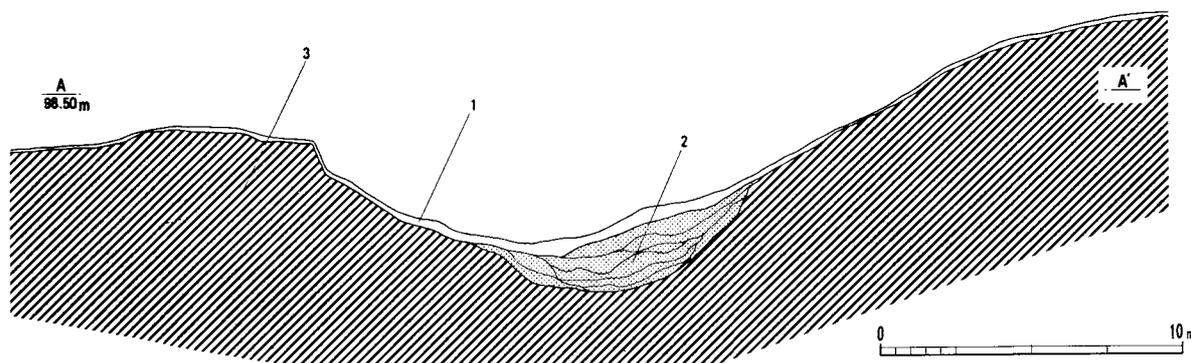
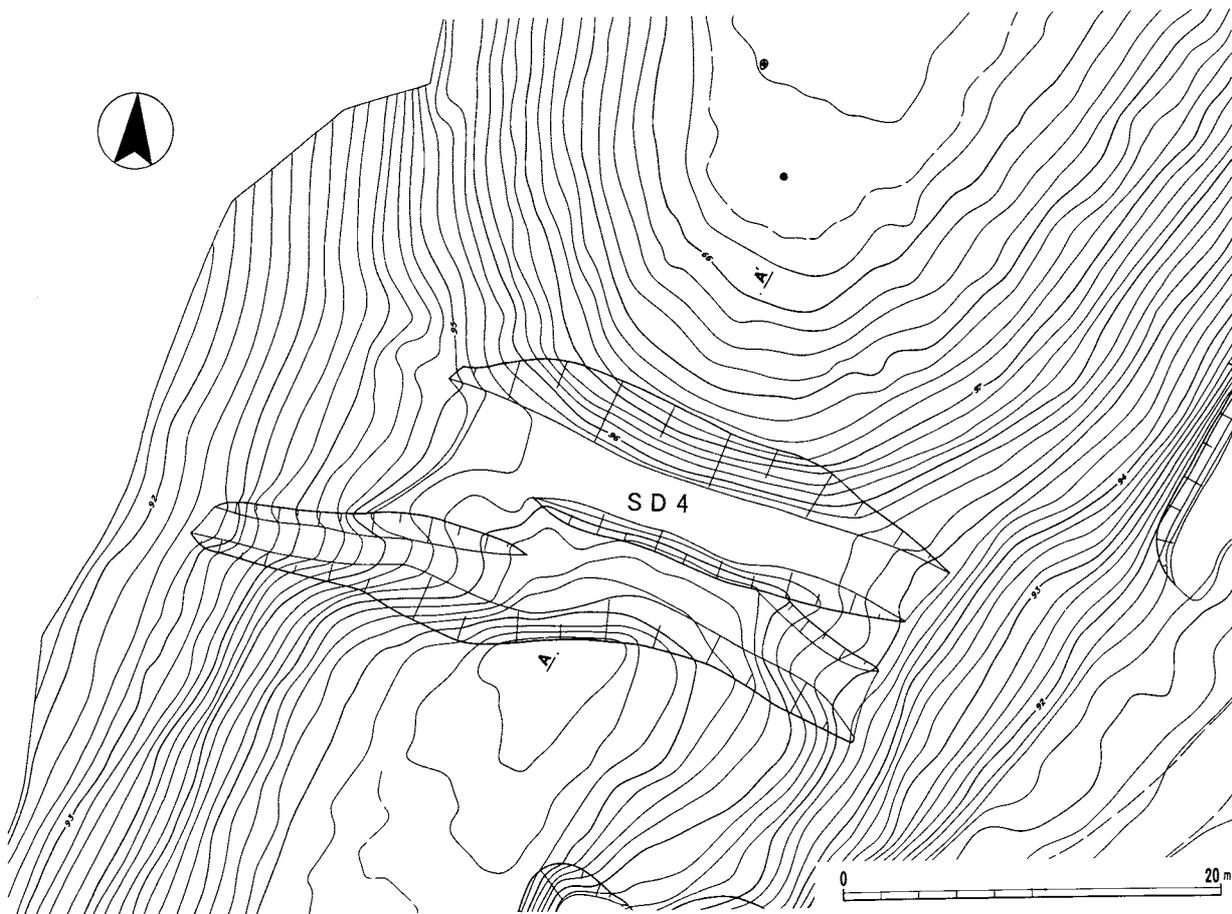
他に郭2にともなうものとしては、郭の上面で不規則なピット群は検出されたものの建物としては成立せず、南西の端でSA8が検出されたにとどまる。

SA8は直径15~20cmほどの小ピットが、郭の南西の縁辺に沿うかたちで並び、ピットの間隔は1.2m~1.6mである。ただし残存深は浅く、一番浅いもので約8cmと問題はあるものの、郭上で他に並行ある

いは交差するような方向のピット列もないため、後世の植栽などは異なると考えられる。

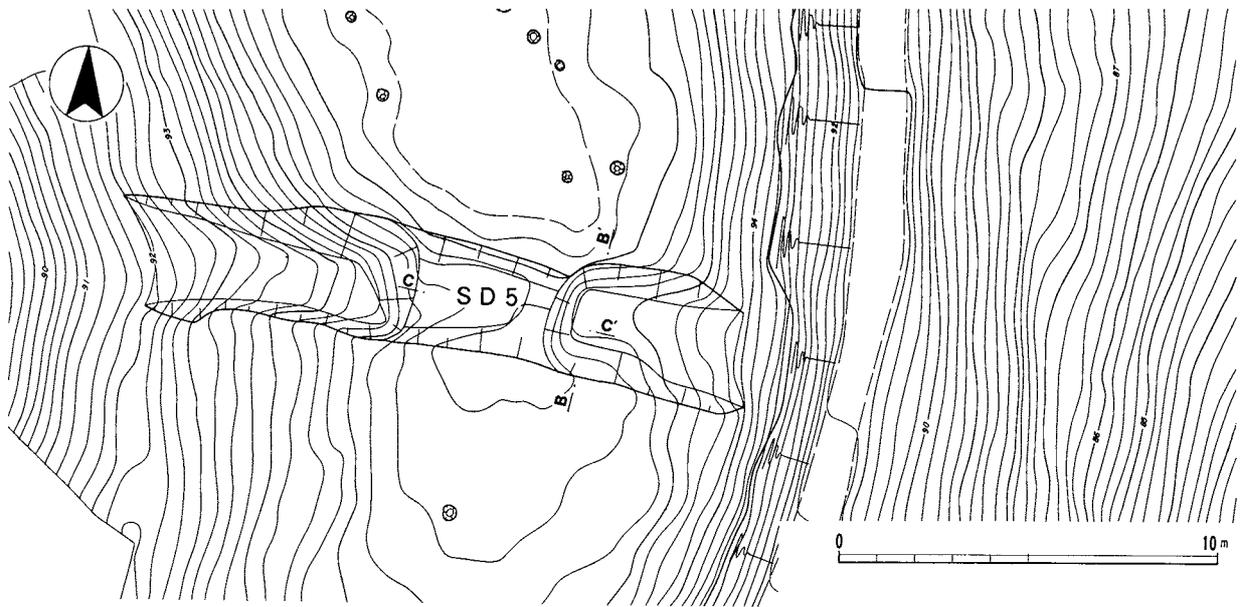
⑤SD5

郭2の南を限る堀切である。規模は大きくなく、幅約2m、長さ約20m、深さも最大で約90cmほどしかない。特に中央部は、掘削されずに残った地山や岩盤が土橋状にのこり、防御施設の堀切としては未完成のような印象を受ける。

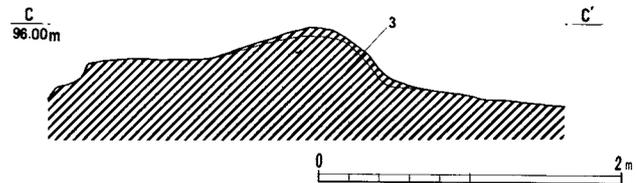
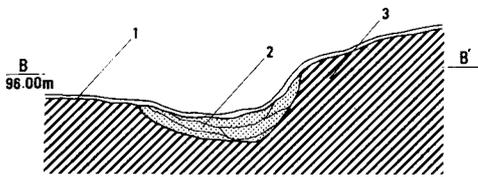


1. 表土
2. 遺構埋土
3. 地山(岩盤)

第61図 SD4 平面図(1:200)・断面図(1:80)



1. 表土 2. 遺構埋土 3. 地山(岩盤)



第62図 SD 5 平面図 (1 : 200)・断面図 (1 : 50)

⑥ SA 9

郭2の南には、SD 3をへだてて緩やかに南に傾斜する平坦な尾根部が続く。この上面は特に人工的な削平が認められなかったため郭遺構には含まれないが、柵遺構が検出された。SA 3は、直径10cm前後の小型のピットが直線的に並び、間隔は0.8m～1.2mとバラつきがある。他の2列の柵と同様、堀切で区画された尾根筋平坦地に方向をそろえて、その南西隅に位置している共通性がある。

⑦ SD 6

今回の調査対象地には入らないが、調査区の南側に接する、ベト谷地区の尾根の最も上手に位置する堀切である。

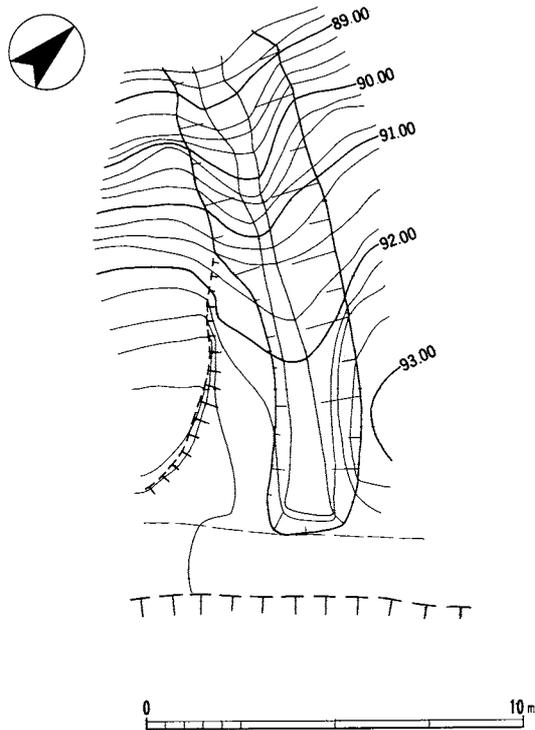
堀切の肩の一部は破壊されており、肩をくずした土で後世の土橋が作られている。現況で幅約3m、最大深1.2m、長さが東西で約15m確認できる。尾根筋づたいのやや幅がくびれた所を利用しており、尾根の東側は崖となって落ちてゆき、西側にだけ掘削されている。

⑧ SZ 10

郭1の平坦部の東肩から掘りこまれたテラス状の遺構である。郭1の上端からの比高は約1.5m、南北9.4m、幅が約1.1mの平坦部を作る。遺構面は岩盤が剥き出しになっており、ここからの遺物の出土はほとんどなかった。

⑨ SZ 11

SZ 10の下に続くテラス状に掘削された平坦部である。SZ 10からの比高が約2.1mで、岩盤の上層の赤褐色の礫混泥土上に作られている。この上面には焼土面SF 25があって、微細な炭化物も散布しており、周辺からは土師器茶釜(71)や鍋(48)の他、鉄^{かすがい}銚(76)などが出土している。この他、直径50～60cmほどのピットも3個見つかったが、性格はわからない。また、これらの上にも約2mの黄褐色土の堆積があり、それが薄い数層の層理をもっていることから、このSZ 11は、SF 25ののる面が上方からの土砂で埋没してからも若干の間は存続していたようである。ただし遺物についてはこの上下2層の間で時期的差土



第63図 S D 6 地形測量図 (1 : 200)

は確認できなかった。

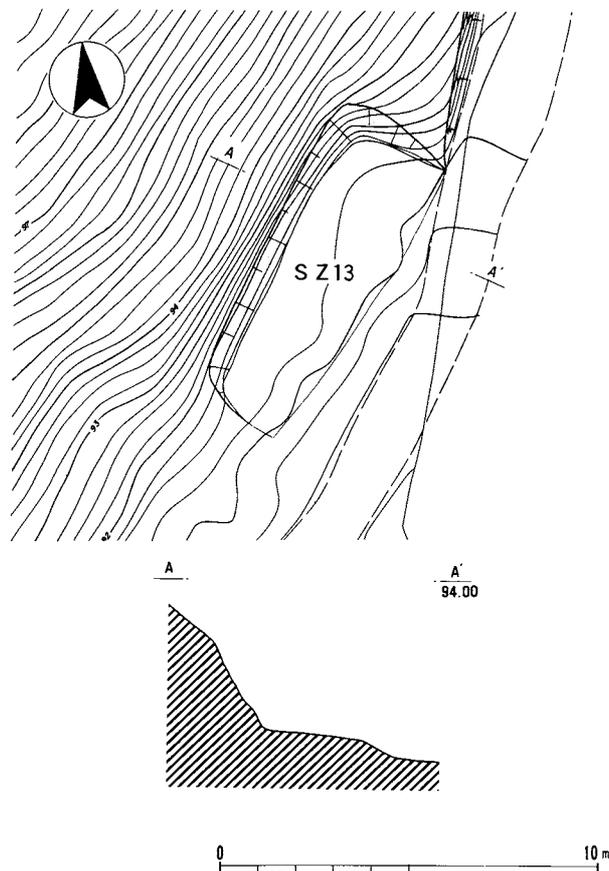
⑩ S Z 12

S Z 11のさらに下方のテラス状の平坦地で、西壁の付近は基盤まで掘削されている。現況からも斜面が「コ」の字状に掘り込まれていることが観察できた。現在まで使用されてきた林道と重複しており、後世の改変のためか、他のテラス状遺構に比べ遺構の肩などが丸く風化している。規模は、S Z 17に次いで2番目に大きく、南北で約18.4m、幅は推定で約4mほどになる。S Z 11の検出遺構面からの比高は約2.4mである。遺物は少なく土師器皿や鍋の小片が出土したのみである。

⑪ S Z 13

今回の調査地内で最も北寄りに位置するテラス状の平坦地で、郭1の東南斜面を掘削している。これも現在の林道と一部が重複している。埋土は褐色礫混土である。南北8.2m、幅は推定約3.9mほどである。基盤まで掘削しており、遺物は鉄片のみで他は全く出土しなかった。

⑫ S Z 14



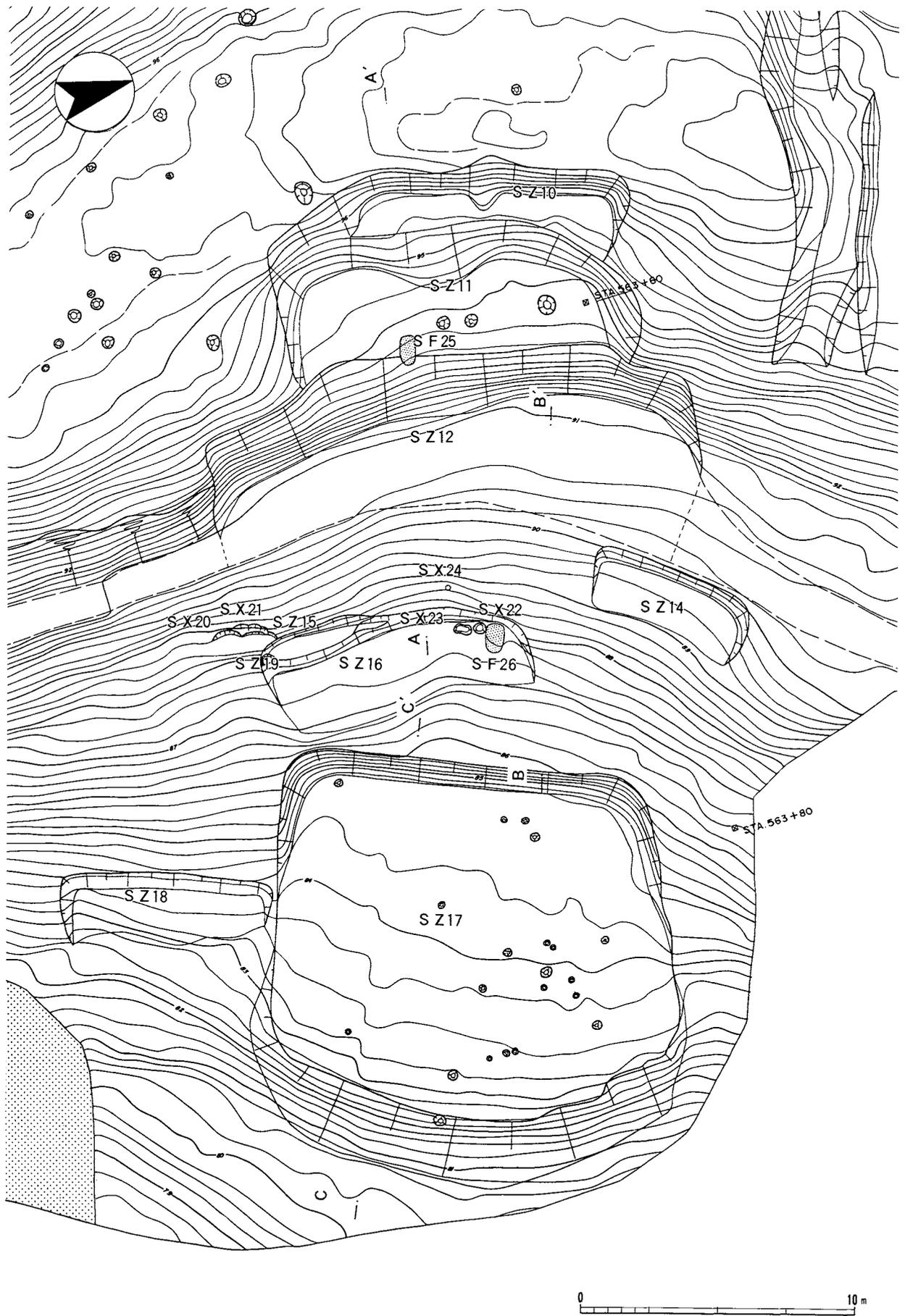
第64図 S Z 13平面図・断面図 (1 : 200)

現林道をへだててS Z 12の北東に位置するテラス状平坦地である。褐色礫混土の上面から赤褐色土層まで「コ」の字形に掘り込んでおり、この遺構の埋土だけが若干の腐食分を含んだ黄色～青灰色の砂質土であることから、遺物は出土しなかったものの時期的には大幅に下がるものであるとみられる。すぐ北側を林道が通り、こうした施設に関連するものかもしれない。規模は、南北5.8m、幅1.6mで、西側の掘り込みの肩からの比高は約0.9mを測る。

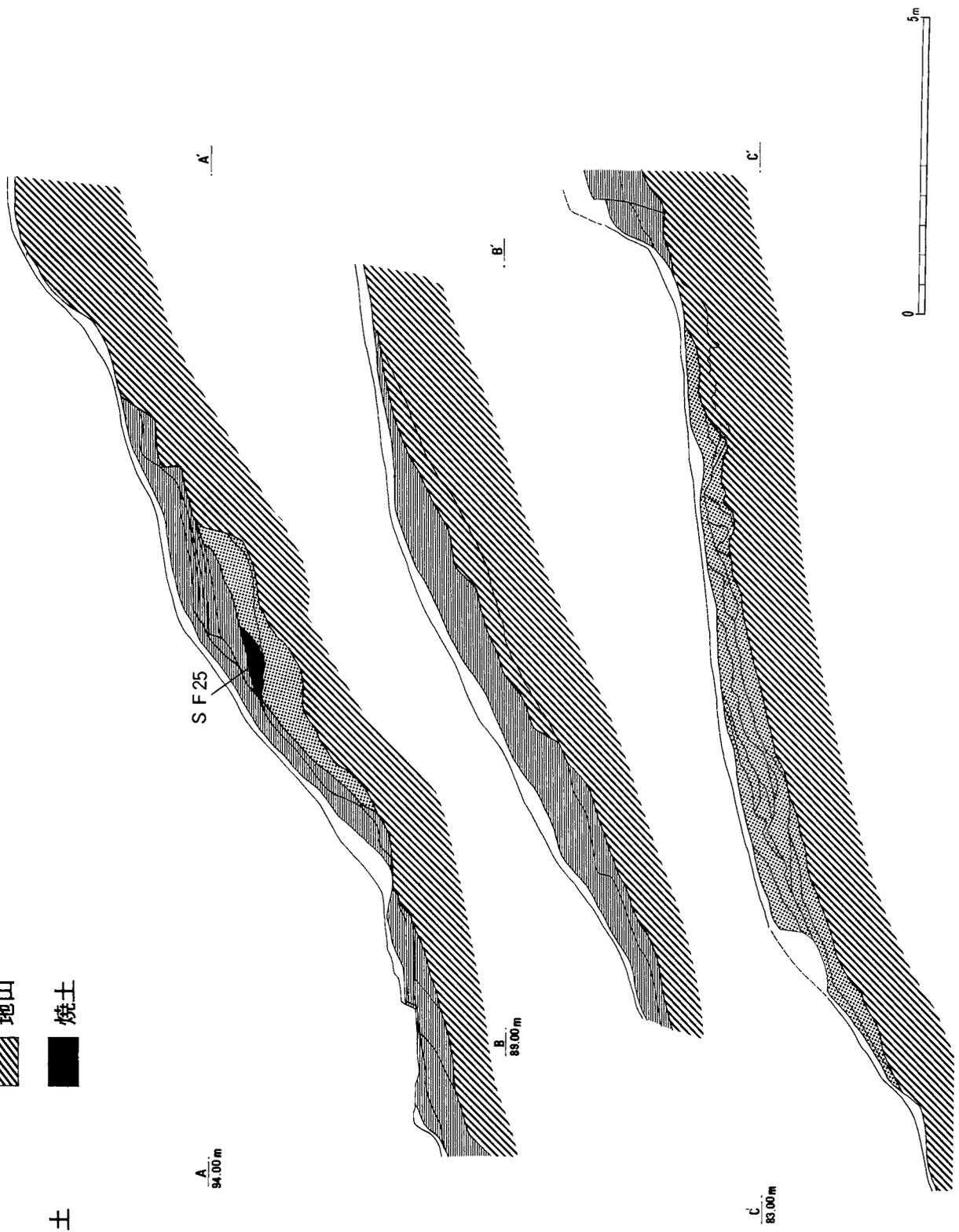
⑬ S Z 15、S Z 16

この2つのテラス状遺構は上下に重複しているやや不定形のものである。S Z 16がS Z 15を切って作られており、S Z 15の本来の規模はわからない。S Z 15は検出時では長さ南北4.6m、残存する幅は約80cmである。黄褐色の礫混土で埋まっていた。この南のコーナーの部分には中世墓と考えられるS X 19が東側の一部を切り取られた形で検出された。

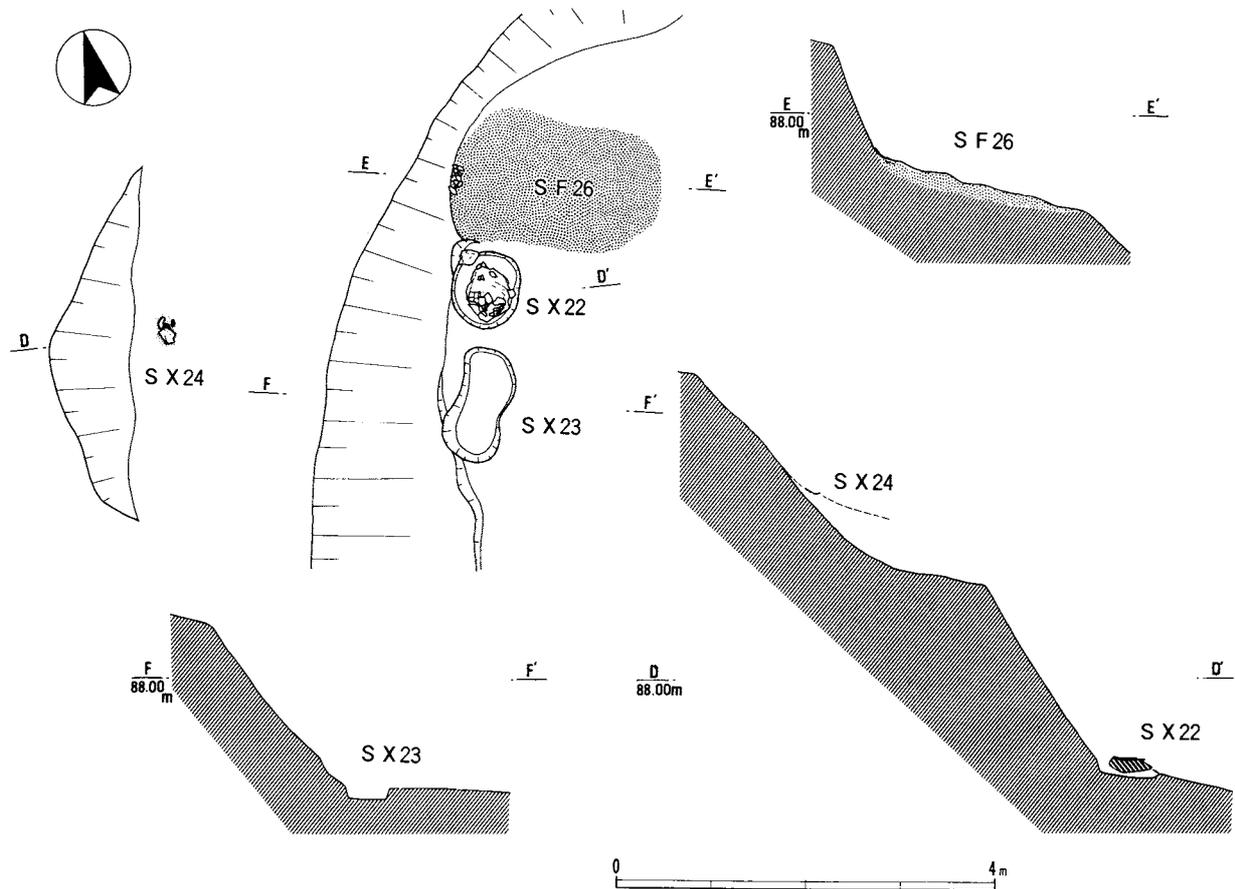
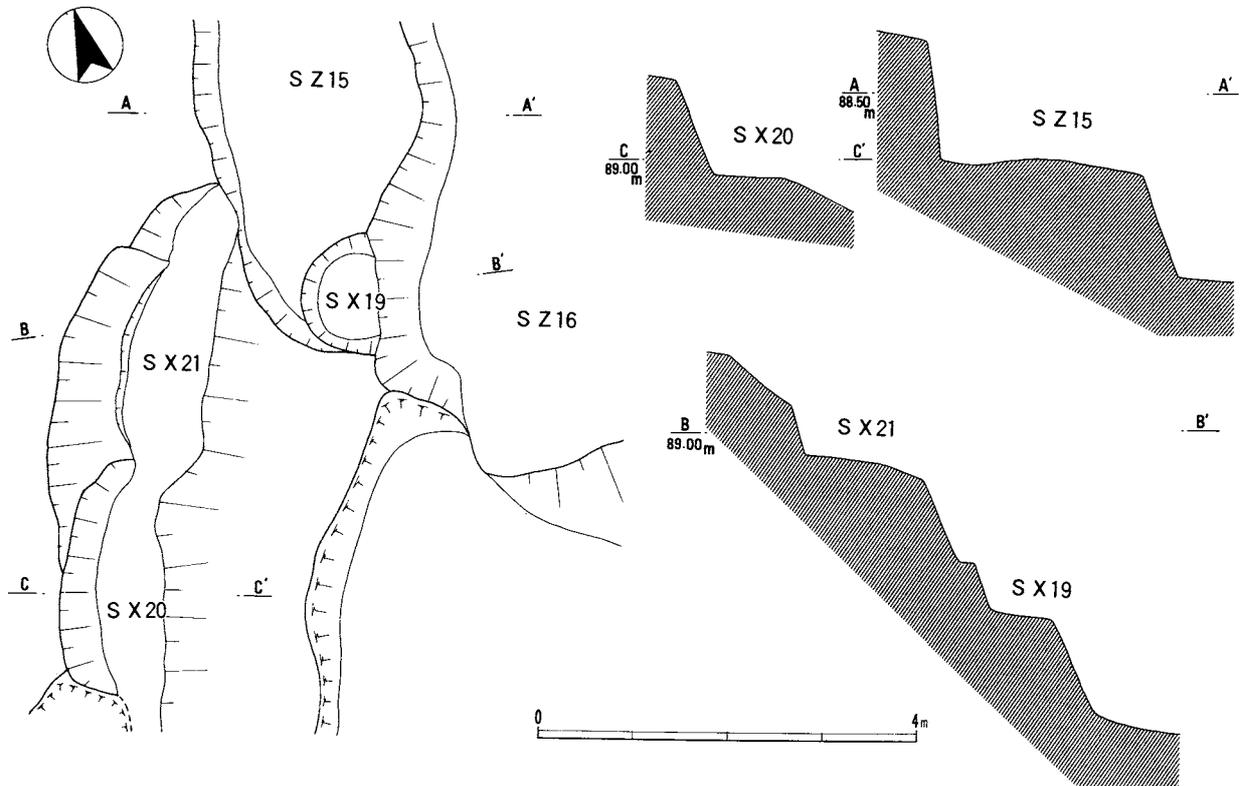
S Z 16は、S X 24の下の南北約10m、幅約3mのテラス状遺構である。西側壁の立ち上がりに対して東側や南北のラインは不明瞭である。この上面では



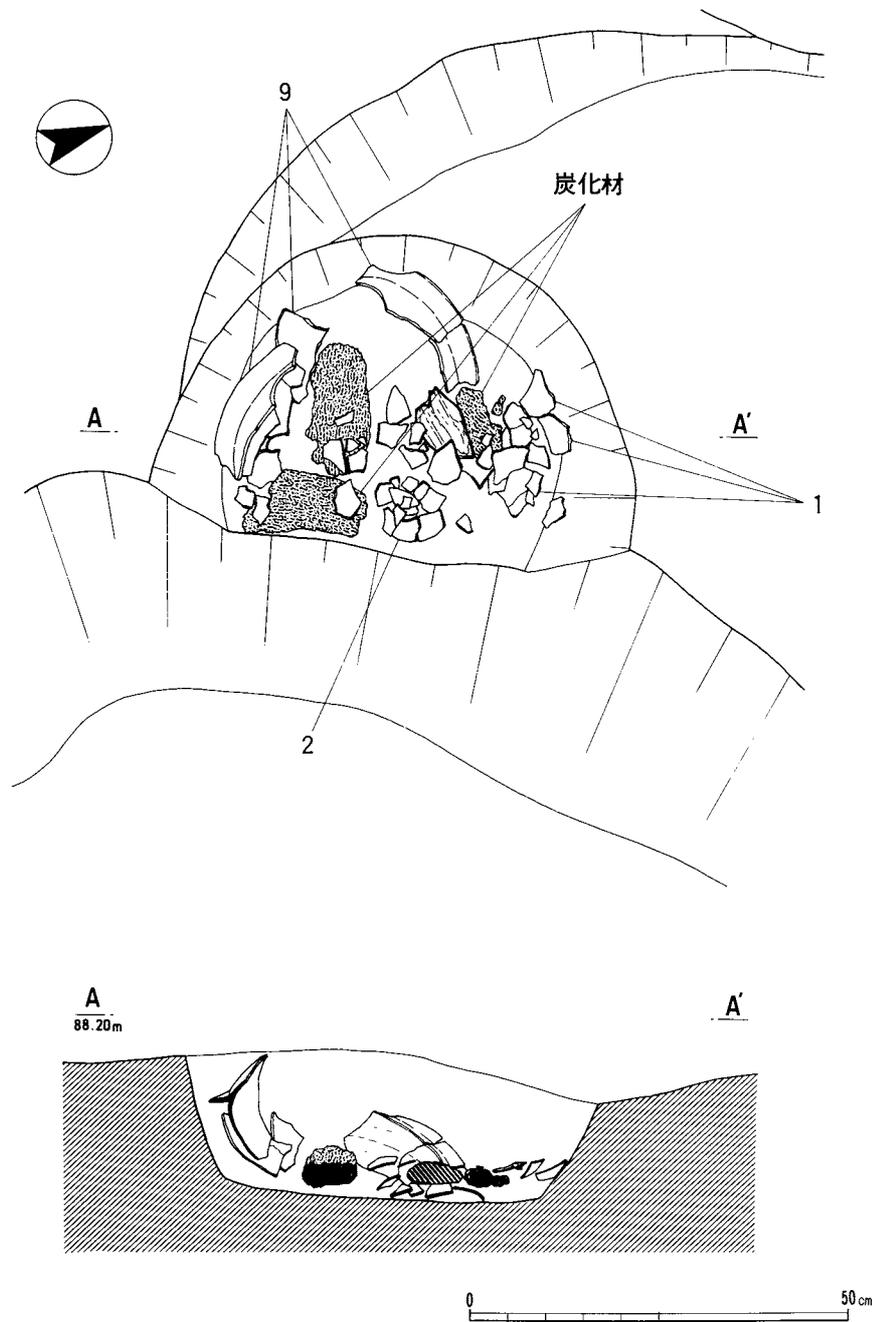
第65図 東斜面遺構群平面図 (1 : 200)



第66図 東斜面土層断面図 (1 : 100)



第67図 東斜面遺構群実測図 (1 : 80)



第68図 SX19実測図(1:10)

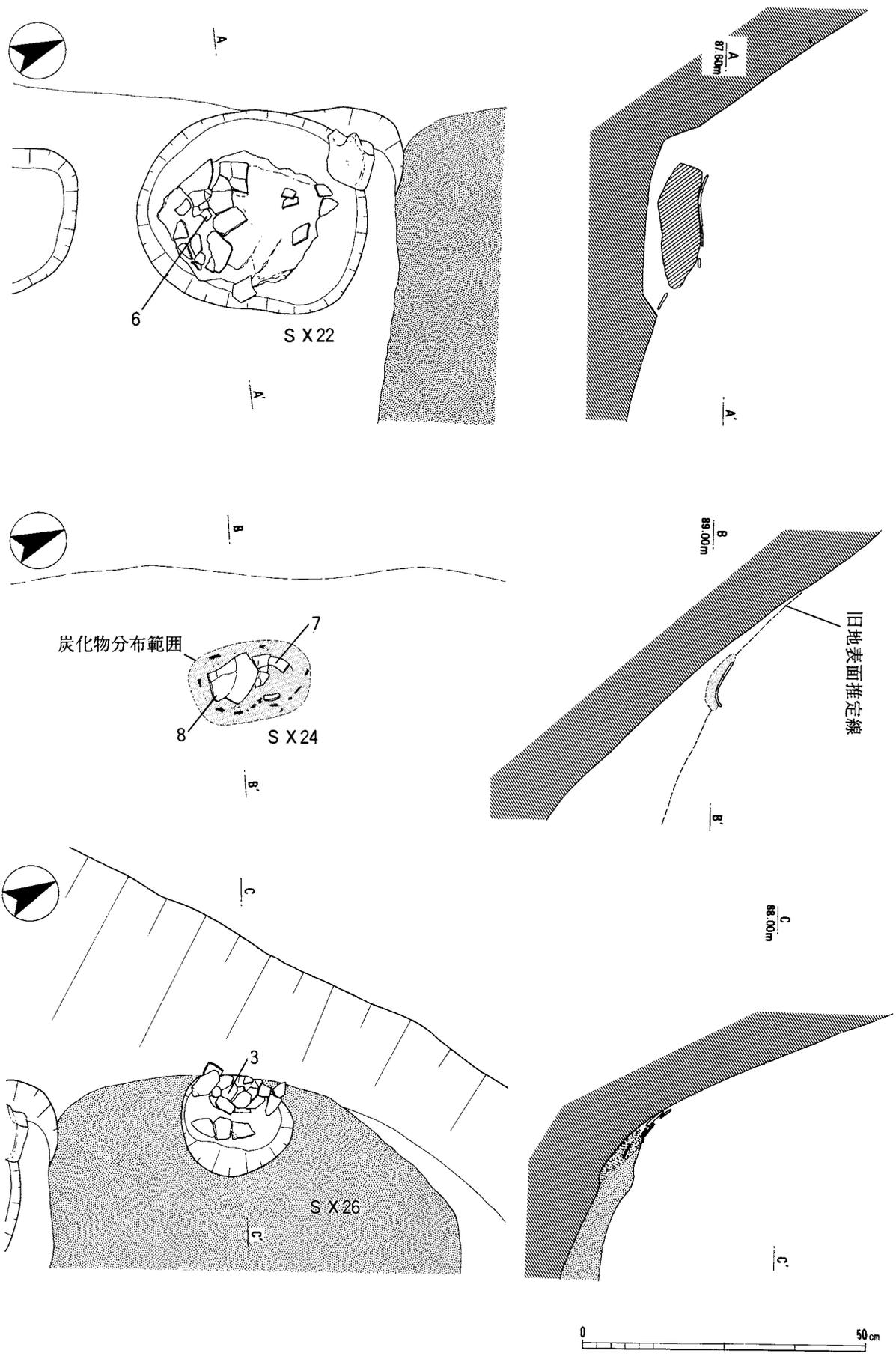
師器皿・鍋片が多量に出土した。遺構の北西部分にはSX22, SX23や強度の火力をうけたとみられるSF26がある。また、この1.5m程西にはSX24があって、一群のものとなるようである。SZ16の埋土は黄褐色の礫混土上層の赤褐色土で、SZ15との先後関係を示している。

⑭SZ17

本調査区内で最も規模の大きいテラス状遺構で、これも本調査に先立つ踏査の段階ですでに確認されていた。埋土は極めて薄く、表土直下から遺構面に

なる。これは、斜面を「コ」の字状に切り崩した赤褐色土や褐色土を東側にならして造成したものである。造成状況を観察するためのトレンチ断面では、斜め下方向に層理が走っている。この造成土の中からは平安時代後期の土師器杯(11)が出土しているが、西壁部分は現在まで地山が露出しており、比較的新しい時期の掘削によるものではないと思われる。

上面には小さなピットが多数みられるが、いずれも建物施設とはならない。また、遺構上面からの遺物の出土は乏しく、わずかな土器片がみられたのみ



第69图 S X 22 · 24, S F 26实测图 (1 : 10)

である。また地元の話では昭和の初めまで子供の遊び場であったということである。

⑮ S Z 18

S Z 17の南側のテラスである。南北7.2m、幅約1mほどを測る。遺物は全くみられず時期は不明だが、埋土が多量の礫を含む赤褐色土であることからみて、S Z 17より先行するものと思われる。

⑯ S X 19

S Z 15に付随するとみられる。東3分の1ほどがS Z 16に切り取られているが、直径約60cmの円形のピットであることがわかる。平らな底部に幅7cmの炭化材を交互に組み、上に土師器皿2枚を伏せ、さらに土師器茶釜をのせている。また結晶片岩片も一点敷かれていた。茶釜はよく使い込まれており、底には多量のススが附着している。前面の状況は切り落とされているため不明だが、遺物の出土状況から考えても、中世墓とみるのが妥当と考えられる。

⑰ S X 20

S Z 15のやや南西に位置する。赤褐色土層を切り込んでおり、検出状況は長さ約2m、奥行き約80cmの小さなテラス状で、上面には土師器鍋(4)が置いてあった。ピットも掘り込まれておらず、遺構の性格は明確ではないが、テラス状の遺構に土器が据え置かれる点でS X 19などとの共通点があり、同様に中世墓の一種あるいはその付属施設と考えてよいと思われる。

⑱ S X 21

S X 20の北に隣接する小テラス状の遺構である。長さ約2.8m、奥行き約90cmを測る。ここからは遺物が出土していないが、形状、規模はS X 20と類似しており、同様の性格が考えられよう。

⑲ S X 22

S Z 16に付属する。直径約40cmの浅いピットに長径28cm、厚さ約7cmの平らな石を据え、その上に口径21.8cmの比較的大型の土師器皿が上向きに置かれていた。また、周囲には微細な炭化物の散布が見られた。このような遺構は類例を知らないが、テラス状遺構と一体のものとして捉えられることや、周囲のS X 19などとの状況とあわせると、S X 22もまた中世墓あるいはそれに付属する施設であると考えられる。

⑳ S X 23

これもS Z 16上にある。長径約60cm、短径約28cm、深さ約8cmの瓢箪形のピットで、ここからの遺物の出土はなかった。性格付けは難しいが、S X 22に隣接することから、同様あるいはS X 22に付帯する遺構と考えられる。

S Z 16ではこれらの他にも土師器鍋片が多量に出土しており、炭化物の散布や不明瞭な焼土面も見られた。同様の遺構がかつては重複していた可能性がある。

㉑ S X 24

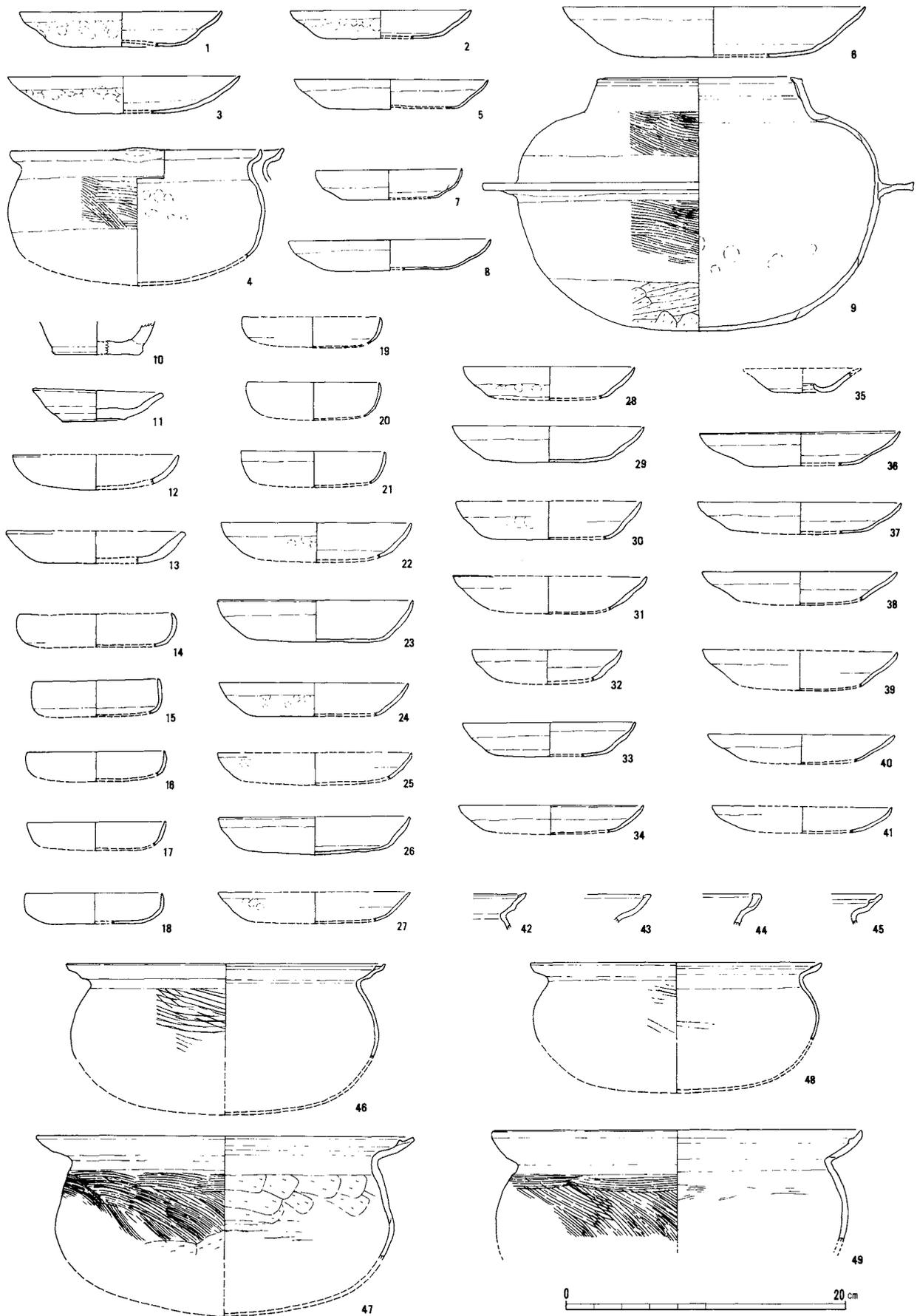
S Z 16の上方約40cmほどのところにある。斜面の赤褐色土の上にゆるやかに傾斜する平坦地を作り、そこに草本類や小さな木の炭化物を20cm×15cmの範囲に敷き、その上に土師器皿(7、8)を上向きにのせる。S X 24のレベルでは明確な遺構面は確認できず、S Z 16の検出面からは浮いたかたちになっているため、S Z 15やS Z 16の遺構群よりは新しいことになるが、遺物からはこれらの明確な時期差は見出せなかった。調査の際にこの周辺一帯の斜面では、破片の形で多くの土師器皿・鍋片や炭化物が出土している。S X 24と同様に明確な遺構面をもたず、上から堆積してくる土砂に流されたり壊されたりしながら、何回にもわたって同様の遺構が営まれていた可能性がある。S X 24は他と違い明確な遺構の形がなく、単純に炭化物を敷いた上に皿を静置したのみという姿が想起され、中世墓というより、それに関わる拝礼の痕跡とも考えられる。

㉒ S F 25

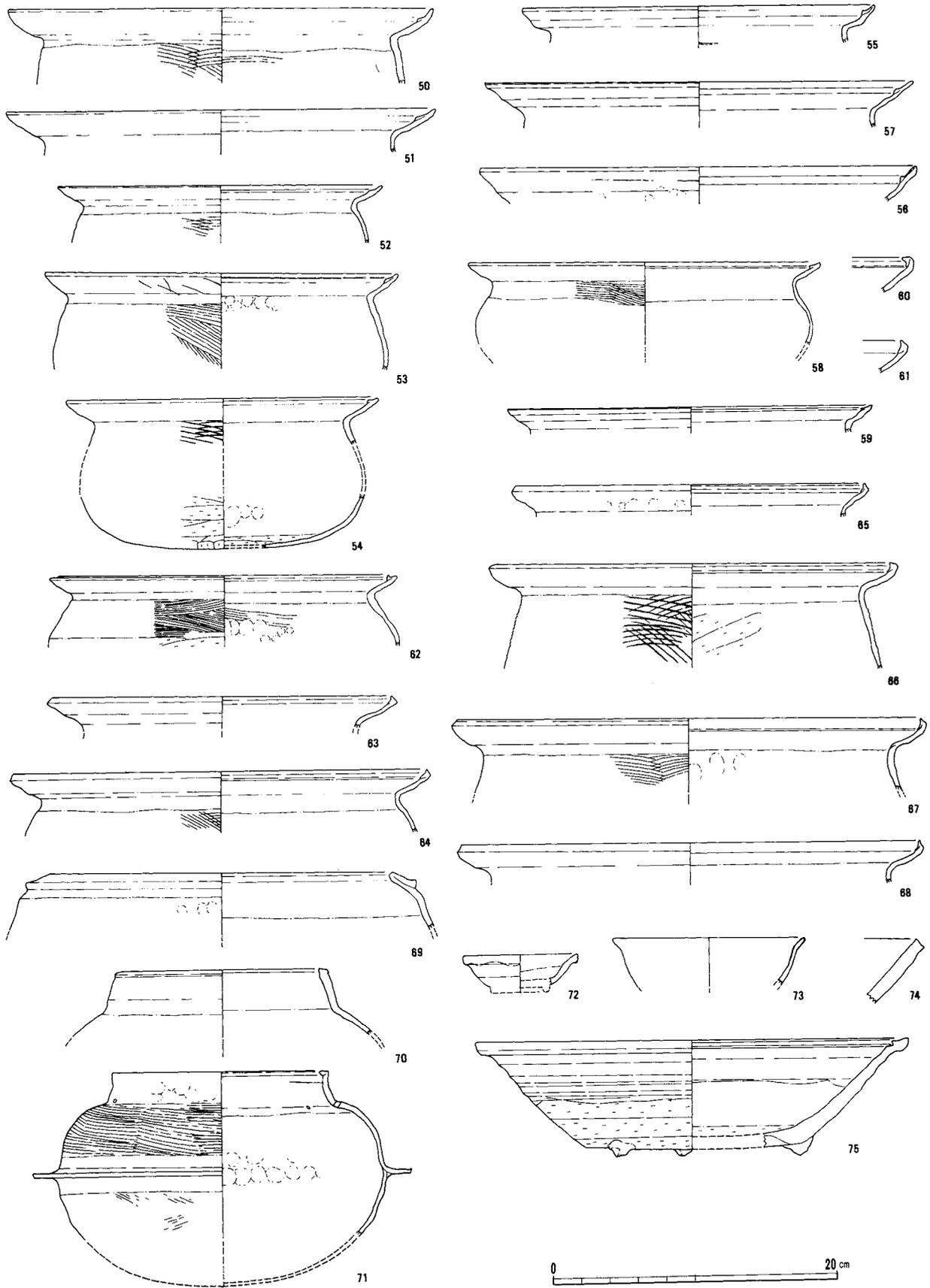
S Z 11上の焼土面である。東西で約1mのもので断面の観察では、炭化物の薄い層が2面みられ、少なくともそれ以上の焼成があったようである。焼土中には土師器の小片が含まれていた。

㉓ S F 26

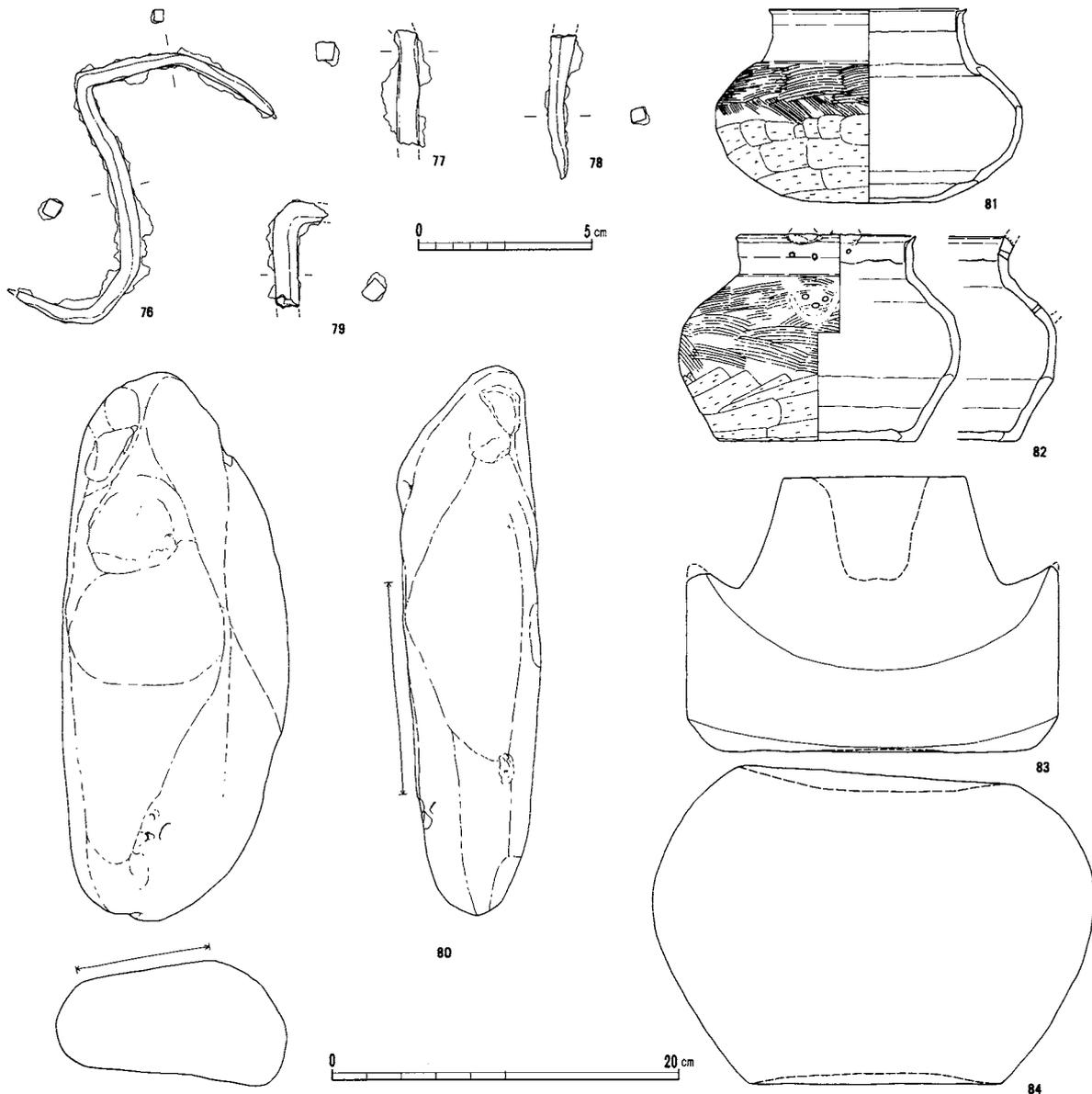
S Z 16上の焼土面である。長径1.1m、短径64cmの空豆状の形をしている。焼土の厚さは約8cmである。焼土の範囲は広く、強度の焼成を受けたようだが焼成面は単一である。S Z 16との壁際西隅には直径約20cmのくぼみがあり、そこに土師器皿(3)が置かれていた。これも中世墓に関連した遺構と見るができるだろう。



第70図 ベト谷地区 出土遺物実測図（1：4）



第71図 ベト谷地区 出土遺物実測図 (1 : 4)



第72図 ベト谷地区および山神城跡周辺出土遺物実測図 (76~79=1:2, 80~84=1:4)

3. 遺物

①弥生時代の遺物

調査区東斜面の崩落土の中から弥生土器の壺底部片(10)が出土している。底面には平織りの布目圧痕が残る。弥生時代後期のものとみられる。

②平安時代の遺物

S Z 17の造成土の中から平安時代のロクロ土師器の杯(11)が出土している。底部に静止糸切り痕がある。焼成はあまりよくなく表面の風化が著しい。(13)も土師器の杯で、ともに多気郡明和町の齋宮跡の土

師器編年で後Ⅱ期に相当し11世紀前半のものと思われる。

③室町時代遺構の遺物

本調査区から整理用の箱にして12箱分が出土している。遺構出土のもの以外は細片が多い。土器は土師器類と瀬戸・常滑産の陶器類や磁器があり、その他釘・鏝^{かすがい}といった鉄製品がある。埋土が山土のために、遺物の残存状態はよくなく、土師器類の大半は表面が磨耗していた。これら遺物はそのほとんどが東側斜面のテラス状遺構群とその周辺からの出土

第14表 ベト谷地区出土遺物観察表

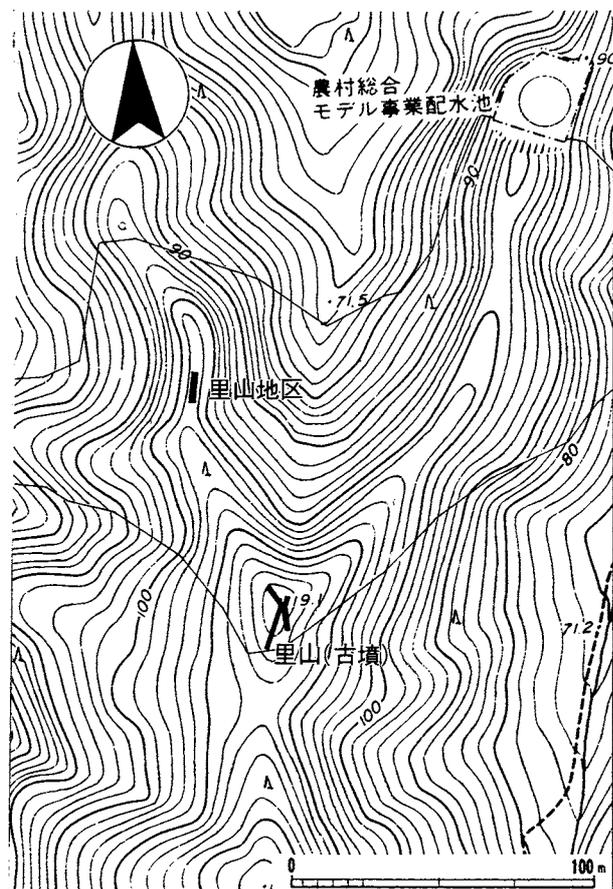
No.	出土地点	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	M28 SX19	土師器 皿	(口)14.4cm (高)2.5cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	ややあまい	外：灰白 2.5Y 8/2 内： "	40%		11-0006
2	M28 SX19	土師器 皿	(口)13.0cm (高)2.0cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	50%		11-0007
3	L26 SF26	土師器 皿	(口)16.6cm (高)2.7cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外：灰白 2.5Y 8/2 内： "	口径の 1/4		11-0015
4	M29 SX20	土師器 鍋	(口)18.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 8本/1.7cmのハケ	密	良好	外：浅黄橙 10YR 8/4 内： "	10%	片口	11-0043
5	L26 SX22	土師器 皿	(口)14.0cm (高)2.1cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	精良	ややあまい	外：浅黄 2.5 Y 8/3 内： "	口径の 1/4		11-0014
6	L26 SX22	土師器 皿	(口)21.8cm (高)3.6cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	1mm以下の砂粒含む、 やや粗	良好	外：灰白 10YR 8/2 内：淡黄 2.5Y 8/3	口径の 1/4		11-0013
7	L26 SX24	土師器 皿	(口)10.4cm (高)2.1cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒含むが良 好。	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	口径の 1/4		11-0016
8	L26 SX24	土師器 皿	(口)14.6cm (高)2.1cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ	密	良好	外：灰白 2.5Y 8/2 内： "	口径の 1/4		11-0012
9	M28 SX19	土師器 茶釜	(口)15.0cm (高)18.1cm	口縁、胴内面ヨコナデ、底 部ケズリ、6本/1.6cmのハ ケ	径1mm程度の砂粒多 く含む、若干の金雲 母含む	良好	外：浅黄橙 10YR 8/4 内： "	ほぼ 完存	体部下半に多量のス ス付着	11-0005
10	調査区外東斜 面	弥生土器	(底)5.6cm	内外面ナデ	径1mm以下の砂粒含 み、小石含	ややあまい	外：淡黄 2.5Y 8/4 内： "	底径の 1/4	底部布目圧痕	11-0001
11	P27 東西ト レンチ最下層	ロクロ土師 器 皿	(口)9.5cm (高)2.2cm	口縁ヨコナデ、胴、底部ロ クロナデ	密	あまい	外：淡黄 2.5Y 8/4 内： "	70%	全面磨耗	11-0024
12	P25 表土	土師器 皿	(口)約12.0cm (高) —	調整不明	径1mm以下の砂粒多 く含む	ややあまい	外：淡黄 2.5Y 8/4 内： "	口径の 1/4		11-0022
13	R27 Aトレ ンチ	土師器 皿	(口)約14.0cm (高)2.3cm	口縁ヨコナデ、胴、底部ナ デ	径1mm以下の砂粒多 く含む	ややあまい	外：淡黄橙 10YR 8/4 内： "	口径の 1/4		11-0030
14	F21 表土	土師器 皿	(口)10.8cm (高)2.2cm	口縁ヨコナデ、胴、底部ナ デ	密	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/3 内： "	口径の 1/4		11-0084
15	M27 黄褐色粘質土	土師器 皿	(口)9.0cm (高)2.6cm	口縁ヨコナデ、胴、底部ナ デ	緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	口径の 1/4		11-0017
16	F21 堀切2地山直 上	土師器 皿	(口)10.0cm (高)2.2cm	ヨコナデ、ナデ	緻密	良好	外：灰白 10YR 8/3 内： "	口径の 1/4		11-0033
17	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)約10cm (高) —	調整不明	やや粗	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/3 内： "	口径の 1/4		11-0026
18	調査区外東斜 面	土師器 皿	(口)9.8cm (高)2.2cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	25%		11-0027
19	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)9.6cm (高)2.2cm	口縁ヨコナデ、胴、底部ナ デ	微細な砂粒多く含む	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	口径の 1/4		11-0085
20	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)9.6cm (高)2.7cm	口縁ヨコナデ、胴、底部ナ デ	径1mm程度の砂粒多 く含む、やや粗	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	口径の 1/4		11-0010
21	F21 堀切2地山直 上	土師器 皿	(口)10.4cm (高) —	口縁ヨコナデ、胴、底部ナ デ	緻密	良好	外：橙 5YR 6/8 内： "	口径の 1/4		11-0034
22	K24 黄褐色粘質土	土師器 皿	(口)13.6cm (高)2.8cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/4 内： "	口径の 1/4		11-0019
23	I24 黄褐色粘質土	土師器 皿	(口)約14.0cm (高)3.0cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒多く含む が密	ややあまい	外：明黄褐 10HR 7/6 内： "	40%		11-0021
24	F21 地山直上	土師器 皿	(口)13.6cm (高)2.3cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	小石を含むが緻密	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/3 内： "	口径の 1/4		11-0032

No.	出土地点	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
25	L18 地山直上	土師器 皿	(口)約15.0cm (高) 2.2cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ	緻密	良好	外:にぶい黄橙 10YR 6/4 内: "	口径の 1/4		11-0036
26	M28 黄褐色粘質土	土師器 皿	(口)13.8cm (高) 2.7cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ	径1mm程度の砂粒を 含むが密	良好	外:淡黄 2.5Y 8/3 内: "	30%		11-0020
27	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)13.8cm (高) 2.3cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外:灰白 2.5Y 8/2 内: "	口径の 1/4		11-0009
28	N18 地山直上	土師器 皿	(口)12.4cm (高) 2.4cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒含むが緻 密	良好	外:にぶい黄橙 10YR 7/4 内: "	口径の 1/4		11-0035
29	L26 土層観察用畦	土師器 皿	(口)13.8cm (高) 2.5cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒を多量に 含む	良好	外:灰白 5Y 8/2 内: "	口径の 1/2		11-0042
30	L26 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)13.4cm (高) 2.8cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外:淡黄 2.5Y 8/3 内: "	口径の 1/4		11-0011
31	L26 黄褐色粘質土	土師器 皿	(口)14.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、底部ナデ	径1mm以下の砂粒含 む	良好	外:淡黄 2.5Y 8/3 内: "	口径の 1/4		11-0023
32	F21 堀切2地山直 上	土師器 皿	(口)10.8cm (高) 2.3cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒含むが緻 密	良好	外:灰白 2.5Y 8/2 内: "	口径の 1/4		11-0028
33	M26 黄褐色粘質土	土師器 皿	(口)12.4cm (高) 2.4cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外:淡黄橙 10YR 8/3 内: "	口径の 1/4	表面やや風化する	11-0018
34	K12 堀切1地山直 上	土師器 皿	(口)13.4cm (高) 2.1cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ	径1mm以下の砂粒含 むが緻密	良好	外:淡黄 2.5Y 8/4 内: "	口径の 1/4		11-0029
35	L26 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口) — (高) —	口縁ヨコナデ、底部ナデ	径1mm以下の砂粒含 む	ややあまい	外:灰白 7.5Y 8/1 内: "	約40%	底部に焼成前の穿孔 あり	11-0038
36	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)14.4cm (高) 2.4cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外:灰白 7.5Y 8/2 内: "	口径の 1/4		11-0025
37	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)14.6cm (高) 2.3cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	径1mm以下の微細な 砂粒含む	良好	外:灰白 10YR 8/2 内: "	口径の 1/4		11-0040
38	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)14.0cm (高) 2.4cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	外:にぶい黄橙 10YR 3/7 内: "	口径の 1/4		11-0041
39	N25 粘質赤褐色土	土師器 皿	(口)14.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	緻密	良好	外:灰白 2.5Y 8/2 内: "	口径の 1/4		11-0008
40	N26 赤褐色砂質土	土師器 皿	(口) 13.4cm (高)約2.0cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒含むが緻 密	良好	外:灰白 2.5Y 8/2 内: "	口径の 1/4		11-0039
41	M26 試掘溝	土師器 皿	(口)約13.0cm (高)約 2.0cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ、 ユビオサエ	微細な砂粒含むが緻 密	良好	外:浅黄橙 10YR 8/3 内: "	口径の 1/4		11-0031
42	G30 地山直上	土師器 鍋	(口) — (高) —	口縁ヨコナデ、6本/cmの タテハケ	径1mmの砂粒含むが 緻密	良好	外:にぶい黄橙 10YR 7/4 内: "	—		11-0069
43	G32 地山直上	土師器 鍋	(口) — (高) —	内外面ヨコナデ	緻密	良好	外:橙 7.5YR 6/6 内: "	—	表面は二次焼成のた めもろい	11-0062
44	O28 黄褐色砂質土	土師器 鍋	(口) — (高) —	内外面ヨコナデ	緻密	良好	外:淡黄 2.5Y 8/3 内: "	—		11-0066
45	I30 地山直上	土師器 鍋	(口) — (高) —	内外面ヨコナデ	径1mm以下の砂粒含 む	良好	外:淡黄 2.5 Y8/3 内: "	—		11-0083
46	G29 地山直上	土師器 鍋	(口)約23.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 4本/cmのハケ	緻密	良好	外:黄橙 10YR 6/4 内:橙 7.5YR 6/6	口径の 1/2	外面スス付着、二次 焼成による赤変	11-0058
47	L25 粘質赤褐色土	土師器 鍋	(口)27.2cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 8本/1.5cmのハケ	径1mmの砂粒含むが 緻密	良好	外:浅黄橙 10YR 8/4 内: "	口径の 1/4	胴外部下半に多量の スス付着	11-0047
48	I26 明黄褐礫混土	土師器 鍋	(口)約21.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 5本/cmのハケ	緻密	良好	外:にぶい黄橙 10YR 7/3 内: "	口径の 1/4	内外面ハケのちナデ、 外面スス付着	11-0050

No	出土地点	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
49	L26 黄褐色粘質土	土師器 鍋	(口)約36.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 6本/1.4cmのハケ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	内外：淡黄 2.5Y 8/3～に ぶい黄橙 10YR 7/3	口径の 1/2	外面に多量のスス付 着	11-0045
50	M26 赤褐色粘質土	土師器 鍋	(口)約30.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 6本/1.5cmのハケ	緻密	良好	外：明黄褐 10YR 7/6 内：にぶい黄橙 10YR 7/4	口径の 約1/6	外面スス付着	11-0052
51	R29 表土	土師器 鍋	(口)30.4cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/4 内： "	口径の 約1/6	外面スス付着	11-0044
52	M27 赤褐色粘質土	土師器 鍋	(口)約23.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 4本/cmのハケ	緻密	ややあまい	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	口径の 1/6	外面スス付着	11-0053
53	M27 明黄褐礫混土	土師器 鍋	(口)約25.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 4本/1.5cmのハケ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	内外：浅黄橙 10YR 8/4～ 橙 7.5YR 7/6	口径の 1/4	二次焼成の痕あり、 頸部にへらあて痕	11-0056
54	J36 赤褐色礫混土	土師器 鍋	(口)約22.0cm (高)約10.0cm	口縁ヨコナデ、3本/cmの ハケ、底部ケズリ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	外：にぶい黄褐 10YR 5/4 内： "	約20%	外面に多量のスス付 着	11-0055
55	H30 地山直上	土師器 鍋	(口)18.6cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 断面：灰白 5Y 7/2	口径の 1/6弱		11-0070
56	L27 明黄褐礫混土	土師器 鍋	(口)30.4cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	外：暗褐 10YR 3/4 内：浅黄橙 10YR 8/4	口径の 1/6	外面に多量のスス付 着	11-0059
57	G32 地山直上	土師器 鍋	(口)31.0cm (高) —	口縁ヨコナデ	緻密	良好	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内： "	口径の 1/6	外面の一部にスス付 着	11-0063
58	L28 黄褐色粘質土	土師器 鍋	(口)約25.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 7本/cmのハケ	緻密	良好	外：浅黄橙 10YR 8/3 内： "	口径の 1/4	外面ハケのちナデ	11-0060
59	N29 黄褐色粘質土	土師器 鍋	(口)約26.0cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm以下の砂粒含 むが緻密	良好	外：浅黄橙 10YR 8/4 内： "	口径の 1/6	外面二次焼成のため 赤変	11-0064
60	K34 地山直上	土師器 鍋	(口) — (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm程度の長石粒 含むが緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/4 内： "	—	断面に黒色層	11-0067
61	I26 明黄褐礫混土	土師器 鍋	(口) — (高) —	口縁ヨコナデ	径1～2mmの砂粒含 む	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/4 内： "	—	外面スス付着	11-0051
62	K24 黄褐色粘質土	土師器 鍋	(口)24.6cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 7本/1.2cmのハケ	径1mm程度の長石粒 含むが緻密	良好	外：橙 2.5Y 6/6 内：にぶい橙 2.5YR 7/4	口径の 1/6	断面に黒色層	11-0048
63	O30 表土	土師器 鍋	(口)約24.0cm (高) —	口縁ヨコナデ	緻密	良好	外：浅黄橙 10YR 8/4 内： "	口径の 1/6	二次焼成の痕あり、 断面に黒色層	11-0061
64	L26 土層観察用珪	土師器 鍋	(口)29.4cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 8本/1.8cmのハケ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	外：淡黄 2.5Y 8/3 内： "	口径の 1/4	外面スス付着	11-0072
65	H29 地山直上	土師器 鍋	(口)約25.0cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm程度の砂粒含 むが緻密	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/4 内： "	口径の 1/6	外面の一部にスス付 着	11-0065
66	N30 地山直 上	土師器 鍋	(口)28.4cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ケズリ、 5本/2cmのハケ	径1mm以下の砂粒含 むが緻密	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/4 内： "	口径の 1/4	外面に多量のスス付 着	11-0049
67	F28, F28 地山直上	土師器 鍋	(口)約33.0cm (高) —	口縁ヨコナデ、内面ナデ、 8本/1.7cmのハケ	径1mm以下の長石粒 含むが緻密	良好	外：浅黄橙 10YR 8/4 内： "	口径の 1/4	外面スス付着	11-0068
68	G30 地山直上	土師器 鍋	(口)32.4cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm以下の砂粒含 む	良好	外：淡黄 2.5YR 8/3 内：浅黄橙 10YR 8/3	口径の 1/6	外面スス付着	11-0086
69	P30 表土	土師器 茶釜	(口)24.4cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm以下の砂粒多 量に含みやや粗	良好	外：明黄褐 10YR 7/6 内： "	口径の 1/6		11-0054
70	N29 表土	土師器 茶釜	(口)約15.0cm (高) —	口縁ヨコナデ	径1mm以下の砂粒多 量に含みやや粗	ややあまい	外：淡黄 2.5Y 8/4 内： "	口径の 1/4	表面の磨耗すすむ	11-0057
71	I26 赤褐色礫混土	土師器 茶釜	(口)15.4cm (高) —	口縁、頸部ヨコナデ、内面 ナデ、ユビオサエ、7本/1. 7cmのハケ	緻密	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/4 内： "	40%以上 残存	外面下半部に多量の スス付着	11-0046
72	M28 表土	施釉陶器 皿	(口)8.2cm (高) —	口縁ヨコナデ、体部ナデ、 鉛釉ツケガケ	緻密	良好	生地：灰白 5Y 8/2 釉：黄褐 2.5Y 5/6	口径の 1/6		11-0002

No.	出土地点	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
73	K31 堀切3地山直上	陶器 碗	(口)13.6cm (高) —	口縁ヨコナデ	緻密	良好	生地：灰白 10Y 8/1 釉：淡緑青	口径の1/6	表面に二次焼成による斑痕	11-0003
74	I 25 赤褐色礫混土	無釉陶器 捏鉢	(口) — (高) —	口縁ヨコナデ、体部ナデ	径1mm程度の砂粒含む	良好	外：灰褐 5YR 6/2 内：にぶい赤褐 2.5YR 5/3	—		11-0082
75	F21 堀切2地山直上	施釉陶器 三足盤	(口)31.0cm (高) 8.1cm	口縁ヨコナデ、体部ロコロナデ、底部内外面ケズリ、灰釉ツケガケ	微細な砂粒含むが緻密	良好	生地：浅黄橙 10YR 8/4 釉：淡緑灰	50%弱 残存		11-0004
81	蚊野出土 上村うめ氏藏	土師器 茶釜	(口)11.4cm (高)11.1cm	口縁ヨコナデ、内面ナデ、外面10本/2.5cmのハケとケズリ	径1mm程度の砂粒含む	良好	外：にぶい黄橙 10YR 7/2 内： "	95%残 存		11-0080
82	山神出土 中北利読氏藏	土師器 土瓶	(口)10.2cm (高)11.9cm	口縁ヨコナデ、底内面ナデ、外面7本/1.5cmのハケとケズリ	緻密	良好	外：浅黄橙 10YR 8/3 内： "	95%残 存	表面にススが多量に 付着	11-0081

※ここであらわした色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の
新版標準土色帖（1988年版）を基準にした。



第73図 里山地区, 里山(古墳)位置図 (1:2,500)

で、それ以外では各遺構周辺やSD4からわずかに見られたのみである。

(1) 土師器

出土土器の九割をしめる。器種には皿・鍋・茶釜がある。皿は口縁部が内弯し、口径が10～12cmほどになる傾向のもの(a類:14～21)と、単純に外側に開く傾向のもの(b類:1～3, 5～8, 22～41)までである。さらにa類のなかでも口縁が直立気味あるいは若干内側に倒れるようなものから、口縁が外側に倒れ口縁部と底部の間に段がつくものがある。また、b類の中でも底部から口縁部にいたる間が比較的素直に立ち上がっていくものと、屈曲する段をもつものがある。今回の調査の出土資料のみではa類とb類には若干乾差があるものの、これらの差異は時期的な変化を表しているものとみられる。SX24出土の(7)はa、b2類の過渡期を示しているといえるだろう。

皿b類の中にはSX22から出土した(6)のような口径21.6cmにおよぶような大型のものも含まれるが、大半は口径12～15cmのものである。(6)などは特殊なものであるといえよう。また(35)は、口縁は欠損してサイズは不明だが小型の部類で、底部中央が内側に向かって焼成前穿孔されている。発掘資料としては類例を知らないが、現在でも民間信仰で六地藏に串に刺した土器皿を供える例が残っており、こうした風習との類似性が想起される。

鍋はすべて口縁部を内側に折り返す所謂「南伊勢系」のもので、伊藤裕偉氏の時期区分による第3段階か

ら第4段階にかけてのものがみられる。口縁部の形状からやはり皿類と同様に時期的ひろがりがあるが、15世紀代から16世紀前葉の室町時代後半に比定される物が中心となる。

茶釜は4点以上出土している。中世墓SX19から鋳部の径で30cmを超える大型のものもみられる(9)。口縁形態からほぼ直立あるいはやや内傾する口縁部を端部を内側に肥厚するもの(9, 70, 71)と、外側に折り返すもの(69)がある。こうした鍋類や茶釜といった煮沸形態の土師器類はほぼ例外なく使用痕をもち、多量のススが付着したり、二次焼成による変色がみられる。

(2) 陶磁器

陶器では、瀬戸産の盤(75)と小皿(73)、常滑産の捏鉢(74)と甕がある。(75)は瀬戸で折縁深皿と呼ばれる灰釉のかかった三足盤で、土師器皿をともないSD4から伏せた状態で出土したものである。周囲には炭化物の散布も見られ、遺構としては捉えられなかったが、東斜面の遺構群と同様、中世墓あるいはそれにかかわる祭祀跡であったと考えられる。瀬戸の藤澤良祐氏の古瀬戸後期様式の編年で15世紀前葉の後Ⅲ期に位置づけられるものであろう。県内の中世城郭からの出土例では度会郡南勢町の田曾城跡の発掘調査で、堀の中の土坑状の落ち込みから8点以上出土している例が知られている。

磁器は椀が1点出土している(73)。淡緑青色をしており中国明代のものとみられる。二次的な焼成をうけ、器表面が変色している。(大川勝宏)

12. 明^{みょうじんまえ}神前地区の調査

調査区はベト谷地区と里山地区の尾根に挟まれた幅30mほどの谷底平野である。現況は休耕田で、谷の脇の水路には豊富な流水がある。台風19号の来襲の際には周辺は完全に水没した。十字トレンチを設

定し、60cm～70cmほど掘削したところで均質な強粘質の還元土層から湧水があったため、遺構はないものと判断した。遺物は近世陶磁器の小片がわずかにみられたのみだった。(大川勝宏)

13. 里山^{さとやま}地区の調査

今回の調査対象地としたなかでは最も東の尾根になる。里山(古墳)は1987年の分布調査の際には標高約70mの古墳状の高まりとしてみられたが、平成

元年2月13日～14日にかけて十字トレンチを設定した試掘調査の結果、表土下の黄褐色土から下で岩盤となり、また遺物の出土もまったくなく、自然地形

であると判明した。

また、ここから北西に約90mの尾根筋上のせまくなった地点(標高103m)は、そのくびれが堀切遺構の埋没したものである可能性があったため、幅1m、

さ7mのトレンチ調査区を設定して試掘を行ったが、表土直下から地山の黄褐色土になり、遺物も出土しなかった。
(大川勝宏)

14. 結 語

今回の調査では2つの郭、それにとまなう3列の柵、7条の堀切、9つのテラス状遺構、6基の中世墓あるいはそれに関連したとみられる遺構や土塁・土橋が検出された。遺跡全体のなかでの分布は、ベト谷地区にほとんどが集中し、他の地区では堀切とその前面に盛られた土塁、後世の造作である土橋がみられたのみで、ベト谷地区の尾根なかならず郭1周辺が山神城の最も重要な部分であったといえ、それは、山神城の最も東の尾根にあったことになる。「山神西本城」とも呼ばれていた字城山付近のピークには確かに頂上部にまとまった平坦地があるものの、現地踏査で確認したかぎりでは、郭1にみられるようなそれを郭として明確に際立たせるための堀切による切断がみられない。その点でも広範な山神城のなかでベト谷地区は特別な部分であったと見てよいだろう。一般に城郭の規模やその機能を考えるには軍学的な知識も含めた縄張りや総構えの検討が必要になるが、山神城跡は遺構の分布する尾根の範囲だけで東西約1.3km、南北で約600mにもおよぶ中世城郭としては極めて広大なものである。にもかかわらず遺構の密度は低く土木工事も大きいものではない。その意味では単に城郭的な遺構部分のみをみた場合、総構えのラインは引くことができない。むしろ開析の進んだ尾根尾根や道路も含めた村々それ自体も非常時には防御ラインとして機能させていたと考えるのが現実に則しているものと思われる。しかし、それぞれの遺構がいかに防御的機能をもっていたかを考えると、疑問をもたざるを得ない。おく地区から西老谷地区までの4本の尾根の堀切は土塁の高さを復元しても比高2m～3mである。それが一つの尾根に1～3ヶ所作られているのみで防御的には脆弱なものである。また、土塁は堀や堀切の後方に作られるのが通例であるのに対して、山神城跡ではすべて前方になっていた。

ベト谷地区にしても、最も郭として明確な郭1も柵以外の施設は見られず、恒常的に機能していたとは考えにくい。SD4については改修して幅を広げたと見られる痕跡がある反面、SD5は工事途中で放棄したような感がある。ベト谷地区のテラス状遺構は、少なくともSZ10・11・15・16・18は出土遺物や埋土の断面観察から城郭とほぼ同時期のものとみられるが、SZ14・17は埋土が新しく、明確に時期決定できないが比較的新しいものと言える。SZ12・13・18は時期決定については明確な根拠がない。

このテラス状遺構に伴う中世墓は、SX19などはその検出状況から墓と容易に判断されるが、他には小さなピットに土師器皿や鍋・茶釜を埋納するもの(SX22・23)や、斜面に小さなテラスをつくりそこに土師器を置くもの(SX20・21・24)がある。後者は従来県内では例がないもので、多くは炭化物の散布を伴っていた。SX22・23・24の形態や、SD4の灰釉三足盤を土師器皿のうえに伏せる例などは中世墓そのものなのかそれに関わる拝礼跡なのかは現在決定できないが、このただ「置いただけ」の痕跡を今後いかに位置づけしていくかという問題点を示したものであるだろう。これまで県内の中世城郭の発掘によって検出された中世墓にくらべても供献される遺物はほとんど使用の痕の著しい土師器類で、これもこの城の性格を示していると言えるだろう。

これらの遺構の時期については、中世墓から出土している土師器類が15世紀後半から16世紀前半ぐらいと考えられ、またSD4の遺構面から出土した三足盤(75)が、古瀬戸後期様式の編年から15世紀前葉のものであることから、ベト谷地区に限って言えば郭・堀切は15世紀代の早い時期につくられ、以後東斜面のテラス状遺構やそれにとまなう中世墓が16世紀以降まで営まれていったものとみられる。

こうした城郭の造営の契機や、その主体はどのよ

うな階層だろうか。これについては北畠国司家の神三郡への勢力拡大との関係があげられる。先述したように山神をはじめとする近郷の集落は鳥名子舞を奉納するなど、神三郡の中でも極めて神宮との関係が深く、それに対して北畠氏は、永享3年(1431)11月26日の外宮一祢宜度会貞秀書状に「神三郡就入名闕所事、国方既乱入之處」とあるように、15世紀前半には玉城町域への進入を開始しており、寛正6年(1464)には山田三方とも軍事的な衝突をおこした際にも山神周辺の諸郷は山田三方に合力しており、北畠氏が田丸(玉丸)城に在陣した際には山神、積良、原などの神領をすでに横領していたことが知られている。近世の地誌類(勢陽雜記など)の天文2年(1533)北畠晴具の軍勢が山岡一党の池山伊賀守がたてこもる山上(山神)城を攻め滅ぼし、山神集落も焼き払われたという記述(山上城合戦)は、城主など誇張や創作があるものの田丸側との緊張関係はよく表しているといえよう。山神城跡は、北畠氏に対向する山神周辺諸郷の軍事的拠り所であったとみるのが妥当であり、田丸城をはじめとする北畠氏と関連する周辺の城郭とは城の造作、立地などといった点で差が現れる理由がわかる。

全国的に見てもこのような単純かつ広範囲に展開する中世城郭の例はほとんど知られていない。構造の面では大阪府阪南町の井山城跡、兵庫県村岡町の福西砦跡、広島県千代田町の小奴可城跡、広島県広島市の国重城跡など、戦国期の発達した城郭のような複雑な構造をもたない山城が発掘調査されてきている。また南北朝期における楠木正成で知られる赤坂城塞群、千早城塞群などにみられる悪党の山岳戦法に使われた粗塞も構造的に類似している。

近年こうした単純な構造の中世城郭の一部に対して、強大な権力基盤に拠らない小規模な城郭としての性格が問題となってきている。所謂「村の城」の問題であり、小規模城郭の中から村の当知行や自衛断、あるいは非日常的な抵抗、自衛の拠り所としての位置づけが試みられてきている。また、軍事施設としてだけでなく、村の墳墓や寺院がともなったり、民衆の避難場所や儀式用のハレの場など村で維持管理されるものとして位置づけする意見もある。

こうした視点をもって山神城跡をみると、山神や

積良などの神宮への帰属という点で共通した惣郷的結合体の北畠国司家に対する軍事的結集のシンボルであり、なおかつ村の墓地など宗教的な場としても機能し、実際の衝突にあたっては「山」に逃げ込むことに重点を置いたアジール性の非常に強いものではなかったかと思われる。生活痕がなく建物もみられないのは、常時は使用せず、非常時にのみここへ逃亡し、落ち着くと村へ戻るといった場であったためではなかろうか。今回この件に関しては十分な検討はできなかった。周辺の諸郷の消長など文献史学的な追証や、集落のパターンなど歴史地理学的な検討も必要となろう。別稿に期したい。

(大川勝宏)

参考文献

- | | | |
|--------------------|---|------|
| 三重県教育委員会編 | 『三重の中世城館』 | 1976 |
| 福西砦跡調査委員会、村岡町教育委員会 | 『福西砦跡発掘調査現地説明会資料』 | 1978 |
| 平凡社 | 『三重県の地名』 | 1983 |
| 高見宜雄、稲垣良二 | 『度会郡南勢町田曾城跡発掘調査報告』 | 1986 |
| 三重県教育委員会 | | |
| 財団法人大阪府文化財協会 | 『第2節 井山城跡』 | |
| | 『井山城跡-発掘調査報告書-』 | 1988 |
| 角田 誠 | 『近畿地方に於ける南北朝期の山城』 | |
| | 『中世城郭研究論集』 新人物往来社 | 1990 |
| 山上雅弘 | 『戦国時代の山城-西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について』 | |
| | 『中世城郭研究論集』 新人物往来社 | 1990 |
| 伊藤裕偉 | 『中世南伊勢系の土師器に関する一試論』 | |
| | 『Mie history』 vol. 1 | 1990 |
| 小坂宜広 他 | 『VI 度会郡玉城町 蚊山遺跡』 | |
| | 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報VI』 | |
| | 三重県埋蔵文化財センター | 1990 |
| 伊藤裕偉 | 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報第3分冊-楠ノ木遺跡-』 | |
| | 三重県埋蔵文化財センター | 1991 |
| 城郭談話会、中世城郭研究会 | | |
| | 『第8回全国城郭研究者セミナー資料』 | 1991 |
| 市村高男 | 『最近の中世城郭研究の動向-文献史学の立場から-』 | |
| 笹本正治 | 『山小屋について』 | |
| 藤木久志 | 『村の城-村の城・荘園の政所・領域の城-』 | |
| 横山勝栄 | 『新潟県北部の小規模山城について』 | |
| 藤澤良祐 | 『瀬戸古窯址群II-古瀬戸後期様式の編年-』 | |
| | 『瀬戸市歴史民族資料館 研究紀要X』 | 1991 |

なお文献史料および文献史学の成果については三重県埋蔵文化財センター小林秀氏のご教示を得た。

神宮関連の当地域に関わる文献史料には『氏経御引付』(『日本塩業大系』2巻 古代・中世史料篇)、『氏経神事記』(『神宮年中行事大成』前篇 大神宮叢書 臨川書店)などがある。

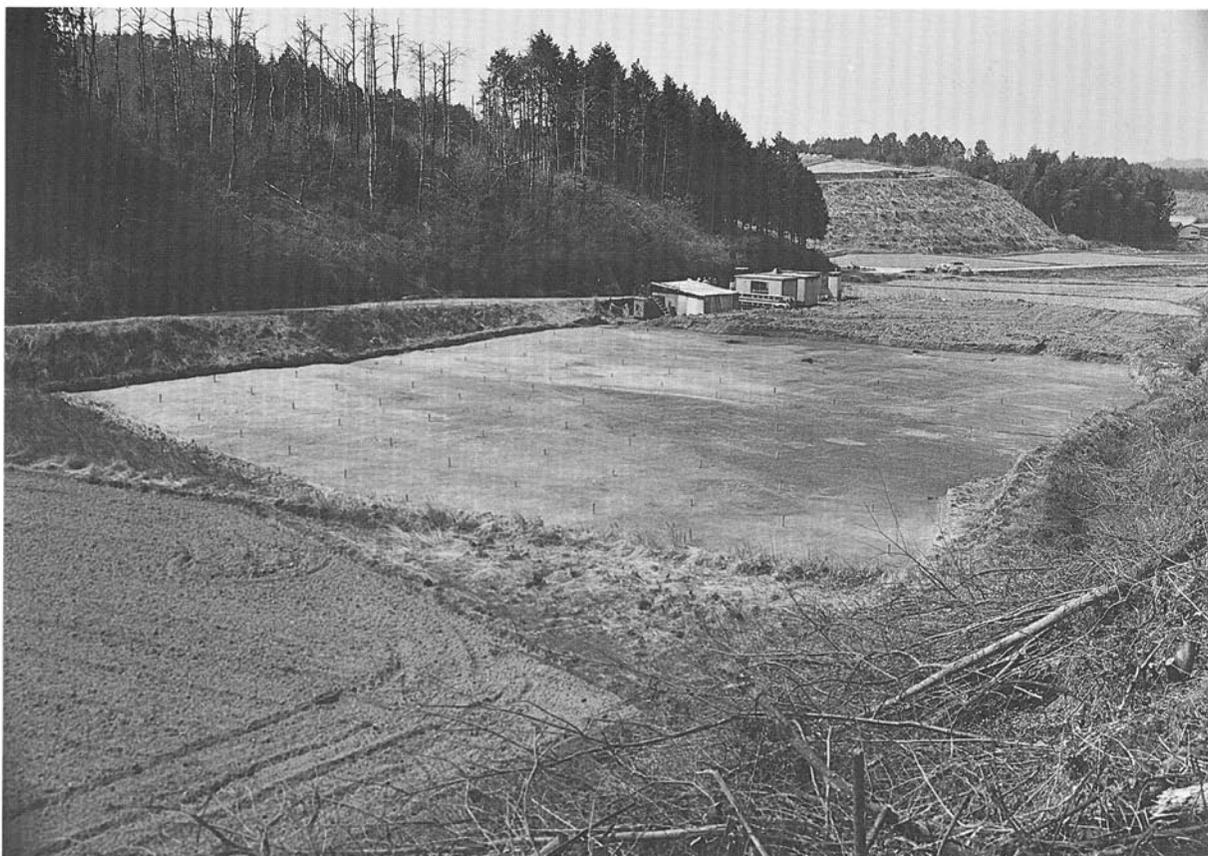


山神城跡全景（東上空から）



山神城跡全景（北上空から）

P L 2



浦ノ内地区調査区全景（南から）



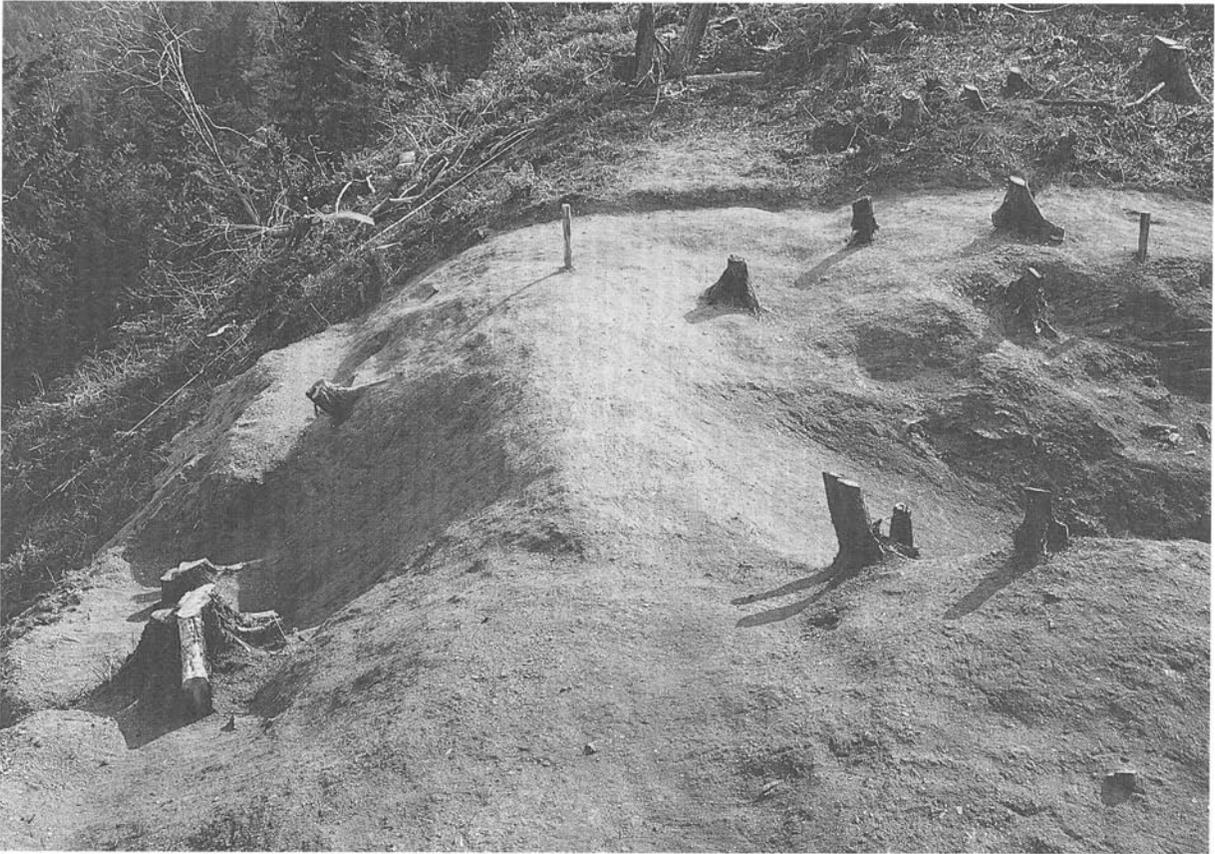
おく地区調査区全景（北から）



相戸地区調査区全景（南から）



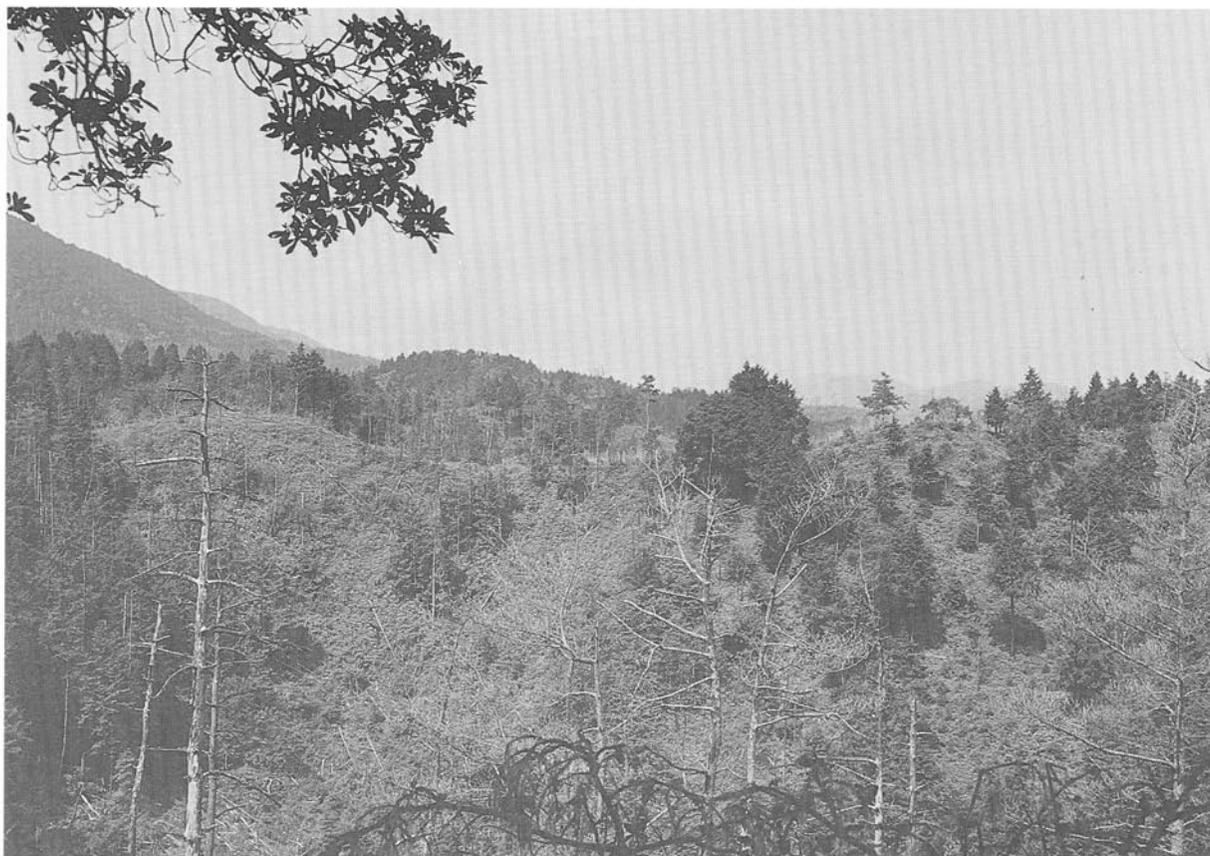
相戸地区 堀切・土橋（北東から）



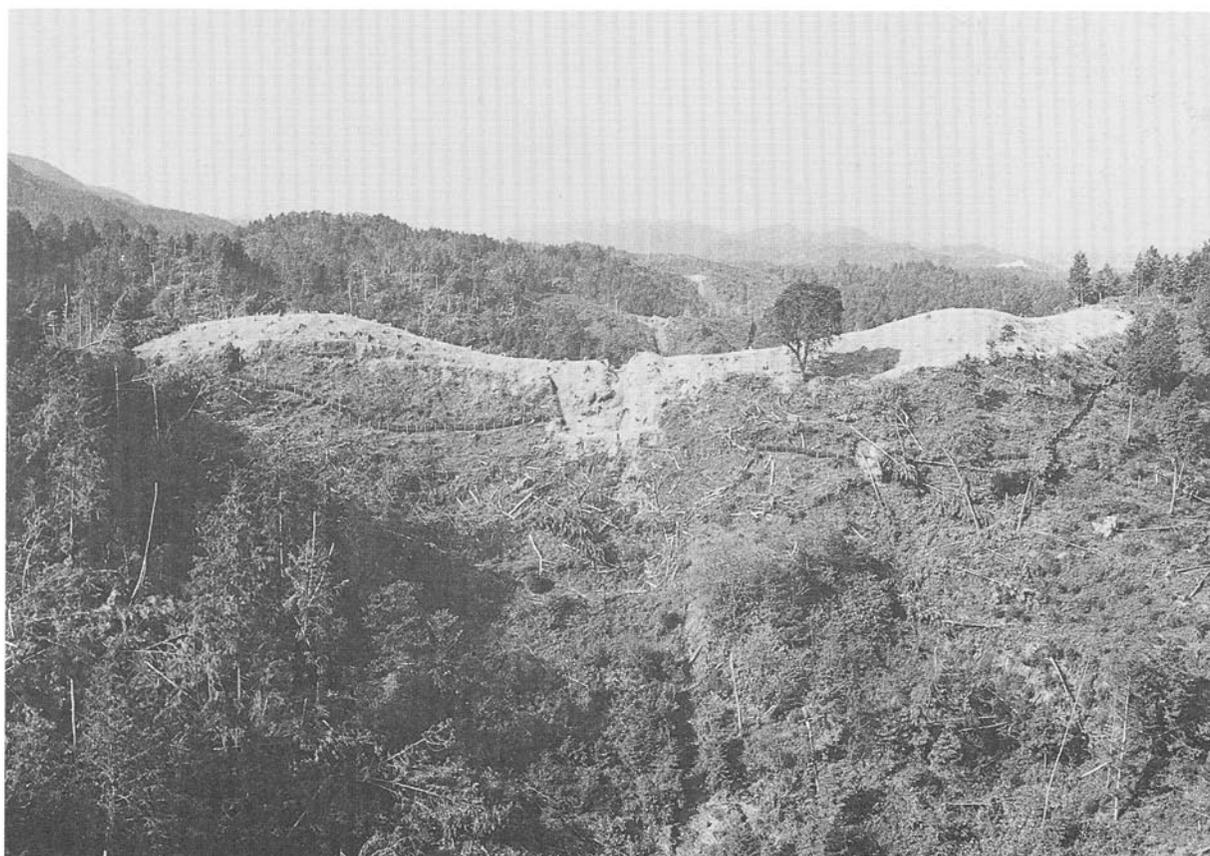
追谷地区調査区全景（北から）



追谷地区堀切（東から）



西老谷地区調査前風景（東から）



西老谷地区全景（東から）

P L 6



西老谷地区全景（北から）



西老谷地区SD1・SA4（南から）



西老谷地区 SD1埋没状況(東から)



西老谷地区 SD1(南東から)



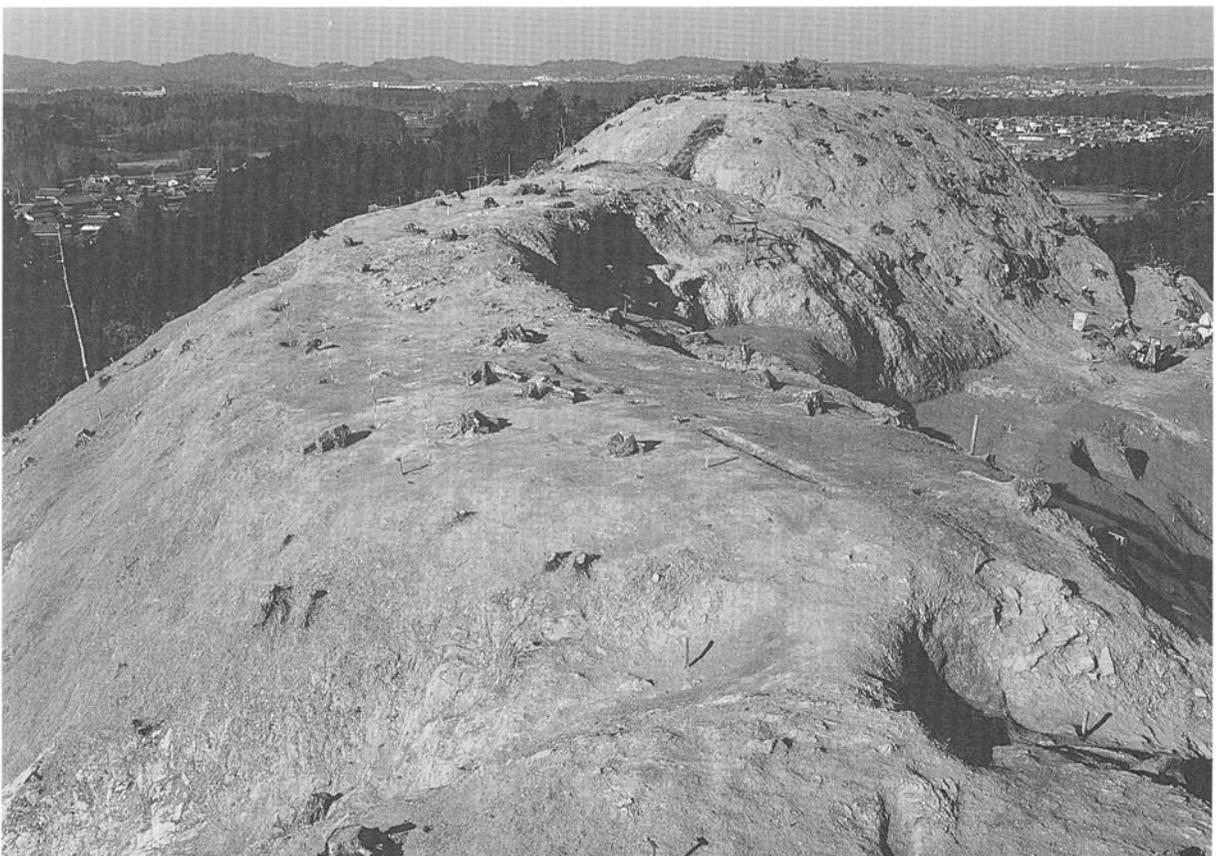
東老谷地区全景（東南から）



ベト谷地区調査前風景（西から）



ベト谷地区調査区全景（東から）



ベト谷地区全景（南から）

P L10



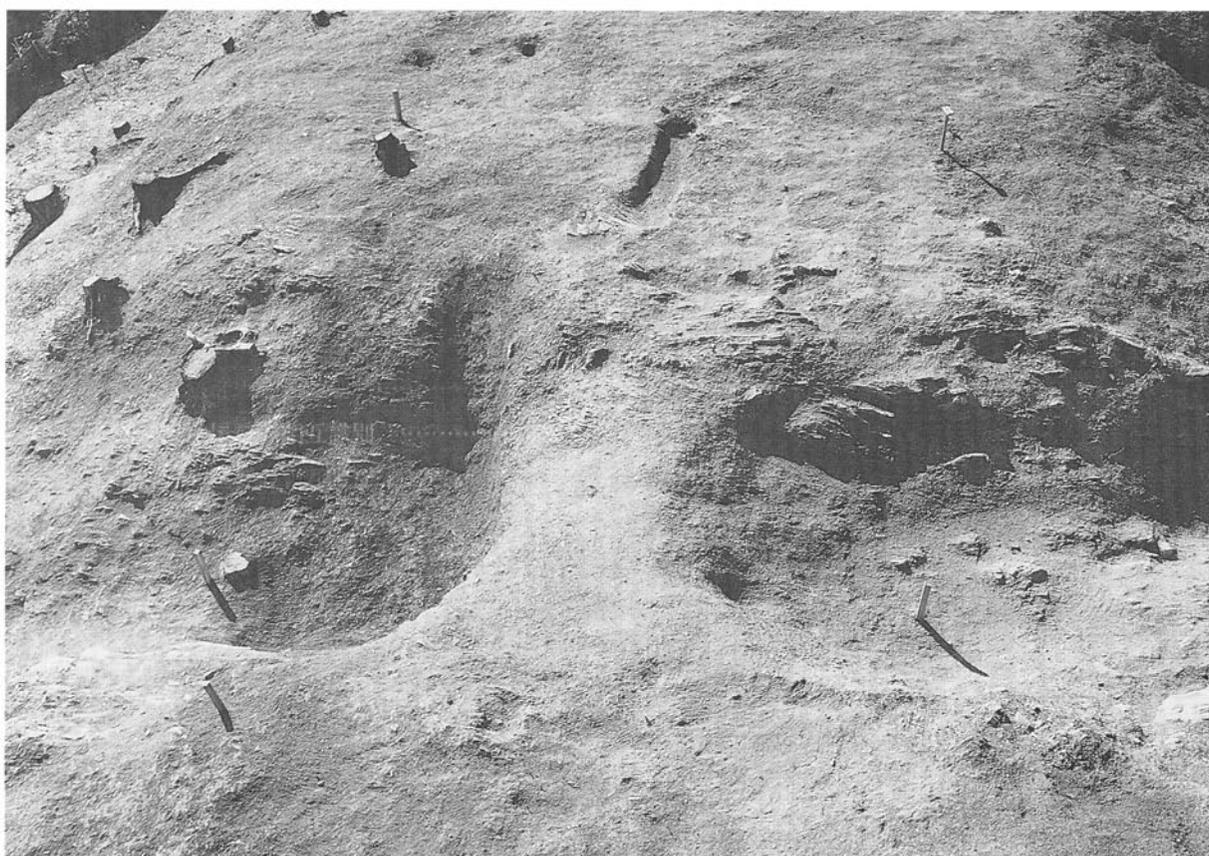
ベト谷地区全景（東から）



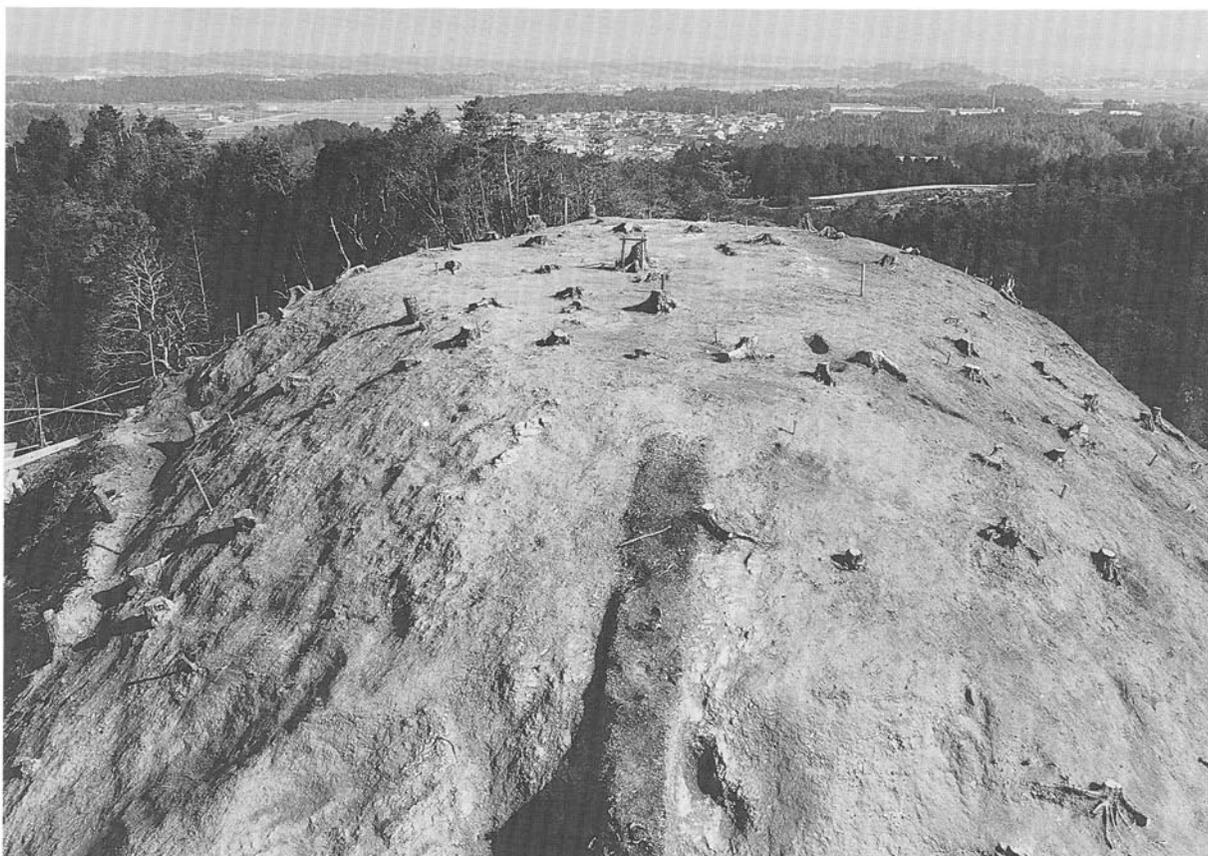
ベト谷地区 SD3（北西から）



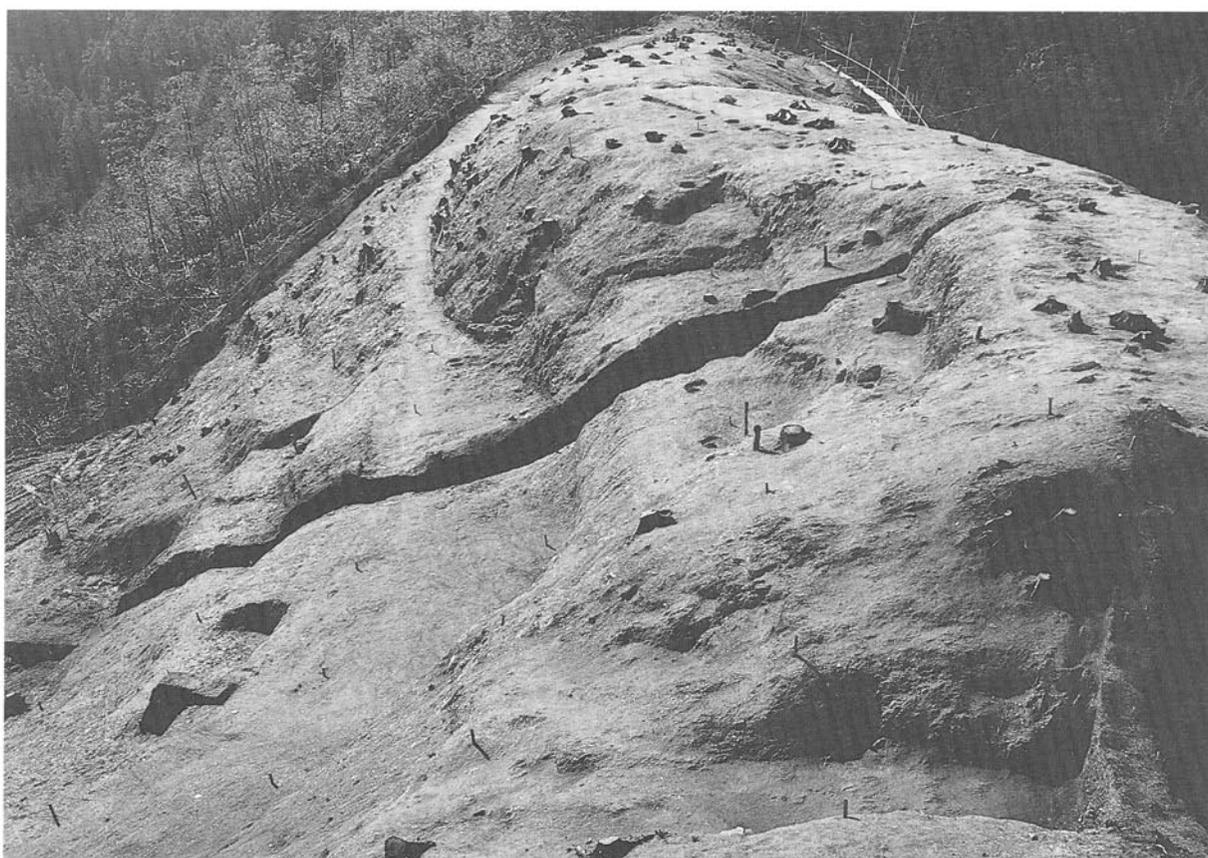
ベト谷地区 SD4埋没状況(東から)



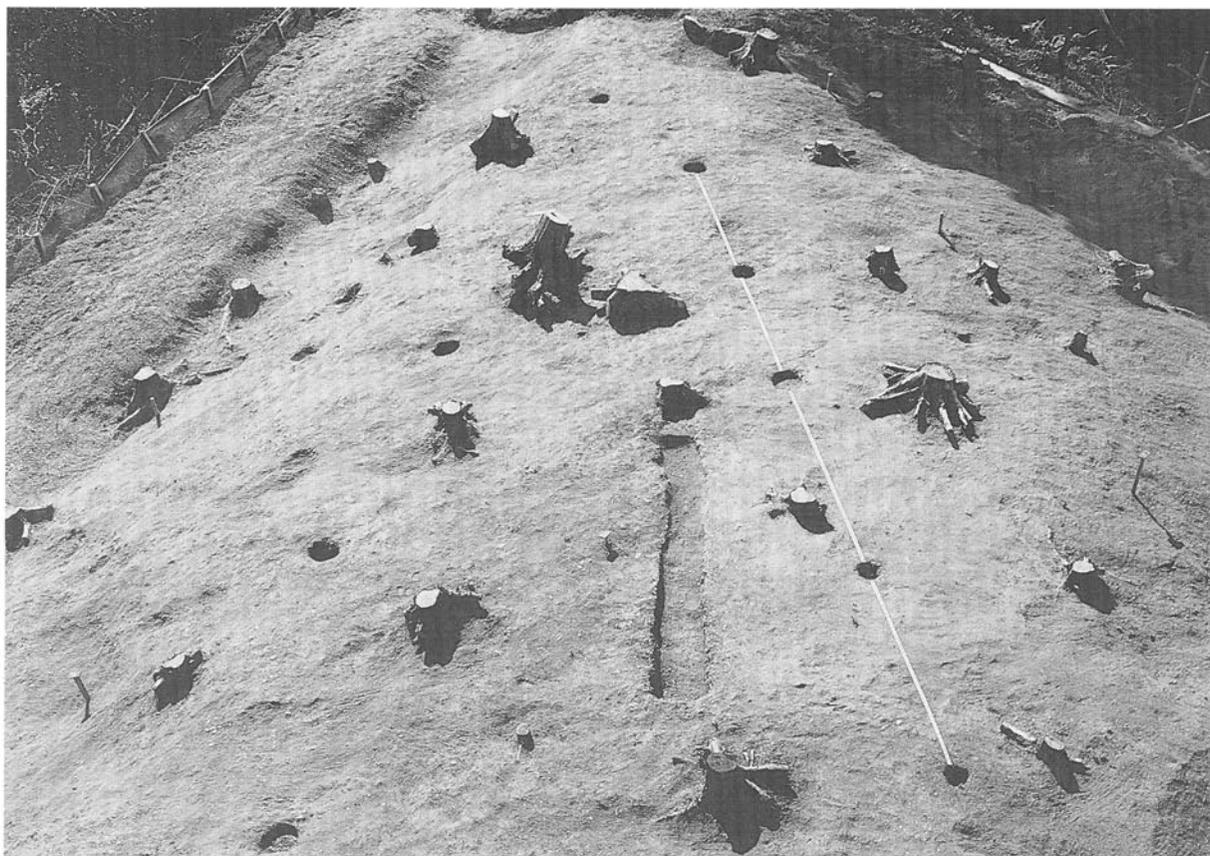
ベト谷地区 SD5(北から)



ベト谷地区 郭1・SA7 (南から)



ベト谷地区 郭2・SZ10・SZ11・SZ12 (北から)



ベト谷地区 SA9 (北から)



ベト谷地区 SZ11・SF25 (北西から)

P L14



ベト谷地区 S Z11 断ち割り状況（北から）



ベト谷地区 S Z12～18（北西から）



ベト谷地区 S Z 13 (北東から)



ベト谷地区 S Z 14 (北東から)

P L 16



ベト谷地区 SX19 検出状況（東から）



ベト谷地区 SX19 遺物取り上げ後状況（東から）



ベト谷地区 S X 20・S X 21 (北から)

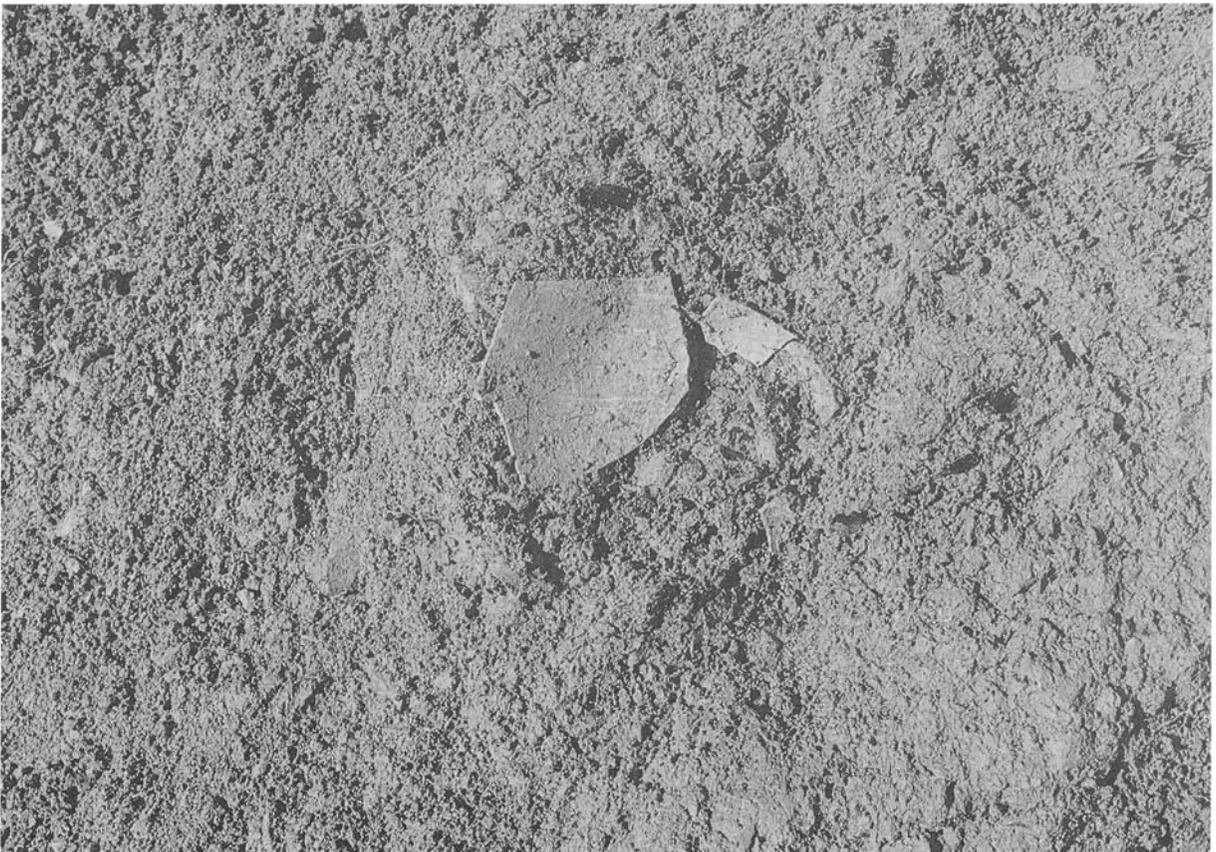


ベト谷地区 S X 22・S X 23・S F 26 (西から)

P L18



ベト谷地区 S X22検出状況（東から）



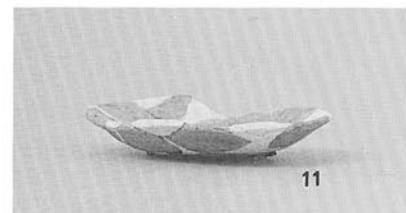
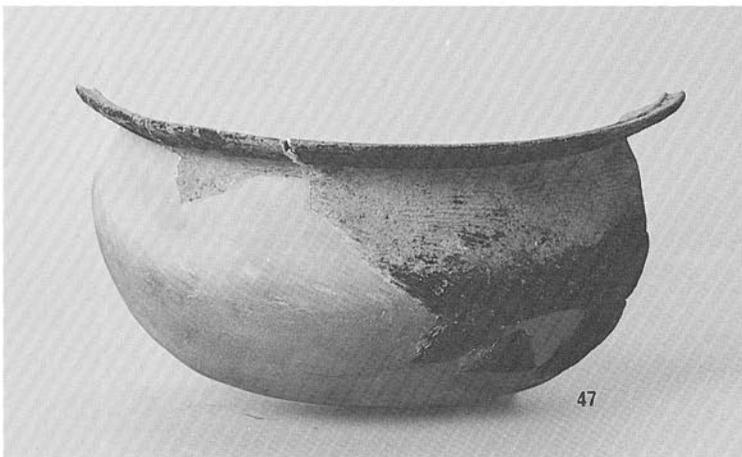
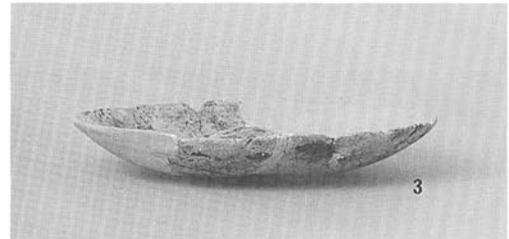
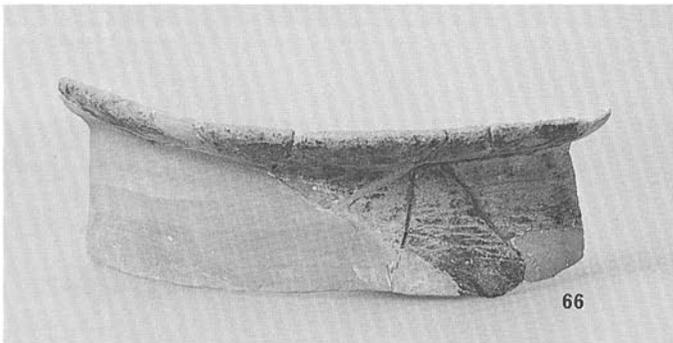
ベト谷地区 S X24（東から）

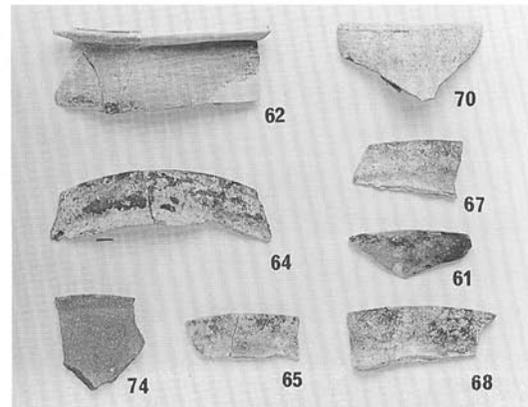
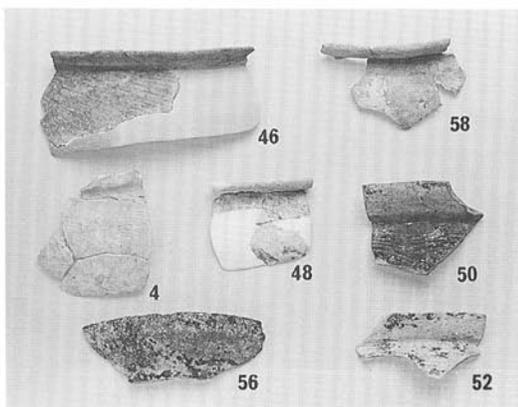
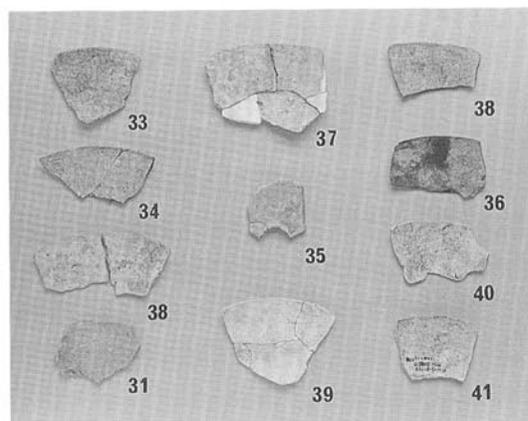
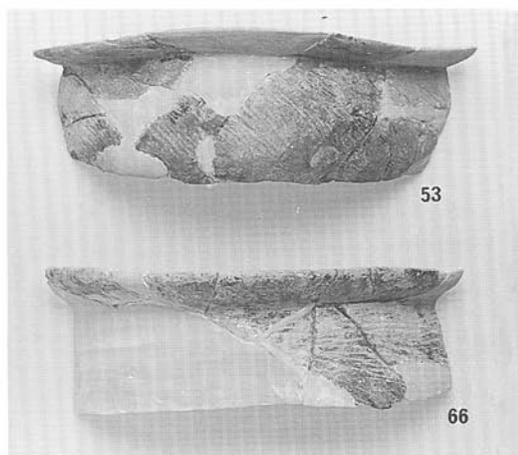
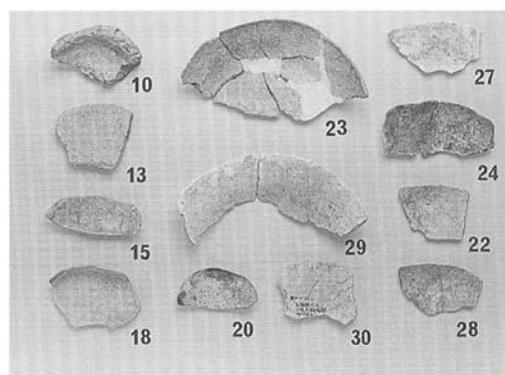
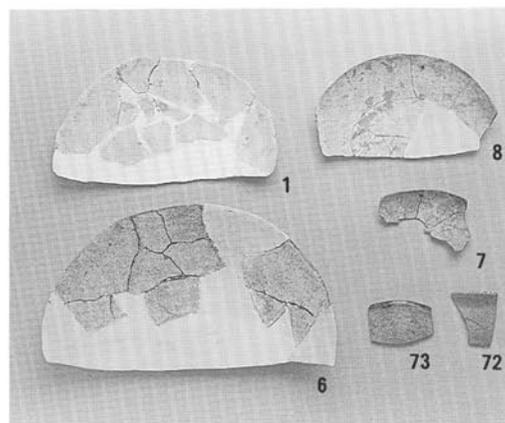
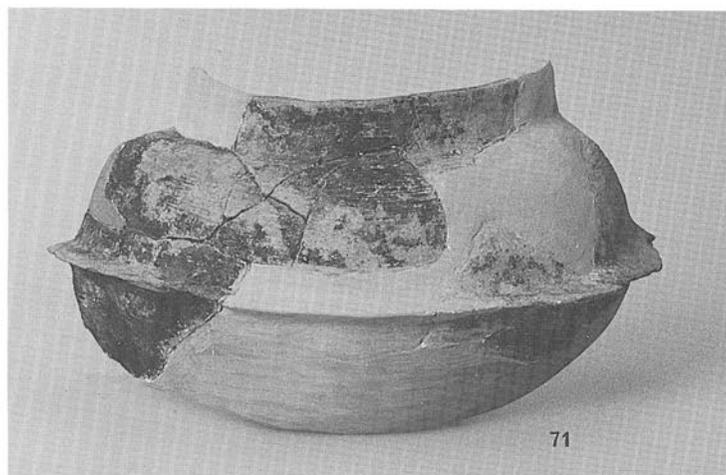


ベト谷地区調査風景



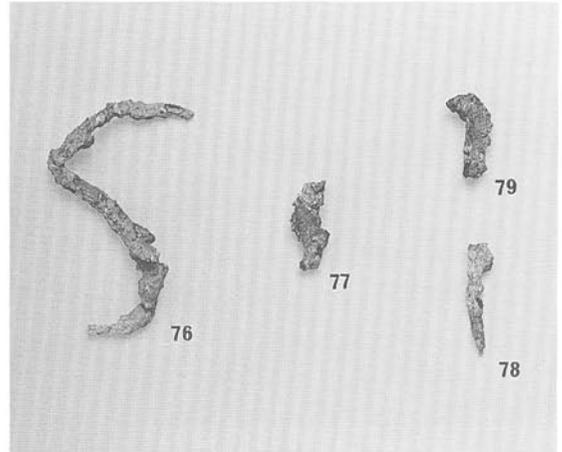
明神前地区全景（西から）





山神城跡出土遺物 (1 : 3)

P L 22



山神城跡出土遺物 (1 : 3)

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告101-2

近畿自動車道（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第2分冊 ——

1992（平成4）年3月

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社
